

舞鶴市千歳下遺跡発掘調査報告書

広島大学大学院文学研究科考古学研究室
舞 鶴 市 教 育 委 員 会

序 文

平成21年度から舞鶴市と共同研究を進めてきた千歳下遺跡の発掘調査報告書作成事業について、本年度にしてようやく本書を上梓することができた。同時に本書を広島大学考古学研究室報告第2冊としても位置づけさせていただいた。

編集者の一人である准教授の野島永君は、かつて京都府埋蔵文化財調査研究センターに在職していた経緯から、舞鶴市教育委員会が発掘調査を実施した千歳下遺跡の重要性にかねてから注目していた。ちょうど、広島大学大学院文学研究科考古学研究室で推進していた瀬戸内海島嶼部の祭祀遺跡の研究や世界遺産・厳島神社の鎮座する厳島の古代祭祀遺跡研究との関連性も高く、舞鶴市教育委員会の松本達也氏と共同研究を実施することとなった。

本事業の推進は、私どもの研究室に在籍する大学院生にとっては考古学室内実習の格好の教材ともなり、大いに研さんを深めることができたと確信する。ともあれ、最近の考古学実習において、最適の教材を確保することの難しさは並大抵のことではない。発掘調査をすれば良いではないか、という声も聞こえてきそうだが、最近の学生さんも忙しく、発掘調査に積極的に参加することもままならない。そうした折りの共同研究事業は頼もしい助っ人とも言える。

舞鶴市教育委員会には相当な無理をお願いすることもあったが、辛抱強く待っていただいた。そのおかげで内容的には、自画自賛する訳ではないが、担当の大学院生が十分に検討を加え、いい出来に仕上がったと自負する。それゆえに本事業の推進が、舞鶴市の古代文化のすばらしさを市民に啓発することにつながれば、望外の喜びである。

本書の刊行に当たっては舞鶴市当局ならびに関係各位の格別のご支援に感謝の意を表したい。

平成23年12月

広島大学大学院文学研究科
教授 古瀬清秀

序 文

舞鶴市は、新たな舞鶴市総合計画（平成23～30年度）で目指す都市像を「東アジアに躍動する国際港湾・交流都市 舞鶴」として、舞鶴の文化的な魅力を地域の活性化の要素とし、市民の皆様と共に創意工夫しながら舞鶴ブランドを生み出すこととしています。特に日本海に開けた京都舞鶴港は交流の拠点として重要な役割を担っております。

本市は、浦入遺跡から出土した約5,300年前の縄文時代前期の外洋性の丸木舟が示すように、海と共に生活し各地との交流をしながら営み続けてきました。今回、千歳下遺跡出土品について、広島大学大学院文学研究科考古学研究室との共同研究の結果、古墳時代の鉄器に朝鮮半島からもたされたものが含まれていることが明らかになりました。このことは、日本海を介して対外交流を行ってきたことを示すものとして、大変重要な発見であります。

これらの研究成果は、ふるさと舞鶴の文化的基盤となるものであり、内容をまとめた本書が舞鶴を築き上げた先人達の歴史を理解し、さらにこれからの舞鶴を考えるための資料として多くの皆様に活用していただければ幸いです。

あとになりましたが、平成11年に実施された発掘調査の成果がこうして公開されるにあたり、調査に際して深いご理解とご協力を賜りました地元千歳自治会やご指導を賜りました広島大学や関係各機関の皆様、また発掘作業や整理作業などに従事いただきました皆様に対しまして衷心よりお礼申し上げます。

平成24年3月

舞鶴市教育委員会
教育長職務代理者
理事 塩田卓三

例 言

- 1 本書は京都府舞鶴市宇千歳に所在する千歳下遺跡の発掘調査報告である。
- 2 千歳下遺跡は舞鶴市教育委員会によって2度の発掘調査が行われた。調査担当者と調査区・調査期間は以下のとおりである。

第1次調査 調査担当者 舞鶴市教育委員会
社会教育課 松本達也
調査区 A・B調査区
調査期間 平成11年2月5日～
3月31日

第2次調査 調査担当者 舞鶴市教育委員会
社会教育課 松本達也
調査区 C調査区
調査期間 平成11年8月5日～9月30日



舞鶴市の位置

- 3 発掘調査の記録作成・写真撮影については、舞鶴市教育委員会松本達也が行った。検出遺構の製図や出土遺物の復原・実測・製図・写真撮影等はおもに広島大学大学院文学研究科考古学研究室において行った。
- 4 本書のレベルは海拔を示している。方位・座標は国土座標平面直角座標（第VI系）に依拠した。
- 5 本総括報告の執筆分担を以下に示す。

第II章 調査地点の環境・第III章 発掘調査の経緯と調査経過・第V章 層序および検出遺構・
第VI章 (4) g. 磁器……………松本達也
第I章 はじめに・第IV章 調査の概要・第VI章 (2) a. 武器・b. 工具・e. 鉄製模造品・
第VI章 (4) b. 丸底壺・c. 壺・甕類・d. 器台・e. 手捏ね土器・f. 須恵器・(5) その他の遺物・
第VII章 総括・第IX章 おわりに……………野島 永
第III章 表採遺物・第VI章 (1) 青銅器・第VIII章 (1) 祭祀遺跡・集落遺跡出土の仿製鏡……………脇山佳奈
第VI章 (2) c. 農具・d. 鉄鋌・f. 板状鉄片……………加藤 徹（現 宮崎県教育委員会）
第VI章 (3) 玉類……………荒平 悠（現 広島県庄原市教育委員会）
第VI章 (4) a. 高坏……………松波静香（現 NPO 法人 アートプラットホームG）
第VIII章 (2) 近年調査された近畿・中国・四国地方の「水辺の祭祀」遺跡
……………谷岡能史（現 広島大学大学院文学研究科助教）

なお、全体の文章表現の調整については、野島と脇山が協議して行った。

- 6 第1次・第2次調査の調査補助および掘削作業については、以下の地元の方々にお世話になった。
調査補助員 上林純子・富永ひとみ、発掘作業員 武内君江・竹内君子・竹内弘子・田多たつ子・南 敦子・
南 祐良・南 春枝・南 佳子・森下喜代子
- 7 遺物実測や整理事業については、舞鶴市教育委員会整理員 堀口多津江・森下彰子・浜田千恵美、広島大学大学院文学研究科考古学研究室大学院生 谷岡能史・山手貴生・松波静香・小林昂博・辻村哲農・実盛良彦・矢部俊一・齋藤友紀、遺物写真撮影については、同研究科大学院生 脇山佳奈・山手貴生・今津和也・谷口早季・横山瑛一・今福拓哉が担当した。
- 8 本報告は広島大学大学院文学研究科考古学研究室と舞鶴市が提携して推進した共同研究『日本海をめぐる古代交流と海浜祭祀に関する研究』（研究代表者：古瀬清秀）および、広島大学大学院文学研究科で推進している『世界遺産・厳島の総合的研究』の科学研究費補助金（基盤研究（B））、課題番号

20320103 (研究代表者：狩野充徳・西別府元日)) による研究成果の一部である。

- 9 本書の作成にあたっては、以下の諸氏からご教示・ご協力を賜った。記して感謝したい。
有井広幸・有松 唯・安 秉杰・安藤信策・李 容哲・岩松 保・魚津知克・奥村清一郎・亀田修一・
河野一隆・岸本直文・黒田悠三・小池 寛・貞松佳恵・杉原和雄・高野陽子・田代 弘・千種 浩・
辻川哲朗・筒井崇史・中川和哉・中西智恵・中村大介・西岡誠司・三浦 到・三浦正幸・肥後弘幸・
福田正継・福永伸哉・細川康晴・的崎 薫・森下 衛
- 10 本書はこれまで広島大学考古学研究室紀要に掲載した概要報告と、発掘調査を行った舞鶴市教育委員会
松本達也による調査記録の一部提供をもとにし、野島・脇山が編集を担当した。

目 次

序 文	i
例 言	iii
I. はじめに	1
II. 調査地点の環境	3
(1) 地理的環境	3
(2) 歴史的環境	4
III. 発掘調査の経緯と調査経過	7
(1) 第1次発掘調査（A・B調査区）日誌抄	7
(2) 第2次発掘調査（C調査区）日誌抄	10
IV. 調査の概要	14
(1) 第1次発掘調査	14
(2) 第2次発掘調査	15
V. 層序および検出遺構	17
(1) B調査区	17
(2) A調査区	17
(3) C調査区	24
VI. 出土遺物	25
(1) 青銅器	25
(2) 鉄器・鉄片	27
a. 武器	27
b. 工具	27
c. 農具	29
d. 鉄鋌	32
e. 鉄製模造品	34
f. 板状鉄片	34
(3) 玉 類	37
a. 勾玉	37
b. 管玉	38
c. その他の玉	38
(4) 土 器	41
a. 高坏	41
b. 丸底壺	49

c. 壺・甕類	52
d. 器台	54
e. 手捏ね土器	55
f. 須恵器	55
g. 磁器	56
(5) その他の遺物	56
a. 土錘・石錘他	56
b. 羽口	56
VII. 総括	58
(1) 海浜祭祀遺跡の類例	58
(2) 千歳下遺跡における祭祀の開始時期	59
(3) 瀬戸内海における祭祀遺跡の開始時期	61
(4) 4世紀後半における畿内政権の対外的活動と丹後半島	62
a. 4世紀後半における前方後円墳の築造規格	62
b. 佐紀政権と丹後半島	63
VIII. 附編 祭祀資料集成と分析	65
(1) 祭祀遺跡・集落遺跡出土の仿製鏡	65
a. 仿製鏡と住居の祭祀	65
b. 仿製鏡と水系の祭祀	66
c. 仿製鏡と海浜・島嶼の祭祀	68
d. 仿製鏡と山の祭祀	69
(2) 近年調査された近畿・中国・四国地方の「水辺の祭祀」遺跡	71
a. 本集成の概要と事例	71
b. 考察	73
IX. おわりに	85
註	86
引用・参考文献	88
韓文要約 (요약)	99
英文要約 (ABSTRACT)	101
遺物観察表	103
図版	119

挿図目次

第1図	千歳下遺跡位置図	1
第2図	千歳下遺跡周辺遺跡分布図	4
第3図	千歳下遺跡調査区周辺出土遺物	7
第4図	千歳下遺跡調査区配置図	14
第5図	千歳下遺跡A調査区東壁土層堆積状況	15
第6図	千歳下遺跡A調査区南壁土層堆積状況	16
第7図	千歳下遺跡上層遺構（鎌倉時代）	18
第8図	千歳下遺跡下層遺構1（古墳時代）	19
第9図	千歳下遺跡下層遺構2（古墳時代）	20
第10図	千歳下遺跡下層遺構A-SK08遺物出土状況	21
第11図	千歳下遺跡下層遺構C-SK04遺物出土状況	21
第12図	千歳下遺跡下層遺構3（古墳時代）	22
第13図	千歳下遺跡下層遺構4（古墳時代）	23
第14図	千歳下遺跡出土青銅器（青銅鏡・銅釧）	25
第15図	千歳下遺跡出土鉄器（武器・工具）	28
第16図	千歳下遺跡出土鉄器（農具・鑄造斧形品）	30
第17図	千歳下遺跡出土鉄器（鉄鋌）	33
第18図	千歳下遺跡出土鉄器（鉄製模造品）	35
第19図	千歳下遺跡出土板状鉄片	36
第20図	千歳下遺跡出土板状鉄片折曲げ模式図	37
第21図	千歳下遺跡出土玉類（勾玉・算盤玉・小玉・平玉）	39
第22図	千歳下遺跡出土玉類（管玉・有孔円板・白玉）	40
第23図	千歳下遺跡出土土師器高坏（1）	42
第24図	千歳下遺跡出土土師器高坏（2）	45
第25図	高坏接合部模式図	47
第26図	千歳下遺跡出土土師器丸底壺	50
第27図	千歳下遺跡出土丸底壺（1～3）と難波野遺跡出土丸底壺（4～6）	52
第28図	千歳下遺跡出土土師器壺・甕	53
第29図	千歳下遺跡出土土師器器台および須恵器甕・甕	55
第30図	千歳下遺跡出土陶器類他	55
第31図	千歳下遺跡出土土製品・石製品	56
第32図	千歳下遺跡出土羽口	57
第33図	鉄を消費する海浜祭祀遺跡位置	59
第34図	関連祭祀遺跡・古墳・古墳群の位置	63
第35図	仿製鏡出土の住居の祭祀遺跡の分布	66
第36図	仿製鏡出土の水系の祭祀遺跡の分布	67
第37図	仿製鏡出土の海・島嶼の祭祀遺跡の分布	68
第38図	仿製鏡出土の山の祭祀遺跡の分布	69
第39図	水辺の祭祀遺跡の時期別割合	71
第40図	各地の降水量	74

挿表目次

第1表	千歳下遺跡出土鉄器・鉄片所属遺構	27
第2表	各遺跡の祭祀遺物組成	60
第3表	仿製鏡出土の住居の祭祀遺跡一覧	76
第4表	仿製鏡出土の水系の祭祀遺跡一覧	78
第5表	仿製鏡出土の海浜・島嶼の祭祀遺跡一覧	80
第6表	仿製鏡出土の山の祭祀遺跡一覧	81
第7表	水辺の祭祀遺跡一覧	82
第8表	青銅器観察表	103
第9表	鉄器・鉄片観察表	103
第10表	玉類観察表	110
第11表	土器観察表	114
第12表	土製品・石製品観察表	117

図版目次

図版第 1	出土遺物集合	119
図版第 2	(1) 千歳下遺跡調査地遠景 (谷奥から)	120
	(2) 千歳下遺跡調査地遠景 (南から)	120
図版第 3	(1) 千歳下遺跡調査地近景 (西から)	121
	(2) 千歳下遺跡調査地近景 (北から)	121
図版第 4	(1) B 調査区東壁断面 (北西から)	122
	(2) B 調査区完掘状況 (北から)	122
図版第 5	(1) C 調査区調査前近景 (北から)	123
	(2) C 調査区調査前近景 (南から)	123
図版第 6	(1) B 調査区完掘状況 (北西から)	124
	(2) B 調査区集石検出状況 (北東から)	124
	(3) B 調査区列石検出状況 (西から)	124
図版第 7	(1) B 調査区杭・木製品出土状況 (西から)	125
	(2) B 調査区木製品出土状況 (西から)	125
	(3) B 調査区東壁断面 (西から)	125
図版第 8	(1) A 調査区鎌倉時代遺構面検出状況 (北から)	126
	(2) A 調査区鎌倉時代遺構面検出状況	126
	(3) A 調査区 SK02 検出状況 (西から)	126
図版第 9	(1) A 調査区 SK02 (西から)	127
	(2) A 調査区 SK03 上層遺物出土状況 (東から)	127
	(3) A 調査区 SK03 下層遺物出土状況 (北から)	127
図版第 10	(1) A 調査区 SK06 遺物出土状況 (南から)	128
	(2) A 調査区 SK07 遺物出土状況 (南西から)	128
	(3) A 調査区 SK07 勾玉 (玉 8) 出土状況 (北から)	128
図版第 11	(1) A 調査区 SK07 完掘・SK08 遺物出土状況 (北から)	129
	(2) A 調査区 SK08 遺物出土状況 (東から)	129
	(3) A 調査区 SK08 斜縁獣帯鏡 (青銅器 1) 出土状況 (南から)	129
図版第 12	(1) A 調査区 SK09 (西から)	130
	(2) A 調査区 SK09・Pit01 断面 (西から)	130
	(3) A 調査区 SK09・SK10 検出状況 (南から)	130
図版第 13	(1) A 調査区 7～12 層土器溜まり (南から)	131
	(2) A 調査区土器溜まり検出状況 (南から)	131
	(3) A 調査区土器溜まり検出状況 (東から)	131
図版第 14	(1) A 調査区 SK13 灰層面掘削状況 (東から)	132
	(2) A 調査区 SK14 完掘状況 (南から)	132
	(3) A 調査区 SK15 完掘状況 (西から)	132
図版第 15	(1) A 調査区 SK15 完掘状況 (東から)	133
	(2) A 調査区 SX01 完掘状況 (北から)	133
	(3) A 調査区東壁断面 (西から)	133
図版第 16	(1) C 調査区 SD01 完掘・鎌倉時代遺構面検出状況 (北から)	134
	(2) C 調査区 SD01 完掘・SK03 検出状況 (東から)	134
	(3) C 調査区 SD01 完掘・SK03 検出状況 (東から)	134

図版第17	(1) C調査区 SK03完掘状況 (南から)	135
	(2) C調査区北側鍛冶焼土上面検出状況	135
	(3) C調査区北側羽口 (土器98) 出土状況	135
図版第18	(1) C調査区 SD02完掘状況 (東から)	136
	(2) C調査区 SD02磁器 (土器90) 出土状況 (東から)	136
	(3) C調査区 SD03遺構面検出状況 (西から)	136
図版第19	(1) C調査区 SD03遺構面検出状況 (東から)	137
	(2) C調査区 SD03完掘状況 (東から)	137
	(3) C調査区 SK02完掘状況 (東から)	137
図版第20	(1) C調査区北側 SK05検出状況	138
	(2) C調査区北側 SK05検出状況	138
	(3) C調査区灰色粘土層 SD06検出状況 (北から)	138
図版第21	(1) C調査区灰色粘土層遺物出土状況 (南から)	139
	(2) C調査区灰色粘土層遺物出土状況 (西から)	139
	(3) C調査区灰色粘土層鉄斧 (鉄器39) 出土状況 (西から)	139
図版第22	(1) C調査区灰色粘土層遺物出土状況 (西から)	140
	(2) C調査区西壁断面 (東から)	140
	(3) C調査区包含層須恵器 (土器81) 出土状況 (南から)	140
図版第23	(1) C調査区北側包含層遺物出土状況 (北から)	141
	(2) C調査区北側包含層銅釧 (青銅器3) 出土状況 (南から)	141
	(3) C調査区北側 SK04遺物出土状況 (南から)	141
図版第24	(1) C調査区北側 SK04遺物出土状況 (北から)	142
	(2) C調査区北側 SK04遺物出土状況 (東から)	142
	(3) C調査区北側 SK04遺物出土状況 (南から)	142
図版第25	(1) C調査区北側 SK04遺物出土状況 (東から)	143
	(2) C調査区北側 SK04鋤先 (鉄器44) 出土状況	143
	(3) C調査区北側 SK04鉄器出土状況	143
図版第26	(1) C調査区北側 SK04鑄造斧形品 (鉄器69) 出土状況	144
	(2) C調査区北側 SK04遺物出土状況	144
	(3) C調査区北側 SK04勾玉 (玉6) 出土状況	144
図版第27	(1) C調査区北側 SK04遺物出土状況	145
	(2) C調査区北側 SK04有孔円板出土状況 (北から)	145
	(3) C調査区北側 SK04平玉 (玉18) 出土状況	145
図版第28	(1) C調査区 SX01検出状況 (北から)	146
	(2) C調査区 SX01検出状況 (南から)	146
	(3) C調査区 SX01焼石検出状況	146
図版第29	(1) 作業風景 (東から)	147
	(2) 作業風景 (北から)	147
	(3) 作業風景 (北から)	147
図版第30	(1) 千歳下遺跡現在の状況 (南から)	148
	(2) 千歳下遺跡現在の状況 (東から)	148
	(3) 千歳下遺跡現在の状況 (北から)	148
図版第31	(1) 青銅器 (鏡背面)	149
	(2) 青銅器 (鏡面)	149

図版第32	(1) 鉄器 (1)	150
	(2) 鉄器 (2)	150
図版第33	(1) 鉄斧・鑄造斧形品	151
	(2) 鉄製農具 (1)	151
図版第34	(1) 鉄製農具 (2)	152
	(2) 鉄鋌 (1)	152
図版第35	(1) 鉄鋌 (2)・鉄製模造品 (1)	153
	(2) 鉄製模造品 (2)	153
図版第36	(1) 鉄製模造品 (3)	154
	(2) 板状鉄片 (1)	154
図版第37	(1) 板状鉄片 (2)	155
	(2) 鉄器集合	155
図版第38	(1) 玉類 (1)	156
	(2) 玉類 (2)	156
図版第39	(1) 白玉 (1)	157
	(2) 白玉 (2)	157
図版第40	土師器高坏 (1)	158
図版第41	土師器高坏 (2)	159
図版第42	土師器高坏 (3)	160
図版第43	土師器高坏 (4)	161
図版第44	土師器高坏 (5)・丸底壺 (1)	162
図版第45	土師器丸底壺 (2)	163
図版第46	土師器壺・甕	164
図版第47	土師器器台・手捏ね土器・須恵器・磁器	165
図版第48	(1) 羽口	166
	(2) 土錘・石錘・鉄床石	166
図版第49	(1) 鉄器39 CT画像	167
	(2) 鉄器40 CT画像	167
	(3) 鉄器70 CT画像	167

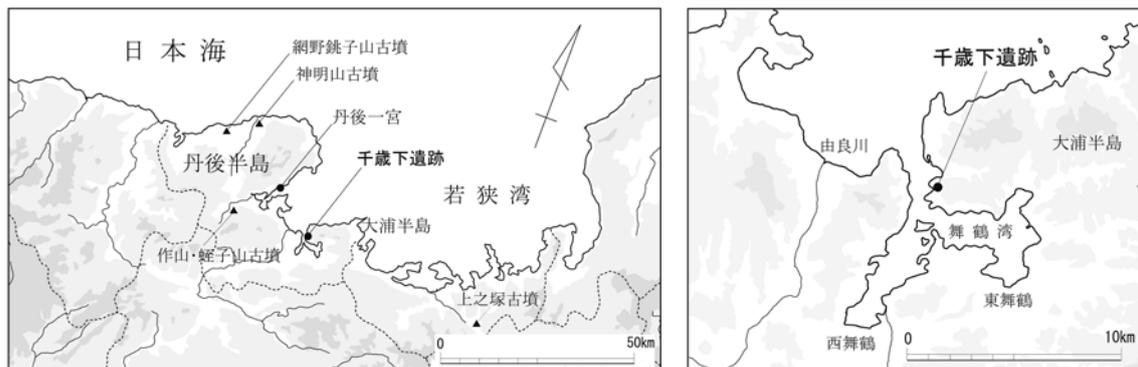
舞鶴市千歳下遺跡発掘調査報告

I. はじめに

千歳下遺跡は若狭湾を望む舞鶴大浦半島、舞鶴市字千歳に位置する。本遺跡は昭和63年に舞鶴市教育委員会吉岡博之が行った市内遺跡分布調査によって周知された。市道改良工事とともに、平成11年に舞鶴市教育委員会によって緊急調査が行われた。発掘調査の結果、古墳時代中期頃の祭祀遺構が検出され、斜縁獣帯鏡や銅釦などの青銅器をはじめ、700点以上にもおよぶ鉄製品や鉄片類、1,000点に達する玉類や石製模造品などが出土した。平成12年には発掘調査の担当者であった松本から、当時京都府埋蔵文化財調査研究センターに勤務していた野島に千歳下遺跡出土資料の図化整理についての依頼があったが、諸般の事情から実現にはいたらなかった。出土遺物は現地説明会で公開されたのみであり、調査終了後、十分な整理作業を行う機会もなく、調査成果は未公表のままとなっていた。

その後、野島は広島大学大学院文学研究科に転職することとなり、松本からの依頼に応ずるために図化整理の受け入れ環境を整えることに努めた。平成18年度には広島大学大学院文学研究科考古学研究室（以下、広島大学考古学研究室）と舞鶴市教育委員会の間において、千歳下遺跡発掘調査の情報公開を主眼とした調査研究のための「千歳下遺跡に関する研究」に係る覚書を取り決め、広島大学考古学研究室が出土遺物および調査記録の一部を舞鶴市教育委員会から借出し、その調査成果の一部を公開することが可能となった（野島 2007）。また、これにより、平成20年度には広島大学考古学研究室紀要に青銅器と鉄器、玉類についての紹介を掲載することができた（野島 2009、野島・加藤・脇山・荒平 2009）。しかし、本覚書は未公開であった千歳下遺跡出土遺物の公開を行うことを協議のうえ、舞鶴市教育委員会が許可するといったもので、整理・実測・報告に関わる人件費・消耗品購入等の諸経費はすべて広島大学考古学研究室において負担せざるをえなかった。

このため、舞鶴市教育委員会は広島大学との新たな共同研究として捉えなおし、平成21年度には、広島大学（広島大学長 浅原利正）と舞鶴市（舞鶴市長 齊藤 彰）との共同研究事



第1図 千歳下遺跡位置図

業を発足させることとなった。共同研究「日本海をめぐる古代交流と海浜祭祀に関する研究」
として再度契約を結び、共同研究事業の一環として広島大学大学院文学研究科の考古学専攻
学生を非常勤職員として雇用し、整理・実測・写真撮影等を行うことができるようになった。
これにより、平成21年度には古墳時代の土器を中心に実測作業を行い、その概要の報告を行
うことができた（野島・松波・松本 2010）。また、翌年平成22年度には祭祀遺跡の集成作業
を行い、古墳時代の祭祀遺跡に関する調査研究を完結することができた（野島・脇山・谷岡
2011）。いずれも基礎的作業の多くは考古学専攻学生によるもので、完成度は高くはないも
のの、おおよそ当初予定の調査研究成果をまとめえたものと考えている。しかし、鎌倉時代
の遺構面において採集された鍛冶微細遺物の分析が行いえなかったことは悔やまれる。

平成23年度には古墳時代祭祀遺跡の調査成果をまとめ、本報告書として刊行することを予
定した。これまでの紹介や概要報告を基礎として、細部の修正を行ったうえで、おおよその
内容を総合して不足部分を補足することとなったが、すべての調査記録資料を借り得るこ
とができなかったため、不十分な部分も少なくない。

なお、出土地点が不明確な古墳時代の高坏破片、細片化した鉄滓や鉄片など、未発表遺物
もあるものの、本報告によって公表された遺物ともども、舞鶴市教育委員会において収蔵・
保管され、今後一般に公開される予定である。

Ⅱ．調査地点の環境

(1) 地理的環境

まず、舞鶴市の地質構造について述べる。舞鶴市はペルム紀に形成された舞鶴層群と夜久野岩類、志高層群そして古三畳紀に形成された荒倉層、難波江層群などが互層となる細長い舞鶴帯上にある。舞鶴帯の中央部には、二畳紀および三畳紀の地層が分布し、南北両端には、各種の火成岩変成岩からなる夜久野岩類が分布する。大浦半島にある空山・大道山（多禰山）は閃緑岩を基盤とした山で頂上は丸みを帯び、比較的なだらかな山容となる。対岸の槇山は頁岩・チャートなど、古生代の堅い岩石からなり、急峻な山容を呈している。正面崎から成生岬・毛島・馬立島・アンジャ島・博奕岬にかけての地域は花崗岩地域にあたる。岬や島の間形成された狭小な平野部に田井・成生・野原・小橋・三浜・瀬崎の各集落がある。神崎海岸は由良川河口にあり、由良川の運搬した土砂の堆積した砂浜となる。金ヶ岬・瀬崎・三浜の一部には黒味を帯びた輝緑岩・頁岩・砂岩が分布する。湾口の博奕岬に出ると、その周辺部に見られる粗粒の黒雲母を含む花崗岩との境界となり、博奕岬の海岸線に広がる白（花崗岩）と黒（閃緑岩）のコントラストの美しい地層の分かれ目が見られる。

舞鶴市は西の丹後半島、東の越前海岸に挟まれ、日本海より湾入した若狭湾西部にある。中央部に舞鶴湾の良港を抱き、リアス式海岸特有の入江と半島が交錯する。舞鶴湾口の西には丹波山地に源流をもつ京都府最大の河川である由良川が若狭湾に流れ込む。舞鶴湾は若狭湾より深く南へ湾入し、狭い湾口から東西両湾へと分岐する。両湾ともに急峻な山地が迫り、湖のような錯覚さえ覚える景観を呈している。両湾の奥には沖積地が発達し、舞鶴東西の市街地が広がる。

舞鶴市はその80%が山地で占められる。青葉山・三国岳・弥仙山・由良ヶ岳・赤岩山などが連なり、福井県・綾部市・福知山市・宮津市との境界となる。本市南東部は丹波山地に属している。丹波山地の稜線方向は地帯構造により、東北東－西南西に走り、河川の方向もこれに一致する。

千歳下遺跡は舞鶴市の北東部に位置する大浦半島の西側、舞鶴湾口の最狭部に位置する。遺跡の所在する大浦半島は標高300～500mの急峻な山地に占められ、その間に流れる小河川が矮小な扇状地を形成している。千歳下遺跡はそういった小河川が形成する、幅約70m・奥行き約150mの小規模な扇状地に位置する。調査をおこなった地点は扇状地の中央部で、小規模な地域であるがゆえに過去の河川の氾濫痕跡を砂礫層の堆積によって垣間見ることができる。遺跡の状況は工事立会いや表探遺物によってある程度うかがい知ることができる。遺跡の周囲に遺存する遺物包含層はこの扇状地全体に広がるようである。

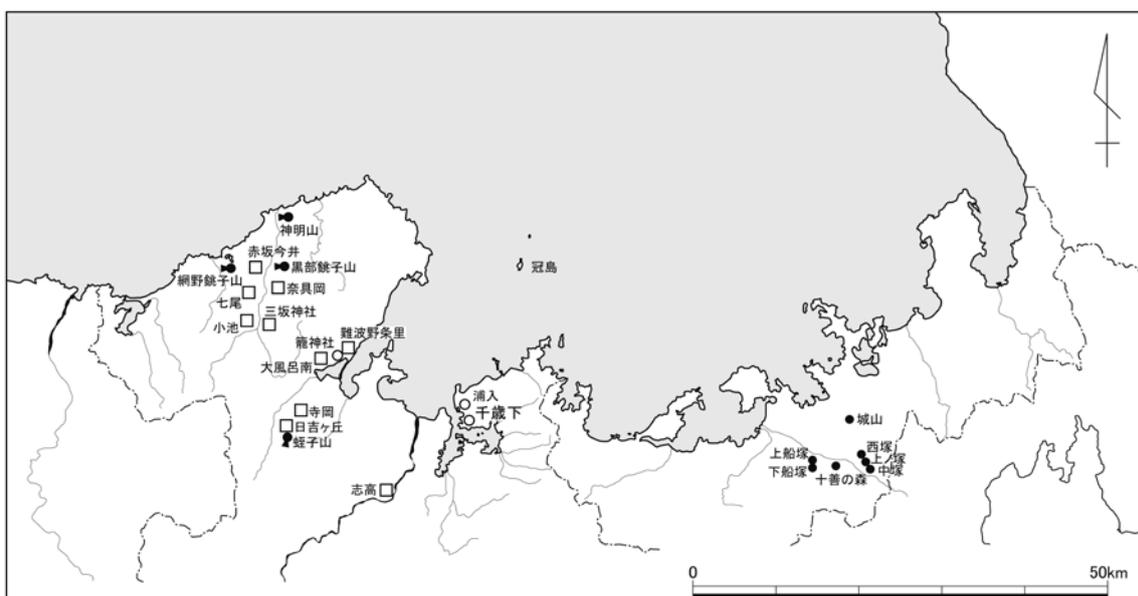
調査地中央部は安定した土壌を基盤層とするが、南と北は洪水砂礫層を基盤層としてその上面に平安時代末期から鎌倉時代の遺構面が遺存する。この遺構面は谷奥部の墓地造成などの立会い調査でしばしば確認され、谷奥から西方向へ延びる状況が想定される。扇状地の南北では砂礫の堆積が著しく、現在西方向に延びる河川が氾濫して調査地点の南北に流路を変

更しながら扇状地を形成していった様相がうかがえる。一方、谷の南西部では砂層が堆積しており、縄文土器が包含されている。その上部に堆積する砂礫層中には古墳時代前期・後期の遺物が2次堆積する。砂層の堆積から北方向（谷の西側やや南より）では古墳時代前期の土師器器台が出土した。調査地はこの古墳時代前期の遺物を確認した地点から北東にあたるが、この間は砂礫層の堆積が確認されている。また、旧道周辺では砂浜と考えられる砂層から平安時代の製塩土器が確認されることから、調査地点は当時の海浜域、海岸線付近と想定できる。

(2) 歴史的環境

千歳下遺跡（舞鶴市教育委員会 1990）は「和名抄」によると、丹後国加佐郡凡海郷に属している。凡海郷は加佐郡の北東に突き出た大浦半島と舞鶴湾口を挟んだ由良川河口域の海浜部がその範囲とされる。千歳下遺跡は大浦半島海浜部に位置し、遺跡の範囲と重複するように現在の集落が広がっている。遺跡の詳細は地理的環境の中で記述したが、縄文時代・古墳時代・奈良時代・平安時代・鎌倉時代と各時期の遺物が採集されている。鎌倉時代以降も石造物や文献等から集落は継続していたと考えられる。この千歳下遺跡から尾根の南に位置する千歳上遺跡では平安時代以降の遺物が散布している。また、北側の丘陵を越えた大丹生遺跡では縄文時代・古墳時代以降の遺物が採集されていることから、大浦半島でも舞鶴湾口付近には遺跡が点在する様子をうかがうことができる。

なかでも千歳下遺跡の北側3km地点に位置する浦入遺跡群（田代・筒井ほか 2001）では、砂嘴によって南に開ける浦入湾を囲んで展開した海浜遺跡の全容が確認された。浦入遺跡は縄文時代前期初頭から鎌倉時代初頭まで断続的に続いた集落跡である。縄文時代前期の外洋航海用の丸木舟や、黒耀石および玦状耳飾りなどの遺物から、広域にわたる縄文人の活動の



第2図 千歳下遺跡周辺遺跡分布図

痕跡が見て取れる。古墳時代中期には鍛冶炉をもつ工房跡が確認され、奈良・平安時代には海浜部を中心に大規模で集約的な製塩や鍛冶といった生産活動が笠氏によって行われていたことをうかがうことができる（吉岡・松本ほか 2001・2002）。舞鶴湾口には技術や物資を集約して製塩・鍛冶といった生産を行う地の利があったのであろう。丹後国の東端で若狭国と接し、由良川河口から丹波国とも繋がる地理的条件がそうさせたのかもしれない。

先述したように、千歳下遺跡は丹後国の東端に位置するが、丹後の地は日本海を通じた交流によって独自の文化を発展させてきたといわれている。弥生時代中期後半から中期末には、斜面に貼石をもつ方形墳丘墓（方形貼石墓）が舞鶴市志高遺跡（肥後・三好ほか 1989）、宮津市難波野遺跡（石尾・引原 2008）、与謝野町日吉ヶ岡遺跡（加藤ほか 2005）・寺岡遺跡（奥村編 1988）・千原遺跡（羽淵 2005）、京丹後市奈具岡遺跡（奥村・林 1986）・小池墳墓群（鈴木・植山編 1984）などで確認されている。日吉ヶ岡遺跡では中期中葉から後葉の鉄器が確認されており、早い段階で日本海を介して大陸から鉄素材を獲得し、その加工技術を習得した先進性が見て取れる。京丹後市の奈具岡遺跡（増田・田代ほか 1993）では中期中葉の緑色凝灰岩製の管玉作りが、また中期後半には鍛冶と水晶製玉作りなどが確認された。

弥生時代後期になると方形貼石墓は姿を消し、前期以来の尾根を整形した台状墓が主流となってくる。京丹後市三坂神社墳墓群（今田・肥後 1998）では水晶・ガラス玉類や素環頭鉄刀などが出土した。後期後葉の与謝野町大風呂南 1 号墓（白数 2000）ではガラス釧・銅釧、多量の鉄剣・鉄鏃、鉄製漁具や工具などが出土した。終末期には京丹後市赤坂今井墳丘墓（岡林・石崎 2004）が出現する。39m×36mの巨大な方形台状墓へと成長する。全ては調査されてはいないものの、墳墓上の第 4 埋葬からは碧玉製管玉とガラス製勾玉からなる頭飾りが出土した。ガラス玉や鉄器の保有は、丹後の地は日本海沿岸や大陸との交流を先がけた先進地域の一つであったことを示唆している。

古墳時代に入ると 4 世紀後半から 5 世紀初頭に日本海側で最大規模の前方後円墳が築造された。4 世紀後半に与謝野町では全長 145m の蛭子山古墳（加悦町市史編纂委員会 2007）、4 世紀後葉から 5 世紀初頭には京丹後市に全長 198m の網野銚子山古墳（梅原 1919a）や全長 190m の神明山古墳（梅原 1919b）などが順次築かれた。網野銚子山古墳と神明山古墳は、河口に形成された潟を一望できる丘陵上に築造され、古代の海上交通を掌握していた被葬者像が想定されている。蛭子山古墳・網野銚子山古墳は奈良県北部に位置する佐紀陵山古墳型、神明山古墳も奈良県北部に位置する五社神古墳型との築造規格の類似性が考えられており、畿内政権との強い結びつきも想定される場所である（加悦町・加悦町教育委員会 1997）。前述の三大古墳に続く古墳としては、京丹後市にある全長 105m を測る 5 世紀前半の黒部銚子山古墳（梅原 1926）がある。2 段築成で葺石・埴輪をもつが前代からの墳丘の縮小化は否めない。

古墳時代中期になると丹後では前方後円墳は少なくなるものの、円墳であっても畿内政権との関係をもつ長持形石棺を主体部とする古墳が多くなる。与謝野町法王寺古墳（堤 1970）、京丹後市産土山古墳（吉田 1997）・願興寺 5 号墳（京丹後市史編さん委員会編 2010）・馬場

の内古墳（杉原 1970）・離湖古墳（三浦ほか 1993）がある。一方、舞鶴湾口西側から遡った由良川中流域の福知山盆地においては小規模な前方後円墳が築造されるが、5世紀中頃には直径71mの円丘部に造り出しをもつ私市円山古墳（鍋田 1989）がみられる。周辺にはそれに前後する首長墳はみられないことから、福知山盆地全体を統括する首長によって築かれたと考えられている。

隣接する若狭においては上中地域に上ノ塚古墳を初めとして、城山古墳・西塚古墳・中塚古墳・十善の森古墳・上船塚古墳・下船塚古墳などが首長権を継承しながら6世紀中葉まで築造されていったことが推測されている（福井県立若狭歴史民俗資料館 1999）。西塚古墳の金製垂飾付耳飾や北部九州との関連を裏付ける九州系横穴式石室の導入など、活発な交流がうかがえる。このことから、古墳時代中期以降、丹後地域は徐々に衰退し、丹後周辺部において新たな首長勢力の台頭がみられるようになってくる。

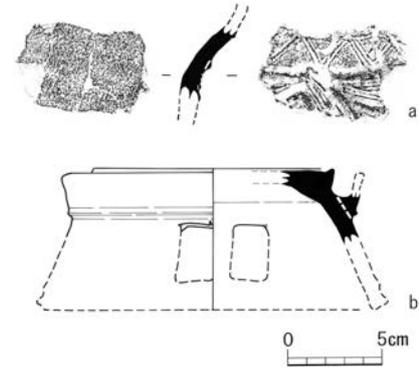
最後に、京都府北部域で古墳時代の祭祀遺物等が出土した遺跡を挙げておく。舞鶴市では桑飼下遺跡（滑石製勾玉）（渡辺ほか 1975）・桑飼上遺跡（滑石製品・碧玉製勾玉・ガラス小玉）（岸岡・細川ほか 1993）・志高遺跡（仿製鏡・土製品・手捏ね土器）（肥後・三好ほか 1989）・女布遺跡（滑石製品・子持ち勾玉）（松本 2002）・浦入遺跡（滑石製品）（吉岡・松本ほか 2002）。宮津市では、難波野遺跡（手捏ね土器）（石尾・引原 2008）、綾部市では、青野遺跡（手捏ね土器）（中村 1988）、福知山市では、石本遺跡（滑石製品・手捏ね土器）（辻本・土橋編 1987）、与謝野町では、中上司遺跡（手捏ね土器）（佐藤 1986）、京丹後市では、大宮売神社境内遺跡（石製模造品・手捏ね土器）（梅原 1923a）・マンジョウ寺遺跡（手捏ね土器）（梅原 1923b）・裏陰遺跡（手捏ね土器）（杉原ほか 1979）・幾坂遺跡（手捏ね土器）（肥後 1991）・アバタ遺跡（手捏ね土器）（肥後 1991）・古殿遺跡（木製品・手捏ね土器）（鍋田・戸原 1988）・林遺跡（土製勾玉）（三浦 1977）・平遺跡（手捏ね土器）（河野 1997）・浅後谷南遺跡（導水施設）（黒坪・石崎・福島 2000）などがある。

千歳下遺跡の所在する千歳集落には「文殊信仰」や「元橋立」といった与謝地域との関連をうかがわせる伝承が数々残る。ここには丹後一ノ宮の籠神社があり、宮司の海部氏は始祖を彦火明命とし、海の奥宮を老人嶋神社が鎮座する冠島とする。冠島には若狭湾沿岸部の漁民が今も大漁祈願や海上交通の無事を願って参拝する祭礼が執り行われており、この地域の信仰の中心として今も生き続けている。立ち入ることはできないものの、冠島にも古墳時代の祭祀遺跡が遺存している可能性が高いであろう。

Ⅲ. 発掘調査の経緯と調査経過

今回の調査は、舞鶴市字千歳で計画された「市道道路改良事業」にともない、記録保存を目的として実施した。分布調査の際、須恵器・土師器・土錘・製塩土器・黒色土器などの生活・生産遺物が採集されており、古墳時代後期から平安時代の遺跡が存在するのではないかと考えられてきた。

なお、千歳下遺跡竹内南・竹内西地区の立会い調査によって、縄文土器1点、円面硯1点などが出土した（第3図）。aの縄文土器は口縁部が内弯する深鉢である。外面には隆帯が貼られ、その間には半截竹管状工具による三角形の文様が施される。浦入遺跡の類似した資料から、船元Ⅱ式と判断できる。なお、時期は縄文時代中期中葉である（吉岡・松本ほか 2002）。bの円面硯は脚部に透かしがあり、硯面の中心をなす陸の周縁に幅の狭い堤を設けている。檜崎彰一氏によると有堤式透脚硯と称されており（檜崎 1982）、7世紀後半から8世紀初頭までの所産である。



第3図 千歳下遺跡調査区周辺出土遺物

調査は開発期間や予定地内に建物が残ることから当初はA・B調査区の調査を計画していたが、A調査区で重要な遺構が確認され、南側の開発予定地にも延びることが予想されたため、建物撤去の後にC調査区を設定し、調査を実施した。調査期間はA・B調査区が平成11年2月5日～3月31日（第1次調査）、C調査区が平成11年8月5日～9月30日（第2次調査）までである。調査経過は以下の調査日誌（抄）のとおりである。

(1) 第1次発掘調査（A・B調査区）日誌抄

2月5日（晴のち曇）調査開始（図版第3）。重機掘削。便宜上、民家へ通じる道路を挟んで南北に分かれるため、道路の南側をA地区（以後、調査区とする）、北側をB地区（調査区）とした。※道具を搬入。

2月8日（晴）人力による作業開始。調査区内の排水作業。A調査区：東側・南側排水溝を掘削。表土を剥いで明橙色土層上面を検出。湧水が激しいため、調査区周囲に排水溝を掘削。B調査区：東側と南側に断面観察を兼ねて排水溝を掘削。シルト層上面に自然流路による砂利が堆積。砂利層・シルト層の互層が基本的な堆積状況となる（図版第4（1））。白磁・鍋・製塩土器支脚・土師器片等が排水溝掘削中に出土。平安時代末期から鎌倉時期前期に該当。※水中ポンプ・テント・仮設トイレを搬入。吉岡係長現地確認。

2月9日（晴）A調査区：南東隅に遺構検出、近代のものか。B調査区：東壁壁面図作成。下層によく締まった砂利層があり、ベース層と考える。シルト層上層の砂利層から近代の遺

物が出土。

2月16日（晴）A調査区：明橙色土下層のφ20cm礫を含む茶褐色土層を掘削。B調査区：シルト層上層を掘削、全体の精査。流路より植物遺存体が出土。※仮設電源設置。

2月17日（晴）A調査区：φ20cm礫を含む茶褐色土層下層の灰茶褐色粘質土層を掘削。羽釜・土師皿が出土。鎌倉時代の遺構面か（図版第8（1））。B調査区：自然流路（シルト層上層）を掘削。石列を検出。石列は自然流路によって切られていた。現在の方格地割りではなく地形に沿ったものか。シルト層を剥いで集石を検出（図版第4（2）・6）。シルト層下層のベース層上層では黒色土器・製塩土器・羽釜等が出土。

2月18日（曇のち雨）A調査区：灰茶褐色粘質土層掘削中に鞆羽口が2点出土、羽釜・土師器も出土。湧水で泥化したため層位不明。中央に土坑状の輪郭を検出。埋土を水洗して鍛造剥片を確認。南・東・西側に排水溝を掘削。東側溝に土器が集中して出土する。下層の遺構内遺物か。B調査区：集石の検出を継続。A・B調査区：雨が続く為、ブルーシートで覆いをして作業を継続。

2月19日（雨のち雪）雪が激しくなってきたため午前中で作業終了。B調査区：シルト混砂礫層を掘削、集石はφ2mほどの範囲で広がっている様子が判明。

2月22日（晴）A調査区：排水溝の掘削。鎌倉時代遺構面東壁の窪みに溜まった黒土（砂鉄か）を検出。精査後、灰色粘質土層を全面で検出。その直下で古墳時代包含層を検出。B調査区：シルト混砂礫層の掘削完了。木片散乱を確認。遺物は羽釜を含むことから鎌倉時代の遺構面と確認。集石は北西より南東方向へ走り、石列と同方向に伸長する。石列と直交して杭を3本検出。土坑等の遺構は検出できない。測量杭を打つ。測量は翌日行う予定。

2月23日（曇ときどき晴）A調査区：排水溝の掘削中に多量の土器が出土。特に南側・東側排水溝に集中する。土壌水洗を行って遺物を回収。多量の遺物中に滑石製勾玉・滑石製有孔円板・管玉・勾玉・ガラス小玉・鉄片などが出土。全体で6箱となる。B調査区：排水溝を掘削。測量杭に座標、レベルを移動。※舞鶴市教育委員会 吉岡・水野来跡、土器細片が多いことから、2次堆積の可能性もあるとの指摘。

2月24日（雨一時曇）A調査区：排水溝の掘削、表土より約1.5m下げる。土壌水洗（以後、A調査区の土は全て水洗）。布留甕・滑石製白玉を確認。

2月25日（晴）A調査区：排水溝の掘削完了。B調査区：精査。完掘状況の写真撮影。

2月26日（晴）A調査区：断面図を作成。包含層および遺構面を検出。ピット（Pit）・土坑（SK）（砂鉄溜り）検出。B調査区：集石遺構の石列南側を断割り。

3月1日（晴）A調査区：東壁南側崩落、復旧を行う。鎌倉時代ベース面で鉄分沈着の硬化面を検出（図版第8（2））。小鍛冶を行っていた状況証拠（鞆羽口・鍛造剥片・粒状滓）が揃う。B調査区：断割りにて下げるが遺物包含層は確認できなかった。壁の崩落の可能性を考えて断割り中止。土壌水洗で鉄片や滑石製有孔円板1・管玉2・勾玉1・白玉58を確認。

3月2日（曇のち晴）A調査区：SK02を掘削（図版第8（3）・9（1））。埋土を採取。鉄滓が出土。Pit01柱穴の半割、柱根を検出。崩落土水洗。B調査区：集石遺構を除去。木製

品が出土（図版第7（1）・（2））。土器洗浄。崩落土中より鉄片・瑪瑙製勾玉1・滑石製有孔円板1・管玉1・滑石製白玉105を確認。

3月3日（晴）A調査区：崩落土全て除去。鎌倉時代遺構面整地層掘削。SK03を検出（多量の土器出土）。Pit02を検出。B調査区：石列の整地層掘削。杭が石列・集石以前のものとの確認。

3月4日（晴のち曇）A調査区：SK03上層埋土の掘削。上層遺物出土状況まで埋土除去。

3月5日（晴）A調査区：SK03上層遺物検出状況の写真撮影（図版第9（2））。図面作成。土器取上げ（細片が多いため20cm区画で一括収集）。

3月6日（晴）A調査区：SK03下層遺物出土状況の写真撮影（図版第9（3））。図面作成・土器取上げ（細片が多いため20cm区画で一括収集）。※府教委 肥後氏、府埋文センター 河野氏来跡。5世紀代の千歳下集落だけでは理解できない。周辺も含めてより大きな集団がここで祭祀を行っていたと考えた方が良い。「一ノ宮」がキーポイントとの指摘。

3月8日（雨一時曇）A調査区：SK04遺物出土状況まで埋土除去。SK05を検出。埋土水洗。SK05はSK04とほぼ同様の遺物が出土しているため同時期のものか？ SK05は南西方向に落ち込んでおり、その掘形が断面で確認できる。SK04・SK05ともに浅い窪みとも考えられるが断面から土坑と捉えておく。東側排水溝掘削中に破鏡（第14図2）を溝内にて確認。平面で確認できるまで現状で置いておく。

3月9日（曇一時雨）A調査区：SK04の遺物取上げ、取上げの際に土器が南方向に伸びていく。昨日検出したSK05と同一のものとなり、土器は同一面をなして調査地南側を南西方向へ広がるため、土器溜りとする。

3月10日（曇一時晴）A調査区：南側の掘削を行う。南西方向の落ち込みに土器が堆積している様子を確認。土器の検出とベース層（遺構面）の確認を行う。北側でSK06を検出（図版第10（1））。※府埋文センター 田代・筒井両氏来跡。様々な御助言を頂く。祭祀とするには遺物だけではなく出土状況も詳細に検討する必要があるとの指摘。府教委 細川・有井両氏来跡。現地視察。出土遺物から現在の遺構面は5世紀後半であろうとの指摘。ただ排水溝出土の滑石製有孔円板の形状から5世紀前半の遺構も存在するであろうとの指摘。有孔円板や白玉は住居址の廃棄祭祀にもともなうので様々な祭祀形態の一つとしてとらえれば良いのではないかとの指摘。

3月11日（曇）A調査区：SK06焼石等の検出。南側で土器が出土（図版第10（1））。破鏡一時取上げ（代わりにプラスチックで作った模型を原位置に仮置き）。

3月12日（曇）A調査区：土器溜り遺物取上げ。SK07・SK08掘り込み面まで掘削。

3月14日（晴）A調査区：SK07・SK08を検出（図版第10（2）・11（1）・（2））。

3月15日（雨一時曇）A調査区：SK07中央にアゼを設定して掘削。北側より遺物、石が落ち込む状況を検出。SK08を半割して掘削。破鏡（第14図1）が出土（図版第11（3））。埋土中に焼石を多数検出。排水溝をさらに掘り下げる、遺物が多数出土。

3月16日（曇一時雨のち曇）A調査区：SK07の図面作成後、完掘。勾玉（第21図8）が出

土（図版第10（3））。SK08を掘削し、集石に被熱を確認。炭が若干混入。土も炭層の上下で取上げ、円形の集石となることが判明。破鏡は炭層の下層出土か。※周辺の下水管埋設の立会い（防火水槽から下、中世のPitを確認）。

3月17日（晴） A調査区：SK07のレベルを記入。SK08の遺物出土。破鏡（第14図1）出土状況の写真撮影（図版第11（3））。※B調査区工事着工。工事用道路・下水管理設の立会い（防火水槽前は全て砂礫層の包含層で遺構の確認はできなかった）。

3月18日（晴） A調査区：SK08の土器取上げ。さらに遺構の検出、南側で杭跡と土坑を検出。※下水管理設立会い（野菜洗い場では、包含層や遺構は確認できなかった。それらしい土はあるが確認できない）。

3月19日（雨） A調査区：SK09を半割して掘削（図版第12（2））。A調査区北側掘形肩部に土器・鉄片の堆積層を確認。φ60cmの円形を呈する土坑（SK10）として掘削（図版第12（3）・13）。※下水管理設立会い（洗い場前交差点、砂礫層から続く灰色砂礫層もあるが遺構・遺物は確認できなかった）。

3月23日（晴） A調査区：SK10を掘削。遺構とは認識できず、北東より落ち込む土器溜りの状況を示す。写真撮影（図版第13）後、除去。SK09平面プランの再確認、調査区北側へと伸びていく様相を示す。※下水管理設立会い（一ノ宮祠前は土・砂礫層を検出。砂礫層の下で包含層を確認）。

3月24日（晴） A調査区：SK10の遺物取上げ。SK09内のPit01を半割。検出状況の写真撮影（図版第12（2））。SK11の遺構掘形ラインの検出。層位はSK09・SK10下層となる。土坑状の落ち込みでなく、溝状に検出。SK11の埋土上層に硬化面を検出し、浅い落ち込みをSX01とする（図版第15（2））。

3月25日（晴） A調査区：SK09を完掘。SK11は調査区外側へ東西方向に延びるためSD01と修正。SK11とSD01は同一遺構。南側西壁10層～17層を掘削。17層を掘削したところで南東隅から北西に伸びる拳大の石列を検出。そこから最下層までの粘質土は落ち込みに堆積した土層と判断する。北東方向への落ち込みをSK12とする。

3月26日（曇一時雨） A調査区：SD01を完掘。SK12石列を検出。平面実測。石列に堆積する粘質土と落ち込みに堆積する粘質土は同一層か。

3月29日（曇） A調査区：SK12を検出、土坑状とはならず集石部分が盛り上がる遺構となる。

3月30日（曇） A調査区：SK12北側を掘削。SK13を完掘（図版第14（1））。

3月31日（晴） A調査区：SK12を除去。SK14・SK15を検出して掘削（図版第14（2）・（3）・15（1））。北側で最下層の黄色細砂礫層を掘り込む遺構を検出。遺構底に焼土を検出し、除去。※本日にてA・B調査区現場終了。機材等を搬出。

(2) 第2次発掘調査（C調査区）日誌抄

8月5日（晴） 現場再開。C調査区とする。北側から重機掘削開始（図版第5）。約0.6m

下から鎌倉時代の遺構面を検出。南に下がる地形を確認。中央部からベース層が砂利層となって認識ができなくなり、約2m下まで断割りを入れる。断割りが崩落した場所より瓦器鍋が出土。その深さまで重機で南方向へ拡幅掘削。

8月6日（晴）測量杭設定。※府埋文センター 森下氏・筒井氏・河野氏、山城郷土資料館 安藤氏来跡。

8月9日（晴）本日より作業員による掘削を開始。調査区内に崩落した土砂の除去。排土の整理。出土遺物は古墳時代中期の土師器が主体を占めるが、中世・古墳時代後期の遺物も混入。土器以外の遺物として白玉・管玉・鉄片・鉄滓も出土。遺構面は南へ向かって傾斜しており、砂礫層へ続く。ベース層はまだ認識できない。南側砂利層の堆積からは鎌倉時代の遺物（瓦器鍋・手捏ね鉢）が出土。南側の遺構面は鎌倉時代と想定できる。

8月10日（晴）北側遺構面の確定、遺構を検出。ピット（Pit）・土坑（SK）・溝（SD）・集石を検出（図版第16（1））。鍛冶関連遺構の検出を想定して50cm区画を設定し、サンプル土を採取。

8月11日（曇一時雨）北側調査区の遺構を掘削。鍛造剥片が多量に混じる黒色土溜りを検出。ブロックを図面に記録後、サンプルとして採取。鍛冶炉本体は検出されない。遺構面南端で検出した石は上面が平坦で被熱している。鉄床石か？※府埋文センター 筒井氏来跡。

8月12日（晴）北側調査区の平面図作成。鉄床石の検出状況の図面作成。石の下には大小の石が根石のように土坑底に入っている（ベースが軟弱なためか？）。

8月16日（曇）北側調査区の遺構掘削完了。鎌倉時代の遺構面のベースとなる整地層を掘削。南側調査区SD02を完掘。集石を検出。瓦器鍋・製塩土器・土師皿が出土。

8月17日（晴）C調査区北側：鎌倉時代の遺構面ベース層（黄褐色礫土層）を掘削。瓦器鍋が出土。遺構面を精査。C調査区南側：集石面まで掘削。集石の南側にさらに石列があることを確認。集石は北側に伸び、これも石列状となることを確認。土器はSD02下層と石列を覆うシルト層とで分けて取上げた（図版第18（1）・（2））。北側の上層石列を石列1、南側の石列は石列2として取上げる。瓦器鍋・土師皿・白磁が出土。瓦器鍋は同様のもののため、短期間で溝が埋まったと想定。

8月18日（晴）C調査区南側：石列2と石列3を検出。検出状況から石列は溝内の流れ込みもしくは投棄された石であることが判明。一応遺構名をSD03とする（図版第18（3）・19（1）・（2））。溝埋土は大きく2層に分層でき、上層は石列2を含む。SD02は表土直下で検出される遺構でSD03埋没後の溝となる。SD03を完掘、写真撮影、平面図作成。SD02・SD03断面は西側壁面図として作成して代用。

8月19日（曇）C調査区北側：東側排水溝の断割り。壁面図作成。SK04を検出、北側へ伸長している模様。四分割で掘削し、埋土を2層に分ける。上層は出土状況から流れ込みの遺物か？下層は南側に包含層（粘土層）が堆積することから南へ落ちる際にある遺構か。

8月20日（晴一時雨）C調査区北側：SK04を四分割で掘削。土器を検出しながら掘削を進める。上層埋土除去後、土器群が出土（図版第23（3）・24（1）・（2））。

8月23日（曇）C調査区北側：SK04を四分割で掘削を継続。上層で出土した細片を取り上げ、形が分かる良好な遺物を中心に検出を進める。甕が数個体がまとまって出土しているようであり、その輪郭の検出を継続する。大きい破片が下層にもぐりこむ状況であることから、下層も同一層として考えてもよい。SK04埋土中には玉・鉄器はまだ出土していない。

8月24日（雨のち曇）C調査区北側：SK04を掘削。土層観察用のアゼで断割りを入れ、層位を確認。土坑の掘形を確認。その下層に砂礫層、またその下層に甕等の包含層を確認。東側西壁壁面図を作成。

8月25日（曇のち晴）C調査区北側：SK04を掘削。底が浅いため土坑というより底が平坦な落ち込みとなるか？

8月26日（曇）C調査区北側：SK04のアゼ除去後、掘削。土器の検出を完了。甕・壺などの土器の中に玉・鉄器片が散見し始める（図版第24（3）・25～27）。C調査区南側：西壁際を断割り、白磁出土。古墳時代の包含層がないことを確認。

8月27日（曇）C調査区北側：SK04遺物出土状況の平面図を作成。

8月30日（晴）C調査区北側：SK04遺物出土状況の平面図を作成。SK04全ての検出は済んでいないが鉄片や勾玉、有孔円板が出土。※前回のA調査区掘削部分まで拡張が了承された。明日から重機で掘削できるか契約業者に相談。

8月31日（晴）C調査区北側：A調査区の埋戻し土が見えるまで重機で範囲拡張を行う。SK04では土器の形が不明瞭なものを取上げ、土器器種が判明するものを残す。壺と思われる個体の中に鉄銹塊を検出。

9月1日（曇一時雨）C調査区北側拡張部：東側排水溝の掘削。SK04では50cm区画で土器を検出。その上層に（切り合いをもち）A調査区土器溜り（C調査区北側包含層）を検出。その他に鎌倉時代と考えられるPitを検出。鞆羽口出土。

9月2日（雨のち晴）C調査区北側拡張部：C調査区北側包含層の土器検出完了（図版第23（1））。銅釧（図版第23（2）・第14図3）が出土。

9月3日（晴）C調査区北側拡張部：C調査区北側包含層遺物の取上げ。50cm区画ごとで遺物の取上げ。

9月6日（曇一時雨）C調査区北側拡張部：SK04遺物の検出を継続。遺物出土状況の平面図を作成。

9月7日（雨のち曇）C調査区北側拡張部：SK04の掘削を継続。鉄片や鉄斧が出土。酸化鉄分が見えるため、他にも鉄器があると予想。

9月8日（晴のち曇一時雨）C調査区北側拡張部：昨日の雨により、A調査区方向から湧水、そのため西側壁際に排水溝を掘削。SK04下層の灰色粘土中より口縁部を欠損する小形壺が出土。SK04出土遺物の検出を完了。

9月9日（晴）C調査区北側：SK04遺物出土状況の写真撮影（図版第24～27）。平面図を作成。SK04下層、灰色粘土上層の砂礫混粘質土層の掘削。

9月10日（曇）C調査区北側：SK04土坑内を八分割して土器を取上げる。まとまりのある

遺物は番号をつけて取上げる。玉・鉄器・鉄片についても同様に取上げる。鉄器・鉄片が出土した場合は図面に記入して取上げる。ベース層である砂礫層を掘削。サンプル土を水洗したが、玉・鉄片はみられなかったため全部は水洗を行わないこととした。

9月13日（曇）C調査区北側：SK04完掘状況の平面図を作成。完掘状況の写真撮影。下層よりSD04検出。平面図作成後、完掘。灰色粘土層を掘削。南側斜面の遺構面検出に努める。東西方向への落ち込みの掘形ラインより上を掘削。灰色粘質土層内には鉄片がみられるため土壌水洗を行う。北西方向へ落ち込んで行く。

9月14日（晴のち曇一時雨）C調査区北側：灰色粘土層を掘削、土器が出土。50cm区画で土壌水洗。北西方向に落ちる掘形肩部（SD06）に土器が集中して出土。またT字状の溝が南側で検出される。埋土は灰色粘土層である。Pitも検出（図版第28（1）・（2））。

9月15日（台風）現場中止。

9月16日（曇一時雨）台風による現場復旧作業（テント復旧、東壁の崩落対策）。C調査区北側：灰色粘土層下層遺構面の平面図を作成。

9月17日（曇）東壁の崩落土を除去し、土嚢袋にて壁を防護。C調査区北側：灰色粘土層の埋土を完掘。平面図と土器出土状況の断面図を作成。写真撮影。土器の集中地点は西側へ緩やかに落ち込む、もしくは溝の肩部として認識した。※滋賀県教委 辻川氏、府埋文センター 田代氏来跡。

9月20日（曇のち晴）C調査区北側：灰色粘土層の完掘図面にレベルを記入。写真撮影。西側壁際を断割る。A調査区のSX01の続きまで掘削を行い、SX01の検出を継続（図版第28）。東側に平坦面、そこから落ちる斜面を西側で検出。

9月21日（雨）C調査区北側：降雨のため昼からの作業。ブルーシートでテントを張り掘削を進める。SX01の延長部分を検出。

9月24日（曇のち雨）午前中にSX01の平面図にレベルを記入。下層部分を掘削し、土嚢に埋土を水洗用として取上げる。昼から埋め戻し作業を実施。午後、台風接近のため作業中止。※本日記者発表。

9月26日（晴）舞鶴市大浦会館にて千歳下遺跡の説明会を実施。

9月29日（晴）水洗作業に必要なものを残して発掘道具等を撤去。

9月30日（曇のち雨）現地作業の最終日。テント、仮設トイレを撤去。

IV. 調査の概要

先述したように、千歳下遺跡は大浦半島の西側海浜部、舞鶴市宇千歳にある。大浦半島は標高500mに達する急峻な丘陵からなり、丘陵高地からは日本海をはるかに遠望することができる。山間の狭隘な谷間や海浜域には小規模な集落が点在するが、千歳地区も南北幅約70m、海岸から東へ約150mほどの狭隘な海浜部に立地する。最も狭まった湾口部にあり、南に東舞鶴湾、北に若狭湾を眺望することができる（第1・2図）。調査区の西側には丹後一ノ宮神社の小祠が存在する。

千歳下遺跡の発掘調査は舞鶴市道の改良工事に先立つ緊急調査であり、調査期間は最小限の日数に限られた。調査担当者の松本によると、付近では、奈良時代の須恵器片が採集されていたことから、奈良時代の柱穴群などが検出されるものと予想していたという。調査地の西側では近年の火力発電所建設の付帯事業として護岸・道路拡幅工事が行われた。調査地は現在では海岸から70mほど隔たっているが、以前は海浜に面する場所であった。

(1) 第1次発掘調査

第1次発掘調査は、平成11年2月5日から3月31日の期間に行われた。道路改良のため、道路面に沿って2ヵ所に調査区（A・B）を設定し、計60㎡の調査面積の掘削が行われた（第4図）。調査区掘削後、湧水が著しかったため、遺構面検出前の調査区周囲に排水溝を掘削して排水せねばならなかった。このため、古墳時代の遺構検出面が十分に確保できなかった⁽¹⁾。

A調査区では上層遺構面（第7図）と下層遺構群（第8～13図）が検出された。上層遺構面からは轆の羽口、鍛造剥片などが出土したが、鍛冶炉などの遺構を検出することはできなかった。包含されていた土器は少なかったが、それらによると平安時代末期から鎌倉時代のものと考えられる。下層遺構群では、古墳時代の土坑状遺構（SK01・SK03・SK05～08・SK10～12）9基（SK11（SD01）は溝状となる）、集石遺構（SX01）1基などを検出した。調査時点では、祭祀場として直接機能した遺構は土坑状遺構9基のうち、4基（SK01・SK03・SK06・SK08）と想定した。松本は当該調査区の北方に位置する浦入遺跡（吉岡・松本ほか 2002）



第4図 千歳下遺跡調査区配置図

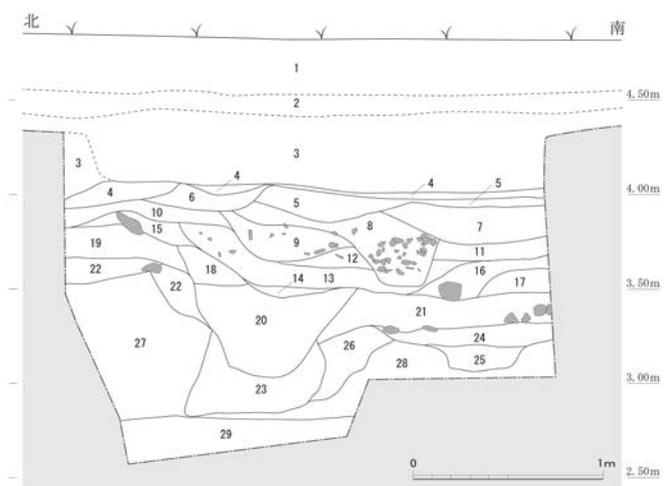
などで大量に出土した製塩土器片が出土せず、かわりに祭祀に関連すると想定される青銅鏡片や石製模造品が出土したことから、遺物を包含する土層は堆積層の流れ込み（2次堆積土）ではないこと、被熱の状況や遺物の破碎状況からそれらが原位置を保ったまま埋没したものであることを確認した⁽²⁾。これらのことから土坑状遺構や祭祀関連遺物は、古墳時代の海浜における祭祀行為の最終局面を示すものと判断した。また、土坑状遺構群の土層断面からは、埋没と掘削を繰り返した状況を確認した。よって、ある程度の期間、祭祀を継続させていたものと判断した。

なかでも土坑状遺構 SK08は平面形態が直径1.5m、挿鉢状の掘形を呈しており、掘形周囲を巡るように人頭大の円礫を配置し、中央にはやや小型の礫を組み込んだ遺構と考えることができる。礫の上面は被熱しており、大小の円礫を配置した後に火を使用した祭祀行為が行われたものと考えることができた（第10図）。斜縁獣帯鏡のほか、模造（ミニチュア）鉄器・鉄鋌・板状鉄片・白玉などが出土した。

なお、B調査区では、平安時代末期から鎌倉時代以前の集石遺構・石列などを検出したが、その下層はすべて自然堆積層からなっていたようで古墳時代の遺構面は検出できなかった。

(2) 第2次発掘調査

第2次発掘調査は平成11年8月5日から9月30日の期間に行われた。第1次調査（A調査区）で古墳時代の特殊な祭祀遺構や多くの遺物が確認されたため、予定された道路改良工事の範囲内で継続調査を行うこととなった。A調査区の南側に隣接してC調査区を設定した。上面で60m²の掘削面積を確保し、A調査区で確認した土層堆積状況との関係を把握するために、A調査区に重複するようにC調査区北側に拡張区を設けた（第4図）。上層ではA調査区同様に韃の羽口片、鉄滓などが出土したが、炉などの明確な遺構の検出はできなかった。下層ではA調査区同様に古墳時代に属する土坑2基、溝2条、柱穴の可能性のあるPit 7基を検出した。

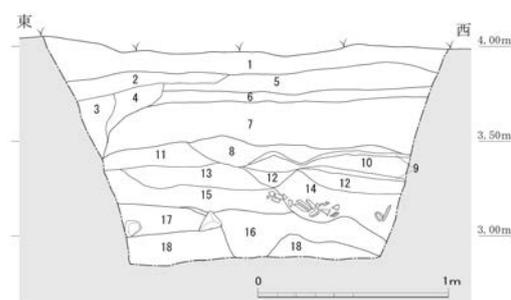


第5図 千歳下遺跡A調査区東壁土層堆積状況

1. 表土 2. 明橙赤色土（整地層） 3. 礫混入赤褐色土 4. 灰褐色粘質土 5. 黄色ブロック混入青灰色砂礫土 6. 黒灰色土（SK02埋土） 7. 砂礫混入淡褐色土 8. 青灰色粘質土（SK03上層埋土） 9. 暗灰褐色粘質土（SK03下層埋土） 10. 酸化黒変化褐色土 11. 土器溜まり 12. 土器溜まり（SK08上層埋土か） 13. 暗黒褐色土（SK08埋土） 14. 淡褐色土（SK08下層埋土） 15. 黒褐色土層を含む褐色土 16. 暗黒褐色土 17. 砂礫混入褐色土 18. 暗褐色土 19. 酸化黒変化暗褐色砂礫土 20. 褐色土（SK01埋土） 21. 黄褐色ブロック混入灰褐色粘質土（SK12埋土） 22. 黄色ブロック混入褐色土 23. 黄褐色細砂+礫（SK13埋土） 24. 暗灰色粘土 25. 暗灰色粘土混入黄褐色細砂+礫 26. 灰褐色粘質土+細砂（SK15埋土） 27. 暗灰色粘土 28. 黄褐色細砂+礫 29. 鉄分を含む褐色砂礫

第1次調査と第2次調査の出土遺物の総数を青銅器・鉄器・鉄製模造品・滑石製模造品および玉類の順に列挙すれば、斜縁獣帯鏡片1・鏡種不明鏡片1・銅釧片1、鉄製武器（鉄刀片1・鉄剣片8・鉄鏃5）や鉄製工具（鉈片3・針5・刀子片16以上・鉄斧2・鉄鑿1・鑄造斧形品1）、鉄製農具（鋤先6・摘鎌6・鉄鎌片15）、鉄鋌片21以上、鉄製模造品（剣形2・刀子形1・鋤先形18以上・斧形18以上・摘鎌形1・鉄鎌形2）と石製模造品（有孔円板11〈双孔10・単孔1〉）、さらには玉類（勾玉〈翡翠4・瑪瑙2・碧玉3・緑色凝灰岩1〉10・管玉〈緑色凝灰岩〉13・算盤玉〈水晶〉2・ガラス製小玉7）といわゆる滑石製玉類（勾玉10・白玉952）などがある。

なお、排水溝掘削時に出土したことから遺構不明な遺物も多い。このため、第VI章では遺物の器種ごとに一括して概説し、個々の遺物の詳細については巻末の遺物観察表（第8～12表）を参考にさせていただきたい。また、各種鉄器の出土遺構については第1表を参考にさせていただきたい。



第6図 千歳下遺跡A調査区南壁土層堆積状況

1. 記載なし 2. 褐色土混明黄褐色土 3. 暗灰紫色粘土 (SK01埋土) 4. 砂礫混入暗茶色土 (SK01埋土) 5. 記載なし 6. 記載なし 7. 礫混赤褐色土 (平安・鎌倉時代包含層) 8. 砂礫を多く含む淡褐色土 9. 明黄橙色土 (鉄分の沈着・硬化層) 10. 茶灰色粘質土 11. 直径20cmほどの砂礫を多く含む混暗褐色土 12. 直径10cmの円礫を多量に含む淡茶色粘質土 (SK05として遺物取り上げ) 13. 直径20cmの円礫を多量に含む暗褐色土 14. 直径20cmの円礫を多量に含む暗褐色土 15. 暗茶黒色土 16. 記載なし 17. 記載なし 18. 暗灰色粘土

V. 層序および検出遺構

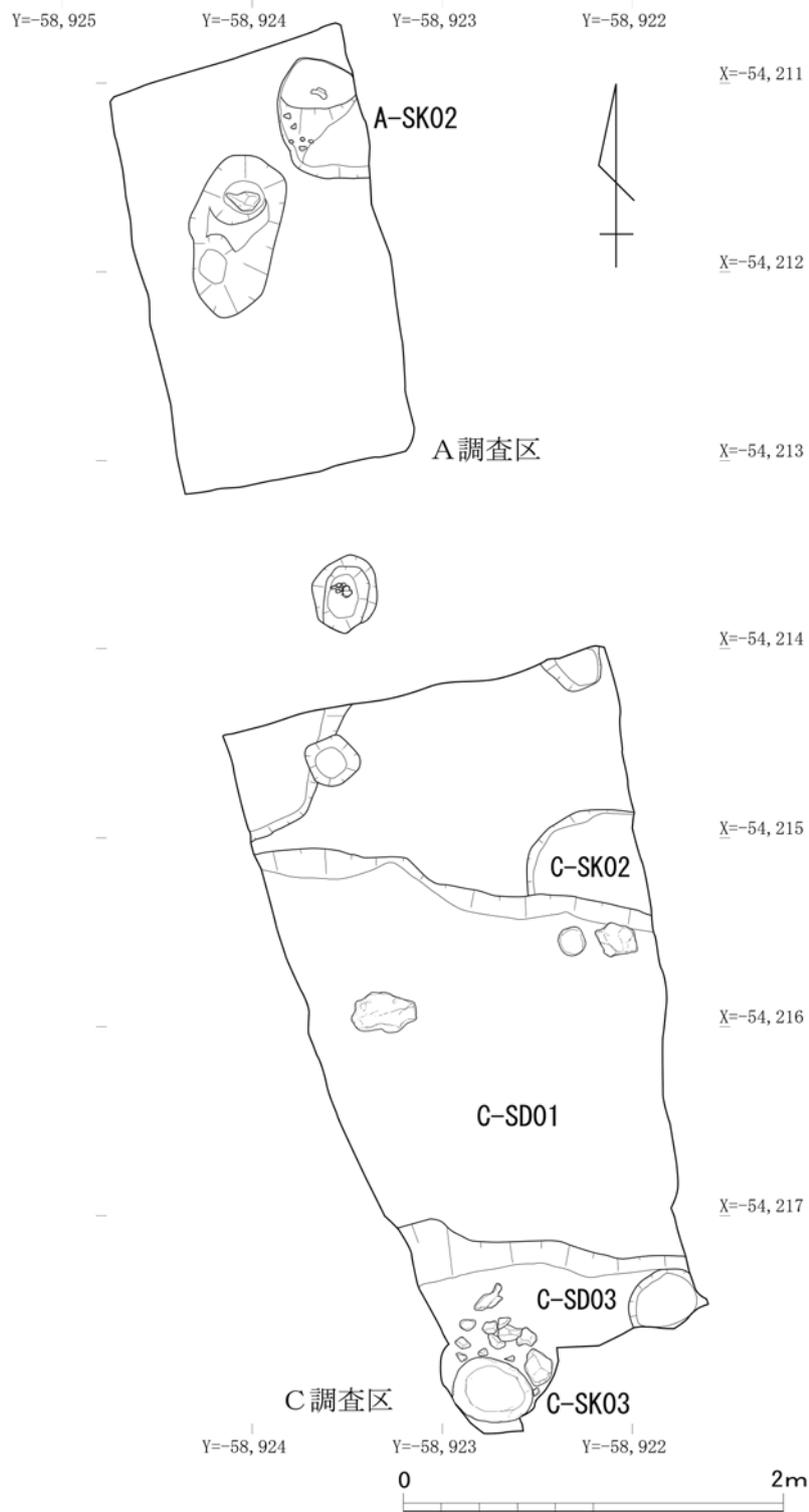
各調査区の層序および検出遺構について解説する。調査地点は千歳下地区の西に広がる扇状地中央部に位置し、谷を横断する南北方向に調査区を設定した。里道から北をB調査区、中央部をA調査区、拡張した南側をC調査区とした。なお、遺構名は調査区ごとに設定したため、遺構名の前に調査区名（A調査区）を付してA-SK01のように略記する。

(1) B調査区

南北約14m、東西約3mの調査区である。調査前の地表面は海拔約5.0mの地点にあり、畑として利用されていた。表土層である耕作土の下層には粘質土および細砂層が堆積し、その下層には近世陶磁器を含む砂礫層が厚さ0.2~0.4mで、調査区全体に堆積している。谷中央のA調査区には見られないことから、調査区北側にある河川が氾濫した時のものと考えられる。この層には近世のものと考えられる陶磁器が包含される。下層には海拔約4.0mの地点で鎌倉時代と思われる遺構面が面的な広がりを見せる。中央部から北側に集中し、集石遺構・石列・自然流路が検出された（図版第4・6）。集石遺構は拳大から人頭大の円礫を幅約1m前後、長さ3m以上にわたって南東から北西に帯状に延びるものである。この集石遺構と並行して2~2.5m北側にも人頭大の石列が検出された。石列遺構の北側には石列遺構を切るように幅約1m、深さ0.5mの溝が東西方向に確認されたが、埋土中からは近世陶磁器が出土したことから近世の洪水によって生じた自然流路と考えられる。B調査区南端にも後述するA調査区で検出された古墳時代に関する遺構・包含層の有無を確認するために一部を海拔2.8mまで掘り下げたが、粘土層・砂礫層が互層となって確認されるのみであった。湧水等によって壁面が崩壊したためこれより下層は確認できなかった。

(2) A調査区

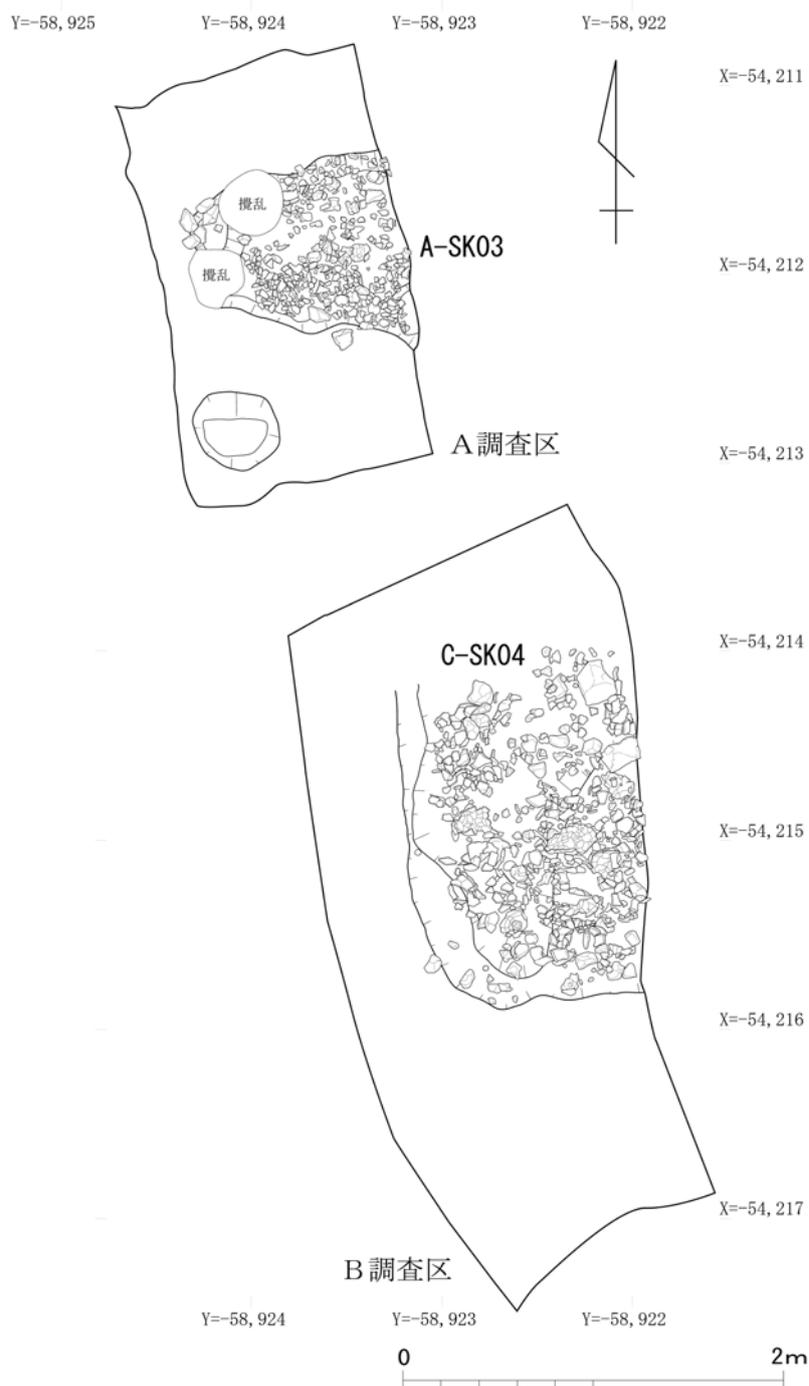
B調査区から里道を挟んで3m南側に設定した南北約6m、東西約3mの調査区である（第7~10・12・13図）。調査前の地表面は海拔約5mほどである。調査区内に水道管が埋設してあったため、実際に遺構面の調査を実施したのは一辺3mの方形の範囲のみである。耕作土である表土層の下層には平安・鎌倉時代の遺物を包含する土層があり、その下層に厚さ0.1m前後の灰褐色粘質土（第5図第4層）を挟んで海拔約4mの地点で鎌倉時代の平坦な遺構面をみることができる。これはB調査区でもみられた鎌倉時代の遺構面に対応するものと考えられる。この遺構面上にはPit 1基および土坑(SK) 1基を検出した（図版第8(1)）。土坑は北東側にあり、排水溝の掘削によって全容が不明だが、残存長0.8m・幅0.7m・深さ0.2mである。埋土は砂鉄を含む黒味を帯びた粘質土である。Pitは0.45m×0.9mの楕円形である。切り合い関係はわからなかったが、底が2ヵ所に分かれていることから土坑2基が重複したものとも考えられる。その北側土坑の底には直径0.2mの柱が一部残存していた。遺構検出には至らなかったが、崩落した東壁には青灰色と赤色に被熱した土が見受けられた



第7図 千歳下遺跡上層遺構（鎌倉時代）

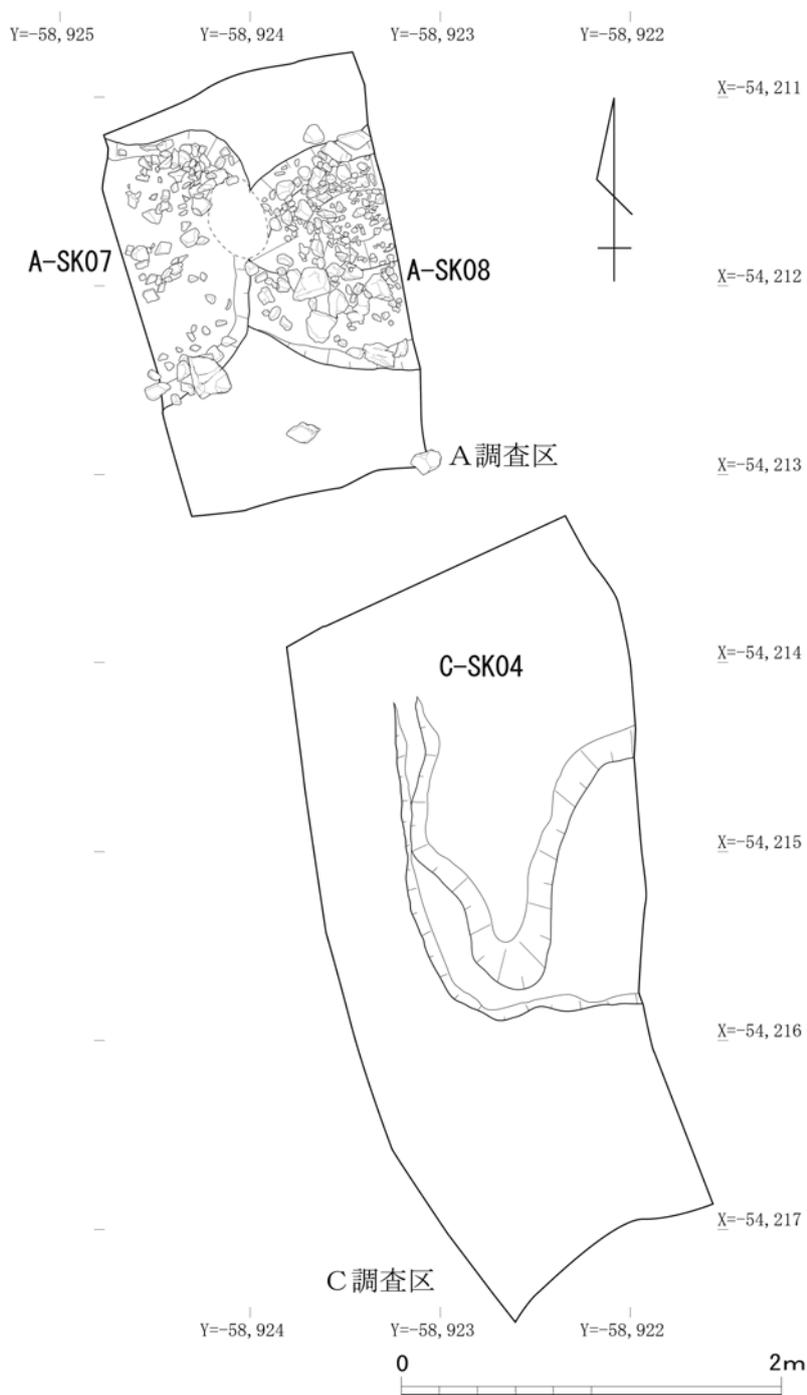
ことからこれが鍛冶炉焼土であった可能性を残しており、おそらく鍛冶工房の一角を検出したものと考えた（図版第8（2））。

この鎌倉時代の遺構面の基盤層である砂礫層を掘削すると土坑A-SK03が検出された（図



第8図 千歳下遺跡下層遺構1 (古墳時代)

版第9 (2)・(3))。残存長1.1m・幅0.9m・深さ0.15mの楕円形を呈している。埋土は2層に分かれ上層が青灰色粘質土、下層が暗灰褐色粘質土である。両層とも多量に遺物が含まれていた。さらにこの下層には北東方向から南西方向に若干傾斜をもつ地形に多量の土器が堆積する土器溜りが検出された (図版第13)。土器の摩滅が少ないことから、2次堆積ではなく原位置をほぼ保っていると考えた。この土器溜りの北東には長さ0.2m・幅0.1m・深さ0.1



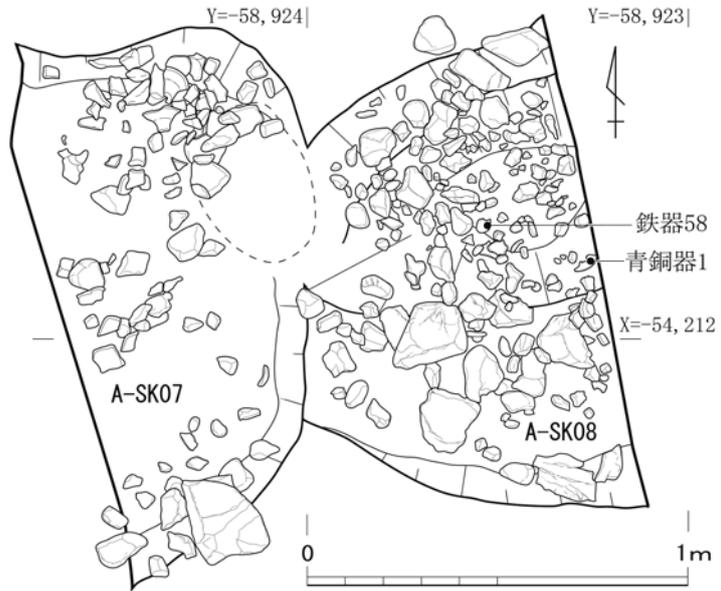
第9図 千歳下遺跡下層遺構2 (古墳時代)

mのA-SK06がある (図版第10 (1))。拳大の礫が北西側に集められ、上面が被熱によって赤く変色していた。

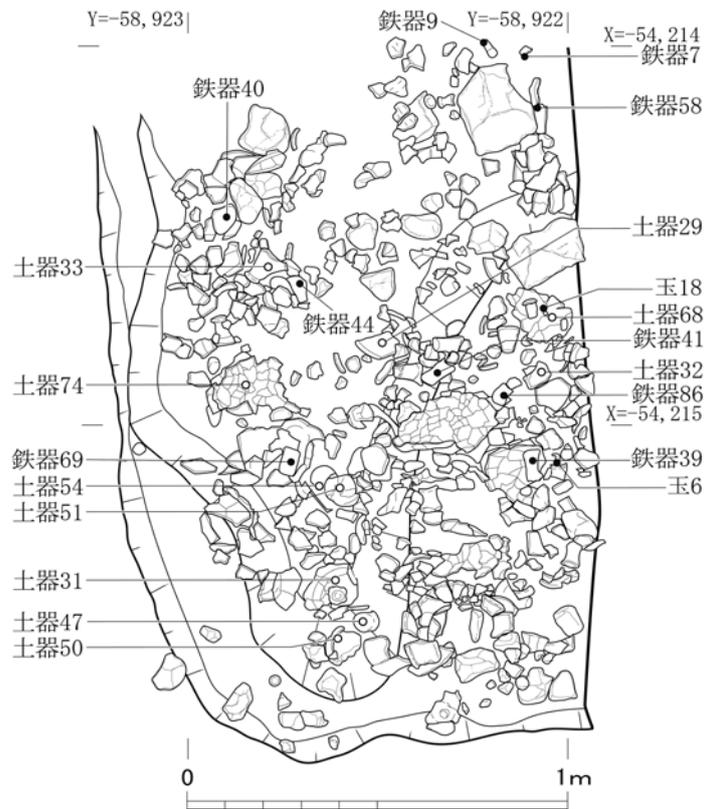
ベース層となる黒変色褐色土の下層西側にA-SK07 (図版第10 (2)・(3)・11 (1))、東側にA-SK08 (図版第11 (1)・(2)) が検出された。切り合い関係からA-SK07がA-SK08を掘り込んでいたことが判明した。A-SK07は西側が未検出だが、残存長0.7m・幅1.4m・深さ0.2

mの不定形な円形を呈していた。埋土には直径0.1m前後の礫が南北隅と中央部で多くみられ、中央と北側の礫は被熱したものが多かった。A-SK08も東側が未検出だが、直径1.5m前後の円形を呈し、播鉢状となっていた。土坑外側周辺に人頭大の礫を配し、その内側に拳大の礫を集めていた。礫の上面は被熱によって赤く変色したものが見受けられた。斜縁獣帯鏡（第14図1）は土坑中央部の礫と同じ高さで鏡背面を上にした状態で出土した（図版第11（3））。その下層ではA-SK09を検出した（図版第12（1）・（2））。土坑（SK）やPitが複数切り合っているのか不明だったが、残存長1.5m・残存幅0.7m・深さ0.2mである。その南側の面では直径0.1mの杭状のPitを6基検出した。また、北東の斜面では半分しか検出していないがA-SK10とした直径0.7m・深さ0.2mの円形を呈した土坑状の落ち込みがあり、土器が多く出土した（図版第12（3）・13）。さらに下層には調査区を東北東から西南西に横切るA-SD01を検出した。残存長1.4m・幅0.8m・深さ0.4mである。

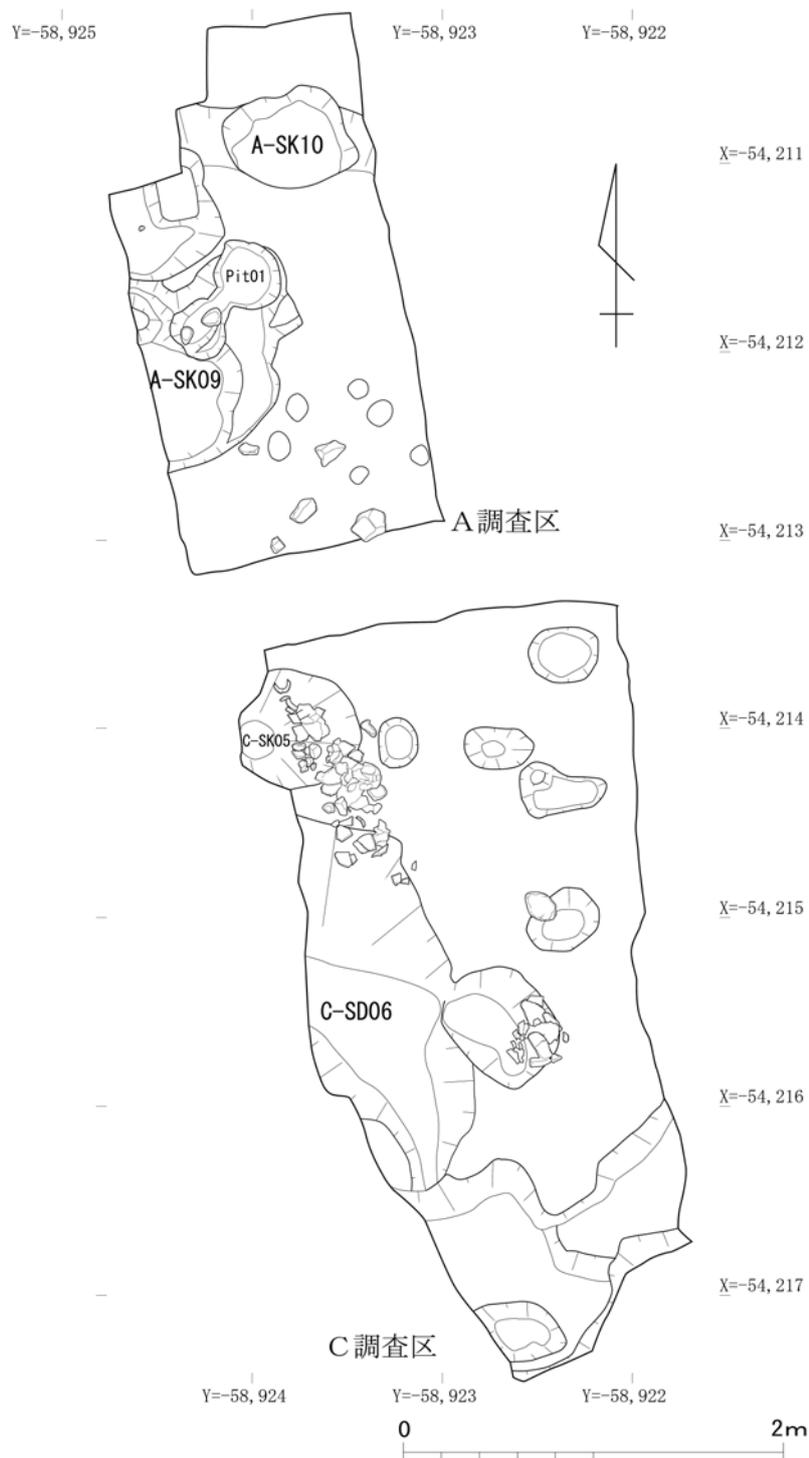
その南側下層ではA-SX01（A-SK12）を検出した（図版第15（2））。0.8~1.0mの基壇状の盛り上がりで北へ約1m張り出す。上面には拳大から人頭大の礫が多数見受けられる。こ



第10図 千歳下遺跡下層遺構A-SK08遺物出土状況

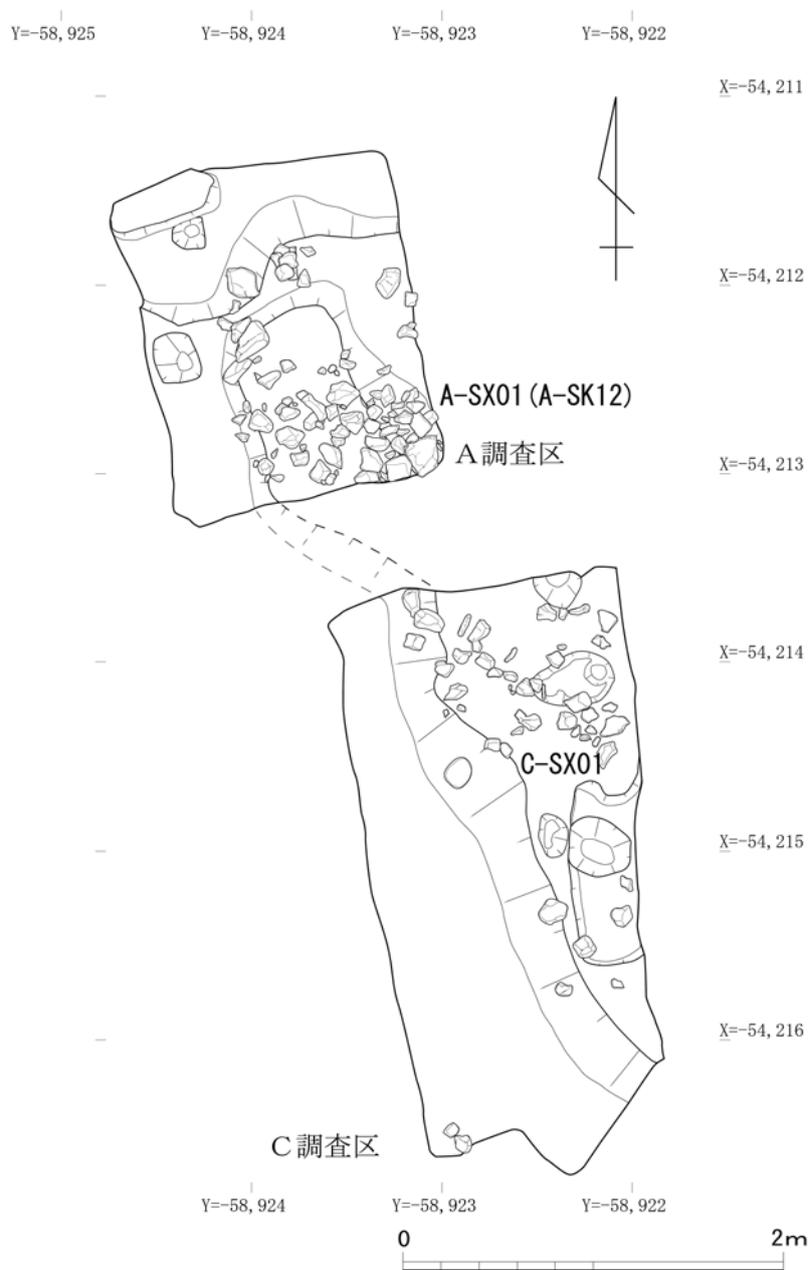


第11図 千歳下遺跡下層遺構C-SK04遺物出土状況



第12図 千歳下遺跡下層遺構3 (古墳時代)

の下層も0.1m程度の層位ごとに遺構がある。A-SK13は直径0.8m・深さ0.2mとなる円形の土坑である (図版第14 (1))。東側は排水溝掘削のため残存しない。A-SK14は東西に長い楕円形を呈し、残存長1.2m・幅0.7m・深さ0.2mである (図版第14 (2))。A-SK15は不定形の円形を呈し、残存長0.8m・幅0.7m・深さ0.3mである (図版第14 (3)・15 (1))。今回確



第13図 千歳下遺跡下層遺構4（古墳時代）

認できた最下層はA-SK16であり、土坑の一部を検出した。いずれも調査区外へ延びるもので、長さ・幅ともに1m以上・深さ0.2m程である。土坑底部は平坦で南西より被熱部が長さ0.7m・幅0.5mの範囲で広がっていた。このベース層は鉄分を含みよく締まった褐色砂礫層で、この南側には直径0.2~0.3mのPit 5基が検出された。遺物が出土していないため時期や性格は不明だが、土坑底が平坦でよく締まっていること、焼土が存在することなどから住居跡（柱穴）の可能性も残している。この遺構最終検出面の土坑底で海拔約2.8mである。

(3) C調査区

A調査区の南側、道路予定地の形状に合わせ、南北2.4m・東西1.6mの調査区を設定した(第7～9・11～13図)。海拔約5.0mの表土層下には、平安時代・鎌倉時代の遺物を包含する土層があり、その下層に厚さ0.1m前後の灰褐色粘質土を挟んでやや南方向に傾斜する海拔約4.0mの地点でA・B調査区と同様に鎌倉時代の平坦な遺構面を確認することができた(図版第16)。中央は下水管理設のため攪乱を受けていたが、土坑(SK)3基、Pit他を検出した。遺構面は南に向かって下がる地形で、流路C-SD01から南側1mは一段下がっている。一段下がった地点にあるC-SK03中央には0.4m大の楕円形を呈する砂岩が据えられ、上面は平坦で被熱していた(図版第16(2)・(3))。砂岩下には石材が据えられ、礫が充填されており、砂岩が固定されていた。礫の間には一部熔融した鉄片や鍛造剥片が出土し、同時期の遺構面が確認されたA調査区の柱穴などから小鍛冶工房の建物が存在していたことを推測させる。鎌倉時代整地層である淡茶色土の下層にはA-SK03下層とA-SK07上層で確認された土器溜りが検出された。この土器溜り中から銅釧(第14図3)が出土した(図版第23(2))。

この層は下層にあるC-SK04の土坑北西部分を削っていた。C-SK04は東側を排水溝により削平されたため、全体がうかがいえないが長さ2.1m・残存幅1.3m・深さ0.2mを測る南北方向に長い隅丸長方形を呈するようであった(図版第23(3)・24(1)・(2))。土坑の中央を中心に多量の土器や鉄器、玉が出土した(図版第24(3)・25～27)。玉などの微細遺物の回収は土坑を八分割して土を取上げ水洗した。この遺構の掘形ベース層は淡灰茶色粘質土層および灰色粘土層である。

また、その下層遺構面は南西方向に傾斜をもち、南側は鎌倉時代の溝によって削平を受けていた。西方向から南方向へ「L」字状に屈曲する溝SD06、Pit8基を検出した(図版第20(3))。Pitは列をなすものもあるが、調査範囲内では建物となるのか判断できなかった。また、この遺構面はA-SK09検出面と対応するため、Pit群はA-SK09南で検出された杭群と関連をもつものと考えられる。土器・鉄器はまとまりをもって出土した。この遺構面のベース層となる茶灰色粘質土を掘削すると、東から西方向に傾斜をもつ地形となる。A-SX01(A-SK12)がC調査区方向から張り出す盛り上がりの形状であったためこの地形と繋がりをもつものと考えられる(図版第28(1)・(2))。

この下層にも遺構状の落ち込みが断面によって観察できたが、9月15日の台風の影響で調査区壁面が崩落し、近隣への地盤沈下の影響が出そうになったため埋戻しを行い、発掘調査を終了した。

VI. 出土遺物

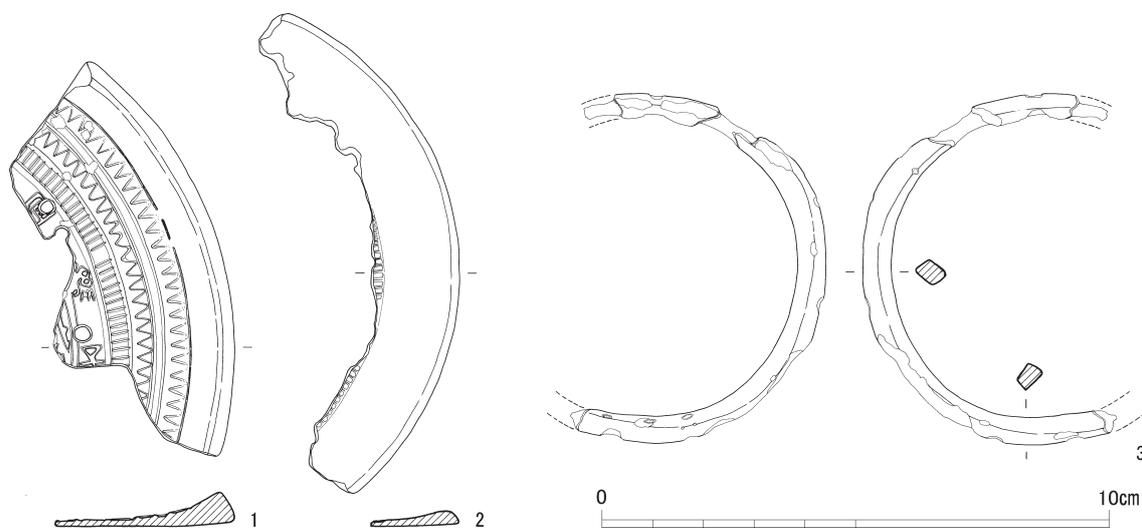
(1) 青銅器

斜縁獣帯鏡（第14図1） A-SK08から出土した。復原径14.6cm、全体の約1/6が残存する鏡片で、破断面をほぼ全面にわたって研磨する。表面は漆黒色を呈する。铸上がりはおおむね良好であるが、文様の一部に铸上りの悪い部分がある。製作段階の研磨は確認できない。鏡を懸垂するための穿孔が2カ所と欠損した穿孔が1カ所あり、全て両面から穿孔を施している。肉眼による観察であるが、鏡面・鏡背面ともに水銀朱の付着がみとめられる。文様は内側から、獣像・銘文帯・櫛歯文帯となる。外区は、鋸歯文帯・無文帯・鋸歯文帯で構成される。内区と外区の段差は小さく明瞭ではない。獣像としては天鹿の脚の一部が確認できる。

銘文帯には「宜孫子」という3文字の隸書体が認められるのみである。斜縁となる縁の上場は丸みを帯びている。縁の厚みは6.3~6.6mm、内区の主文様帯の厚みは1.3mmである。現重量は45.5gである。本鏡は面径および文様から岡村秀典氏の六像B式と判断した（岡村1992）⁽³⁾。

斜縁獣帯鏡の多くは「・・・子孫」の銘文を持っており「孫子」となるものは非常に少ない。類例としては、兵庫県塚の本古墳墳丘経塚出土と伝えられる鏡（櫃本 1998・2002）、愛媛県国分古墳出土鏡（八木 1989）があげられる。伝塚の本古墳墳丘経塚出土鏡は、面径10.9cmの四像式である。銘文は「上方作竟眞大□□□□宜孫子」とある。愛媛県国分古墳も四像式で11.8cmである。銘文には「尚□□□□□□□式在□□□會年益寿長宜孫子」とある。このうち伝塚の本古墳墳丘経塚出土鏡の天鹿の文様表現は、本鏡と非常に類似している。

次に、六像B式のうち縁が斜縁を呈するものを示すと、神奈川県了源寺古墳（赤星 1979）・長野県中山36号墳（原・小松 1972）・愛知県笹ヶ根1号墳（平出・木村・野澤・伊藤・千田・



第14図 千歳下遺跡出土青銅器（青銅鏡・銅劔）

小島・山田 1990)・京都府百々池古墳(西田・梅原 1920)・大阪府安威0号墳1号粘土槨(奥井 1982)・兵庫県天坊山古墳第1主体部(松本・加藤・岸本 1970)・奈良県小泉大塚古墳(伊達 1966・千賀 1998)・奈良県大和天神山古墳(伊達・小島・森 1963)・島根県松本1号墳(山本 1963)・岡山県一国山3号墳(神谷・河田・西田編 2006)・広島県中小田第1号古墳(潮見 1980)・広島県伝今岡所在古墳(古瀬 1982)・徳島県天河別神社5号墳(秋山 1976・森 2011)・徳島県西山谷2号墳(栗原・田川・湯浅 2005)・香川県今岡古墳(松本・岩橋編 1983)・香川県古枝古墳(松本 1983)・香川県猫塚古墳(梅原 1933)・大分県野間10号墳(賀川・小田 1967)・中国伝内蒙古綏遠(梁 1989)・中国山東省張庄1号墓(李・胡 2000)・楽浪大同江面(楽浪郡 1330 鏡)(関野・谷井・栗山・小場・小川・野守 1925)・伝楽浪(柴田鈴三氏旧蔵)(梅原・藤田編 1959)・五島美術館蔵鏡(岡村 1992)・和泉市久保惣記念美術館蔵鏡(和泉市久保惣記念美術館 1984、中野編 1985)などがある。

斜縁獣帯鏡は古墳時代前期に多く出土する鏡であり(岡村 1998)、本鏡の出土したA-SK08とは時期差がある。本鏡は、舶載後、日本列島においてしばらく経過したのちに祭祀で遺棄されたものと想定できる。

鏡式不明鏡(第14図2) A調査区の東側排水溝の掘削中に出土した。復原径11.2cm、縁と櫛歯文帯の一部が残存する。文様の鑄上りは悪く、櫛歯文帯の一部が不鮮明である。色調は金銅色となる。製作時の研磨痕は確認できない。また、破断面への研磨は行われていないものの、この鏡片に接合する破片が出土していないことから鏡片としてもたらされたと判断する。櫛歯文帯のみで鏡式を断定することは困難であるが、内行花文鏡の可能性もある。中国鏡か仿製鏡かについても判断ができない。平縁となる縁の上場はやや丸みを帯び、明瞭な稜はみられない。縁の厚さは2.9~3.0mm、内区の櫛歯文帯は厚さ約1.0mm、現重量16.1gである。肉眼では赤色顔料や布の付着は認められない。

銅釧(第14図3) C調査区北側包含層出土である。残存部から推定する限り、比較的整った正円を呈する。円環外面に刻目はない。全体の約1/3を欠損しているほか、錆による腐食が著しく遺存状況は悪い。断面の形状は場所によってやや異なり、菱形を呈する部分(右図左側)と、それより薄く長方形を呈する部分(右図下側)がある。この他、釧の内側面(右図下側)には直径1.5~3.0mmの気泡がみられる。これは図の上側に湯口が存在したため、鑄造時の気泡が内側に残った痕跡(鬆)と考えられる。したがって、断面形状の違いは湯廻りの良・不良を示しており、厚く菱形を呈する部分は湯廻りが良かった部分、それより厚さが薄く長方形を呈する部分は湯廻りが悪かった部分と考えられる。現重量は6.6gである。

本釧は円環形無刻型銅釧と分類され、断面が菱形のものは8点あり、4世紀後半の古墳と6世紀代の古墳から出土すると報告されている(小高 1989)。

(2) 鉄器・鉄片

a. 武器 (第15図1～14)

鉄刀 (1) 鉄刀身と考えられる小破片のみである。断面が二等辺三角形を呈することから刀身と判断した。折り返し鍛錬をした痕跡を断面に残している。

鉄剣 (2～9) 鉄剣鋒や鉄剣身の破片がある。横断面が薄いレンズ状か菱形になるものを鉄剣破片とした。身幅が5cm、厚さ1cm前後となる大型品(8)も存在する。剣身と鋒(2～5)が接合する個体はなく、身幅もそれぞれわずかに異なることから別個の鉄剣の破片と考えることができる。

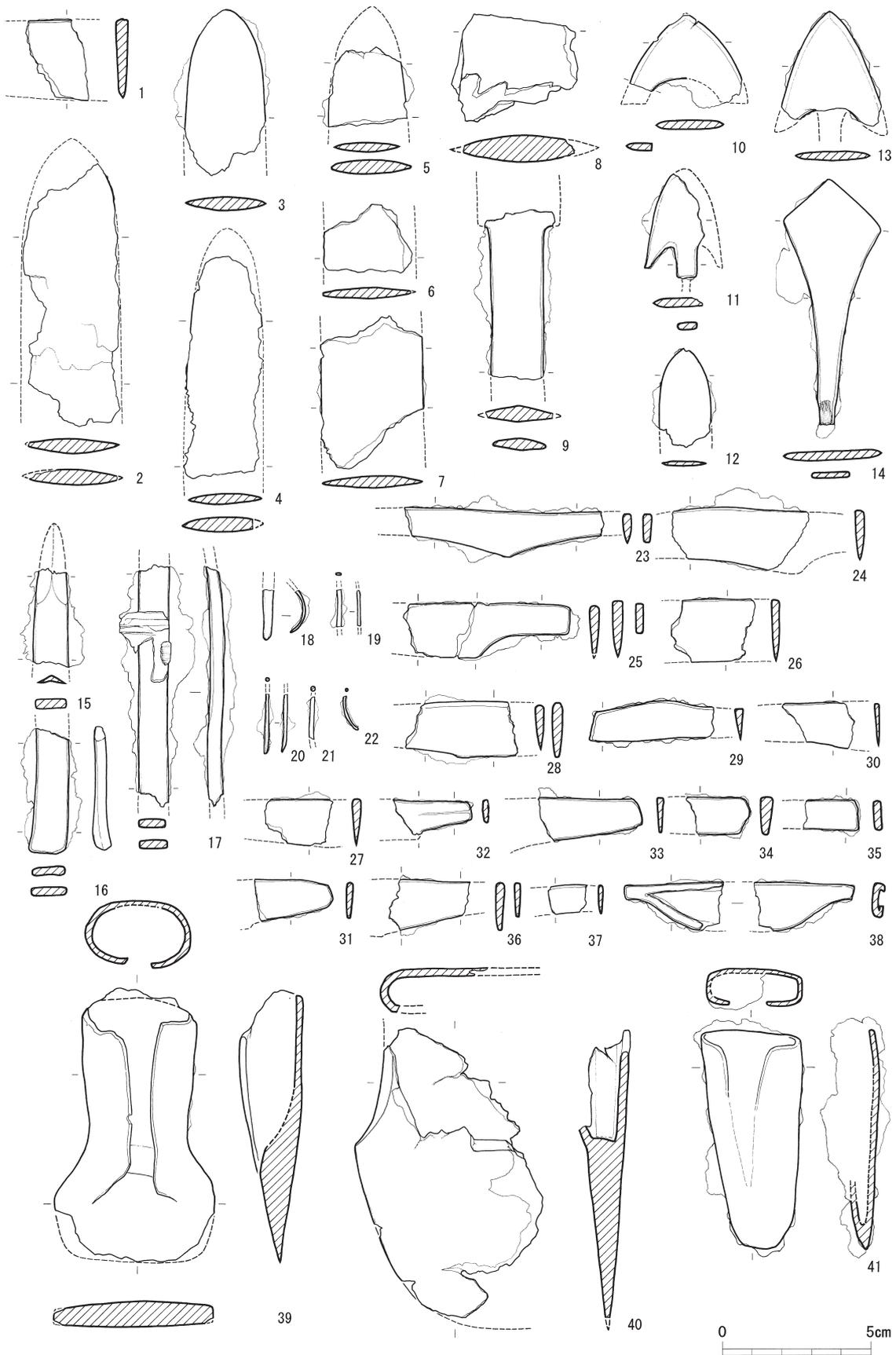
鉄鏃 (10～14) 鉄鏃5点はいずれも形態が異なる。10は茎が確認できない。11も篋被ぎから茎部分が欠損しているようである。古墳副葬品とも異なる形態を呈しており、実際に使用された鏃なのであろう。

b. 工具 (第15図15～41)

鈍 (15～17) 破片となり、錆化が著しい。17は鉄錆に覆われているが、わずかに木柄と樹

第1表 千歳下遺跡出土鉄器・鉄片所属遺構

調査区	遺構名	刀剣	鉄鏃	工具	農具	鉄鋌	模造品	鉄片
A	SD01			29				
A・C	SX01					89		
A	SK03	8		18・23・	42・68・		105・107・110・ 120・122	
C北	SK04	1・2・4・ 7・9	12	15・16・ 17・20・ 21・24・ 31・36・ 40・41	43・44・ 46・53・ 58・60・ 63・64	70・73・ 78・84・ 86	92・100・114・ 115・124・131	133・140・144・ 145・148・154・ 155・161・162
A	SK05					83	129	
A	SK06				45・47・ 54・67		118	136・147・158・ 181
A	SK07			26	48	90	108	
A	SK08					85	97・109・116・ 127	
A	SK10				55			177
A	SK11						93	
A	SK12							159
A・C	排水溝・ トレンチ 壁面崩落 土ほか	3・5・6	10・ 11・ 13・14	19・22・ 25・27・ 28・30・ 32・33・ 34・35・ 37・38・ 39	49・50・ 51・52・ 56・57・ 59・61・ 62・65・ 66	71・72・ 74・75・ 76・77・ 79・80・ 81・82・ 87・88	91・94・95・ 96・98・99・ 101・102・103・ 104・106・111・ 112・113・117・ 119・121・123・ 125・126・128・ 130・132	134・135・137・ 138・139・141・ 142・143・146・ 149・150・151・ 152・153・156・ 157・160・163・ 164・165・166・ 167・168・169・ 170・171・172・ 173・174・175・ 176・178・179・ 180



第15図 千歳下遺跡出土鉄器（武器・工具）

皮紐巻きが遺存しており、実用されていたものとわかる。いずれもC-SK04から出土した。3点は接合しないものの、それぞれの破断面はほぼ同規模なので同一個体の可能性がある。**針**（18～22）18・19は扁平な板状の横断面となり、20～22の横断面は円形に近い。20・22の直径は1.5mm前後と小さい。

刀子（23～38）鉄刀よりも身幅が小さく、縦断面が長二等辺三角形を呈するものを刀子とした。すべて破片となって出土した。多くは緩やかに傾斜する刃関をもち、棟関をもたないことから4世紀から5世紀前葉までの刀子であることがわかる。茎のみで刀子と確認することは難しく、35のように不確かなものや38のように未成品かと考えられるものもある。

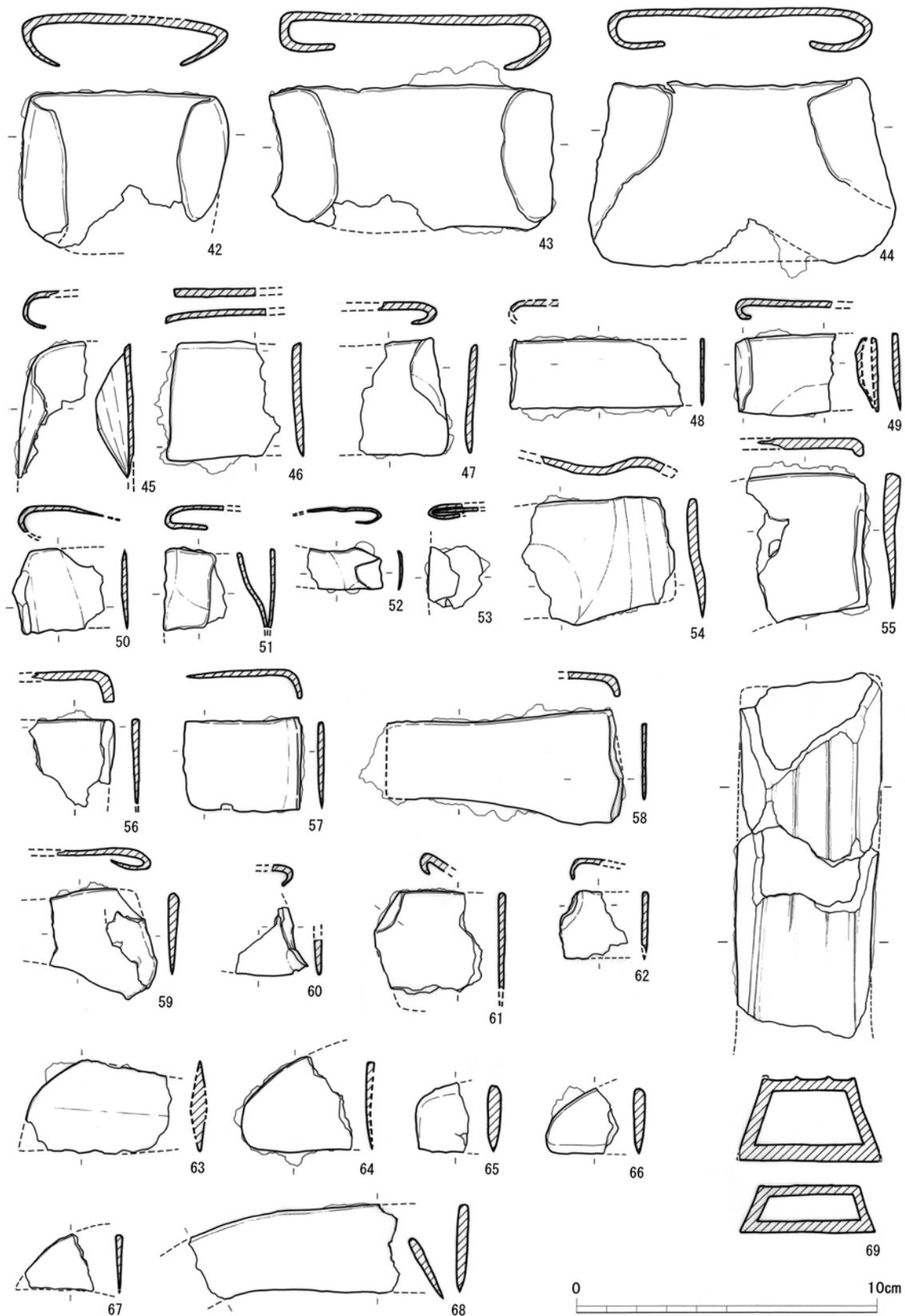
袋状鉄斧（39・40）39は厚い鑿状の刃部を比較的薄い鉄板で巻き込んで成形しているようである。木柄が遺存していることから、使用後に遺棄されたものとみられる（図版第49(1)）。40は肩部が突起状に突出して刃部が丸くなる。器表面の腐食が著しいものの、器面が平滑で非常に精巧な造形といえる。袋部破面端部が外側に傾き変形している。横斧か鋤先の可能性も考慮すべきであろう。鉄質が異なるようで、古墳副葬品にもみられない形態である（図版第49(2)）。

袋状鉄鑿（41）銹化が著しいが木柄が遺存していることがわかる。刃部は使用により摩耗したか、わずかに欠損しているようである。

c. 農具（第16図42～69）

鉄板上下幅が4cm以上、厚さ3～4mm前後の大型品を鋤・鋤先（以後、鋤先と略称）（42～47）、上下幅が3cm以下、厚さ2mm以下の小型品を摘鎌（48～53）と想定した。鋤先は鉄斧（39）と同様にほぼ完形で遺存しているものがある（42～44）。他の器種の多くが破片化しているなかでは特異な存在である。いずれも木柄の木質が遺存しないものが多いが、53のみ縦に木目をもつ木質が遺存している。鉄鎌（54～68）は破片化しているものが多い。折り返しをもち、かつ一方の長辺に刃部をもつものを鉄鎌とした。大きさにも個体差がかなりある。54は折り返しがあまく、鉄鎌ではない可能性もある。55はほぼ直角に短く立ち上がる折り返しをもつ。一辺に刃部をもつことから鉄鎌とした。61・62は通常とは反対に向く隅角部分の折り返し（角折り返し）（魚津 2005）をもつ。U字形鋤先や新しいタイプの曲刃鎌がみられないことから4世紀末葉から5世紀初頭を中心とする時期と考えることができる⁽⁴⁾。

鋤先（42～47）鋤先はすべて弥生時代以来製作されてきた長方形の鉄板を折り返した形態で、いわゆるU字形鋤先はみられない。これらの鋤先は、刃部については欠損が多いものの、比較的直刃に近い形態で共通しているようである。また木質が銹着していない点も共通している。しかし、袋部の作り方や平面形に着目すると、それぞれに形態差がある。身の長さが5～6cm前後の大型品（42～44・45）と、4cm前後の小型品（46・47）に分類が可能である⁽⁵⁾。47にみるような不完全な袋部の折り返しからは簡略化した模造品の可能性も考えられる。出土遺構別にみると、42はA-SK03下層、43・44・46はC-SK04、45・47はA-SK06下層から



第16図 千歳下遺跡出土鉄器（農具・鑄造斧形品）

出土しており、小型品の方が下層の遺構から出土していることになる。大型から小型へとといった簡略化ではなく、大型品と小型品の違いは単なる時期差、あるいは祭祀の内容の違いに起因すると考えられる。また、C-SK04のように同一遺構内から大小両方が出土したことから、その型式学的な連続性はみられない。

摘鎌（48～53） 全体が遺存する資料はないが、鋤先と同様に、身の長さが3cm前後の大型品（48～51）と、身の長さ1.5cmの小型品（52）がある。平面形については、ほぼ長方形の鉄板を加工したもの（48・49・51）と、折り返し部の幅が短くなるもの（50・52）がある。53には袋部内から身部にかけて柄と思われる木質が遺存している。

鉄鎌（54～68） 鉄鎌も全体が遺存した資料は58のみで、その他の資料は大部分が欠損している。鉄鎌の時期的指標とされるのは、直刃鎌と曲刃鎌という刃部形態の違いである。千歳下遺跡で出土した資料には、直刃鎌（58）と曲刃鎌（68）の両者が存在するが、その他は欠損部分が多く明確ではない。

鉄鎌の分類では、都出比呂志氏と寺沢薫氏の分類規準を踏襲した古瀬清秀氏の分類手法に基づく。まず大きさをみると⁽⁶⁾、全長が明らかな58は全長8cmほどの小型品である。57は柄を装着した場合、ほとんど刃部がなくなってしまう。また、58も小型品の中でも小さい方であるが、刃幅は約3cmと中型品に多い大きさである。2点とも切断はなされていないと考えられる。その他では、基部付近の幅から、54・55が大型品、58・59・62が小型あるいは中型品に分類できる。

次に、着柄角度⁽⁷⁾をみると、角度が90度前後の直角のもの（54～58）と、110～120度前後の鈍角のもの⁽⁸⁾（59～62）に弁別できる。90度前後のものは農具、110度前後のものは工具に近い機能をもつとされる（古瀬 1991）。折り曲げ甲技法では基部全体を折り曲げているのに対して、乙技法では基部の背の角のみを折り曲げている違いがあり⁽⁹⁾、折り曲げ部の製作方法と鎌の形態に相関があるといえそうである。これらのことから、大型から中・小型の農具としての鎌と、中・小型の工具に近い鎌が存在していたと想定できる。また、甲技法と乙技法は製作工人の差という指摘⁽¹⁰⁾もあり、鎌の機能のみではなく、製作地も複数存在した可能性が考えられる。基部以外では、鋒部分も出土している。これらは大型品と考えられるもの（63・64）や、それよりも小さいもの（65～67）があるが、形態は様々である。この中で63は背側にも刃部が形成されており、鉄剣の剣身と見間違える特異な形態である。

これらを層位的にみると、大型の54・55はA-SK06下層・A-SK10から、着柄角度の異なる58と60がC-SK04から出土しており、あとから工具としての機能をもつ鎌が加わった可能性を示している。C-SK04より下層の遺構からは鋤先が出土しているものの鉄製工具がほとんど出土していないことを考慮すると、祭祀具としての鉄製品の器種がC-SK04段階で多くなったことを示していると考えられる。また、上層のA-SK03からは実用に供された鉄製品は出土していないことから、大半の鎌はC-SK04出土であると考えられる。

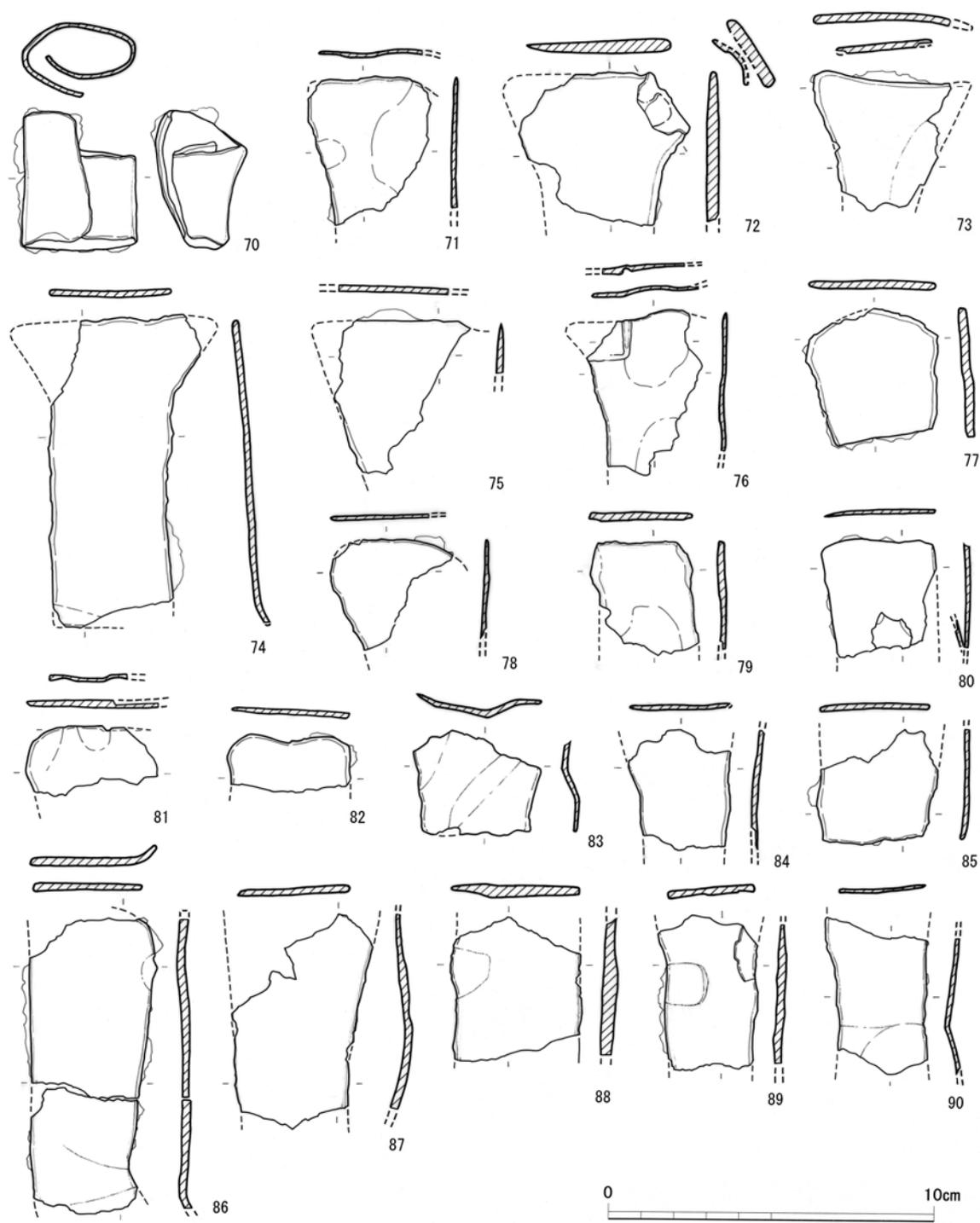
鑄造斧形品（鑄造鉄斧）（69） このほかに、韓半島南部で製作されたと考えられる単合範の鑄造斧形品がある⁽¹¹⁾。遺存状態が悪く刃部が破損している。中央部に強い圧力を受けたよ

うで上半分と下半分を接合しても歪みが生じてしまう。刃部は基部よりもわずかに広がるようで、土掘りの際に土離れをよくするための隆起突線4条がわずかにみられる。やや小型だが東潮氏の月城路型（東 1999a）に近い。4世紀末葉から5世紀前葉を中心とする他の遺物と時期的な齟齬はない。

d. 鉄鋌（第17図70～90）

どの端辺にも刃部が形成されず、厚みをほとんど減じずに端辺部がやや丸くなるもので、一端がわずかながらでも幅広に終わるもの（70～82）を鉄鋌とした。完存するものはない。両端短辺が遺存していなくとも両長辺が遺存し、両端に向けてやや幅広になるもの（83～90）も鉄鋌の一部と推定して図化した。このほか、後述する板状鉄片のなかにも鉄鋌の一部が含まれる可能性がある。出土した鉄鋌の最小幅は2.5～4.0cmで、東潮氏分類（東 1999b）の小型鉄鋌・中型鉄鋌に該当する。長さについては、欠損や切断により、鉄鋌本来の形状を保ったものが存在しないため、小型・中型のいずれの分類に当たるかは明らかではない。ただし、70・74のように廃棄時の状態を保ったものでも最大で長さが10cm前後、欠損はしているものの86も9cm程度である。細かく切断した際に発生するような中央部のみの破片がみられないことから、本来はおよそ全長20cm未満のものと考えられ、小型鉄鋌である可能性が高い⁽¹²⁾。その他の形態的特徴についてはあまり分類の指標にされてはいないが、中・大型鉄鋌の端部が撥状に広がるのに対して、細型鉄鋌では端部はほとんど広がらない（東 1999b）とされている。また、鉄鋌は細型鉄鋌を基本単位としており、それを複数枚用いて小型・中型・大型鉄鋌が作られている（東 1999b）。そのため、単純な形態であるが、大きくなるほど細部形態の変異は大きくなることが予想され、技術的分類の指標となる可能性もある。端部の形態もその一つであろう。鉄鋌の原形を保っていると考えられる資料の端部には、72や73のように直線的で、全体として三角形の撥状に開く形態と、77や78のように端部が円弧状をなし、胴部からあまり広がらない形態が存在するようである。前者は幅がやや広い印象をもつが、欠損部も多いため明らかではない。愛媛県出土遺跡では、端部が広がる「鉄鋌A類」と、端部が広がらない「鉄鋌B類」が出土しているが、ここでは「鉄鋌A類」の切断などの加工によって「鉄鋌B類」となることが想定されており（相田・谷若 1993）、本遺跡の資料とは異なる。

一方、加工痕をみると、鉄鋌製作時の鍛打痕と考えられる痕跡以外に、切断痕や折り曲げなどが観察される。70は鉄鋌のほぼ半分的位置を真一文字に切断し、人為的圧力で丸めたものである（図版第49（3））。70・72・76は先端部隅角を折り曲げている。鋭い切断痕をもつ80や83（上辺）のような資料が存在する一方、74・77・83（下辺）・85のように切断されたと思われる端部が丸みを帯びるものもある。これにより高温状態での切断（いわゆる沸かし鍛冶）と低温状態での切断が存在したことがわかる。83には両者が存在しているので、高温状態での切断→低温状態での切断のような順番が考えられる。この他、76は上辺に直交するように細い溝状の凹みが観察され、折り曲げか切断しようとした痕跡と思われる。70や72の



第17図 千歳下遺跡出土鉄器（鉄釘）

ように原形から大きく折り曲がるものと、74・83・86・90のように原形をあまり損なわずに折り曲がるものがある。これらの折り曲げ方は、後述する板状鉄片の分類と比較すると、72がa類、74・90はc類、86はcあるいはe類に近い加工形態であるが、同じものは見当たらない。加工方法はそれぞれであるが、鉄釘を利用して製品を作り出そうとしたわけではない。

e. 鉄製模造品（第18図91～132）

実用に耐えない大きさや、実用には不都合な形状となっているものを模造品として分離した。鉄剣（91・92）や刀子（93）は刃部を形成する両面の交差角度があまく、かなり小さいことから模造品とした。鋤先や摘鎌と同様な形態（94～111）をもちつつも、両短辺の折り返しが身に密着しているもの（94・95・97・98・106）、刃部が形成されないもの（97～99）、折り返しがあまく木柄の装着を意図した形状に加工されていないもの（96・99～105）がある。これらは鋤先模造品と考えることができるものである。また、大きさや素材となる鉄板の厚さが1.5～2.0mm以下で、たとえ木柄が装着されたとしても柄自体の厚さが薄すぎて実際の使用に耐えないと思われるもの（107～111）がある。これらも模造品の可能性が高いものである。

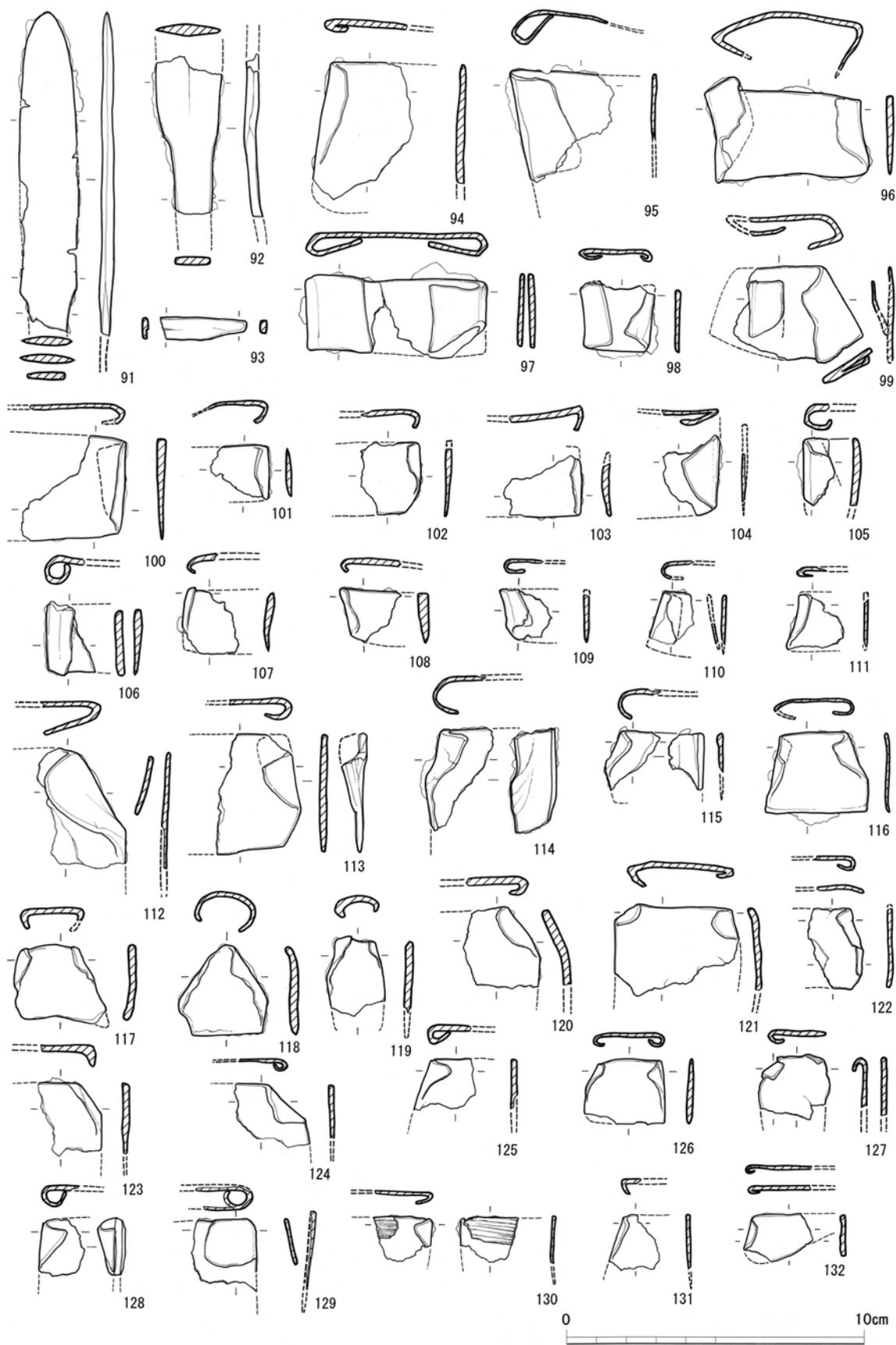
次に折り返しが基部側の一部隅角にとどまるような角折り返しをもつことから、刃部幅がより広い形態となる一群（112～130）がある。112は大型鉄鎌の一部かもしれないが、基部側端の両隅が折り曲げられる類例（116～119・121・126～127）は古墳に副葬される斧形の鉄製模造品（ミニチュア鉄斧）（門田 1999）よりも粗雑な作りをしており、他の破片もそのような模造品の部類に入るものと思われる。愛媛県出作遺跡出土例（相田・谷若 1993）にやや類似するが、短辺を斜めに折り曲げることによって台形に近い平面形となるもの（116～119）と、基部側上端両隅の突出した隅角のみをわずかに折り曲げる形骸化した形態（121・127）の二者がある。模造品の形骸化とみれば、前者から後者への変化を説明することができる。このほかにも素材鉄板が薄く、規模が小さすぎることから鉄鎌模造品（131・132）と想定されるものもある。

f. 板状鉄片（第19図133～181）

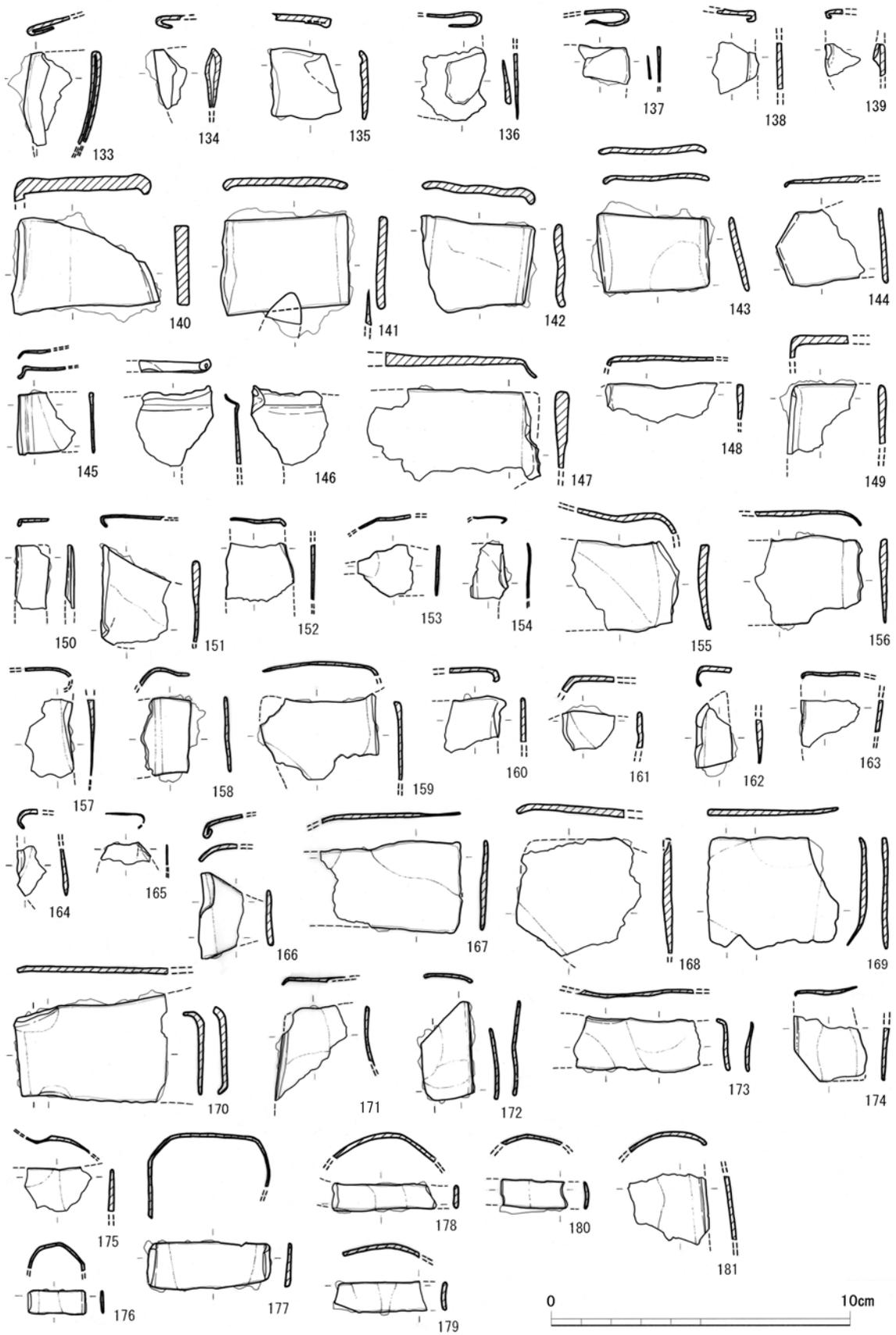
板状の鉄破片のなかでも折り曲げ加工がみられるものの一部を図化した。断面「U」・「コ」字状に強く折り曲げるもの（133～139）は上述した模造品などに含め得なかったものである。端辺を断面「J」・「L」字状に短く折り曲げるもの（140～166）には器厚の厚いもの（140～142・147・149など）と薄いもの（145・146・150～154・157～159・165など）がある。厚いものは鉄器の一部を折り切った可能性がある。鉄鋌の一部かと想定される幅広の鉄板片（167～171）には、折り切る痕跡は少なく、隅角部分にわずかな弯曲を施すものが多い。また、幅1cm内外の帯金状の小さな鉄板（172～180）を丸く弯曲させたものなどがある。帯金状の鉄板片は厚さが薄く鉄釧片の可能性もある。このほかにも板状の鉄片は500点以上出土しているが、いずれも碎片化が著しく、図化に耐えないものが多い。

製品およびミニチュア品と考えられる鉄器以外の資料で、意図的に折り曲げたり、弯曲させたと考えられる鉄片について、その形状から以下のようにa～f類に分類することができる（第20図）。

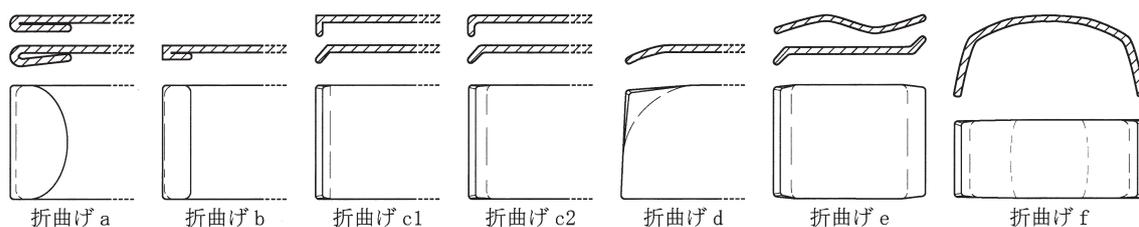
a類（133～137） 端部を「U」字状に折り曲げるが、その折り曲げの度合いが強いもので、



第18図 千歳下遺跡出土鉄器（鉄製模造品）



第19圖 千歲下遺跡出土板狀鉄片



第20図 千歳下遺跡出土板状鉄片折曲げ模式図

折り曲げ部分が閉じたものもある。ただし、135を除くと破片であり、錆化により剥離した個体と、摘鎌や鋤先の模造品を含んでいる可能性がある。

b類 (138～139) 端部を「コ」字状に強く折り曲げるが、a類のように折り曲げ範囲は広くなく、狭く短いものである。数は少ない。

c類 (140～165) 一边を「J」あるいは「L」字状に折り曲げた資料である。「L」字状に折り曲げたものには140・144～154、「J」字状に折り曲げたものには141～143・155～165がある。これらの形態的特徴から別の分類になる可能性もあるが、140～143にみるように、形態が非常に類似したもののなかにも、両方の形態が存在しており、折り曲げる意識においては有意な差は存在しないと考える。したがって、この二者を同じ分類にとどめ、技術的な差異という点から両者をc1、c2と細分する。c1類は何らかの工具を当てて（あるいは鉄床などの工具に置いて）折り曲げ加工を行ったと考えられる。直線的で比較的鋭く曲がることとその理由であるほか、145・146・150には幅が細い溝状の工具痕が存在するからである。折り曲げ方には、折り曲げ部より先が反るもの（145～147）と反らないものがある。c2類はc1類に比べて折り曲げ部分が緩やかであることから、工具などを当てて曲げたものではないと考えられる。中には、155～157のように鎌や摘鎌の未成品と考えられる資料も存在している。

d類 (166～170) 折り曲げが側縁全体に及ばず、一部のみにとどまる資料である。おもに隅角付近の一部、あるいは向かい合った両側辺を折り曲げている。比較的大型の資料に多いようである。

e類 (171～175) 全体として捩れがみられる資料である。比較的小型の資料が多い。175を除くと、一側縁の全体あるいは一部を「L」字状に折り曲げている。

f類 (176～181) おもに細長い形状の鉄板を「U」字あるいは緩い「V」字状に折り曲げた資料である。181を除くと、177が幅1.6cmとやや広いが、176・178～180は幅約1.0cmと他の折り曲げられた鉄器よりも幅が狭いのが特徴である。形態的なバリエーションが豊富な折り曲げ鉄片のなかでは定型的な折り曲げ方である。

(3) 玉 類

a. 勾玉 (第21図)

瑪瑙製勾玉 (1・2) いずれも山陰系の形状を呈するC字形の定型勾玉である。すべて片

面穿孔であり、色調や仕上げの程度からも古墳時代中期に通有のものである（深田 2006）。

1は頭部を欠損しているが、残存長は尾部だけで19.2mmあり、大型品である。色調は鈍い黄橙色を呈するが、透明度は高い。全体的に丁寧に研磨されており、曲面には稜をもたない。

2は完形で全長27.0mmの小型品である。赤褐色を呈し、透明度は高い。1に比べて研磨が粗く、わずかな稜が形成されている。腹部および尾部の一部に自然面を残す。

碧玉製勾玉（3～5） いずれも山陰系の形状を呈するC字形の定型勾玉である。すべて片面穿孔であり、色調や仕上げの程度からも古墳時代中期に通有なものである。3と4は全長27.8～27.9mm、幅16.6mmとほぼ同形同大の小型品であるが、4は研磨面によって稜が形成されている。5は全長38.2mm、幅21.7mmの大型品である。全体的に丁寧な研磨が施されているが研磨面が顕著に残っており、横断面が扁平になる。

緑色凝灰岩製勾玉（6） 頭部に3条の沈線を刻む丁字頭勾玉である。両面穿孔からも畿内系の特徴を有する。大きさは碧玉製勾玉に近似しており、全長28.6mm、幅18.2mmのやや小型品である。全体的によく丸みを帯び、丁寧に仕上げられている。

滑石製勾玉（7～16） 大きさによって2群に分類される。大型品は長さ24.5～37.2mm、幅13.8～21.7mm、頭部厚5.2～7.2mmである。均整のとれたC字形を呈するものが大半を占める。頭部と尾部は丸みを帯びているが、顎や尾部の先端がやや尖り気味の個体もある。小型品は長さ6.6～9.5mm、幅3.8～5.1mm、頭部厚1.3～1.9mmである。均整のとれたC字形を呈する。ともに扁平化しており、研磨においても粗雑な点がみられる。

翡翠製勾玉・平玉（17～20） いずれも片面穿孔であるが、獲得された素材の形状によるものか大きさに規格性はみられない。

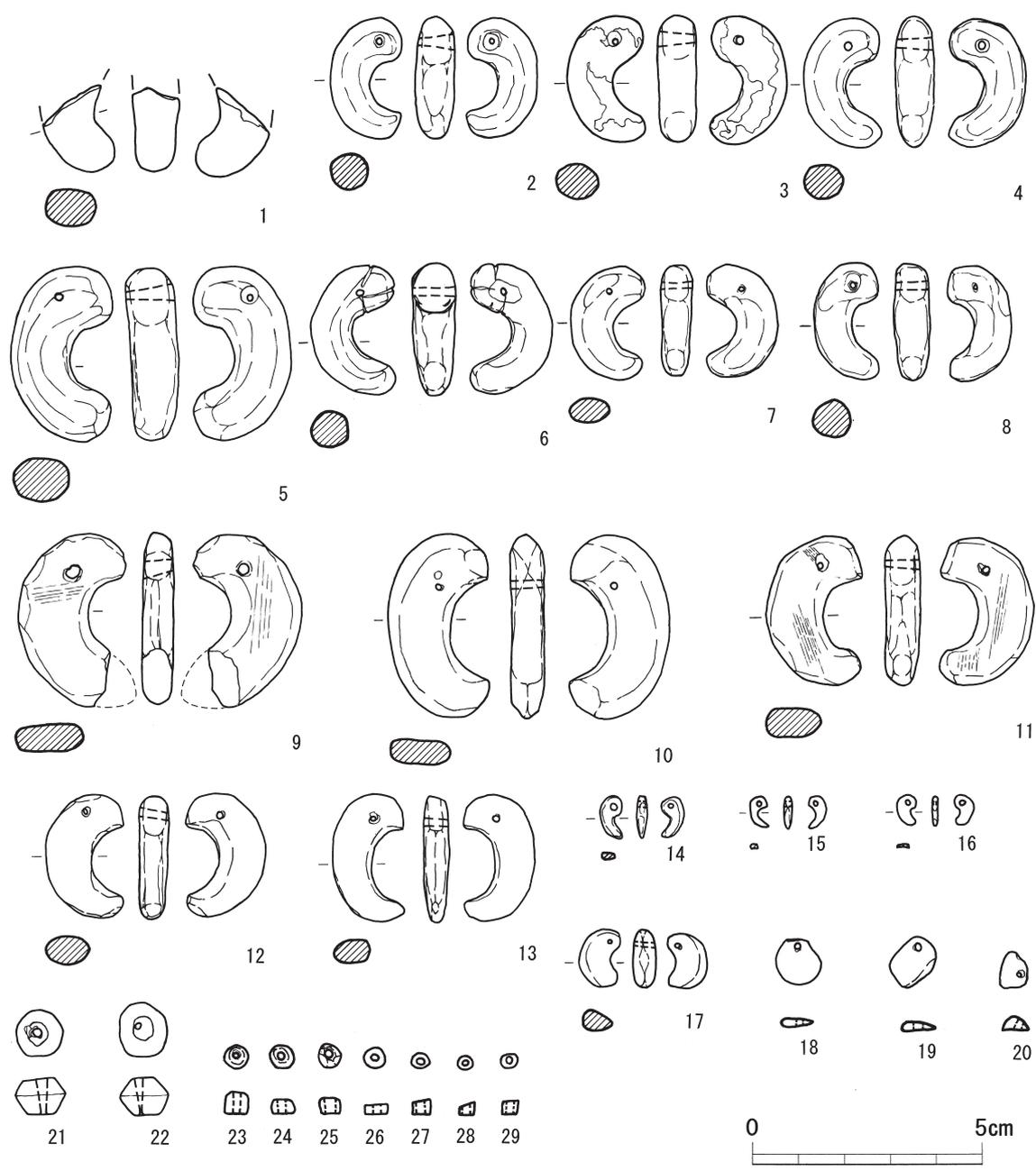
b. 管玉（第22図）

緑色凝灰岩製管玉（30～42） 全体に残存状況はよく、一端を欠く3点を除いて完形である。直径3.5～6.1mm、長さ15.6～30.7mmであり、いずれも両面から石錐で穿孔されている。石材的にはやや雑多な印象を受けるものの、短径長身の規格をもち、古墳時代前期末から中期前半に見られる畿内系の管玉である（大賀 2002）。

c. その他の玉（第21・22図）

水晶製算盤玉（21・22） 片面穿孔である。稜は明瞭ではなく、やや丸みをもつ。両端面は平滑に研磨しており、敲打調整痕や研磨擦痕は完全に消されているが、側面の仕上げはやや雑で研磨の際の稜や敲打調整痕がわずかに残る。端面は小さく、その径は直径の半分程度である。穿孔はやや細い円錐形を呈し孔内は平滑となる。21は穿孔の貫通部分で小さな割れ円錐を生じるが、22では平坦なまま貫通しており、鉄錐を使用して丁寧な穿孔が行われたと考えられる。両者とも直径が10mmをこえ、古墳時代前期から中期段階の水晶製算盤玉としては大型の部類に入る（大賀 2009）。

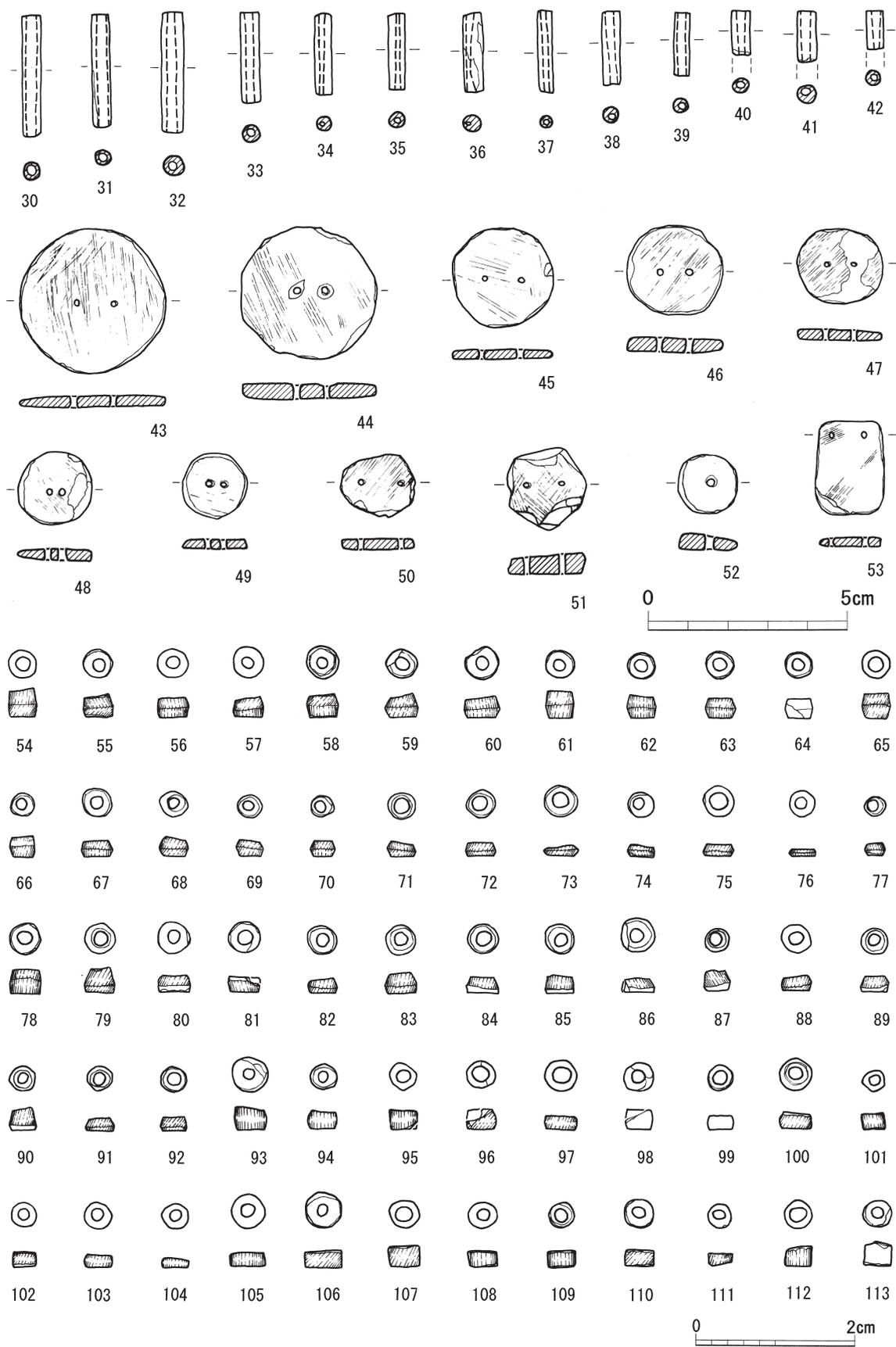
ガラス小玉（23～29） コバルト・ブルー2点、青緑色5点である。これらのガラス小玉の



第21図 千歳下遺跡出土玉類（勾玉・算盤玉・小玉・平玉）

形態は二次加熱の度合いから、筒状を呈するものと球状を呈するものとに分かれる。前者は青緑色のガラス小玉4点であり、端面を研磨するという特徴を有する。後者はコバルト・ブルーのガラス小玉2点および青緑色のガラス小玉1点であるが、青緑色のガラス小玉は表面に凹凸が多数あり、整美な外形を有するコバルト・ブルーのガラス小玉と作りが明らかに異なる。

有孔円板（43～53） 双孔円板10点、単孔円板1点、総数11点が出土した。双孔円板は滑石製であり、不定型有孔板3点が含まれる。不定型有孔板の側面研磨は全て斜方向に研磨される。単孔円板は蛇紋岩製である点でも区別される。双孔円板に比してやや厚みがあり、研磨



第22図 千歳下遺跡出土玉類（管玉・有孔円板・白玉）

が丁寧である（市川・島崎 2005、福本 2005）。

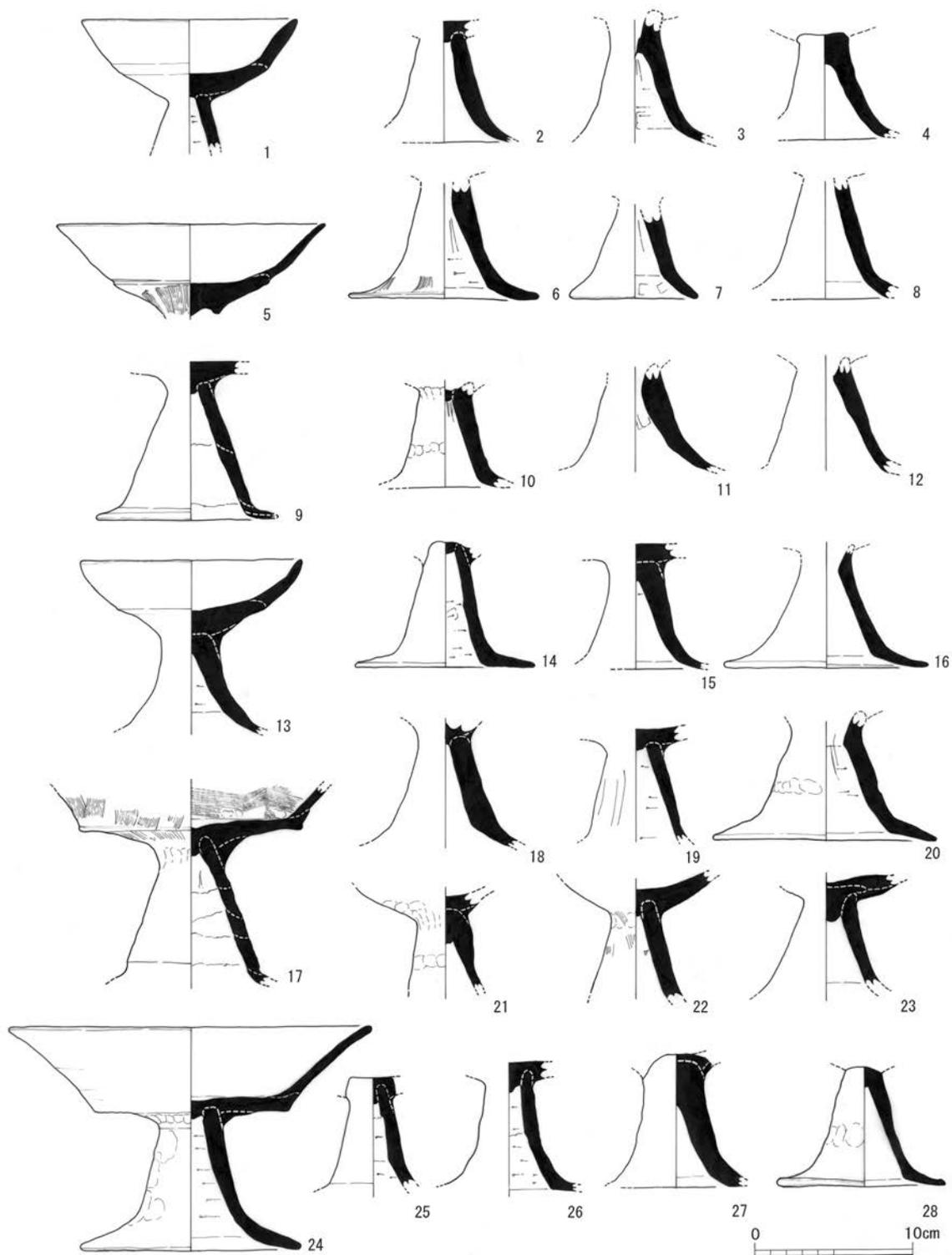
臼玉（54～113） 総数952点が出土している。側面形態から、側面に稜をもつもの（形態1）、稜が不明瞭で丸みをもつもの（形態2）、稜をもたずに円筒形を呈するもの（形態3）に分類される。さらに、形態1でも稜が側面中央に位置し、上下端面の直径がほぼ等しいもの（形態1 a）と稜が一方の端面に近接し、上下端面の直径が異なるもの（形態1 b）の2種類に分類できる。構成は形態1 aが488点（51.3%）、形態1 bが131点（13.8%）、形態2が74点（7.8%）、形態3が248点（26.1%）、不明11点（1.2%）となる。各形態において大きさに若干の差異が認められ、形態1 aは長さ3.0～4.0mm、直径4.0～5.0mmのやや大型品を多分に含む。また形態1 bと形態3は非常に近似する大きさを示し、長さ1.0～3.5mm、直径3.0～5.0mmに大半が集中する。形態2はその他の形態に比して小型であり、大半が長さ1.0～2.5mm、直径3.0～5.0mmに集中する。

（4）土器

a. 高坏（第23・24図1～42） 高坏は最も多く出土した土器である。そのうち42点を図化した。1～6はA-SK03、7はA-SK07、8～28はA調査区から出土したが、出土遺構は不明である。29～34はC-SK04、35～42はC調査区から出土したが、これも出土遺構は不明である。調査区内の排水溝掘削時に出土したものも多い。また、遺構ごとに形態的特徴を読み取れるとは言い難い。

1は坏部と脚部の接合面できれいに破断しており、その様子から坏部と脚部を別々に作っていたことが容易にわかる。胎土は淡黄橙色を呈し、表面は摩耗して調整は不明瞭である。坏部は丸みを帯びた浅碗形で、2段階に分けて成形されている。まず、円板状の素材粘土を脚部と接合し、その端部上面に口縁部分となる帯粘土を継いで立ち上げている。その接合線が坏部中程に段状に残る。2は坏部の大半が欠損している。脚部孔内面はにぶい淡橙色、外面は橙色を呈する。破断面から、脚部が坏部底面に食い込んでいることがわかる。3は5と接合する。内外面ともにぶい橙色を呈するが、坏部孔内面中央付近と脚部外側面には黒斑がみられる。脚部との接合面で坏部がはずれており、5の坏部底面中央には接合による圧力のため、素材粘土が脚部孔内に半球状に押し出されていることが観察できる（半球状押し出し凸部）。脚部の上から坏部底面となる粘土板を強く押しつけて食い込ませている。坏部は1と同様、2段階で成形されている。表面は摩耗しているが、坏部外面にわずかにハケ調整が残る。脚部孔の内面はヘラケズリで仕上げている。4は脚部のみが残る。脚部上端が坏部に食い込んでいた痕跡はなく、接合部の周囲を補強する貼り付け粘土も少ない。脚部の上面には上から強く押しつけた痕跡が認められる。胎土は橙色を呈する。脚部底面にはわずかにハケ調整がみられる。6も脚部のみが遺存する。接合部が欠損しているために坏部との接合方法は不明である。胎土はにぶい淡橙色で、脚裾部上面にハケ調整がなされ、脚部孔内面はヘラケズリで仕上げられている。

A-SK07からは7が1点出土した。脚部のみが遺存で、坏部との接合部が欠損しているた



第23図 千歳下遺跡出土土師器高坏 (1)

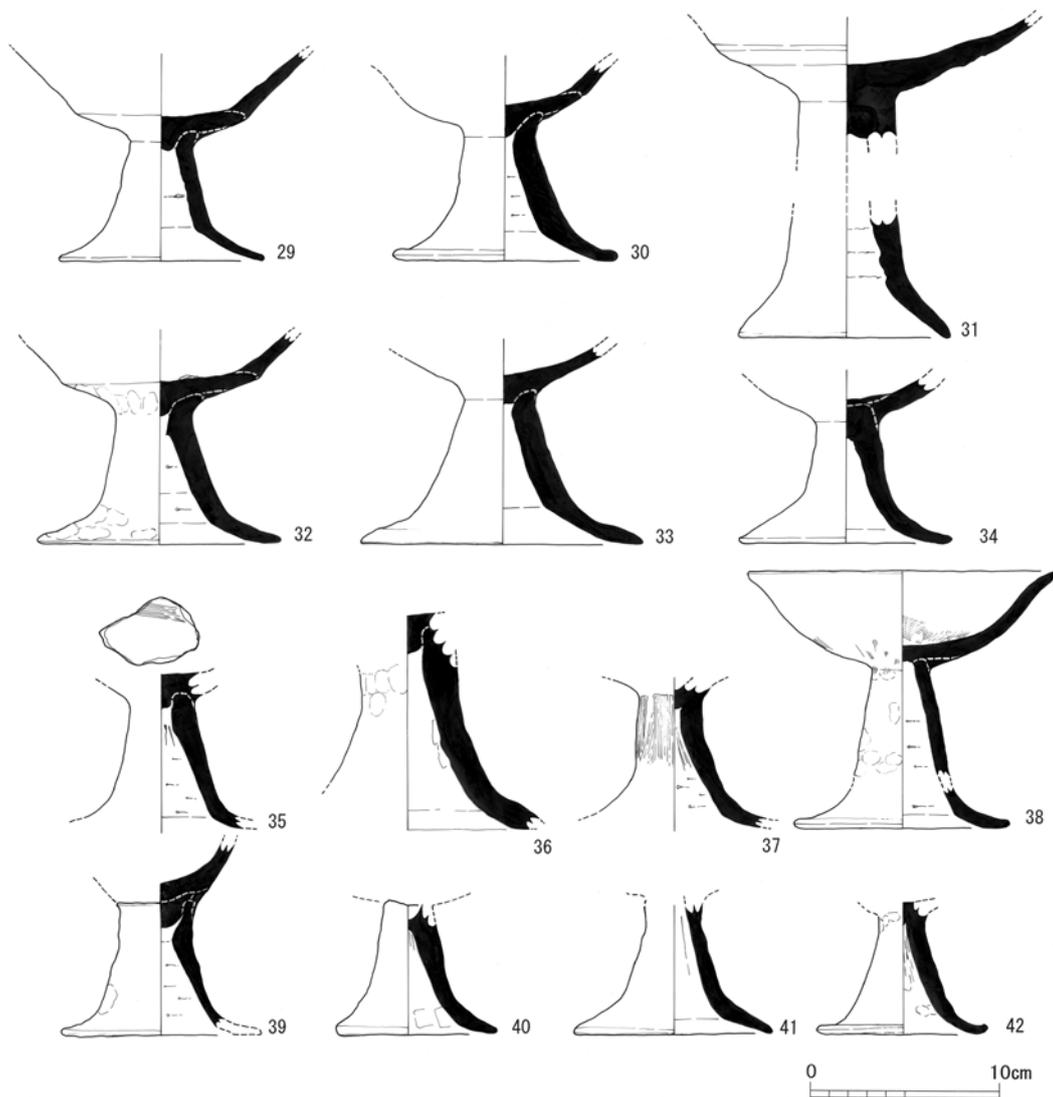
め接合方法は観察できない。しかし、脚部が小型であることや接合部分を補強するための充填粘土の状況から、脚部は坏部の下面に貼り付けただけであったと想定できる。胎土は明赤褐色を呈し、脚裾部に黒斑がある。脚部孔内面はヘラケズリで仕上げられている。

8は脚部のみで、坏部との接合部は欠損している。脚部上端には坏部との接合部分を補強

する充填粘土はみられない。胎土は淡黄橙色で、脚部孔内面はヘラケズリがなされている。9は脚部の中央あたりが膨らみ、中空部分が広がる形態をもつ。接合部は破損していないので断面からの観察はできないが、脚部孔内面には接合のための棒状工具の痕跡がある。坏部底面の中央には押し出し凸部が若干みられるが、脚部の形状と坏部の厚さなどから脚部上端が坏部底面に食い込んでいるとは考えにくい。坏部の上面中央がわずかに盛り上がっていることから、坏部の底部中央を上から押して脚部へ押し込み、できた凹みに粘土を充填して坏の底部内面を成形したものと想定できる。胎土は灰白色で、焼成はあまい。脚部孔内面はヘラケズリで仕上げられている。10は脚部のみだが、脚部上端の孔には上から押し込まれた充填粘土の一部が残っている。外面は明赤褐色だが、孔内面は黒褐色を呈する。11と12は坏部との接合面で破断した脚部である。接合部の脚部上端が外側へ広がっているため、脚部に坏の底部となる円板状の粘土を充填して接合したと考えられる。11の外面は明赤褐色、孔内面は橙色で裾部に黒斑がある。12の胎土は灰白色で焼成があまく、かつ摩耗が激しいため調整は不明である。13は脚部上端で孔が貫通していない。別作りの脚部を坏の底面に貼り付けた後に接合部の周りを粘土紐で補強したのであろう。坏部は丸みを帯びた浅碗形で、1と同様、2段階で成形され、その接合線が段状に残っている。胎土は明赤褐色を呈し、脚部孔内面はヘラケズリ後の仕上げ調整がなされておらず、削りかすの粘土が付着したまま焼成されている。14は坏部に食い込んだ脚部と、脚部孔内の半球状押し出し凸部の形状がよくわかる好例である。胎土はにぶい橙色を呈する。坏部に食い込んでいた部分は脚部の上端外側面に灰白色の焼成痕跡として残る。半球状押し出し凸部があるものの、顕著な膨らみをもたない。脚部上端は外側へ広がる形状とはならず、三角コーンの先端を切ったような形をしている。15も13と同様に脚部孔が貫通しない。破断面の観察から脚部が坏部に食い込んだ様子はなく、脚部上端面に坏部を接着し、周囲を粘土で補強しているのみである。胎土は橙色を呈する。漆のように光沢のある黒褐色の皮膜が一部に残っている。断面にも観察できるため、土中成分が付着したものと考える。16は坏部が欠損している。脚部上端は外側へ広がっており、接合部の外周を補強する粘土がわずかに残る。胎土は橙色を呈し、15と同じような暗黒褐色の皮膜が外面一部と孔内面全体に付着している。17の坏部は2段階に分けて作られる。すなわち、直角に近い角度で立ち上がった擬口縁をもつ浅皿状の底部を作り、擬口縁の内側に粘土を付け足して口縁部分を立ち上げて坏部を成形する。坏部の内外面とも丁寧なハケ調整が施されている。一方、脚部のつくりはかなり粗く、孔内面には粘土紐の接合痕跡が未調整のまま残っている。坏部の中央を上から強く押さえた痕跡があるが、坏部と脚部は別々に作られており、円板状粘土を充填したとは考えられない。胎土はにぶい橙色を呈する。18は坏部の大半が欠損している。胎土は淡黄橙色で1～2mmの長石粒を多く含み、焼成はあまい。摩耗が著しく、調整は不明である。脚部孔から観察すると坏部を脚部に押し込んだ様子はない。19も坏部の大半が欠損している。焼成は良好で、胎土は灰白色である。器壁は薄く、脚部外面には焼成前に刻まれた3本の細刻線が上から下に走っている。坏部底面中央にはわずかながら半球状押し出し凸部がみられるが、接合部の坏の厚さから脚部上端が坏部底面に食

い込んでいるとは考えられない。脚部孔内面はヘラケズリで仕上げられている。20は坏部との接合面で破断し、脚部のみが遺存している。上端部は外側へ広がった形状を呈し、10～12などと同様の成形方法であると考えられる。脚筒部外面には、指頭圧痕が巡る。孔内面はヘラケズリの後にナデ調整で仕上げている。胎土は橙褐色を呈する。21は断面の摩耗が著しく脚部と坏部の接合部の観察が難しい。しかし、脚部が細身で、脚部上端の外側面の凹んでいるところが1・13などの接合部に類似していることから、脚部に坏部を接合して粘土で補強したと考える。胎土は淡黄橙色を呈し、焼成はあまい。22・25・26はちょうど接合部の断面が見える状態で破損している。脚部上端は坏部底面に食い込むものの、円板状充填粘土は確認できない。22の胎土は外面が赤褐色で孔内面が灰褐色を呈する。接合部周辺にハケ調整がわずかに残っており、坏部上面には鉄錆が付着している。25はにぶい淡橙色で、坏部の底部上面はハケ調整、脚部孔内面はヘラケズリで仕上げている。26の胎土は灰白色で、焼成不良による外面の摩耗のため明瞭ではないが、接合部に縦方向のハケ調整がわずかに残る。脚部孔内面はヘラケズリで仕上げる。23は坏部と裾部の大半を欠損するが、接合方法がよくわかるものである。坏部の底面中央の半球状押し出し凸部の膨らみが顕著で、坏部の底部上面の凹みからみても相当強く充填粘土を押し込んだことがわかる。脚部上端は接合部で外へ広がっている。胎土は橙褐色で焼成があまく、全体的に摩耗が著しい。脚部孔内面はヘラケズリで仕上げている。24の坏部形態は17と類似している。浅皿状の坏部の擬口縁内側に粘土を付け足し、口縁部分を立ち上げている。接合部は脚部上端が坏部底面に食い込んでおり、その周囲を粘土で補強している。胎土はにぶい淡橙色を呈する。1mm以下の細かい石英・長石粒などを多く含むため、表面はざらついている。脚部孔内面はヘラケズリで仕上げられている。27の脚部孔は上端で貫通してはいない。脚部の上端外側面に坏部が接合されていた痕跡があることから、坏部底面に脚部上端を食い込ませて成形したことがわかる。胎土は橙色を呈し、表面の摩耗が著しく、調整は不明である。28は脚部のみ遺存している。これも脚部孔は貫通していない。接合痕跡が脚部上端面にのみあることから、脚部上端は坏部底面に食い込んでおらず、接着部を粘土で補強するだけの接合方法であったのだろう。脚部孔内面はヘラケズリで仕上げられている。胎土は淡黄橙色を呈する。

C-SK04出土の29～34は比較的大型で器壁の厚いものが多い。29は脚部と坏部の接合面できれいに破断している。坏部は2段階で成形されていて、接合線が段状の形態として残る。坏部中央下面に半球状押し出し凸部があり、円板状粘土を充填していることがわかる。胎土は淡白橙色で、脚部孔と坏部下面の一部に黒斑がある。脚部孔内面はヘラケズリがなされているものの、粘土紐の接合痕跡が残っている。30の坏部底面中央にも半球状押し出し凸部があり、円板状粘土を充填しているといえる。坏部は29と同様2段階で成形されているが、接合線は丁寧なナデ調整により消されている。胎土はにぶい淡橙色で、外面のおおよそ1/6に黒斑がみられる。坏部上面中央には鉄錆が付着している。31はかなり大型で器壁も厚い。脚部孔には下からも粘土が充填されている。後述するが、この1点のみは高坏I b類の中でもI b'類として分離した。胎土は明灰褐色を呈する。大型で頑丈そうであるが、細かい破片



第24図 千歳下遺跡出土土師器高坏（2）

となって出土した。32は脚部と坏部の接合面で破断している。半球状押し出し凸部が顕著なことから、円板状粘土を充填していたことがわかる。坏部底面には鉄片と鉄錆が付着している。胎土はにぶい淡橙色である。外面の1/6と孔内面の一部に黒斑がみられる。33も32と同様の成形方法で、脚部と坏部の接合面で破断している。胎土は橙色で、脚部外面の一部に黒斑がみられる。脚部外面には鉄錆が付着している。脚部孔内面はヘラケズリで仕上げられている。34はC-SK04出土の他の高坏に比べて小型で華奢である。接合面で破断しており、その断面からは脚部上端を坏部に食い込ませ、接合部周辺を貼り付け粘土で補強している様子がよくわかる。脚部と坏部の接合部付近には明確な指頭圧痕がみられないものの、脚部上端外側面が凹んでおり、接合時にこの部分を指で押圧したことがわかる。胎土は明赤褐色を呈する。脚部孔内面はヘラケズリで仕上げられている。

35は坏部の大半が欠損する。接合部の断面から坏部の底面に食い込ませた脚部上端の周辺を粘土で補強していることがわかる。胎土は淡橙色で、脚部孔内面はヘラケズリがなされて

いる。坏部の底部上面はハケ調整がなされている。36も坏部の大半が欠損する。胎土は橙色を呈する。大型で器壁も厚い。脚部孔内面には粘土紐の接合痕跡が残る。坏部底面中央には半球状押し出し凸部が顕著に残り、円板状粘土を充填したと考えられる。37も坏部の大半が欠損する。胎土はにぶい淡橙色で、脚部外面の上半は縦方向にハケ調整が施されている。脚部孔内面はヘラケズリがなされている。削りかすが付着したまま焼成されているため、孔からの観察ができない。坏部底面中央の半球状押し出し凸部の有無は不明である。脚部上端面に残った粘土は中央が凹んでおり、円板状粘土を充填した可能性もある。細身の脚部や脚部上端面が若干凹んでいる様子が1・13などの接合部によく似ていることから、脚部と坏部が別作りで、脚部を坏部底面に食い込ませずに周囲を粘土で補強する接合方法であると考えられる。38の脚部は細身で、坏部は口縁が外弯するなめらかな浅碗形をなしている。坏部は内外面ともハケ調整がなされている。脚部は坏部底面に食い込まず、半球状押し出し凸部もみられない。接合部は貼り付け粘土で補強されている。胎土はにぶい淡赤褐色を呈する。39は小さな坏部をもつ特異な形態の高坏である。坏部が脚部との接合面ではずれており、坏部の破断面からは円板状の充填粘土が観察できる。脚部に円板状充填粘土を押し込んで接合した後、その周囲に坏部の側面を成形し、上面に粘土を重ねて坏部の底部を成形している。脚部上端は接合部で外側に広がっている。胎土は明赤褐色で、1～3mm、大きな石粒では10mmほどの石英・長石粒が混和される。坏部外面はハケ調整がなされている。40は脚部のみが遺存する。坏部との接合部は脚部上端面が強く押さえられて凹んでおり、その周りに補強粘土が残っている。脚部孔が貫通せず、接合部外面の補強粘土が厚い。胎土はにぶい淡橙色を呈し、脚部孔内面は弱いヘラケズリで仕上げられている。41の胎土もにぶい淡橙色で、焼成はあまく、全体的に摩耗が著しい。接合部は欠損しているため観察できないが、脚部上端が広がっておらず細身であることから、円板状粘土を充填する接合方法ではないと考えられる。42も坏部の大半を欠損する。脚部上端が坏部の厚さの半分あたりまで食い込んでおり、その周辺を貼り付け粘土で補強している様子がわかる。胎土は橙色で、脚部孔内面はヘラケズリで仕上げられている。

接合方法の分類 以上、高坏の脚部と坏部の接合部分の観察から、以下の3種類の接合方法に分類できる。まず、坏部底面中央に半球状押し出し凸部のあるものを高坏Ⅰ類とする。このⅠ類の中でも、さらにⅠa・Ⅰb・Ⅰc類と細分することが可能である。千歳下遺跡で出土したⅠ類はほぼすべてⅠb類として分類したい。なお、Ⅰa・Ⅰc類については他遺跡との比較の項で後述することとし、ここではⅠb類の接合方法について述べておきたい。Ⅰb類は筒状の脚部に円板状の粘土を上から強く押しつけて接合し、それを基礎として周りに坏部を成形していく。この接合方法をとるものは、筒状の脚部の内部に坏部が食い込んでできる半球状の押し出し凸部が残る特徴がある。また、筒状の脚部の上端は上から押し当てられる粘土の圧力によって広がってしまうものが多いといえる。さらには上からの円板状充填粘土を受け入れ易くするために、この形に成形されるようになるとも考えられる。Ⅰb類は比較的脚部径が大きく、脚部・坏部とも頑丈な器形のものが多い。また、円板状粘土によって

坏部が支えられるため、脚部の上端には接合部を補強するための貼り付け粘土がほとんど見られない。23や39はI b類の典型的な例である。31は脚部孔に下からも粘土を充填しており、I b類の中でもI b'類として分離したい。

高坏II類は脚部と坏部を別々に作った後、脚部を坏部に押しつけてある程度食い込ませ、周囲に粘土を貼り付けて充填し、接合するものである。典型的な例として17があげられる。坏部が押しつけられてできる押し出し凸部が若干あるものの、I類ほど顕著な膨らみをもたない。脚部上端はI類のように外側へ広がらず素直に直立するものが多い。

高坏III類は脚部と坏部を別々に作ったのち、脚部に坏部を接着し、周囲を粘土で補強することによって接合するものである。38が典型的な例である。脚部上端は坏部底面に食い込まず、押し出し凸部はみられない。脚部は比較的細く華奢で、坏部も器壁が薄い浅碗形のものが多い。脚部孔が貫通しないものも多い。

以上から出土例を分類すれば、次のようになる（第25図）。

I b類：3・4・5・8・10・11・12・16・20・23・29・30・(31)・32・33・36・39

II類：14・17・22・24・25・26・27・34・35・42

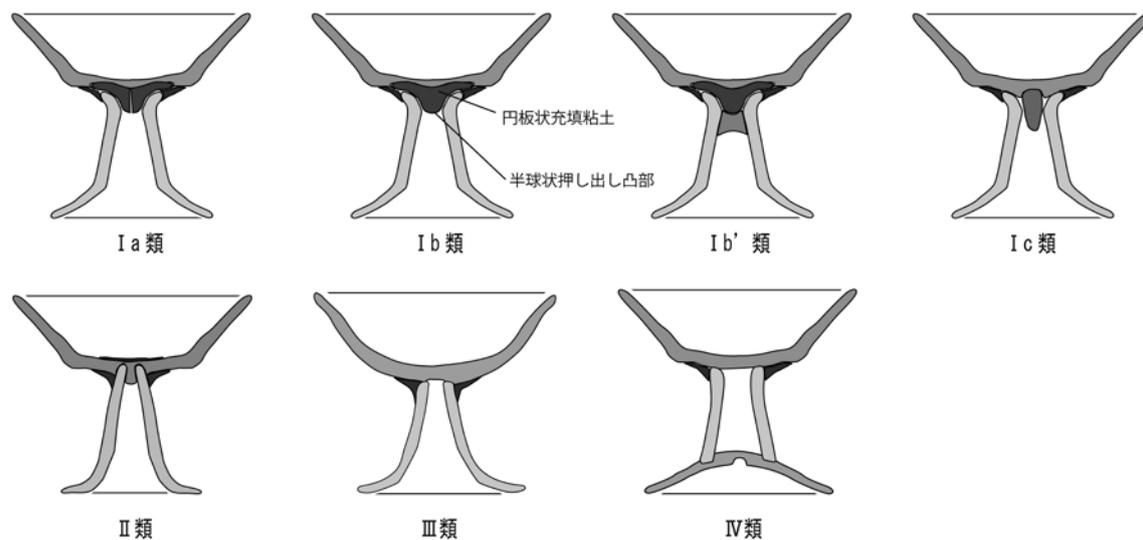
III類：1・(7)・13・15・18・19・21・28・38

IあるいはII類：2

IIあるいはIII類：9・37・40・41

不明：6

他遺跡との比較 当遺跡から湾を挟んで対岸の丹後半島、丹後一ノ宮神社（元伊勢籠神社）に隣接して難波野遺跡がある。地理的にも時期的にも当遺跡と関連するとみられる祭祀遺跡である（石尾・引原 2008）。難波野遺跡祭祀遺構 SX200の高坏29点を観察したところ、千歳下遺跡出土の高坏とは明らかに異なる成形方法のものがあった。千歳下遺跡では、脚部上端に円板状の粘土を強く押しつけた際にできる半球状押し出し凸部があったが、難波野遺跡出



第25図 高坏接合部模式図

土例ではそれをわざわざ指で成形して貼り付けているものが多く見られた。上からの強い圧力によって自然にできる半球状押し出し凸部はきれいな膨らみをもつが、難波野遺跡のものは指で成形しているため、歪んだものや杯の中心からずれているもののほかに、不自然に突き出たものさえある。円板状粘土を充填するⅠb類の半球状押し出し凸部を真似ようとしたものと考えられる。この接合方法をⅠc類として分類する。難波野遺跡例では接合強度とは関係なく単なる「ほぞ穴（脚部孔）」に差し込む突起状の「ほぞ」となっていることからすると、型式学的にみて難波野遺跡出土例は千歳下遺跡出土のそれよりも後出する痕跡的要素をもつと認識できる。

また、難波野遺跡出土の高坏の中には、1点のみではあるが、坏部・脚筒部・脚裾部を別々に作っているものがあつた。これを高坏Ⅳ類とした。脚裾部には底面中央に脚部孔の名残りといえるような痕跡的な凹みが作られている。このⅣ類の例からしても、難波野遺跡出土例が千歳下遺跡出土のそれよりも後出するものと判断できるだろう。

以上の観点から難波野遺跡の高坏を分類すると次のようになるだろう。

Ⅰb類：4点

Ⅰc類：9点

Ⅱ類：3点

Ⅲ類：7点

Ⅳ類：1点

ⅠあるいはⅡ類：1点

ⅠあるいはⅢ類：2点

不明：2点

また、丹後東部の集落遺跡、浅後谷南遺跡の概要報告では、高坏を古墳時代前期後半から古墳時代中期後半まで3段階に編年している（石崎・黒坪・福島 2000）。古墳時代前期後半とされる溝 SD2012の高坏には、ミガキ調整が丁寧に施されており、底面も丁寧なハケ調整がなされているものがある。半球状押し出し凸部に、棒状工具による刺突痕のある資料も数点確認した。坏部と脚部を接合する際、下から棒状工具で押さえつけたものと考えられる。接合方法としてはⅠ類にあたり、Ⅰb類よりも早い時期にみられることから、刺突痕のあるものをⅠa類とする。他に坏部底面に脚部を挿し込んだ痕跡があるものや、脚部に円形の透かしが開いているものもあり、特定の接合方法のみが採用されていたわけではないようである。だが、調整や接合の丁寧さから、溝 SD2012の高坏は千歳下遺跡出土例よりも先行するといつてよいであろう。古墳時代中期前半とされる溝 SD2010古相の高坏では、ミガキ調整がいまだ坏部内面には残るものの、外面には施されなくなり、脚裾部底面のハケ調整も溝 SD2012のものに比べて雑になっている。そして、古墳時代中期後半とされている溝 SD2010新相の高坏は、内外面ともミガキ調整がなされなくなる。

浅後谷南遺跡では接合方法もⅠ類からⅢ類までさまざまで、1点ではあるが難波野遺跡出土例にみられるⅠc類がある。調整や坏部と脚部の接合方法などの成形手法から、千歳下遺

跡は浅後谷南遺跡の溝 SD2010古相から一部新相の時期にあたるものである。

以上のことから、千歳下遺跡出土高杯の多くは浅後谷南遺跡溝 SD2010古相（古墳時代中期前半）前後から難波野遺跡祭祀遺構 SX200よりも前の段階にあたるものと考えられることができる。

高坏接合部の型式変化 千歳下遺跡・浅後谷南遺跡・難波野遺跡の高坏から、調整と接合方法に着目して型式的变化を読み取ろうとすると次のようになる。なお、特徴的な部分を書き出したもので、各段階のものがかならずしもこれらの要素すべてをもちあわせているものではない。

第1段階：丁寧なミガキ調整がある。脚裾部に丁寧なハケ調整がある。坏部と脚部の接合方法にはI a類が多い。

第2段階：外面のミガキ調整がなくなる。全体的に調整が雑になる。坏部と脚部の接合方法はI b類が主体となる。

第3段階：坏部と脚部の接合方法にI c類やIV類が出現する。

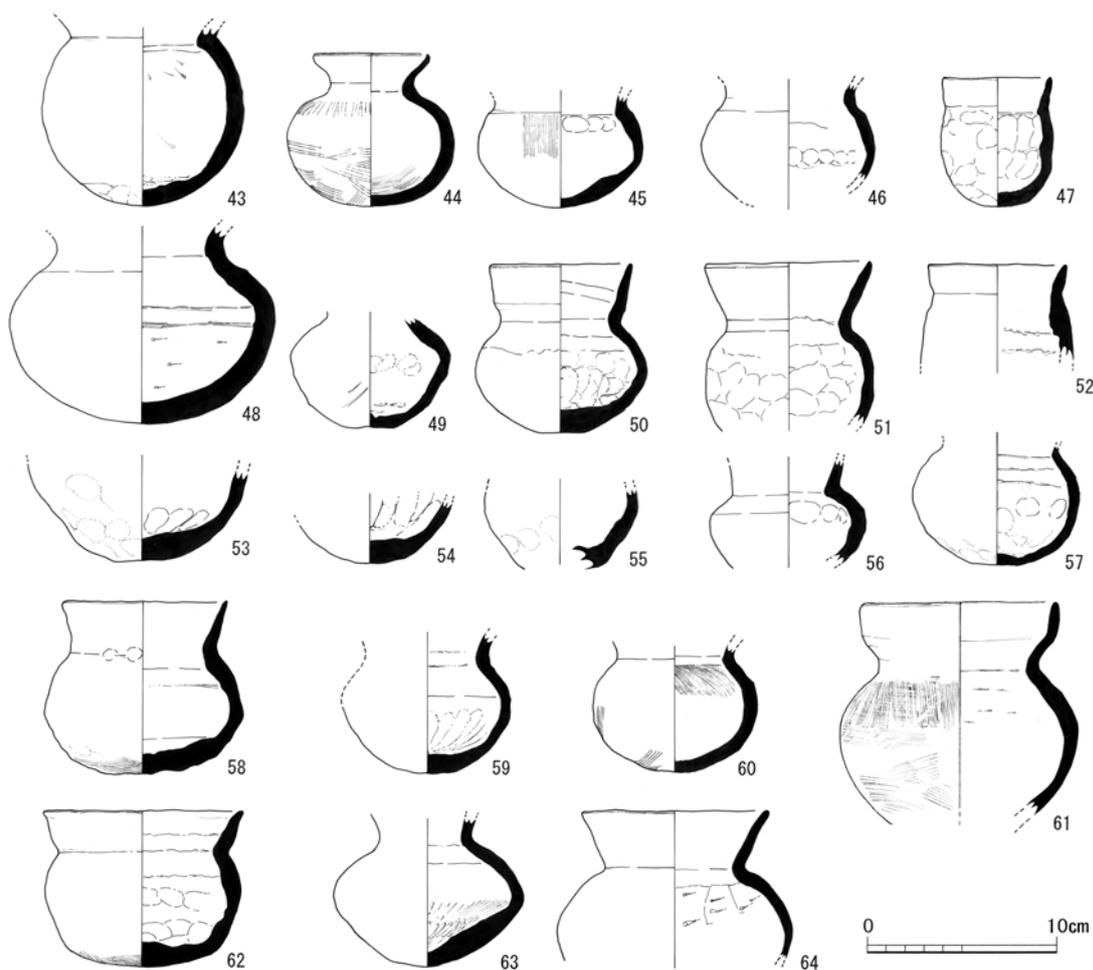
難波野遺跡に1点のみみられるIV類の出現は、I c類の出現と同様に成形方法にこだわらず、形だけを真似ようとした形骸化した段階を感じさせる。しかし、I類・II類・III類はそれぞれ各段階に存在しており、この分類によって年代を速断することはできなかつた。ただし、I類の中では時期差を読み取ることができる。すなわち、早い時期にI a類が採用されるが、高坏が大型化してくるとI b類が主体となり、次に半球状押し出し凸部を故意に指で成形して接合ほぞとするI c類が出現してくる。II・III類では、今回指摘したI類のような型式差は読み取れなかつたが、さらなる観察によって時期的変容を考慮した分類ができる可能性がある。

b. 丸底壺（第26図43～64）

丸底壺22点を図化した。43～45はA-SK03出土、46～55はC-SK04出土であるが、その他は排水溝などの掘削によって出土したため、所属遺構は不明である。なお、56～61はA調査区、62～64はC調査区から出土した。

43は1/2程度しか遺存しない。口縁部を欠損するもので球形に近い胴部をもつ。外面は下半に小範囲の不整方向のヘラケズリののち、ハケ調整を行う。内面は上半がヘラケズリ、下半は指頭によるナデ上げ、底面に指頭圧痕が顕著にみられる。胎土は淡黄褐色で焼成があまく、摩耗が著しい。44は口縁端部をわずかに欠くものの、ほぼ完形に近い。頸部から緩やかに外反して端部でわずかに内弯する特異な形態をもつ。外面は下半に小範囲のヘラケズリののち、全体にハケ調整を行う。外面下半には漆かと思われるような暗黒褐色有機質の皮膜が遺存している。高坏15などに付着していたものと類似する。胎土は淡黄褐色で内面はハケ調整、底部に指頭圧痕を残す。45は口縁部が欠損する。玉葱形に近い扁球形の胴部をもつ。胴部上半と底部を接合して成形したようである。明るい褐色系の胎土で、外面は細かいタテハケ調整、肩部内面に口縁部との接合のためにつけられた指頭圧痕が認められる。

46は1/3程度しか遺存しない。口縁部および底部を欠損する。45同様に底部を胴部上半と接合して成形しているようである。焼成はあまく、灰白色を呈する。摩耗が著しく、調整は不明瞭だが、内面中位に接合のための指頭圧痕がみられる。47は口縁部を一部欠損する。胴長の特異な形態となる。手捏ねによって成形された胴部に口縁部が接合される。焼成はあまく、肌白色を呈する。口縁部外面から肩部にかけて共伴鉄器の錆と考えられる酸化鉄が付着している。48は口縁部を欠損する大型品である。肩部が張る完形の胴部をもつ。肩部内面には指頭圧痕があり、接合によって生じた余分な器壁の厚さを減じるために横方向のヘラケズリによってかき取られている。胎土は桃褐色を呈する。外面には2次的な被熱の痕跡がみられる。49も口縁部が欠損する。手捏ねによる胴部と、肩部・口縁部が接合されるようである。肌褐色を呈する。50は1/2ほどしか遺存しない。頸部から屈曲して立ち上がる二重口縁をもつ。外面は灰白色だが、下半全体を黒斑が覆う。43同様に底部外面が多面体になるような粗いヘラケズリを行ない、ハケ調整で仕上げたようである。内面上半に粘土紐の接合痕、下半から底部にかけて指頭によるナデ上げが放射状にみられる。51は外面肌色となる焼成のあまいものである。下半から底部が欠損するものの、やや胴長となることがわかる。胴部の上半と下



第26図 千歳下遺跡出土土師器丸底壺

半を接合し、口縁部となる帯粘土を巻き上げるもので、内面全体に指頭圧痕が著しい。52は1/2が遺存する。これも焼成があまく、灰白色となる。表面が剥落しているようである。粘土紐を巻き上げて口縁部まで成形している。手捏ねによるため、粘土紐の接合痕が明瞭に残る。53は底部のみが遺存する。手捏ねで指頭圧痕も顕著である。橙褐色を呈する。やや歪んでいるため、器種が明瞭ではないが、丸底壺の類としておきたい。54も底部のみ遺存する。灰白色を呈し、不整方向のヘラケズリ後、ハケ調整で仕上げる。指頭による強いナデ上げを内面に行く丁寧なつくりの丸底壺である。55も底部の一部のみが遺存する。焼成前の穿孔がある。灰白色で外面は指頭圧痕、内面は横位のユビナデがみられる。小片のため、全体の器形は不明である。

56は口縁端部と底部を欠損する。扁球形の小型の胴部から強く外反して真直ぐに立ち上がる口縁部をもつ。47同様、胴部下半に鉄錆が付着する。外面は摩耗しているものの、底部と胴部上半を接合して、口縁部となる帯粘土を巻き上げていることがわかる。灰白色で内面には粘土の接合部分に指頭圧痕が観察されるが、比較的丁寧なつくりであるといえよう。57は口縁部が欠損し、全体の1/2しか遺存しない。扁球状に近い胴部をもつ。灰褐色で器壁の薄いものである。内面下半には指頭圧痕やユビナデが著しく、内面肩部から口縁部分に粘土紐の接合痕が顕著にみられる。58はほぼ完形に近い。厚手で底部が平坦になる特徴的な器形をもつものである。灰黄褐色で、底部外面に不鮮明な粗いハケ状の工具による調整の痕跡がある。59は1/2程度で、口縁部が欠損する。球形に近い胴部をもつ。57とほぼ同様なつくりで、頸部内面に粘土紐接合痕跡がある。60も口縁部が欠損する。やや扁球形に近い胴部をもつ。薄い橙褐色から肌色を呈し、内外面は横位のごく細かい目のハケ調整で仕上げる。61は底部が欠損する大型品である。内側に屈曲して垂直に立ち上がる口縁部をもち、二重口縁の名残りをみせている。灰白色を呈し、外面は下半が不整方向の粗いハケ調整、肩部を細かい目のハケ調整で仕上げる。内面は甕などと同様に横位のヘラケズリが施される。

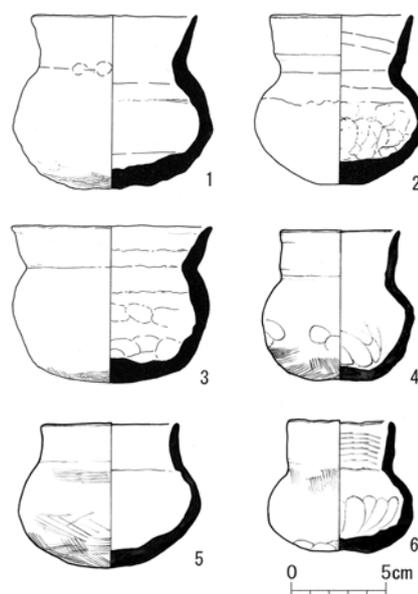
62は1/2ほどが遺存している。玉葱形の胴部と、器壁を減じて斜め外側に立ち上がる口縁部をもつ。肌白色で底部に粗いハケ調整を残している。58とつくりが類似しており、内面に指頭圧痕と粗いユビナデがうかがえる。63は口縁部が欠損し、1/2程度しか遺存しない。胴部中央が極端に張る算盤玉に近い形態をもつ。外面は淡黄褐色から肌色で、丁寧なハケ調整で仕上げる。内面は放射状の当て具痕跡がみられる。熟練した製作技術をうかがうことができる。他の丸底壺とは異なる技術で製作された搬入品とみたい。最後に64であるが、1/2程度が遺存する。直口壺としたほうがよいかもしれない。これも61と同様に外面ハケ調整で、薄壁化するために丁寧なヘラケズリを行うものである。他とは異なり、暗褐色を呈する。一連の小型丸底壺の製作技術とは異なるものといつてよい。

丸底壺はおよそ製作技法が統一されてはおらず、千差万別といった感がある。扁球形や玉葱形に近いものから、球形になるもの、あるいは縦に長い長胴形になるものまで様々といつてよい。また成形についても幾種類かの方法がみられた。半球形となる底部の上に胴部上半の帯粘土を接合して、さらに口縁部の帯粘土を巻き上げていく成形方法が一般的である。し

かし、その中でも外面をハケ調整で仕上げ、内面はヘラケズリかハケ調整とし、接合の痕跡をほとんど残さない丁寧なつくりのもの（43・44・60・61・63・64）と、内面の接合痕跡が比較的明瞭に観察でき、指頭圧痕やユビナデ・ナデ上げが顕著にみられるもの（45・46・49・50・51・56・57・58・59・62）に分類することができる。また、小さなものは粘土紐の巻き上げと手捏ねによってのみ成形するものもある（47・52）。手捏ねによる成形のものは焼成があまく、灰白色から肌白色になる。

以上から、最も丁寧な接合による成形、ヘラケズリやハケ調整による仕上げを行うものを丸底壺Ⅰ類、丁寧な成形を行うが、粘土接合痕跡や指頭圧痕がみられるものを丸底壺Ⅱ類、小型でもっぱら手捏ねによって成形されるものを丸底壺Ⅲ類としたい。千歳下遺跡ではⅠ類からⅢ類まで認められるわけであり、定型化していた小型丸底壺の形態的な統一感はないものの、それが時期的に新しいものとしてのみ捉えるよりも、祭祀遺跡における特殊な丸底壺の製作事情がそこに関与しているといえる。

他遺跡との比較 先述した高坏と同様に、丸底壺についても難波野遺跡祭祀遺構SX200出土例との比較を行ってみたい。まず、SX200では、小型丸底壺だけではなく、大型化した丸底壺も出現している点で異なる。また、千歳下遺跡でⅢ類とした、手捏ね成形によるものは存在しなかった。難波野遺跡の丸底壺の方が内面ナデ上げによる調整が丁寧であるが、胴部最大径に対する頸部径の比率が50～60%台の丸底壺が主体（石尾・引原 2008、69頁、第11図20・21・23～25）となり、相対的に新しい様相をもつものと思われる。千歳下遺跡58・62（第27図1・3）は難波野遺跡に類例（石尾・引原 2008、69頁、第11図28・30〈第27図5〉）があり、同一の成形技法であることが確認できた。また、千歳下遺跡50（第27図2）は難波野遺跡類例（石尾・引原 2008、69頁、第11図26・27〈第27図4・6〉）に先行する形態と考えることができ、時期幅があるものの、千歳下遺跡出土例がやや古い様相を示していることがわかる。

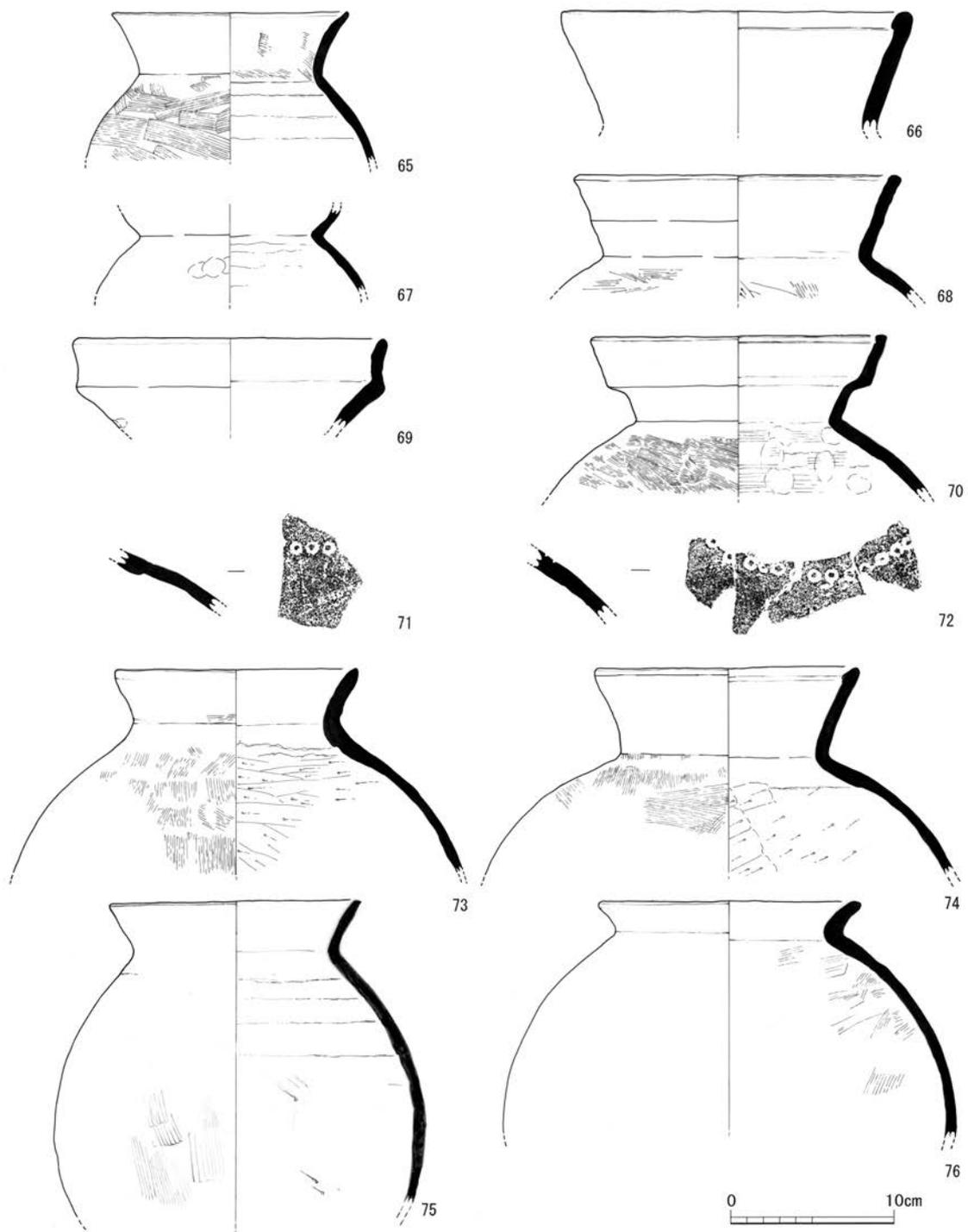


第27図 千歳下遺跡出土丸底壺（1～3）
と難波野遺跡出土丸底壺（4～6）

c. 壺・甕類（第28図65～76）

全体を復原できるものは少ない。多くは破碎しており、甕75のみ胴部下半付近までその形状を知りえることができた。65・66と68～72はC-SK04出土のもので、67はA調査区、73～76はC調査区出土である。

65は口縁部1/4しか遺存しない。口縁部はやや外弯しつつ薄くなり、端部でわずかに内反する。淡桃褐色の特徴的な胎土をもち、外面に横位のハケ調整、内面に幅1.5cm程度の帯粘



第28図 千歳下遺跡出土土師器壺・甕

土の接合痕を残している。66は全周する壺口縁部である。口縁端部は内側に肥厚し、隆帯状になる。胎土は暗灰褐色で器壁が厚く、内外面横位のハケ調整を行う。67は頸部1/4のみが遺存する。65同様に内面に1 cm程度の粘土紐の接合痕が明瞭に観察できる。口縁端部を欠損するものの、やや内弯していくようである。淡褐色を呈し、外面に鉄錆の付着がみられる。68は口縁部1/8程度の小片である。外反した口縁はやや波打ち、端部は肥厚しない。外面は

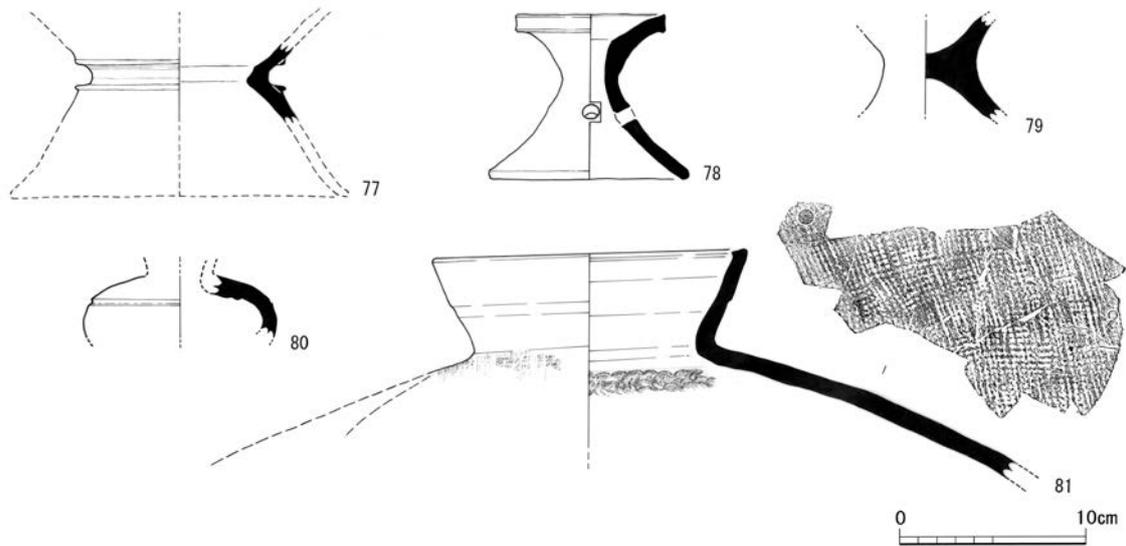
赤褐色で、丹塗りの可能性がある。69も在地的な二重口縁壺で、口縁部1/5程度が遺存する。器壁の厚いものとなる。灰褐色から灰白色を呈する。70は山陰系の二重口縁壺で、口縁部1/8程度が遺存している。擬口縁に外傾する口縁部を接合する。端部を肥厚させるものの、口縁部の立ち上がりはやや短くなり、端部内面に一条の沈線が入る。明橙褐色を呈し、外面が細かい目のハケ調整、内面はヘラケズリ後、横位のやや粗いハケ調整によって平滑に仕上げられる。

71・72は二重口縁壺の肩部竹管文である。同一個体のものと思われるが、接合しなかった。ともに赤褐色を呈する。内面には65・67と同様な粘土紐の接合痕跡がみられる。器壁の厚さと傾きから70よりも大型のものと想定されよう。

73は頸部から緩やかに外弯する口縁部をもつ直口壺である。全体の1/6程度が遺存する。頸部内面に口縁部帯粘土の接合痕跡が明瞭にみられる。肌色に近い淡明褐色で、外面は全体にハケ調整、内面は横位の粗いヘラケズリによって器壁を減じている。74は全体の1/8程度が遺存する。直口の口縁端部はわずかに内側に肥厚する。薄い灰褐色で、外面ハケ調整、内面ヘラケズリの仕上げ方が73と同様のものであるが、より丁寧である。布留式中相を示しているといつてよい。75も1/6程度が遺存するに過ぎない。口縁部中位がやや厚くなり、端部が上を向く特徴をもつ壺である。焼成不良で灰白色を呈する。やや歪んでいるため、実際はより胴部が膨らむ形態となるかもしれない。内面上半に65・67などと同様な帯粘土の接合痕跡がみられる。76も全体の1/6以下の破片しか遺存してはいない。短い口縁部が強く外反する。肌色に近い淡灰褐色を呈し、内面は頸部直下までヘラケズリを施し、細かい目のハケ調整で仕上げる。帯粘土の接合がみられない点では74と類似するものの、口縁部の形態からみても新しいものである。

口縁部の形態に注目すると、65のように口縁端部に向かって薄く、わずかに内弯気味に立ち上がる布留式でも古い様相をもつものがある。また、端部を内側に肥厚させる布留式土器（布留3式前後（寺沢 1986））の特徴を示すもの（66・70・74）もあり、小型丸底壺や高坪などからすれば、甕・壺形土器はやや古い様相をもつものが散見できるといった印象をもつ。とくにC-SK04は比較的古い様相をもつ布留式土器破片も含まれていることがわかる。しかし一方、73や75・76など明らかに新しい型式の土器も含まれており、祭祀遺跡がある程度の期間、存続していたことが想定できる。

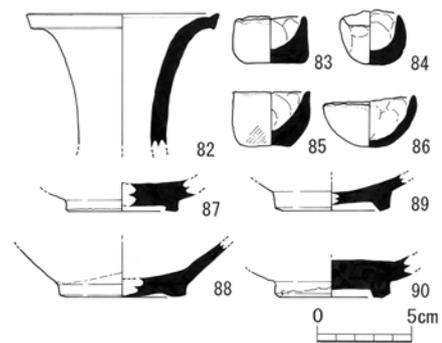
d. 器台（第29図77～79） 77はC調査区北側排水溝掘削時に出土した鼓形器台である。くびれ部上下の突帯が明瞭で、布留式でも古い様相を示す。78は調査区南側に隣接した宅地の下水管理設工事にもなう立会い調査によって出土した。脚部の一部を欠損するが、完形に近い。器高が裾径よりも小さい形態となる。口縁端面は垂直となり、脚裾部の広がりはやや萎縮している。受部は平滑で丁寧なヘラミガキが施されている。明橙褐色の精良な胎土が使われている。穿孔数は推定4つ。これも布留式でも古い様相を示すものといつてよい。79はC調査区西壁から出土した。橙褐色で上下が欠損し、全体の形状は不明である。



第29図 千歳下遺跡出土土師器器台および須恵器礎・甕

e. 手捏ね土器（第30図83～86） 83・84・86はA調査区排水溝掘削時に出土した。85はA-SK03上層の落ち込み部分から出土した。

いずれも粘土塊から手捏ねで成形したものである。内面に親指を押し込んで成形した痕跡が残る。83は平坦な底部から垂直に立ち上がるものの、内面は指ナデの圧痕によって碗形となる。橙褐色の胎土を呈し、指頭痕跡が顕著にみられる。84は手捏ねのため、口縁部分が水平に整えられてはならず、歪んでいる。褐色を呈する。85も手捏ねで外形がやや歪んでいる。胎土は暗褐色で、83同様、内面の指頭圧痕が顕著となる。86は器壁を薄く作るもので、他とは異なる。外面はナデ消しているが、粘土紐の接合痕が残る。灰白色を呈する。



第30図 千歳下遺跡出土陶器類他

f. 須恵器（第29図80・81・第30図82） 80は礎肩部破片である。C-SK04の検出前後に出土したが、C-SK04にともなうものかどうかは不明である。肩付近は水平に近く、器表も平滑で丁寧に仕上げられている。81はA調査区断割り、およびその付近で出土した横瓶である。破碎されたものとみられ、数センチ程度の破片が大量に出土している。細片のためすべてを接合することができなかったが、胴部長径が80cm近くになるかと思われる。内面は同心円叩き、外面は格子目叩きの後に回転カキ目調整で仕上げる。このほか、A調査区鎌倉時代以後の遺構面付近から出土した須恵器壺L（第30図82）がある。口縁部で大きく外反し、端部を上下に拡張する。平安時代前期のものであろう。

g. 磁器（第30図87～90） 87～90はC調査区、鎌倉時代前後の遺構面から出土した。87・88はC-SD02、89は西壁の断割りの際に出土した。90はC-SD03から出土した。

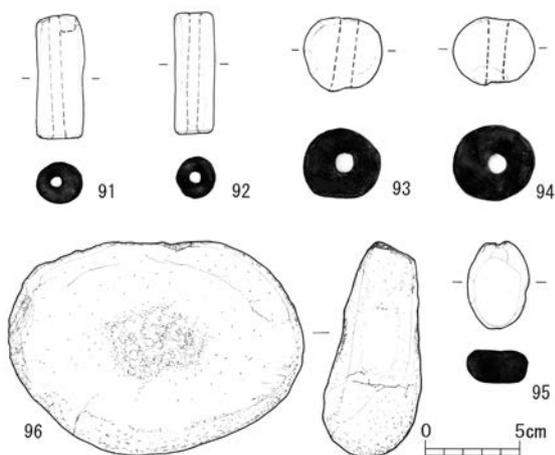
87・90は龍泉窯の青磁碗である。いずれも高台と見込み部がわずかに遺存する。釉薬は高台内側および高台畳付け部分以外の全面に施している。87は外面に蓮弁状の痕跡を有する。高台は低く、断面四角形を呈する。高台内側のケズリは浅い。釉薬は明オリーブ灰色である⁽¹³⁾。龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5類（森田 1995）と考えられる。90も高台内側のケズリが浅いため、底部が厚く高台高は低い。高台はやや開く断面四角形を呈する。畳付け外側を削り、内面の見込みには浅い圈線が入る。釉薬はオリーブ灰色である。外面に蓮弁が確認できないため、龍泉窯系青磁碗Ⅰ－1類と考えられる。88・89は白磁碗である。88は直線的に延びる体部と低い高台をもつ。高台内側のケズリは浅く、底部は厚い。内面の見込みは強く押さえて段をつける。胎土は粗く黒色鉱物細粒を含む。釉薬は灰白色を呈し、高台付近まで垂れる。白磁碗Ⅳ－1類と考えられる。89は断面四角形のやや細い高台をもち、高台部から体部は直線的に外側上方に延びる。内面に灰白色の釉薬が施されるが、外面には認められない。白磁碗Ⅵ類と考えられる。87は14世紀、88～90は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

(5) その他の遺物（第31・32図）

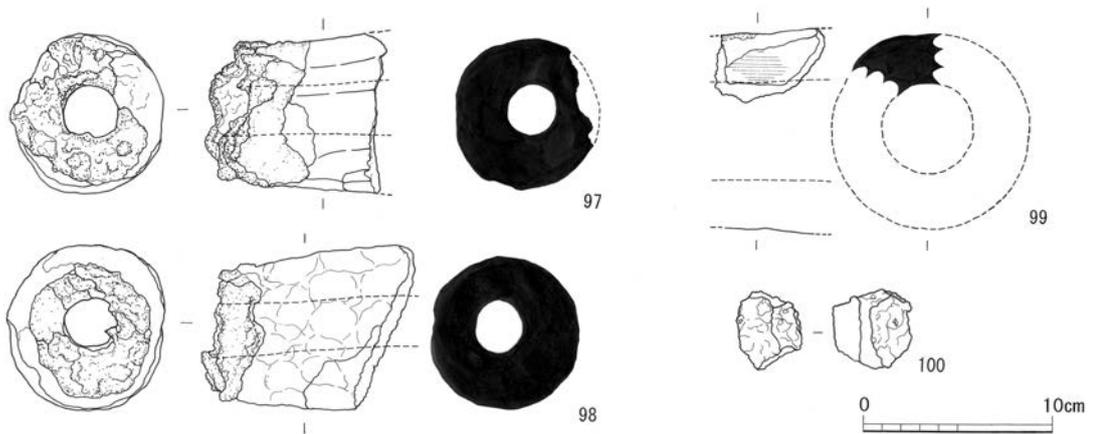
a. 土錘・石錘他（第31図91～96） 91・93・94はC-SK04から出土、92はA調査区排水溝、95はA-SK11出土である。また、96はA調査区東壁4層（第5図）出土である。

91・92は円筒形の土錘である。91は全長6.4cm、重量45.4gとなる。灰白色である。上端に2孔があり、直径5.5mmの中心孔は貫通しているが、もう一方の孔は深さ8mmで中心孔に通じる。92はやや細身で全長6.2cm、重量38.3gとなり、直径4mmの中心孔が貫通する。橙褐色である。93・94ともに球形の土錘である。93は直径3.6～4.2cm、重量57.1gとなる。全体に摩耗しており、砂粒を多く含む粗い桃灰白色の胎土が使われている。94は3.7～4.0cm、重量59.1gとなる。精良な灰色粘土を用いており、黒斑が残る。紐の当たる部位を幅3mm、棒状工具によって窪ませている。95は扁平な花崗岩河原石を利用した石錘である。上端のみ刻目が施される。重量33.2gとなる。96は砂岩質の鉄床石である。後述する羽口など鍛冶関連遺物とともに出土した。中央部には敲打痕跡があり、酸化鉄が認められる。

b. 羽口（第32図97～100） 97～100はA調査区東壁の鎌倉時代前後に埋没したと思われる第4層付近（第5図）から出土した羽口先端部である。ともに棒状工具の表面に粘土を貼り付けて成形したようだが、孔



第31図 千歳下遺跡出土土製品・石製品



第32図 千歳下遺跡出土羽口

内面に工具痕跡はみられなかった。97は先端部側で外径7.3cm、折損部側で外径8.2cm前後、孔径2.6cmである。淡桃白色で砂粒をほとんど含まない緻密な胎土である。羽口先端部の熔損と被熱の状況から羽口の設置俯角は5～10度程度で、水平に近い状態で使用されていたものと思われる。98は先端部側で外径7.0cm、折損部側で外径8.9cm前後、孔径2.7cmである。97とは異なり、直径1～2mm程度の石英・長石を多量に含む淡褐色の胎土をもつ。端部の熔損と被熱の状況から羽口の設置俯角は、10～15度程度となる。99は大口径の羽口の破片である。直径10.0cm以上になると思われ、鉄熔解用の羽口であろう。器表面にハケ状工具痕跡が残る。97や98のような鍛冶用の羽口とは異なる成形方法で製作されたようである。100も羽口細片である。このほか、鎌倉時代前後の遺物を包含する土層から碗形鉄滓の破片も出土している。

VII. 総 括

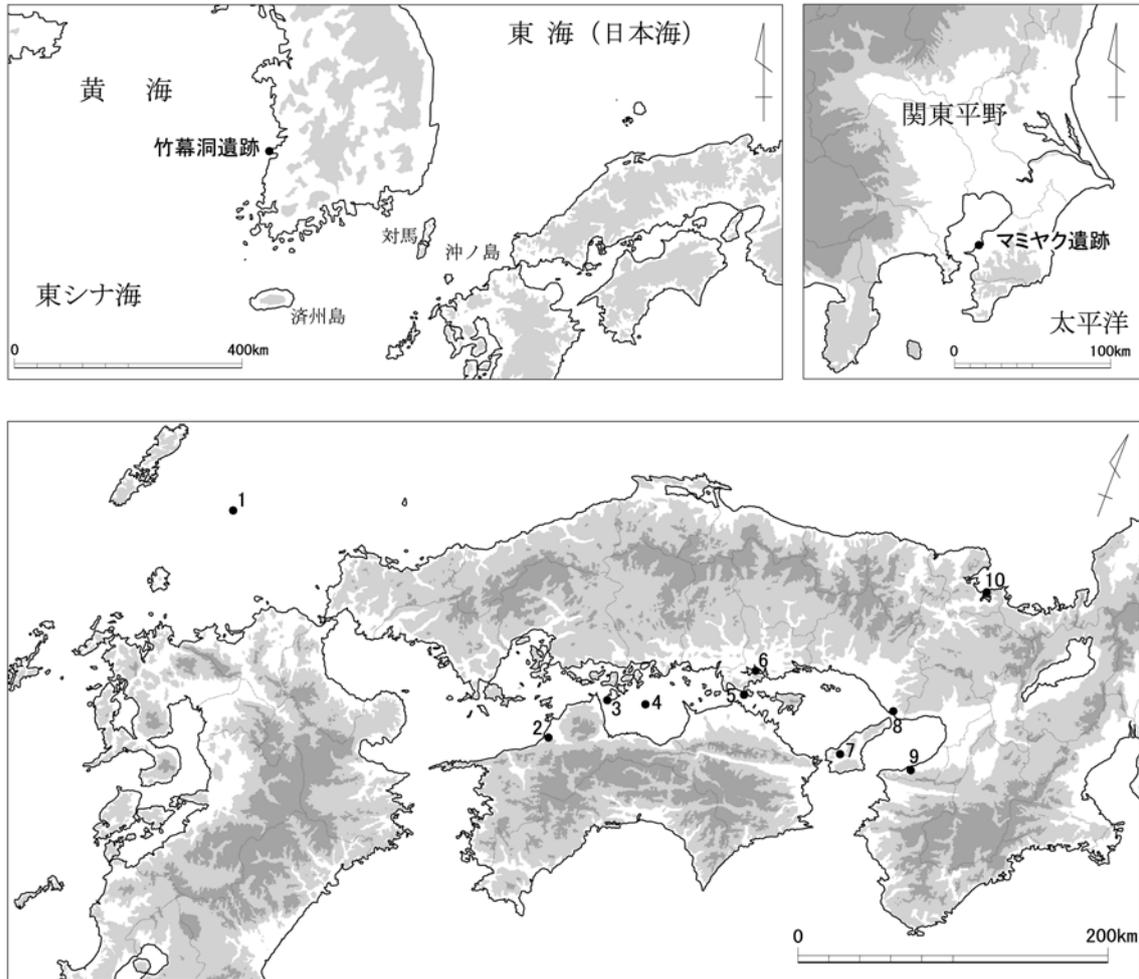
丹後一ノ宮である元伊勢籠神社は、天の橋立の北方、丹後半島の東側海浜部にあり、千歳下遺跡とは阿蘇海と舞鶴湾を隔ててはるか対岸に位置する。千歳下遺跡の西隣には「一ノ宮」と呼ばれる小祠がある。難波野遺跡と千歳下遺跡はともに海によって隔てられた2つの「一ノ宮」の近隣に位置し、古墳時代中期の海浜祭祀行為によって破棄された土器群が出土するといった共通項をもつ。また、息津島とされる冠島が籠神社の北東沖合いに位置する⁽¹⁴⁾。これを単なる偶然とすべきではなかろう。想像をたくましくすれば、宗像大社（辺津宮）と沖ノ島（沖津宮）の位置関係と同じような地理的状况にあるといってもよい。辺津・沖津の地理的状况は瀬戸内海の大木遺跡や高島岩盤山遺跡などにも認められることから、沖の小島や半島を渡海目的地に見立てた祭祀が実修された可能性を指摘してきた（野島 2007・2009）。

(1) 海浜祭祀遺跡の類例

千歳下遺跡の発掘調査によって古墳時代中期前葉頃を中心に数回の祭祀の実態を示す遺物群を確認することができたわけだが、このような千歳下遺跡と同様に、鉄器・鉄鋌・板状鉄片などを中心として青銅鏡、滑石製模造品・玉類の他、祭祀に関連する遺物が出土したおもしろな遺跡としては下記のものがある（第33図）。

韓国全羅北道扶安郡竹幕洞遺跡（国立全州博物館 1994）・福岡県宗像市沖ノ島遺跡（藤田・斉藤 1957、原田 1961、岡崎ほか 1979）・愛媛県今治市火内遺跡（安部・真鍋 1998）・愛媛県伊予郡松前町出作遺跡（相田・谷若 1993）・愛媛県越智郡上島町魚島大木遺跡（溝淵・松本ほか 1979、村上 1997）・香川県香川郡直島町荒神島遺跡（溝淵・松本ほか 1979）・岡山県岡山市高島岩盤山山頂遺跡（溝淵・松本ほか 1997）・兵庫県南あわじ市木戸原遺跡（南あわじ市教育委員会 2005・2009・2010、定松・谷口 2006）・兵庫県神戸市白木遺跡（安田編 2000）・大阪府阪南市亀川遺跡（島崎 2002）・千葉県木更津市マミヤク遺跡（小沢 1989）。

これらの遺跡はいずれも海浜域に立地する共通性がある（第33図）。鉄器・鉄素材などと滑石製品を基礎的祭祀具として使用・遺棄あるいは破棄する古墳時代海浜祭祀遺跡のグループとして把握することができる（第2表）。海浜地域における祭祀遺跡は、海上交通のための祭祀が行われたと考えられるものが多い。神体島として信仰の篤い三重県鳥羽市神島（亀井 1967、和田 1995、金子 2004）や福岡県宗像市沖ノ島などは古墳時代以来、畿内王権を祭主とし、渡海の安全祈願を目的とした祭祀が執り行われたという⁽¹⁵⁾。韓国全羅北道に位置する竹幕洞遺跡は、黄海に面した邊山半島の西端の絶壁に位置する祭祀遺跡だが、倭からもたらされたと想定される石製模造品や須恵器などの遺物も出土しており、百濟（栄山江流域）と倭の間の海上交通の安全祈願に関する祭祀を物語るものとされている（小田 1999）。千歳下遺跡や出作遺跡では、韓半島南部で生産されたと考えられる単合範鑄造斧形品が出土している。また、兵庫県木戸原遺跡・愛媛県出作遺跡では陶質土器が出土していることから



第33図 鉄を消費する海浜祭祀遺跡位置

1. 沖ノ島祭祀遺跡 2. 出作遺跡 3. 火内遺跡 4. 大木遺跡 5. 荒神島遺跡
6. 高島岩盤山遺跡 7. 木戸原遺跡 8. 白水遺跡 9. 亀川遺跡 10. 千歳下遺跡

も、韓半島へ向かう航海の安全祈願を行ったものとするができるかもしれない。敷衍すれば同一グループと把握できる海浜祭祀遺跡は海上の安全を祈願する目的をもつものと想定することが可能となろう⁽¹⁶⁾。

千歳下遺跡の発掘調査によって、古墳時代中期までには舞鶴湾から日本海、韓半島への海路、いわば日本海ルートが存在していたことを示唆する重要な考古学的資料を得ることができたといえる。

(2) 千歳下遺跡における祭祀の開始時期

出土土器からみた祭祀遺跡の時期的消長 千歳下遺跡は扇状地海浜部に位置しているため、発掘調査では、湧水が著しかった。近現代の盛土（整地土層）を除去し、古墳時代の包含層に達するまで、地表下1mほど掘削せねばならなかった。発掘調査区の遺構検出面周囲に排水溝を掘削しており、その際に出土した遺物が最も多い。このため、遺構ごとに出土土器の様相を把握することは現実的には難しかったものの、高坏は千歳下遺跡において最も多く出

第2表 各遺跡の祭祀遺物組成

遺跡名	舶載鏡		仿製鏡			鉄製品					石製形代		滑石製模造品			玉類		他	立地	中心時期
	中国製青銅鏡	大型青銅鏡	小型青銅鏡	鉄刀・鉄剣類	武器	鑄造鉄斧	鉄製工具	鉄製農具	鉄鋌・鉄板	模造品	舟・人・馬	剣形	有孔円板	他	硬質玉材玉類	滑石製玉類				
竹幕洞遺跡		○	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○		○	武器・馬具	半島先端	5c後半～6c	
沖ノ島21号祭祀遺跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	鉄釧・銅釧	島巨岩上	4c後葉～5c前葉	
千歳下遺跡	○			○		○	○	○	○	○			○	○	○	○	銅釧	半島海浜	4c末葉～5c前葉	
出作遺跡						○	○	○	○	○		○	○	○		○		海浜隣接	5c中葉	
白水遺跡				○		○	○	○	○	○		○			○			海浜隣接	5c中葉	
マミヤク遺跡							○	○	○	○		○	○		○	○	子持ち勾玉	海浜隣接	5c後半	
亀川遺跡							○	○	○			○	○	○		○		海浜隣接	5c後葉	
木戸原遺跡							○		○			○	○		○	○		海浜隣接	5c前半	
高島岩盤山遺跡			○						○			○	○		○			島丘陵上	5c後半～6c	
大木遺跡			○						○			○			○			島海浜	5c前半?	
荒神島遺跡				○					○			○			○			島海浜	5c後半～6c	
火内遺跡				?					?	○							鉄鈴?	島海浜	5c後半～6c?	

土した土器であった。松波静香が第VI章(4)a.高杯の項において指摘したように、高杯の脚部と坏部の接合部分の観察から、3種類の接合方法(第25図I・II・III類)が確認できた。坏部下面中央に半球状の突起部のあるものをI類としたが、なかでも類例の多かったIb類は、筒状の脚部に円板状の粘土を上から強く押しつけて接合し、それを基礎として周囲に坏部を成形していくもので、筒状の高杯脚部の内部に圧迫された粘土が食い込んでできる半球状の押し出し凸部が明瞭に残る特徴がある⁽¹⁷⁾。刺突痕をもつIa類がみられなかったことから、5世紀前葉を前後する時期を想定することができよう。

一方、先述してきたように、千歳下遺跡とは若狭・宮津湾を挟んで対岸の丹後半島には、丹後一ノ宮神社(元伊勢籠神社)に隣接した海浜祭祀遺跡、難波野遺跡がある。難波野遺跡祭祀遺構SX200から出土した高杯は、半球状の押し出し凸部の形状を真似して故意に指で成形した凸状粘土塊を貼り付けて脚部に差し込んでいたことから、この差し込み接合方法をIc類として分類し、型式学的にみて千歳下遺跡出土のそれよりも後出する痕跡的要素と認識したわけである。

このため、千歳下遺跡出土土師器は難波野遺跡祭祀遺構SX200出土土師器と比較すれば、やや古い様相をもつとすることができる。SX200から出土した須恵器には、TK208型式前後の高杯や甕などがあり、多量の土師器群もほぼ同時期のものとする事ができよう。よって、時期幅はあるものの、千歳下遺跡の高杯が使用・廃棄された時期はそれを遡り、一部は併行していたものとみてよからう。

以上の土器観察結果からすれば、千歳下遺跡の存続時期の中心は丹後半島に所在する三大前方後円墳（網野銚子山古墳・神明山古墳・蛭子山1号墳）の築造時期よりも新しくなるといえよう。しかし、布留式期でも中相にまで遡る土師器が存在することも明らかとなった。山陰系二重口縁壺や器台（第28図70、第29図77・78）などが、千歳下遺跡の祭祀の開始時期を示すものであるならば、下層遺構の存在からも古墳時代前期後半段階までには本遺跡における祭祀が開始された可能性を指摘することができよう。千歳下遺跡出土土器全体からみれば、おそらく4世紀中葉頃に始まり、4世紀末葉頃から祭祀活動が活発化し、5世紀前葉頃に盛行したものと理解することができよう。

(3) 瀬戸内海における祭祀遺跡の開始時期

瀬戸内海周辺の海浜あるいは島嶼において、鉄製品や滑石製模造品などを集積・遺棄する祭祀遺跡についてもその開始時期をみておきたい。まず、須恵器が出土していない海浜祭祀遺跡として、愛媛県魚島大木遺跡・兵庫県白水遺跡が挙げられる（第33図）。

大木遺跡の位置する魚島は瀬戸内海の中央、燧灘の絶海に位置する。海浜にわずかな居住地があるばかりの周囲6kmの小さな島で、遺跡は魚島の北岸海浜に迫り出した急峻な丘陵裾にある。付近は宮の前と呼ばれ、巖島神社小祠があった。戦前まで祭祀が継続されていたという（村上編 1997、41・42頁）。大木遺跡では、降雨によって丘陵裾が崩れ、祭祀遺物が採集された。祭祀遺物などが出土した遺構については不明ではあるが、鉄鏃や小型鉄鋌のほか帯金状の小鉄板・重圈文鏡・石製模造品・軟質石材製玉類などがみられる。共伴した可能性の高い土器のなかには須恵器がみられず、土師器および手捏ね土器しかない。そのなかでも土師器甕は小形のもので、布留式最新段階の形態を示している。4世紀後半まで遡る可能性の高いものはなく、5世紀前半頃の所産と考えられる。兵庫県木戸原遺跡もほぼ同時期のものとできよう。

兵庫県白水遺跡は海岸付近で合流する明石川の支流伊川の沖積地にある。遺跡の南東、海浜部には五色塚古墳が位置する。3.5～4.0m前後の不整円形で浅い掘り込みをもつ土坑SX01から、鉄矛・摘鎌・鉈のほか、茎をもつ鉄剣形鉄板・小鉄片・小鉄塊、石製模造品・軟質石材製玉類などが出土した（安田編 2000）。共伴した土師器は5世紀中葉を遡らないとされる⁽¹⁸⁾。土師器のみで須恵器がみられないことから須恵器出現以前とも考えられたが、高坏の接合形態が簡略化されており、高坏I c類が1点（安田編 2000、30頁、第26図126）みられる。この他には高坏筒部に円板を充填して坏部底部としていると考えられる簡略化した高坏I類（同、第26図127）や高坏III類（同、第26図124・125）の他、高坏IV類（同、第26図128・129）が主体となる⁽¹⁹⁾。土師器甕でも布留式の肥厚した口縁端部を痕跡的にもつ小形甕（同、第26図133）以外は、外弯して細く延びる布留式以降の口縁部をもつものとなっている。滑石製模造品も新しい様相のものであり、やはり5世紀前半にまで遡る様相はみとめられない。

須恵器を共伴した祭祀遺跡としては、岡山県高島祭祀遺跡群（鎌木 1968、溝淵・松本ほ

か 1979、22・23頁) や、香川県荒神島遺跡(溝淵・松本ほか 1979、19~22・28~34・45~48頁) などがある。高島祭祀遺跡群では、やや古相の形態を示す小形の土師器甕(溝淵・松本ほか 1979、53頁、図10) があるものの、中央広場あるいは岩盤山山頂遺跡などから出土する須恵器はTK23~TK47型式以降のものが主体となっており、土師器高坏などには高坏I c類、差込み接合を行うものが出現していることがわかる⁽²⁰⁾。やはり4世紀後半にまで遡る可能性は少ないとみてよかろう。荒神島遺跡にしても、丸底壺に千歳下遺跡出土例(第27図2) に酷似したもの(溝淵・松本ほか 1979、46頁、第2図2) があるものの、出土土器からは5世紀前葉から6世紀前半の時期幅で捉えることができよう。

よって、瀬戸内海における同様な海浜・島嶼地域の祭祀遺跡の開始時期は、千歳下遺跡よりもやや降り、現状では5世紀前半から中葉以降にならないと普及しないものとみられる。これらの海浜祭祀遺跡が海上交通の安全を祈願したものと想定すれば、瀬戸内海海上交通の発展は3世紀末葉から4世紀前葉を前後した布留式土器の拡散期(次山 2000) を経て、5世紀前半から中葉前後に新たな展開を想定することができよう。

(4) 4世紀後半における畿内政権の対外的活動と丹後半島

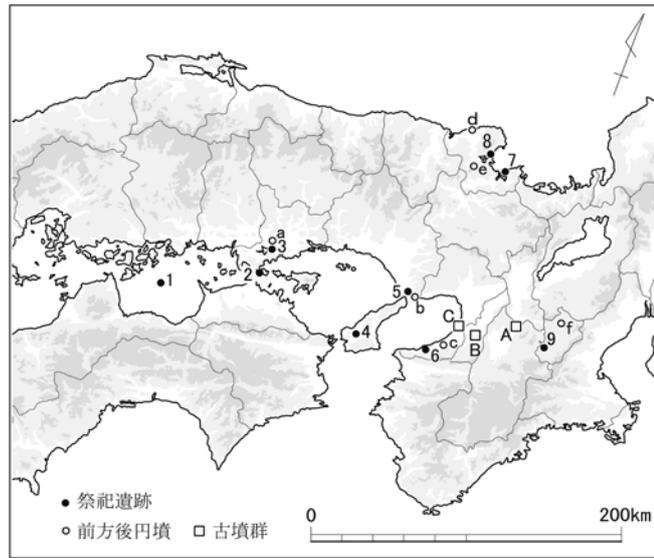
千歳下遺跡の祭祀開始時期はおそらく4世紀中葉頃であり、その最盛期は4世紀末葉から5世紀前葉頃と推測することができた。現在把握している出土土器の様相からは、日本海沿岸に位置する千歳下遺跡のほうが瀬戸内海沿岸地域に出現する海浜祭祀遺跡よりもやや早くに出現し、その後ある程度併行していたとみてよかろう。

a. 4世紀後半における前方後円墳の築造規格 大王墓と目される巨大前方後円墳は大和盆地東南部の三輪山西麓から奈良盆地北部、さらには大阪平野の河内古市、和泉百舌鳥の地へとその造営地を徐々に移動させていく(広瀬 2001ほか)。都出比呂志氏は大王墓の造営地の移動現象は地方の首長墓の系列の変化と連動したものであるという考えを示した(都出 1988)。地方の首長墓系列の消長は個別地域における首長の輪番的な交替を示すものではなく、畿内政権の政治的な変動に関連しており、地方首長もそれに巻き込まれた結果であるとする。その際、畿内政権と地方首長との政治的関係を示す考古学的情報のひとつとして前方後円墳の築造規格の共有があると考えられている。

前方後円墳の整然とした段築構造や、相似形と想定される大型古墳の存在から、それらは同一の設計図に基づき、高度な土木技術によって施工されたことが想定されている(岸本 1992ほか)。畿内政権と地方首長との関係はこのような大王墓と考えられる巨大前方後円墳と同じ墳丘規格をもつ相似形の首長墳を築造しえたかどうかで理解されるわけである。

千歳下遺跡における祭祀活動が開始された4世紀後半期には、奈良盆地北部に位置する佐紀盾列古墳群西群において、五社神古墳(伝神功陵、全長270m)・宝来山古墳(伝垂仁陵、全長225m)・佐紀陵山古墳(伝日葉酢媛陵、全長200m) が相次いで築造されることとなる。岸本直文氏は以前に五社神古墳の3/4の墳丘規模である佐紀陵山古墳を標式とする「佐紀陵山型築造規格」が、京都府京丹後市網野銚子山古墳(全長198m) や京都府与謝郡与謝野町

蛭子山1号墳（全長145m）、兵庫県神戸市五色塚古墳（全長194m）、大阪府岸和田市摩湯山古墳（全長200m）、三重県上野市御墓山古墳（全長190m）、岡山県岡山市金蔵山古墳（全長165m）などにあてはまるとした（岸本 1992）（第34図）。その後、岸本氏は渋谷向山古墳の築造規格との関連性を指摘し（岸本 2000）、五社神古墳の築造年代が下降することが明らかとなったことから（宮内庁 2005）、佐紀陵山古墳は、渋谷向山古墳の築造規格系譜をひき、2/3の墳丘規模で築造されたものと訂正した（岸本編 2010）⁽²¹⁾。いずれにせよ、4世紀後半、佐紀盾列古墳群西群の大王墓と同規格の同規模墳や相似墳



第34図 関連祭祀遺跡・古墳・古墳群の位置

- 1. 魚島大木遺跡 2. 荒神島遺跡 3. 高島岩盤山遺跡
- 4. 木戸原遺跡 5. 白水遺跡 6. 亀川遺跡 7. 千歳下遺跡
- 8. 難波野遺跡 9. 土山遺跡 A. 佐紀盾列古墳群
- B. 古市 C. 百舌鳥古墳群 a. 金蔵山古墳 b. 五色塚古墳
- c. 摩湯山古墳 d. 網野銚子山古墳 e. 蛭子山古墳
- f. 御墓山古墳

が丹後半島に存在することは以前から多くの識者によって重要視されていた。

b. 佐紀政権と丹後半島 三浦到氏もまた網野銚子山古墳の発掘調査を通して、その墳丘規模と墳丘形態から佐紀盾列古墳群西群諸墳との類似性を指摘している（三浦 1988）。開化紀6年条、且（丹）波⁽²²⁾ 大県主由碁理娘、竹野媛を妃とする記事、また垂仁紀15年条、日葉酢媛・淳葉田瓊入媛・眞砥野媛・薊瓊入媛・竹野媛ら丹波道主王の5人の娘の婚嫁記事、日葉酢媛を皇后とする記事、皇后日葉酢媛の伝承記事などを傍証として、三浦氏は4世紀後半から5世紀初頭にかけての丹後地域の首長と畿内政権との政治的結合（連合）を想定する。また、丹後地方には畿内政権が朝鮮半島や大陸との交渉を求める上での窓口（港）としての役割があったとした（三浦 1982）。これは明石海峡を眺望する位置に「網野銚子山型」の五色塚古墳が築造された理由と同じであるとし、両墳の被葬者が生前、佐紀盾列古墳群西群を造営した政権中枢による対外的交渉の一端を担った可能性にまで言及している。

文献史学からは、塚口義信氏が4世紀後半の王権について論じ、香坂王・忍熊王の反乱伝承を重視し、彼らを佐紀盾列古墳群西群の被葬者と考証している（塚口 1985）。彼らの勢力基盤はその伝承における逃走舞台などからみて、大和北東部から山城南部あるいは近江南部、さらに丹波の地にかけてであるとし、佐紀盾列古墳群西群と網野銚子山古墳の関係を示唆する。また、神功皇后摂政元年2月条、天皇陵を真似て淡路から石を運んで造営した山陵に兵を隠したとする記事にみえる「山陵」を五色塚古墳に比定する⁽²³⁾。考古学だけでなく文献史学からも網野銚子山古墳・五色塚古墳の築造に関しては佐紀盾列古墳群西群との関係の一端が示されているものとみることができよう。

また近年では、佐紀陵山古墳と網野銚子山古墳の築造規格の共有関係、丹波国出身女性を后とする上述の記紀の伝承記事、あるいは369年における倭と百済の間の軍事同盟（吉田1998）などを根拠とし、4世紀の第3四半期、畿内政権内における朝鮮半島との積極的な外交を行うグループが、日本海ルートを通じて対外的交渉を行なった結果、倭・百済軍事同盟の成立を成功させたとする（塚口 2010）。つまり、塚口氏は日本海ルートを掌握した外交派グループが佐紀盾列古墳群西群の被葬者であると想定するわけである。

この佐紀政権が日本海を朝鮮半島に向かう航路を重視したという仮説は、同規格の古墳の存在と文献史学の断片的資料からの類推が相まっており、魅力的である。千歳下遺跡の存続期間は佐紀盾列古墳群西群の造営時期とおおよそ併行しており、この海浜祭祀遺跡が航海の安全などを祈願したものとの前提からすれば、佐紀政権が丹後半島とその周辺海域を海上交通⁽²⁴⁾、さらには対外的交渉の拠点としたと想像することも強ちあやまりではなからう。

塚口氏はさらに佐紀政権衰退後、古市あるいは百舌鳥の新政権が瀬戸内海ルートを重視したとするが、瀬戸内海周辺における鉄製品や滑石製模造品などを集積・遺棄あるいは廃棄する海浜地域の祭祀遺跡は5世紀前半から中葉以降に普及する傾向があることから納得できよう。それらの祭祀遺跡のなかでも大規模なものは、5世紀の対外的交渉のための海上交通に関する祭祀が執り行われたものと想定することができる。佐紀政権の衰退とともに登場してきた古市・百舌鳥の新政権における対外的交渉が、瀬戸内海浜・島嶼における祭祀活動を活発化させたものといえよう。祭祀遺跡の分布は当時の海上ルートを復原するための重要な情報を内包しているといっておかろう（古瀬ほか 2002）。

よって、舞鶴市千歳下遺跡における祭祀活動が佐紀政権の成立と対外的交渉に利用する外港の掌握、さらには網野銚子山古墳や蛭子山1号墳などといった丹後三大古墳の造営に関連したものであると推測することができる。千歳下遺跡は海上交通に関わる祭祀遺跡であり、古墳時代前期後半、4世紀後半以降、倭の対外的交渉を担った佐紀政権が日本海沿岸を朝鮮半島に向かう海上ルートを開発していた傍証ともなりうる重要な遺跡であるといえよう。

VIII. 附編 祭祀資料集成と分析

古墳時代の滑石製模造品については、森本編 2005文献において集成され、祭祀遺跡における出土状況がある程度わかる状況にある。今回の集成では滑石製模造品については省略した。なお、日本出土の小型(形)仿製鏡については、白石・設楽編 1994・2002文献に拠っており、その後の新出資料を補った。祭祀遺跡出土遺物についても、1985年に国立歴史民俗博物館によって情報収集が行なわれていたが(白石編 1985)、その後の新出資料などの補遺をめざし、今回は2001年以降に発行・出版された埋蔵文化財報告書を検索した。

(1) 祭祀遺跡・集落遺跡出土の仿製鏡

本節では、弥生時代から古墳時代の祭祀遺跡出土の仿製鏡を集成し検討を行う。祭祀遺跡の分類については小野真一氏(小野 1982)・大平茂氏(大平 2008)の論考を参考にしながら、住居の祭祀、水系の祭祀、海浜・島嶼の祭祀、山の祭祀とした。なお、今回の検討では古墳に関する祭祀は対象としていない。時代は弥生時代後期・終末期、古墳時代前期・中期・後期とし、古墳時代前期を3世紀～4世紀代、中期を5世紀代、後期を6世紀～7世紀前半としてとらえている。時代を細分できるものについては、前半・後半などとしている。なお、弥生時代の仿製鏡については、面径の大きなものが存在しないということから「小形仿製鏡」と表記した。しかし、古墳時代の仿製鏡については、小型から大型のものまで存在することから「小型仿製鏡」とする。仿製鏡の面径については、弥生時代から古墳時代の仿製鏡の数量と面径を検討した結果から、13cm未満を便宜的に「小型鏡」として表記を統一した。また、13cm以上20cm未満を「中型鏡」、20cm以上を「大型鏡」とした。以下、祭祀の種類ごとに説明を行いたい。

a. 仿製鏡と住居の祭祀(第35図・第3表)

仿製鏡は住居から出土する事例が多く、管見によれば、108面を確認している。時期ごとに説明を行う。

弥生時代後期～終末期 仿製鏡は45面確認した。分布をみると、九州で32面出土しており集中していることが分かる。なお、このうちの14面は熊本県からの出土である。瀬戸内海沿岸から近畿にかけて8面出土し、関東や日本海側の鳥取県からも数面ずつ出土が認められる。鏡は弥生時代の小形仿製鏡が多く、それ以外に素文鏡・重圏文鏡が確認できる。面径は4.2～9.2cmで、このうち9点は鏡片である。

鏡の出土状況で特異な例としては、内区が欠損した後に廃棄された埼玉県大宮市三崎台遺跡(笹森ほか 1996)がある。また、広島県広島市真亀C地点遺跡の鏡は、出土状況から屋根に結ばれていたのではないかと推測されている(金井 1977)。

古墳時代前期 仿製鏡は38遺跡42面確認でき、このうち6点が鏡片である。分布は、九州5面・中国8面・四国1面・近畿4面・中部6面・関東18面となっている。鏡種は、弥生時代

に製作された小形仿製鏡、素文鏡・重圈文鏡・珠文鏡・内行花文鏡である。完形鏡はすべて小型鏡であり、面径1.9～10.5cmである。

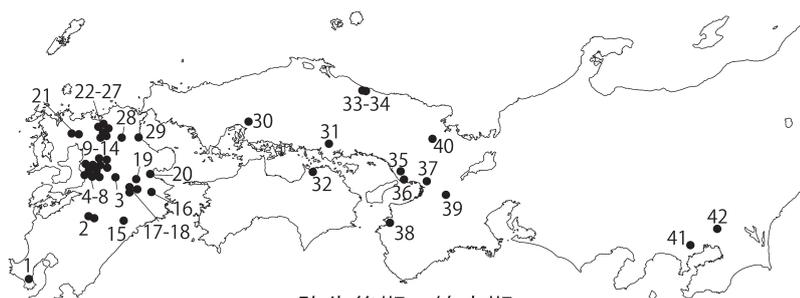
古墳時代中期～後期 仿製鏡は9遺跡10面確認でき、このうち2点が鏡片である。分布は、九州1面・中国4面・近畿1面・中部1面・関東3面となっており、際立った分布の偏りは認められない。鏡種は素文鏡・珠文鏡・重圈文鏡・内行花文鏡・乳文鏡・鋸歯文鏡である。完形鏡の面径は2.6～7.2cmで、すべて小型鏡である。

住居の祭祀では、弥生時代は鏡が多く流通していた九州における出土が目立ち、古墳時代前期は、瀬戸内海沿岸から近畿・中部・関東での出土が多くなる。古墳時代中期以降は全ての地域で鏡数が減少することが判明した。

鏡の種類は、弥生時代後期から終末期は小形仿製鏡がみられ、古墳時代に入ると素文鏡・重圈文鏡・珠文鏡などの出土が増える。全時期を通して鏡の面径は1.9～10.5cmであり、いずれも13cm未満の小型鏡である。住居内の出土位置については、入り口近く・住居中央部・住居端などがある。地域・時代の違いによる変化の傾向はみとめられない。

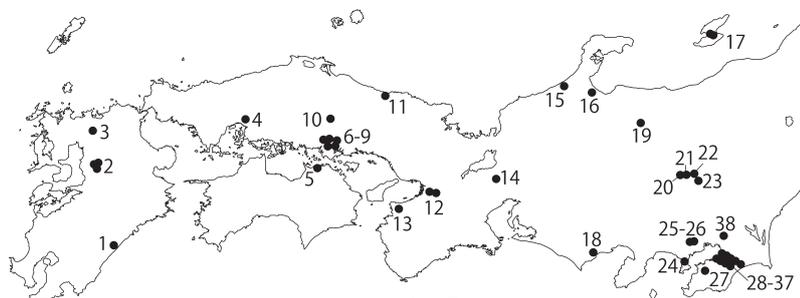
b. 仿製鏡と水系の祭祀 (第36図・第4表)

仿製鏡は、管見によれば75面確認できた。水系の祭祀は、井戸・溝・自然流路・河川・沼



弥生後期～終末期

1. 横瀬 2. 夏女 3. 下山西 4-8. 戸坂、五丁中原、徳王、石川、ラスギ 9. 高岡原、八反原、木瀬、西弥護免、うてな 15. 本村 16. 鹿道原 17-18. 石井入口、小園 19. 石田 20. 北方下角 21. 惣座 22-27. 内精、良積、宮ノ本、貝元、御笠地区、弥永原 28. タタラ 29. 鬼木四反田 30. 真亀C地点 31. 山屋敷 32. 彼ノ宗 33-34. 宮内、南谷大山 35. 玉津田中 36. 長田神社境内 37. 山ノ上 38. 旧吉備中学校校庭 39. 木津城山 40. 石原 41. 大場第二地区 42. 三崎台



古墳前期

1. 西ノ別府 2. 方保田東原 3. 亀作A 4. 毘沙門台 5. 谷尻 6-9. 津寺、百間川沢田、足守川加茂B、川入 10. 下川津 11. 長瀬高浜 12. 久宝寺 13. 北田井 14. 木曾 15. 塚崎 16. 小杉上野 17. 蔵王 18. 小深田 19. 篠ノ井 20. 天引向原 21. 神保下條 22. 舞台 23. 中溝・深町 24. 池子 25-26. 館町515、宇津木向原 27. 大竹 28-37. 草刈、草刈六之台 38. 戸張一番割



古墳中期～後期

1. 長野A 2. 斎富 3. 下湯原B 4. 長瀬高浜 5. 高野 6. 塩崎 7. 八幡耕地 8. 根崎 9. 片野向

第35図 仿製鏡出土の住居の祭祀遺跡の分布

などから出土したものと
している。

弥生時代後期～終末期

仿製鏡は30面確認でき、
環濠・溝・河川から出土
している。分布は、九州
19面・四国4面・中国1
面・近畿4面・中部2面
となっている。九州は17
面が福岡県・佐賀県から
の出土であり、住居の祭
祀で熊本県での出土が多
い状況とは異なっている。
全て小形仿製鏡であり、
面径は3.5～9.1cmで
ある。

古墳時代前期 仿製鏡は
29面確認でき、このうち
3点は鏡片である。溝・
井戸・河川から出土して
いる。分布をみると、九
州3面・四国1遺跡3
面・近畿9遺跡18面・中
部4面・関東1面であり、
弥生時代中期から終末期
に比べ九州での出土数が
減少し、近畿や中部での
出土が多くみられる。鏡

の種類には、弥生時代の小形仿製鏡、素文鏡・重圈文鏡・珠文鏡・内行花文鏡・獣形鏡・神
獣鏡があり、完形鏡の面径は2.7～7.8cmである。多数の鏡が出土した例として、兵庫県明石
市藤江別所遺跡（稲原 1996）・香川県高松市居石遺跡（藤井・山元 1995）があり、藤江別
所遺跡では、井戸から小型鏡の素文鏡・重圈文鏡・珠文鏡が計9面出土している。居石遺跡
では河川より小型鏡の素文鏡・重圈文鏡・珠文鏡が1面ずつ出土しており、これらの鏡がと
もに使用された遺跡が多いことが分かる。

古墳時代中期～後期 仿製鏡は11面確認でき、出土遺跡は溝・旧河道・水田・湧水が報告さ
れている。分布は、九州1面・中国1面・近畿3面・中部2面・関東2遺跡4面で、全国各



弥生後期～終末期

1. 小野崎 2. 惣座 3. 吉野ヶ里 4. 本行 5. 平塚川塚 6. 雀居 7. 馬渡・東ヶ浦
- 8-9. 伊崎、金山 10. 稲光 11. 道後町 12. 大相院 13. 寺田・産宮通 14. 鉦田
15. 表山 16. 篠原 17. 亀井 18. 青谷上寺地 19. 大友西 20. 西念・南新保 21. 中小泉



古墳前期

1. 柳町 2. 宇土城址 3. 長野フンデ 4. 居石 5. 藤江別所 6. 吉田南 7. 矢作
8. 太田黒田 9. 下長 10. 金森東 11. 服部 12. 鴨田 13. 高溝 14. 木田 15. 下安原
16. 石川条里 17. 伊勢町 18. 御林跡



古墳中期～後期

1. 平原 2. 山田 3. 長越 4. 西ノ辻 5. 下長 6. 元宮川神明原 7. 姫宮 8. 勝坂
9. 長須賀条里制

第36図 仿製鏡出土の水系の祭祀遺跡の分布

地で水系の祭祀が行われたようである。鏡の種類には、素文鏡・珠文鏡・乳文鏡・内行花文鏡があり、いずれも2.5～7.4cmの小型鏡である。このうち3点は鏡片である。

水系の祭祀の仿製鏡は、弥生時代後期から終末期においては九州からの出土が多い。古墳時代以降は九州での出土数が減少するものの、近畿・中部・関東では多くみられるようになる。面径は2.7～9.1cmであり、住居の祭祀と同様に全時期を通して小型鏡を使用することが判明した。

c. 仿製鏡と海浜・島嶼の祭祀（第37図・第5表）

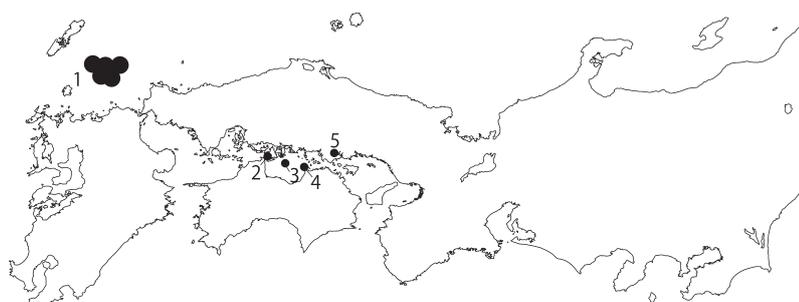
仿製鏡と海浜・島嶼の祭祀は、福岡県宗像市沖ノ島遺跡（鏡山 1958・原田 1961・西田編 1978）・愛媛県越智郡上島町魚島大木遺跡（長井 1975）・愛媛県今治市火内遺跡（阿部・真鍋1998）・岡山県岡山市高島岩盤山山頂遺跡（鎌木 1968）・香川県三豊市船越遺跡（松本 1981）の5遺跡のみであり、遺跡数は非常に少ない。海の祭祀について検討を行った亀井正道氏（亀井 1988）などを参考にして分類すると、沖ノ島遺跡のように畿内政権が執り行った祭祀遺跡と、大木遺跡・火内遺跡・高島岩盤山山頂遺跡・船越遺跡のように在地で行われたと考えられる祭祀遺跡がある。時期ごとにみていくこととする。

古墳時代前期後半 仿製鏡は沖ノ島遺跡の岩上祭祀でのみ確認できた。沖ノ島遺跡は、古墳時代以降、畿内政権によって航海安全を祈願するための祭祀が行われており、大量の鉄製品・石製模造品・青銅鏡などが出土している。岩上祭祀の仿製鏡は35面出土し、16号遺跡では小型鏡3面・大型鏡1面、17号遺跡では小型鏡2面・中型鏡10面・大型鏡9面、18号遺跡では小型鏡3面・大型鏡3面、19号遺跡では大型鏡1面、21号遺跡では小型鏡3面となっている。岩上祭祀では小型鏡とともに大型鏡が使用されている状況が確認できた。千歳下遺跡では2点の鏡片が出土しており、そのうちの1点は面径11.2cmの仿製鏡の可能性があり、海浜・島嶼の祭祀のなかでは早い段階から青銅鏡を使用している。

古墳時代中期～後期 仿製鏡は5遺跡9面確認できた。沖ノ島遺跡では岩上祭祀から岩陰祭祀へと移行し、大木遺跡・火内遺跡・高島岩盤山山頂遺跡・船越遺跡では在地の祭祀が行われた段階である。遺跡の分布は福岡県沖ノ島遺跡から瀬戸内海にかけて確認できた。沖ノ島遺跡では、8号遺跡から小型鏡2面、7号遺跡から小型鏡1面、15号遺跡から小型鏡1面、23号遺跡から小型鏡1面

が出土するものの、岩上祭祀段階に比べると仿製鏡の面数は減少し、小型鏡のみを使用している。

大木遺跡は重圈文鏡1面の他に滑石製有孔円板・鉄製品などが出土している。時期は古墳時代



1. 沖ノ島 2. 火内 3. 大木 4. 船越 5. 高島岩盤山

第37図 仿製鏡出土の海・島嶼の祭祀遺跡の分布

中期である。火内遺跡は包含層から土師器・須恵器・製塩土器の他、重圏文鏡1面・銅鈴・鉄製品が出土している。時期は古墳時代後期である。高島岩盤山山頂遺跡は重圏文鏡1面の他、石製模造品・土師器・鉄製品などが出土している。時期は古墳時代中期後半から後期である。船越遺跡では砂堆から素文鏡1面と共に祭祀に関係する遺物がみつかった。近くに製塩遺跡があることから、製塩に関する祭祀とされている（松本 1981）。時期は古墳時代中期である。仿製鏡はすべて古墳時代の小型鏡を使用している。

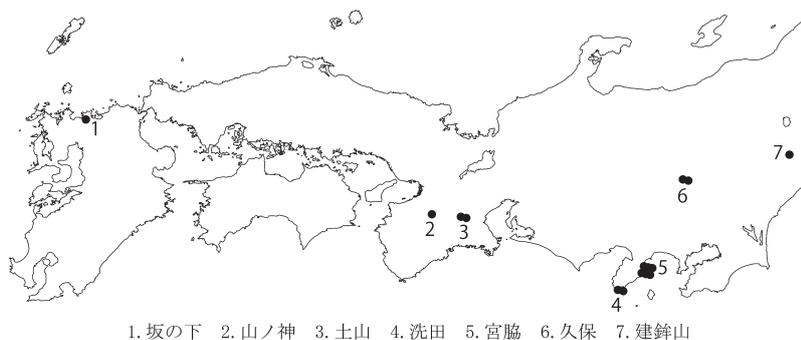
仿製鏡と海浜・島嶼の祭祀遺跡については、沖ノ島遺跡は、大型鏡と小型鏡をともに使用する段階から小型鏡を使用する段階に移行すると指摘されているように（佐田 1999）、古墳時代前期後半である岩上祭祀では小型鏡・中型鏡・大型鏡を大量に使用し、その後古墳時代中期から後期の岩陰祭祀では小型鏡のみを使用していた。古墳時代前期後半の沖ノ島遺跡では古墳に副葬されるような大型鏡を多量に使用し、祭祀を行ったという特殊性も再確認できた。しかし、沖ノ島以外の祭祀遺跡ではすべて小型鏡を使用しており、他の祭祀形態と同様の傾向にあることが分かった。なお、仿製鏡が出土した海浜・島嶼の祭祀遺跡は、すべて古墳時代の遺跡であり、弥生時代の遺跡は確認できなかった。舶載鏡に関しても海浜・島嶼の祭祀遺跡では出土しておらず、弥生時代は海浜・島嶼の祭祀で青銅鏡を使用していない可能性が高い。

d. 仿製鏡と山の祭祀（第38図・第6表）

仿製鏡は、全国で8遺跡16面確認できたのみである。山の祭祀には、山を望む場所で祭祀を行ったものと山の丘陵や岩場で祭祀を行なったものがある。

古墳時代中期～後期 仿製鏡が出土した山の祭祀は、すべて古墳時代中期から後期の範囲に収まり、分布にはとくに偏りはないと判明した。九州から東北の広範囲で山の祭祀が行われたと考えられる。

山を望む場所で祭祀を行ったものには、群馬県富岡市久保遺跡（富岡市市史編さん委員会 1987）・静岡県熱海市宮脇遺跡（熱海市史編纂委員会編 1967）・静岡県下田市洗田遺跡（堀田・川合 1950）がある。多賀神社境内で発見された宮脇遺跡は古墳時代中期から古代の遺跡で、神体山である向山に対する祭祀が行なわれたと考えられている（小野 1982）。仿製鏡は大石下から4面、神木下から2面が出土している。面径は5cm以下のものが5面、13.3cmの六獣鏡が1面である。遺跡の立地が丘陵上の久保遺跡・洗田遺跡も神体山に対する祭祀を行っていたと考えられる。久保遺跡は素文鏡



第38図 仿製鏡出土の山の祭祀遺跡の分布

2面と石製模造品などが出土しており、榛名山二ツ岳に対する祭祀と推測されている（井上 1999）。洗田遺跡は、素文鏡1面・珠文鏡1面が出土しており、三倉山に対する祭祀が行なわれたと推測されている（堀田・川合 1950）。

山の丘陵や岩場で行われた祭祀遺跡としては、福島県白河市建鉾山遺跡（亀井 1966）・奈良県桜井市山ノ神遺跡（樋口 1928a・b）・三重県名張市土山遺跡（水口・門田 1978）・福岡県前原市坂の下遺跡（前原市教育委員会 1993）がある。建鉾山遺跡は、山頂から山腹に存在する巨岩を対象として営まれた祭祀遺跡であり、珠文鏡1面が出土している。山ノ神遺跡では素文鏡2面、土山遺跡では重圏文鏡1面・四獣鏡1面、坂の下遺跡では重圏文鏡1面が出土している。

仿製鏡が出土する山の祭祀は、古墳時代中期から後期のみとなっており、宮脇遺跡の六獣鏡が面径13.3cmで中型鏡である以外は、すべて小型鏡である。なお、弥生時代から古墳時代前期の事例は管見の限りみとめられなかった。弥生時代の山の祭祀遺跡では、銅鐸・銅剣・銅戈・銅鉾が祭祀用品として使用されることが多く、山の祭祀で鏡が使用されるのは、古墳時代中期以降と考える。

以上、仿製鏡が出土した弥生時代から古墳時代の祭祀遺跡を検討した。仿製鏡の分布について述べると、住居や水系の祭祀では、弥生時代には仿製鏡を多く入手できたと考えられる九州での出土が目立つが、古墳時代以降は近畿を中心に分布がみとめられるようになり、中部・関東での出土も多くなる。海浜・島嶼の祭祀では、古墳時代前期後半は、確実には沖ノ島遺跡からの出土のみであり、中期から後期は沖ノ島遺跡と瀬戸内海に分布する。山の祭祀は古墳時代中期から後期にみられ、九州から東北まで分布している。仿製鏡を用いる祭祀が古墳時代において広範囲に広がっていく状況を確認することができた。鏡の種類は、弥生時代には重圏文系・内行花文系の小形仿製鏡が多く、それ以外にも素文鏡・重圏文鏡もみとめられる。古墳時代前期は、素文鏡・重圏文鏡・珠文鏡が多く、弥生時代に製作された小形仿製鏡もわずかながら確認できる。古墳時代中期以降は、素文鏡・珠文鏡の他に、乳文鏡・内行花文鏡・獣形鏡などがみられるようになる。

祭祀遺跡で仿製鏡を使用する遺跡の変化について述べると、弥生時代後期から古墳時代前期前半では、仿製鏡は住居や水系の祭祀においてのみ確認できる。住居は集落内と判断でき、水系の祭祀では集落近くと考えられる場所で行われていたと推測する。古墳時代前期後半は、引き続き各地で住居や水系の祭祀において仿製鏡が使用され、さらに、海浜・島嶼の祭祀である沖ノ島遺跡の岩上祭祀で仿製鏡の使用が始まる段階である。古墳時代中期から後期は、住居や水系の祭祀の遺跡数は減少するが引き続きみとめられ、海浜・島嶼や山の祭祀においても仿製鏡が多く使用される時期である。海浜・島嶼や山の祭祀は、集落から離れた場所で行われることが多かったと考える。

今回の検討によって、弥生時代や古墳時代前期前半のように、集落内や集落に近い場所のみで仿製鏡を使用する段階と、古墳時代前期後半以降のように、集落から離れた場所でも仿製鏡を祭祀の道具として使用する段階が存在することが判明した。仿製鏡の使用方法が増加

し、仿製鏡の意義が複雑になっていく様相をうかがう事ができたといえる。

(2) 近年調査された近畿・中国・四国地方の「水辺の祭祀」遺跡—文献史料との比較—

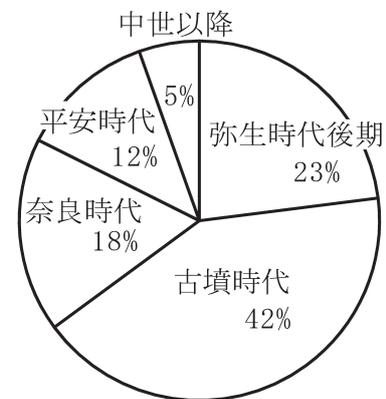
「水辺の祭祀」とは、河川や溝の近辺において行われる祭祀を総称したものである⁽²⁵⁾。「水辺の祭祀」において「水」が重要な意味をもっていたという前提に立つなら、「水辺の祭祀」は「地鎮祭祀」や「墓域祭祀」と異なり、水を必要とする農耕や、水によって引き起こされる災害と強い関連をもっている祭祀といえる。具体的には雨乞いや止雨祈願などが水辺において行われていたと想定される。

「水辺の祭祀」に関連する遺跡は全国各地で発見され、関連する研究も膨大である（金子編 1998、和田 1999ほか）。そうしたことも考慮して、近畿・中国・四国地方の遺跡を主たる対象に、弥生時代後期以降の「水辺の祭祀」遺跡を集成し、その概要とこれをもとにした考察を述べる。報告書中に「水辺の祭祀」と明記されているもののほか、溝跡や自然流路などから祭祀遺物が見つかるケースも「水辺の祭祀」遺跡として扱った。なお、都城に関連した遺跡は関連機関による集成（近江 2008、53頁）などが随時行われているため含めてはいない。

a. 本集成の概要と事例

第7表は「水辺の祭祀」に関連した遺跡の一覧である。以下では出典表記を簡潔にするために報告書の考察に相当する部分以外について、遺跡に関する出典を第7表の番号で示す。「水辺の祭祀」遺跡は大まかに山間部よりも沖積平野に多く、祭祀の性格や立地条件を反映してか、水田跡付近の出土例も多い。出土遺物からみると、ミニチュア土器・墨書土器・赤色に塗装された土器・破碎土器・玉類、斎串・人形などの木製品、獣骨などをともなう遺跡が多い。第39図は第7表を時代ごとに集計した結果を示す。第39図をみると、弥生時代後期から古墳時代前期と奈良時代から平安時代前半に多い。前者は古墳の出現とも関連して土器編年についての研究が進み、年代が細かい範囲で特定されるケースが多いことと起因しているとみられる。後者は律令政権下の地方官衙やこれに付随した集落で行われたとみられる祭祀が特徴的である。

弥生時代から古墳時代について、個別の事例を見てみる。奈良県大和高田市土庫長田遺跡では古墳時代の大規模な河道から滑石製勾玉や有孔円板などとともに、多量の韓式系土器が出土し、渡来人や渡来系文化と「水辺の祭祀」との関係について示唆に富んでいる（第7表22）。和歌山県有田川町野田地区遺跡では、布留式期の土器をとともなう溝から形代とされる祭祀具が出土するとともに、武内宿禰が水主神を勧請したのがはじまりとさ



第39図 水辺の祭祀遺跡の時期別割合

れ、遺跡に隣接する藤並神社との関係が指摘されている（川崎 2009、46頁）。これは、神社の初源や「水辺の祭祀」、さらにはそれらと畿内政権との関連を示す資料として重要な一例となりうる。また、島根県出雲市矢野遺跡でも、破碎されたとみられる5世紀前半頃の須恵器が溝から出土している（三吉 2010）。矢野遺跡では8世紀には『風土記』における「矢野社」があったとされ（高橋 2010、163頁）、調査地が現在の八野神社境内に位置していること、さらには遺跡が弥生時代から古墳時代前期にかけて出雲平野の拠点集落であったことを考慮すると、今後、天野遺跡における祭祀の時系列的把握が期待される。香川県さぬき市寺田・産宮遺跡では弥生時代後期後半の河床面から小形仿製鏡が出土し、愛媛県西予市坪栗遺跡でも異体字銘帯鏡が溝跡から出土した。ともに鏡が「水辺の祭祀」に利用されていたとの見解が出されている（第7表52・60）。両者は土器や木製品のみが見つかる事例とは明らかに異なるといえるが、これが具体的に何を意味するのか、発掘調査成果から特定するには至らなかった。

次に、古代を中心に具体例をみってみる。滋賀県東近江市金貝遺跡では8世紀後半の水路遺構が三間社流造の神社本殿とされる掘立柱建物跡と近接した場所で検出されていることから、水利に関連して神社が建てられたとされる。「水辺の祭祀」と神社との関連を探る上で貴重な事例を提供している（内田 2010、108～115頁）。滋賀県近江八幡市芦刈遺跡・大中の湖南遺跡は律令期の湖岸における港湾施設であるとともに、石敷遺構が湖岸における律令祭祀の場であった点で（田中 2005）、海上・湖上交易とも関連して「海の祭祀」遺跡とも似た側面をもつ。大阪府八尾市植松遺跡では、旧大和川⁽²⁶⁾の支流となる自然流路から8世紀～9世紀初めのミニチュア土器や墨書土器がみつき、当時の大阪平野東部で行われていた水害に対する祭祀の典型例と位置付けられている（川瀬 2007、136頁）。同様に、大阪府大阪市長原遺跡では奈良時代から平安時代前半の墨書土器とウシやウマの骨が自然流路から検出されている（第7表15）。長原遺跡は同時期を中心とした大規模な集落跡・水田跡であることから、「水辺の祭祀」が水田経営と一体であったことをうかがわせる事例といえる。徳島県徳島市観音寺遺跡では8世紀前半～9世紀前半の各期における齋串や人形といった木製祭祀具が自然流路から層位的に出土し、当該期に祭祀が継続的に繰り返行われていたとみられる（第7表49・50）。

都城については、今回の集成対象としなかったが、平安京では天皇の権力が衰微した10世紀後半以降、祭祀遺物をともなう遺跡が減少し、祭祀場が集約される（久世 1994、831頁）。奈良県橿原市四条遺跡でも藤原宮期に流水があったとされる地点から銅製品や土馬・墨書土器・馬歯が出土した（鈴木編 2010、28～29頁）。

一方、「海の祭祀」遺跡も広義には「水辺の祭祀」遺跡であり、千歳下遺跡との関連から近年の興味深い事例をいくつか挙げておきたい。石川県七尾市小島西遺跡では古墳時代中期から平安時代の祭祀遺物が大量に出土した。特に8世紀後半～9世紀の木製祭祀具や墨書土器が大量に出土し、周囲に「香嶋津」があったとされることから、官衙を主体とした祭祀が行われていたとされる（大西編 2008）。小島西遺跡における祭祀遺物の初現年代は千歳下遺

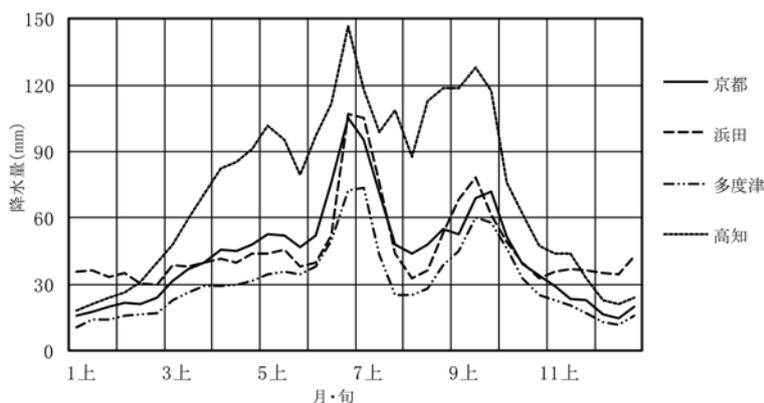
跡よりもやや下るが、平安時代までの祭祀遺物が多量に出土している点、また日本海沿岸に位置する点では共通する。しかし、官衙を主体とする古代の様相は千歳下遺跡とは異なる。静岡県浜松市伊場遺跡とこれを貫く伊場大溝の周辺では古墳時代中期から古代の滑石製模造品や木製祭祀具などが出土した。海浜部において集落全体および官衙に関わる祭祀が行われていたとされ（鈴木 2008、92～93頁、鈴木敏則 2009、181～184頁）、海岸に位置しつつも大溝を舞台とした「水辺の祭祀」が行われていた点で貴重な事例といえる。浜名湖周辺では静岡県浜松市舞阪町天白遺跡において7世紀～8世紀の陶馬や勾玉形土製品などが製塩土器とともに出土し、陶馬が祈雨に用いられたという指摘がある（鈴木一有 2009、96頁）。島根県の出雲平野も浜名湖周辺と似た地形的条件を有し、比較的海岸に近かったとされる遺跡で重要な成果が得られている。島根県出雲市出雲大社境内遺跡では古墳時代前期（4世紀末頃）の石製模造品などの祭祀遺物が大量に出土し、出雲大社本殿の成立がこれ以前に遡るという見解が出されている（相山 2004、486頁）。また、付近には8世紀後半～9世紀の神社と官衙の性格を併せもつ青木遺跡があるが、ここでは祭祀遺物として神像や絵馬などが出土し、律令体制下における祭祀儀礼および神社との関係を探る稀有な事例として、考古学・歴史学双方にとって大きな示唆を与えている（今岡ほか 2006）。

b. 考察 — 文献史料・気象データとの比較を中心に —

「水辺の祭祀」遺跡にはその後の神社における祭祀へとつながっていく過程が推察できるものがあり、このことから神社の成り立ちは「水」との関連が重要といえる。こうした一連の過程は考古遺跡だけでなく、「六国史」や『延喜式』などの文献史料からも探ることができる（久世 1994、831頁、和田 1999、172～176頁ほか）。古代については、史料から祈雨・止雨関連記事が集成され、これらが唐で行われていたものと一致し、都城から離れた地方では国司の独自の判断によって実施されていたことなどが示されている（三宅 1995）。一方で、「水辺の祭祀」、その中でも雨乞いに代表される農耕関連祭祀は考古遺物や文献史料から論じられることはあっても、自然科学的な視点からアプローチした論考は少ない。そこで、ここでは、「水辺の祭祀」が日本固有の気候や風土、あるいは降水量の季節変化などどのように関連しているのか、触れてみたい。

文献史料に現われた雨乞い祭祀に関連する最初の具体的な記述として、『日本書紀』の皇極天皇元年（642年）7月条、「群臣相謂之曰。随村々祝部所教。或殺牛馬祭諸社神。或頻移市。或禱河伯。既無所効。蘇我大臣報曰。可於寺寺轉読大乘經典。悔過如仏所説敬而祈雨」、これにつづく8月条、「天皇幸南淵河上。跪拜四方。仰天而祈。即雷大雨遂雨『五日溥潤天下。於是。天下百姓俱稱万歳曰至徳天皇』⁽²⁷⁾」が挙げられる。前者では祈雨にともなう牛馬が生贄となり、後者は河川上流での祈禱が想起される。文献史料は近畿地方中部に関する記事が大半であるが、『日本書紀』の記事は本集成における「水辺の祭祀」遺跡とよく一致している。これに対し、祈晴・止雨祈願については、『続日本紀』⁽²⁸⁾の宝亀6年（775年）9月条、「遣使奉白馬及幣於丹生川上。畿内群神。霖雨也」が最初の具体的な記事で、雨乞い同様に

河川近傍での祈禱が想起される。地方に関する文献記事は賑給を主としたものが大半であるが、『続日本後紀』⁽²⁹⁾の天長10年(833年)7月条、「越後国蒲原郡伊夜比古神預之名神。以彼郡每有旱疫。致雨救病也」、承和4年(837年)1月条、「在石見国五ヶ郡中神惣



第40図 各地の降水量

十五社。始預官社。以能応吏民之禱。久救旱疫之灾也」という記事がある。これは「水辺の祭祀」と雨乞いとの関係を直接的に示すものではないが、神社において雨乞いが行われていたことを示唆する。

第40図は気象庁のデータをもとにした1901年～2010年を統計期間とした京都・浜田(島根県)・多度津(香川県)・高知の4地点における旬合計降水量である⁽³⁰⁾。近畿地方中部では11世紀頃まで旱魃が文献史料に記載された気象災害の中では最も多く(日下部 1977)、中国地方・四国地方でも14世紀頃まで旱魃が相対的に多い(日下部 1969, 1978)。また、近畿地方を中心にほぼいずれの年代でも旱魃や雨乞いの記事は7月～8月に最も多く記載されている(中央气象台・海洋气象台 1939, 山本 1983, 638頁, 谷岡 2010)。上述の『日本書紀』における記載は、現行のグレゴリオ暦で8月28日・9月8日のものである。この雨乞いの記事は時期的にやや遅いとも言えるが、古代における史料の傾向、および現代の気象データと大きくかけ離れたものではない。

日本における降水量の季節・経年変化に多大な影響を与えるものとして、北太平洋高気圧や南北間の気温格差をエネルギー源とする傾圧不安定波の季節変化、比熱の違いによる海陸間の温度・気圧のコントラストなどが挙げられる。こうした要素は日本だけでなく、降水量の季節変化が明瞭な東アジア全体に重要な役割を果たす。日本における祭祀を論じる際には、韓国や中国における事例との比較が気候学的見地に立った時に再認識できる。

一方で、古代における気象関連項目全体をみると、文献史料には雷の記事が旱魃と同程度に多く記載されている。「六国史」のうち最も記述が詳細な『日本三代実録』では雷が特に多く記載され、8月についてみるなら、雷の記事が最も多い875年、877年には雷と旱魃が交互あるいはあわせて記されている。また、雷は7月～8月に多く記載され、この点は現在⁽³¹⁾と共通している。京都における1881年～2010年の平均雷日数は多い月から8月が5.0日、7月が4.8日、9月が2.7日であり、日本の大半もこれに準じた傾向を示す⁽³²⁾。しかし、現代における気象観測データによる分析では、雷日数が多い年と少雨年・多雨年は必ずしも一致しない。このことは、雷が古代において雨をもたらすものとして過剰に意識された結果、あるいは雷やこれに付随する激しい現象への畏怖が表れた結果といえる。雷は考古遺物とし

ては残らないが、日本各地に残る「雷電神社」などは雷が神社における祈祷や祭祀の中で重要な意味をもっていたといえよう（高木 2007、216～222頁）。

さらに、「水辺の祭祀」遺跡の中には繰り返し洪水にさらされ、洪水痕跡が何層も認められるものもある。詳細は各報告書を参照されたいが、大阪府大阪市長原遺跡・岡山県岡山市津寺遺跡などがこれに該当する。同様に、文献史料にも雨乞いだけでなく、止雨祈願や洪水、暴風雨も記載されている。古代における精神世界と「水」との関連が、恵みをもたらす反面、旱魃や洪水という「水」に関連した災害とも向き合わなければならない状況の中で構築されていったといえよう。

祭祀全般については近畿地方を中心とした文献史料にも記載されていることから、「水辺の祭祀」が雨乞いなどの農耕に関連した行為と密接に関係していることが看取された。文献史料から得た知見では雨乞いは、気候学的に降水量が少ない時期あるいはその直後に行われることが多い。こうした降水量の季節変化は東アジアに共通するものである。雷や洪水なども古代における精神世界や実際の祭祀行為と関連していたとみられる。

最後に、「海の祭祀」遺跡については、古代の文献史料が内陸の盆地である奈良や京都に集中して多いことから、内陸部における「水辺の祭祀」遺跡に比べて、遺跡と史料の間での比較が難しい。さらに、大まかに海岸に立地しているものの、遺跡を詳細にみると、急峻な崖をとともなう磯・河口・ラグーンなど、その立地条件は多様である。これに加え、海岸ではなく、海が見える尾根上にある祭祀遺跡や神社にも、「海」に関連した祭祀の場としての機能を求めることができよう。

第3表 仿製鏡出土の住居の祭祀遺跡一覧

No.	所在地	遺跡名	鏡式	面径 (cm)	遺構	出土位置・特記事項	時期
1	群馬県太田市	中溝・深町遺跡22号住居	内行花文鏡・鏡片	復元9.0 ~10.0	住居	住居床面直上で出土	古墳前期
2	群馬県伊勢崎市	舞台遺跡146号住居	重圏文鏡	6.8	住居		古墳前期
3	群馬県高崎市	神保下條遺跡1号住居	重圏文鏡	6.1	住居		古墳前期
4	群馬県甘楽郡甘楽町	天引向原遺跡20号住居跡	珠文鏡	7.0	住居		古墳前期後半
5	埼玉県大宮市	三崎台遺跡第3次調査第52号住居	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅲb?、田尻5?)	欠損7.6	住居	鏡面下にして、入口近くの床面で出土	弥生後期
6	埼玉県桶川市	八幡耕地遺跡	珠文鏡?・鏡片	復元5.6	住居	住居南壁の床面で出土	古墳後期
7	千葉県袖ヶ浦市	大竹遺跡群二又堀遺跡 SI105住居	重圏文鏡	7.3	住居		古墳前期
8	千葉県柏市	戸張一番割遺跡30号住居	重圏文鏡	6.3	住居		古墳前期前半
9	千葉県木更津市	根崎遺跡 SI015住居	鋸歯文鏡	7.2・ 穿孔1	住居		古墳中期
10	千葉県佐原市	片野向遺跡	重圏文鏡	3.8	住居		古墳後期
11	千葉県佐原市	太田・大篠塚遺跡48号住居	重圏文鏡	11.2	住居		不明
12	千葉県市原市	草刈遺跡 K039A	弥生重圏文系鏡 (高倉Ⅲb?・田尻3)	5.4	住居	壁寄りの場所で出土	古墳前期
13	千葉県市原市	草刈遺跡 C区97号住居	珠文鏡	6.8	住居		古墳前期後半
14	千葉県市原市	草刈六之台遺跡88号住居	小型仿製鏡・鏡片	復元9.0	住居		古墳前期
15	千葉県市原市	草刈六之台遺跡823号住居	素文鏡	2.8	住居	竈の東袖と北東の柱穴間の埋土下層で出土。822号住居と重複しており、822号住居に伴う可能性あり	古墳前期
16	千葉県市原市	草刈遺跡 L区029号住居	珠文鏡	7.0	住居		古墳前期
17	千葉県市原市	草刈遺跡 L区037号住居	素文鏡	1.9	住居		古墳前期
18	千葉県市原市	草刈遺跡 L区0103号住居	内行花文鏡	6.6	住居		古墳前期
19	千葉県市原市	草刈遺跡 L区301号	乳文鏡	9.2	住居		古墳前期~中期
20	千葉県市原市	草刈遺跡 L区098号	珠文鏡	4.5	住居		古墳前期
21	東京都八王子市	宇津木向原遺跡4区5号住居	弥生小形仿製鏡・素文鏡	5.9	住居	住居北東隅で鏡面下にして出土	古墳前期前半
22	東京都八王子市	館町515遺跡20号住居	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅲb、田尻5)	7.7	住居	住居北西隅の床上直上で出土。鏡面上にして出土	古墳前期前半
23	神奈川県横浜市	大場第二地区遺跡群 No.2地区 YT-10住居	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅲb?、田尻5?)	5.7	住居		弥生後期
24	神奈川県逗子市	池子遺跡群 NO.2地点2号住居	内行花文鏡・鏡片 (舶載か?仿製か?不明)	復元9.4	住居	埋土	古墳前期
25	新潟県佐渡市	蔵王遺跡	内行花文鏡	10.5	掘立柱建物		古墳前期?
26	新潟県佐渡市	蔵王遺跡	珠文鏡	復元6.5	掘立柱建物		古墳前期?
27	富山県射水市	小杉上野遺跡	弥生内行花文系鏡もしくは内行花文鏡	7.2	住居		古墳前期前半
28	石川県金沢市	塚崎遺跡6号住居	弥生小形仿製鏡?・鏡片	8.0	住居	東北部床面で出土	古墳前期前半
29	長野県長野市	篠ノ井遺跡群 SB7250	重圏文鏡	3.3	住居		古墳前期
30	長野県長野市	塩崎遺跡48号住居	内行花文鏡・鏡片	復元6.7	住居	住居床面に鏡面を上で出土	古墳中期
31	静岡県焼津市	小深田遺跡第7地点 D-23住居	重圏文鏡	3.7	住居		古墳前期後半
32	京都府木津川市	木津城山遺跡	素文鏡	4.2	住居	鏡背面に赤色顔料	弥生後期
33	京都府福知山市	石原遺跡 SHa001	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅲb、田尻5)	6.8	住居		弥生後期後半
34	滋賀県栗東市	高野遺跡	重圏文鏡?	7.1	住居		古墳中期
35	滋賀県犬上郡多賀町	木曾遺跡 SH24	珠文鏡・鏡片	復元5.4・ 研磨	住居		古墳前期後半
36	和歌山県和歌山市	北田井遺跡	重圏文鏡	4.5	住居		古墳前期
37	和歌山県有田郡有田川町	旧吉備中学校校庭遺跡11号住居	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅰb、田尻2a)・ 鏡片	復元6.0	住居		弥生後期後半
38	大阪府豊中市	山ノ上遺跡	弥生重圏文系鏡 (高倉Ⅲb、田尻3)	6.1	住居	埋土	弥生後期
39	大阪府八尾市	久宝寺遺跡住居3	重圏文鏡	6.7	住居		古墳前期
40	大阪府八尾市	久宝寺遺跡住居3	素文鏡	2.5	住居		古墳前期
41	兵庫県神戸市	玉津田中遺跡	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱa、田尻2b)	7.5	住居	埋土	弥生後期
42	兵庫県神戸市	長田神社境内遺跡 SB09	弥生重圏文系鏡・単線波文鏡	6.2	住居	住居中央付近、鏡面下にして地面に対して50°の角度で立って出土	弥生後期後半
43	岡山県赤磐市	斎富遺跡	珠文鏡	3.6	住居	床面より高い位置で出土	古墳中期
44	岡山県総社市	山屋敷遺跡	重圏文鏡	5.3	住居		弥生後期
45	岡山県岡山市	川入遺跡	内行花文鏡?・鏡片	復元20	住居	溝近く	古墳前期

46	岡山県岡山市	足守川加茂 B 遺跡	弥生重圏文系鏡 (高倉 I b、田尻1う)	4.4	住居	埋土	古墳前期前半
47	岡山県岡山市	百間川沢田遺跡	素文鏡	3.0	住居		古墳前期
48	岡山県岡山市	百間川沢田遺跡住居21	素文鏡	3.0	住居	住居内の土坑肩部のやや下った位置で出土	古墳前期
49	岡山県岡山市	津寺遺跡	重圏文鏡	6.0	住居		古墳前期
50	岡山県真庭市	谷尻遺跡	素文鏡	3.0	住居		古墳前期
51	岡山県真庭市	下湯原 B 遺跡	素文鏡	4.3	住居		古墳後期
52	広島県広島市	真亀 C 地点遺跡	弥生重圏文系鏡 (高倉 I a、田尻1あ)	6.2	住居	住居の外周をめぐる溝上 25cmから出土。鏡の出土状況から、鏡は屋根に結ばれていた可能性あり	弥生後期後半
53	広島県広島市	毘沙門台遺跡	重圏文鏡	6.0	住居		古墳前期?
54	香川県坂出市	下川津遺跡 SBNa11	弥生内行花文系鏡 (高倉 III b、田尻5)	7.3	住居	住居壁寄り出土	古墳前期前半
55	香川県善通寺市	彼ノ宗遺跡 ST09	弥生内行花文系鏡・鏡片	復元8.0	住居	南西端の床面直上で出土	弥生後期後半
56	鳥取県東伯郡湯梨浜町	長瀬高浜遺跡 SI-138	素文鏡	3.2	住居		古墳中期
57	鳥取県東伯郡湯梨浜町	長瀬高浜遺跡 SI-100	素文鏡	2.6	住居		古墳中期
58	鳥取県東伯郡湯梨浜町	長瀬高浜遺跡 SI249	重圏文鏡	3.6	住居		古墳前期前半
59	鳥取県東伯郡湯梨浜町	南谷大山遺跡23号住居	小型仿製鏡・鏡片	復元7.5	住居		弥生後期後半
60	鳥取県東伯郡湯梨浜町	宮内第1遺跡 SI101	弥生内行花文系鏡 (高倉 III b、田尻5)	7.8	住居	柱穴近くで出土	弥生後期
61	福岡県北九州市	長野 A 遺跡22号住居	鏡式不明鏡・鏡片	復元11.0	住居		古墳後期
62	福岡県豊前市	鬼木四反田遺跡	弥生重圏文系鏡 (高倉 I a、田尻1あ・い)	記述なし	住居		弥生後期
63	福岡県嘉麻市	タタラ遺跡16号住居	弥生小形仿製鏡	復元4.6	住居		弥生後期
64	福岡県福岡市	弥永原遺跡2号堅穴住居	弥生内行花文系鏡 (高倉 II a、田尻2b)	7.1	住居		弥生後期
65	福岡県春日市	小倉池ノ下遺跡	弥生内行花文系鏡 (高倉 II a、田尻2b)	記述なし	住居		不明
66	福岡県筑紫野市	御笠地区遺跡 G 地区 SX32	弥生重圏文系鏡 (高倉 I b、田尻1え?)	4.4	住居		弥生後期
67	福岡県筑紫野市	貝元遺跡312号住居	弥生内行花文系鏡 (高倉 I、田尻1)	復元8.4	住居		弥生後期後半
68	福岡県筑紫野市	日焼遺跡	弥生内行花文系鏡 (高倉 II b、田尻3a)・鏡片	復元6.8	住居		不明
69	福岡県太宰府市	宮ノ本遺跡第6次6SI045	弥生内行花文系鏡 (高倉 I b、田尻2a)	7.0	住居	住居の入り口の土坑より出土	弥生後期
70	福岡県小郡市	横隈町遺跡2地区14号住居	弥生内行花文系鏡 (高倉 II b、田尻3a)	記述なし	住居	埋土	不明
71	福岡県久留米市	良積遺跡	弥生内行花文系鏡 (高倉 II b、田尻3a)	記述なし	住居		弥生後期
72	佐賀県鳥栖市	内精遺跡	弥生内行花文系鏡 (高倉 I b、田尻2a)	破片	住居		弥生後期後半
73	佐賀県神埼郡吉野ヶ里町	亀作 A 遺跡 SH009住居	弥生小形仿製鏡	7.0?	住居		古墳前期前半
74	佐賀県佐賀市	牟田寄遺跡	弥生内行花文系鏡 (高倉 I b、田尻2a)	7.8	掘立柱建物	柱穴より出土	弥生
75	佐賀県佐賀市	惣座遺跡 SB219住居	弥生内行花文系鏡 (高倉 II a、田尻2b)	9.1	住居		弥生後期
76	佐賀県佐賀市	惣座遺跡 SB219住居	弥生内行花文系鏡 (高倉 II a、田尻2b)	7.5	住居	壁際で床面直上から鏡面下にして出土。住居に敷いたと思われる藁の痕跡あり	弥生後期
77	佐賀県小城市	八ツ戸遺跡3号住居	弥生重圏文系鏡 (高倉 II、田尻2)	7.6	住居		弥生
78	佐賀県多久市	四反田遺跡8号住居	弥生内行花文系鏡 (高倉 II b、田尻3a)・鏡片	復元6.9・研磨・穿孔	住居	床面直上で出土	弥生～古墳
79	大分県由布市	北方下角遺跡	弥生内行花文系鏡 (高倉 II a、田尻2b)	8.2	住居		弥生後期後半～古墳前期前半
80	大分県竹田市	石田遺跡	弥生重圏文系鏡 (高倉 I b、田尻 I え)	5.1	住居	壁側、床面から10cmほど浮く	弥生後期前半
81	大分県竹田市	小園遺跡 A 区5号住居	弥生内行花文系鏡 (高倉 II b、田尻3a)	8.1	住居	床面に密着した状況で出土	弥生後期後半
82	大分県竹田市	石井入口遺跡23号住居	弥生小形仿製鏡・鏡片	復元5.6	住居	埋土	弥生後期
83	大分県竹田市	石井入口遺跡57号住居	弥生重圏文系鏡 (高倉 I a、田尻1い)	5.5	住居	埋土	弥生後期後半
84	大分県豊後大野市	鹿道原遺跡157号	弥生内行花文系鏡 (高倉 II a、田尻2b)	8.8	住居	住居中央。鏡面表にして出土	弥生後期後半～古墳前期前半
85	大分県日田市	本村遺跡3次32号住居	弥生小形仿製鏡・鏡片	復元8.0	住居		弥生後期後半
86	熊本県山鹿市	方保田東原遺跡1号住居	弥生重圏文系鏡 (高倉 I b、田尻2)	8.1	住居		弥生後期～古墳前期前半

87	熊本県山鹿市	方保田東原遺跡15号住居	弥生内行花文系鏡 (高倉 I b、田尻2a)	7.9	住居		古墳前期前半
88	熊本県山鹿市	方保田東原遺跡17号住居	弥生重圏文系鏡 (高倉 I b、田尻1え)	4.7	住居	鏡背面上にして出土	古墳前期前半
89	熊本県山鹿市	方保田東原遺跡7号住居	弥生内行花文系鏡 (高倉 I b、田尻2a)	7.8	住居		古墳前期前半
90	熊本県菊池市	うてな遺跡57号住居	弥生内行花文系鏡 (文様不明)・鏡片	5.9	住居	西壁接し、布に包まれて出土	弥生後期
91	熊本県菊池市	小野崎遺跡年賀塚Ⅱ区 SH-24	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱa、田尻2b)	6.7	住居		弥生
92	熊本県菊池市	小野崎遺跡町畑Ⅶ区 SH-23	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱa、田尻2b)	7.6	住居		弥生
93	熊本県菊池市	小野崎遺跡年賀塚Ⅱ区 SH-14	弥生小形仿製鏡・素文鏡?	4.6	住居		弥生
94	熊本県菊池郡大津町	西弥護免遺跡	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅲa、田尻3b)	8.6	住居?	住居と溝の切り合い部分で出土	弥生後期
95	熊本県合志市	木瀬遺跡4号住居	弥生重圏文系鏡 (高倉 I b、田尻1え)	4.9	住居	ベット状遺構の近くで出土	弥生後期
96	熊本県合志市	八反原遺跡1号住居	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱa、田尻2b)	7.7	住居		弥生後期
97	熊本県玉名市	高岡原遺跡16号住居	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱb、田尻3a)	7.9	住居	出土位置は床面直上ではない	弥生後期
98	熊本県熊本市	ヲスギ遺跡24号住居	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱb、田尻3a)	8.6	住居	埋土	弥生後期
99	熊本県熊本市	石川遺跡13区2号住居	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱb、田尻3a)	6.9	住居		弥生後期
100	熊本県熊本市	徳王遺跡	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱa、田尻2b)	7.7	住居?		弥生後期
101	熊本県熊本市	五丁中原遺跡5号住居	弥生内行花文系鏡 (高倉 I a、田尻1)	8.0	住居	ピット内から埋納された状況で出土	弥生後期
102	熊本県熊本市	戸坂遺跡20号住居	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱ、田尻4)	9.2	住居?	包含層	弥生後期
103	熊本県阿蘇市	下山西遺跡32号住居	弥生内行花文系鏡 (高倉 I b、田尻2a)	6.3	住居	壁面近くで出土	弥生後期
104	熊本県球磨郡錦町	夏女遺跡23号住居	弥生内行花文系鏡・文様不鮮明	8.4・穿孔	住居	床面より15cm浮いて出土	弥生後期
105	熊本県球磨郡錦町	夏女遺跡50号住居	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱa、田尻2b)	7.9	住居	ベット状遺構付近で出土	弥生後期
106	宮崎県児湯郡川南町	西ノ別府遺跡 SA1	重圏文鏡	7.1	住居		古墳前期
107	宮崎県延岡市	速日峰地区遺跡18E区1号住居	弥生小形仿製鏡	5.3	住居		弥生
108	鹿児島県指宿市	横瀬遺跡2号住居	弥生重圏文系鏡 (高倉 I、田尻1)・鏡片	復元6.5	住居	埋土上層。住居とは関係ない可能性あり	弥生後期後半

第4表 仿製鏡出土の水系の祭祀遺跡一覧

No.	所在地	遺跡名	鏡式	面径 (cm)	遺構	出土位置・特記事項	時期
1	千葉県館山市	長須賀糸里制遺跡 ESD-1	乳文鏡	9.5	溝		古墳中期
2	千葉県市原市	御林跡遺跡352号遺構	内行花文鏡	7.1	溝		古墳前期
3	神奈川県伊勢原市	勝坂祭祀遺跡	珠文鏡	4.5	表探		古墳中期～後期
4	神奈川県伊勢原市	勝坂祭祀遺跡	獣形鏡	7.4	表探		古墳中期～後期
5	神奈川県伊勢原市	勝坂祭祀遺跡	珠文鏡	6.8	表探		古墳中期～後期
6	富山県中新川郡上市町	中小泉遺跡 SD39	弥生重圏文系鏡 (高倉Ⅱ、田尻2)	7.1	溝	肩部	弥生後期
7	石川県金沢市	西念・南新保遺跡 SD22	重圏文鏡	6.4	大溝	肩部	弥生後期～古墳前期前半
8	石川県金沢市	下安原遺跡溝	珠文鏡	7.8	溝		古墳前期前半
9	石川県金沢市	大友西遺跡西 SD01	弥生小形仿製鏡 (鏡式不明)	6.8	溝		弥生後期
10	福井県福井市	木田遺跡	鏡式不明・鏡片	欠損	溝	肩部	古墳前期後半
11	長野県長野市	石川糸里遺跡	内行花文鏡・鏡片	破片	溝		古墳前期～中期
12	山梨県甲府市	伊勢町遺跡	珠文鏡	7.0	河川		古墳前期後半～中期
13	静岡県静岡市	元宮川神明原遺跡宮川6区 SR313	乳文鏡・鏡片	破片	旧河道		古墳中期～後期
14	静岡県賀茂郡河津町	姫宮遺跡	珠文鏡	記述なし	沼・池		古墳中期
15	滋賀県守山市	下長遺跡 SD-5	素文鏡	3.7	溝	最下層	古墳中期
16	滋賀県守山市	下長遺跡	重圏文鏡	4.2	溝		古墳前期
17	滋賀県長浜市	鴨田遺跡	弥生小形仿製鏡	6.5・穿孔2	溝	肩部	古墳前期
18	滋賀県米原市	高溝遺跡大溝	重圏文鏡	3.6	大溝		古墳前期～中期
19	滋賀県米原市	高溝遺跡大溝	素文鏡	3.3	大溝		古墳前期～中期

20	滋賀県守山市	服部遺跡	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅲa、田尻3b)	7.8	溝		古墳前期
21	滋賀県守山市	金森東遺跡	弥生小形仿製鏡 (文様不明)	7.7	溝	上層	古墳前期
22	和歌山県和歌山市	太田黒田遺跡	内行花文鏡・鏡片	復元9.0・ 穿孔2	溝	最上層	古墳前期
23	大阪府東大阪市	西ノ辻遺跡	素文鏡	2.5	水利施設	包含層	古墳中期後半
24	大阪府八尾市	矢作遺跡	四獣鏡	8.0	溝	鏡面上、壺が覆う	古墳前期前半
25	大阪府八尾市	亀井遺跡	弥生重圏文系鏡 (高倉Ⅲb、田尻3)	5.4	河川	河床近く	弥生後期
26	兵庫県明石市	藤江別所遺跡	重圏文鏡	4.1	井戸	埋土	古墳前期前半
27	兵庫県明石市	藤江別所遺跡	重圏文鏡	4.1	井戸	埋土	古墳前期前半
28	兵庫県明石市	藤江別所遺跡	素文鏡	3.84～ 3.96	井戸	埋土	古墳前期前半
29	兵庫県明石市	藤江別所遺跡	重圏文鏡	3.9	井戸	埋土	古墳前期前半
30	兵庫県明石市	藤江別所遺跡	重圏文鏡	3.7	井戸	埋土	古墳前期前半
31	兵庫県明石市	藤江別所遺跡	珠文鏡	6.51～ 6.52	井戸	埋土	古墳前期前半
32	兵庫県明石市	藤江別所遺跡	珠文鏡	5.08～ 5.10	井戸	埋土	古墳前期前半
33	兵庫県明石市	藤江別所遺跡	素文鏡	2.54～ 2.56	井戸	埋土	古墳前期前半
34	兵庫県明石市	藤江別所遺跡	重圏文鏡	3.0	井戸	埋土	古墳前期前半
35	兵庫県姫路市	長越遺跡	素文鏡	3.7	大溝	肩部	古墳中期
36	兵庫県神戸市	三番町遺跡	珠文鏡	4.9	溝		不明
37	兵庫県神戸市	吉田南遺跡	重圏文鏡	2.8	溝		古墳前期
38	兵庫県神戸市	篠原遺跡第 SD01	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅲb、田尻5)	7.9・ 歪みあり	大溝		弥生後期
39	兵庫県神戸市	表山遺跡環濠	弥生小形仿製鏡	6.8	溝		弥生後期
40	兵庫県神戸市	新方遺跡	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅰb、田尻2a)	5.6	溝		弥生時代
41	兵庫県三原郡南あわじ市	鈿田遺跡	弥生内行花文系鏡	8.5	溝		弥生後期
42	香川県高松市	居石遺跡	珠文鏡	5.4	河川跡		古墳前期前半
43	香川県高松市	居石遺跡	重圏文鏡	3.6	河川跡		古墳前期前半
44	香川県高松市	居石遺跡	素文鏡	2.72～ 2.78	河川跡		古墳前期前半
45	香川県さぬき市	寺田・産宮通遺跡	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅲb、田尻5)	7.8	溝		弥生後期後半～ 古墳前期前半
46	愛媛県北条市	大相院遺跡	弥生重圏文系鏡？	破片	自然流路		弥生後期
47	愛媛県松山市	道後町遺跡Ⅱ	弥生小形仿製鏡 (文様不明)・鏡片	復元7.2	溝	埋土	弥生後期
48	鳥取県鳥取市	青谷上寺地遺跡	素文鏡	4.9	溝		弥生後期
49	鳥取県米子市	山田遺跡1区	珠文鏡・鏡片	復元7.0	溝		古墳中期
50	福岡県北九州市	伊崎遺跡 M13	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱa、田尻2b)	7.1	溝	3層	弥生前期
51	福岡県北九州市	長野フンデ遺跡6A 区土器溜まり	弥生小形仿製鏡 (高倉Ⅱ'、田尻4)	8.3	自然流路	土器溜まり	古墳前期前半
52	福岡県北九州市	金山遺跡Ⅵ区	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱa、田尻2b)	8.9	水路	弥生土器とともに出土	弥生後期？
53	福岡県京都郡苅田町	稲光遺跡	重圏文鏡	3.5	川	土器とともに出土	弥生終末期
54	福岡県古賀市	馬渡・束ヶ浦遺跡	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱb、田尻3a)	8.5	溝		弥生後期後半
55	福岡県福岡市	雀居遺跡 SD002	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱa、田尻2b)	9.1	溝	3層	弥生後期
56	福岡県福岡市	野多目前田遺跡第Ⅰ調査区	内行花文鏡	復元18.1	溝状遺構	最下層	古墳
57	福岡県甘木市	平塚川添遺跡	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱa、田尻2b)	7.6	内濠	埋土上層	弥生後期
58	福岡県甘木市	平塚川添遺跡	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱa、田尻2b)	8.9	内濠	埋土上層	弥生後期
59	佐賀県鳥栖市	平原遺跡2区 SX222	内行花文鏡・鏡片	復元7.4	水田		古墳中期
60	佐賀県鳥栖市	本行遺跡	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱb、田尻3a)	7.8	溝		弥生後期
61	佐賀県鳥栖市	本行遺跡	弥生小形仿製鏡・素文鏡	5.5	溝		弥生後期
62	佐賀県神埼市	吉野ヶ里遺跡吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区 SD0054溝	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱb、田尻3a)	6.4	溝		弥生後期後半～ 終末期
63	佐賀県神埼市	吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区169トレンチ	弥生内行花文系鏡 (文様不鮮明)	8.9	溝		弥生後期後半～ 終末期
64	佐賀県神埼市	吉野ヶ里遺跡 SD0832	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱb、田尻3a)	6.6	溝		弥生後期後半～ 終末期
65	佐賀県神埼市	吉野ヶ里遺跡吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 SD0925溝	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱb、田尻3a)	7.6	溝		弥生後期後半～ 終末期
66	佐賀県神埼郡吉野ヶ里町	吉野ヶ里遺跡吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 SD2121	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱa、田尻2b)	8.6	溝		弥生後期後半～ 古墳前期
67	佐賀県神埼郡吉野ヶ里町	吉野ヶ里遺跡吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区第221調査区 SD0265	弥生内行花文系鏡 (高倉Ⅱa、田尻2c)	6.8	溝		弥生後期後半～ 終末期

68	佐賀県佐賀市	惣座遺跡 SD019	弥生内行花文系鏡 (高倉 I b、田尻2a)	6.1	溝		弥生終末期
69	佐賀県佐賀市	惣座遺跡 SD019	弥生小形仿製鏡	破片	溝		弥生終末期
70	長崎県南島市	今福遺跡 B3・4区	弥生小形仿製鏡	復元7.5	溝		弥生
71	長崎県南島市	今福遺跡 B3・4区	弥生小形仿製鏡	復元7.8	溝		弥生
72	大分県大分市	植田条里遺跡	弥生重圏文系鏡 (高倉 I b、田尻1う)	6.1	溝		弥生後期後半～ 古墳前期
73	熊本県宇土市	宇土城址 SD01	神獸鏡	欠損15.2	溝		古墳前期
74	熊本県玉名市	柳町遺跡4SX049	内行花文鏡	復元5.6・ 穿孔1	溝状遺構		古墳前期後半？
75	熊本県菊池市	小野崎遺跡年賀塚 I 区 SD-01上層	弥生小形仿製鏡 (高倉 II a?・田尻2b?)	復元6.6	溝		弥生後期

第5表 仿製鏡出土の海浜・島嶼の祭祀遺跡一覧

No.	所在地	遺跡名	鏡式	面径 (cm)	遺構	出土位置・特記事項	時期
1	岡山県岡山市	高島岩盤山遺跡	重圏文鏡	欠損	岩上	在地の祭祀	古墳中期後半～ 後期
2	香川県三豊市	船越遺跡	素文鏡	4.0	砂堤	在地の祭祀。近くから 製塩土器出土	古墳中期
3	愛媛県越智郡上島町	大木遺跡	重圏文鏡	3.9	包含層	在地の祭祀	古墳中期後半
4	愛媛県今治市	火内遺跡	重圏文鏡	6.0	海浜部	遺物包含層、在地の祭 祀？	古墳中期～後期 前半
5	福岡県宗像市	沖ノ島16号遺跡	三角縁神獸鏡	20.5	岩上	一部が露出し出土。鏡 面は上。沖ノ島遺跡は 大和王権の行った祭祀	古墳前期後半
6	福岡県宗像市	沖ノ島16号遺跡	素文鏡	3.0	岩上	三角縁神獸鏡近くから 出土	古墳前期後半
7	福岡県宗像市	沖ノ島16号遺跡	内行花文鏡	9.1	岩上	現位置を留めていない	古墳前期後半
8	福岡県宗像市	沖ノ島16号遺跡	方格規矩鏡	6.9	岩上	現位置を留めていない	古墳前期後半
9	福岡県宗像市	沖ノ島17号遺跡	方格規矩鏡	27.1	岩上	鏡は集積され出土。鏡 面上	古墳前期後半
10	福岡県宗像市	沖ノ島17号遺跡	方格規矩鏡	26.2	岩上	鏡は集積され出土。鏡 面上	古墳前期後半
11	福岡県宗像市	沖ノ島17号遺跡	方格規矩鏡	22.1	岩上	鏡は集積され出土。鏡 面上	古墳前期後半
12	福岡県宗像市	沖ノ島17号遺跡	方格規矩鏡	21.5	岩上	鏡は集積され出土。鏡 面上	古墳前期後半
13	福岡県宗像市	沖ノ島17号遺跡	方格規矩鏡	17.8	岩上	鏡は集積され出土。鏡 面上	古墳前期後半
14	福岡県宗像市	沖ノ島17号遺跡	方格規矩鏡	16.6	岩上	鏡は集積され出土。鏡 面上	古墳前期後半
15	福岡県宗像市	沖ノ島17号遺跡	方格規矩鏡	18.0	岩上	鏡は集積され出土。鏡 面上	古墳前期後半
16	福岡県宗像市	沖ノ島17号遺跡	内行花文鏡	18.7	岩上	鏡は集積され出土。鏡 面上	古墳前期後半
17	福岡県宗像市	沖ノ島17号遺跡	内行花文鏡	17.6	岩上	鏡は集積され出土。鏡 面上	古墳前期後半
18	福岡県宗像市	沖ノ島17号遺跡	内行花文鏡	17.0	岩上	鏡は集積され出土。鏡 面上	古墳前期後半
19	福岡県宗像市	沖ノ島17号遺跡	龍鏡	23.7	岩上	鏡は集積され出土。鏡 面上	古墳前期後半
20	福岡県宗像市	沖ノ島17号遺跡	龍鏡	12.9	岩上	鏡は集積され出土。鏡 面上	古墳前期後半
21	福岡県宗像市	沖ノ島17号遺跡	変形文鏡	10.0	岩上	鏡は集積され出土。鏡 面上	古墳前期後半
22	福岡県宗像市	沖ノ島17号遺跡	変形獸形鏡	16.7	岩上	鏡は集積され出土。鏡 面上	古墳前期後半
23	福岡県宗像市	沖ノ島17号遺跡	変形獸形鏡	16.4	岩上	鏡は集積され出土。鏡 面上	古墳前期後半
24	福岡県宗像市	沖ノ島17号遺跡	変形画像鏡	22.0	岩上	鏡は集積され出土。鏡 面上	古墳前期後半
25	福岡県宗像市	沖ノ島17号遺跡	変形画像鏡	15.0	岩上	鏡は集積され出土。鏡 面上	古墳前期後半
26	福岡県宗像市	沖ノ島17号遺跡	三角縁神獸鏡	24.3	岩上	鏡は集積され出土。鏡 面上	古墳前期後半
27	福岡県宗像市	沖ノ島17号遺跡	三角縁神獸鏡	21.6	岩上	鏡は集積され出土。鏡 面上	古墳前期後半
28	福岡県宗像市	沖ノ島17号遺跡	三角縁神獸鏡	20.0	岩上	鏡は集積され出土。鏡 面上	古墳前期後半
29	福岡県宗像市	沖ノ島17号遺跡	変形夔鳳鏡	22.1	岩上	鏡は集積され出土。鏡 面上	古墳前期後半
30	福岡県宗像市	沖ノ島18号遺跡	夔鳳鏡	破片	岩上	一面離れ、鏡面下で出 土	古墳前期後半

31	福岡県宗像市	沖ノ島18号遺跡	三角縁神獸鏡	23.4	岩上	一列に鏡面上にして出土	古墳前期後半
32	福岡県宗像市	沖ノ島18号遺跡	三角縁神獸鏡	20.9	岩上	一列に鏡面上にして出土	古墳前期後半
33	福岡県宗像市	沖ノ島18号遺跡	三角縁神獸鏡	20.6	岩上	一列に鏡面上にして出土	古墳前期後半
34	福岡県宗像市	沖ノ島18号遺跡	三角縁神獸鏡	破片	岩上	一列に鏡面上にして出土	古墳前期後半
35	福岡県宗像市	沖ノ島18号遺跡	鏡片・鈕のみ	破片	岩上		古墳前期後半
36	福岡県宗像市	沖ノ島18号遺跡	鏡片・鈕のみ	破片	岩上		古墳前期後半
37	福岡県宗像市	沖ノ島18号遺跡	内行花文鏡	10.0	岩上		古墳前期後半
38	福岡県宗像市	沖ノ島18号遺跡	四乳櫛歯文鏡	7.8	岩上		古墳前期後半
39	福岡県宗像市	沖ノ島18号遺跡	素文鏡	3.9	岩上		古墳前期後半
40	福岡県宗像市	沖ノ島19号遺跡	内行花文鏡	24.8	岩上	鏡面上にして出土	古墳前期後半
41	福岡県宗像市	沖ノ島19号遺跡	変形文鏡	破片	岩上		古墳前期後半
42	福岡県宗像市	沖ノ島21号遺跡	龍鏡	13.0	岩上		古墳前期後半
43	福岡県宗像市	沖ノ島21号遺跡	格子目文鏡	11.9	岩上		古墳前期後半
44	福岡県宗像市	沖ノ島21号遺跡	四乳渦文鏡	9.2	岩上		古墳前期後半
45	福岡県宗像市	沖ノ島21号遺跡	円圏文鏡・鈕のみ	破片	岩上		古墳前期後半
46	福岡県宗像市	沖ノ島21号遺跡	素文鏡	破片	岩上		古墳前期後半
47	福岡県宗像市	沖ノ島8号遺跡	方格規矩鏡	14.1	岩陰	地表下10cm、背面上。	古墳中期～後期
48	福岡県宗像市	沖ノ島8号遺跡	変形文鏡	10.0	岩陰		古墳中期～後期
49	福岡県宗像市	沖ノ島7号遺跡	珠文鏡	9.2	岩陰	岩陰中央部	古墳中期～後期
50	福岡県宗像市	沖ノ島7号遺跡	鏡片	不明	岩陰		古墳中期～後期
51	福岡県宗像市	沖ノ島15号遺跡	乳文鏡	9.2	岩陰	石の下から鏡面下で出土	古墳中期～後期
52	福岡県宗像市	沖ノ島23号遺跡	珠文鏡	欠損6.0	岩陰	一段上がった岩の上から	古墳後期

第6表 仿製鏡出土の山の祭祀遺跡一覧

No.	所在地	遺跡名	鏡式	面径 (cm)	遺構	出土位置・特記事項	時期
1	福島県白河市	建鉾山遺跡高木地区	珠文鏡	4.6	山腹の巨石	遺物包含層	古墳中期
2	群馬県富岡市	久保遺跡	素文鏡	4.8	墳丘状遺構	榛名山二ツ岳への祭祀	古墳後期
3	群馬県富岡市	久保遺跡	素文鏡	2.5	墳丘状遺構	榛名山二ツ岳への祭祀	古墳後期
4	静岡県熱海市	宮脇遺跡B地区	素文鏡	3.7	神木の下	向山への祭祀	古墳中期～古代
5	静岡県熱海市	宮脇遺跡B地区	素文鏡	3.5	神木の下	向山への祭祀	古墳中期～古代
6	静岡県熱海市	宮脇遺跡A地区	六獣鏡	13.3	大石の下	向山への祭祀	古墳中期～古代
7	静岡県熱海市	宮脇遺跡A地区	素文鏡	5.0	大石の下	向山への祭祀	古墳中期～古代
8	静岡県熱海市	宮脇遺跡A地区	素文鏡	4.5	大石の下	向山への祭祀	古墳中期～古代
9	静岡県熱海市	宮脇遺跡A地区	素文鏡	4.3	大石の下	向山への祭祀	古墳中期～古代
10	静岡県下田市	洗田遺跡	素文鏡	4.3	丘陵上	三倉山への祭祀	古墳中期～後期
11	静岡県下田市	洗田遺跡	珠文鏡	7.2	丘陵上	三倉山への祭祀	古墳中期～後期
12	三重県名張市	土山遺跡	四獣鏡	8.0	岩盤露頭部	露頭付近	古墳中期
13	三重県名張市	土山遺跡	重圏文鏡	3.3	岩盤露頭部	露頭付近	古墳中期
14	奈良県桜井市	山ノ神遺跡	素文鏡	3.0	山の岩盤		古墳中期
15	福岡県前原市	坂の下祭祀 B-20-a 工区	重圏文鏡	5.6	岩場		古墳中期～後期

注1：弥生時代小形仿製鏡の分類は以下の文献を参考にした。

高倉洋彰1985「弥生時代小形仿製鏡について（承前）」『考古学雑誌』第70巻第3号、日本考古学会、94～121頁。

田尻義了2010「弥生時代小形仿製鏡の集成」『季刊邪馬台国』106号、梓書院、95～116頁。

注2：「弥生内行花文系鏡」は、内行花文日光鏡系仿製鏡・内行花文系小形仿製鏡、「弥生重圏文系鏡」は重圏文日光鏡系仿製鏡・重圏文系小形仿製鏡とする。

注3：鏡式で「弥生」を加えたものは、弥生時代小形仿製鏡であり、それ以外は古墳時代の小型仿製鏡である。

第7表 水辺の祭祀遺跡一覧

No.	所在地	遺跡名	遺跡概要・特記事項	祭祀遺構・遺物	時代	備考
1	滋賀県甲賀市	新宮神社遺跡	甲賀寺と紫香楽宮を結ぶ道路状遺構と関連施設を検出	舟形代人形代、木沓（いずれも旧河道1かからの出土）	奈良時代	舟形代・人形代は橋脚付近での祭祀に関連
2	滋賀県近江八幡市	芦刈遺跡・大中の湖南遺跡	琵琶湖に面した律令期の港湾施設	木製祭祀具（人形・刀形など）	7世紀～8世紀	
3	滋賀県守山市	弘前遺跡	①弥生時代中期の方形周溝墓②古墳時代前期・中期末・後期末の集落跡、③奈良時代後半遺構の条里制集落跡。飛鳥時代～奈良時代前半は遺構が希薄	①土坑（土師器小型壺を伴う）。②溝（土師器壺・甕・高坏・土玉を伴う）	古墳時代前期	②は祭祀ではなく、投棄の可能性もある
4	滋賀県東近江市	金貝遺跡	奈良～平安時代の集落跡、室町時代の溝状遺構	神社遺構	8世紀後半～9世紀前半	8世紀後半の神社は、水利に関連して建てられる？
5	京都府宮津市	難波野遺跡・難波野条里制遺跡	海浜部に立地する祭祀・集落跡。①古墳時代の祭祀遺構。②中世の籠神社に関連する可能性がある居館跡などが検出された	壺、甕、滑石製勾玉・白玉・有孔円板（水辺の祭祀跡というだけでなく海上交通の安全も祈願？）	古墳時代中期（5世紀後半ごろ）	付近に籠神社があり、関連？
6	京都府久御山町	佐山遺跡	①弥生後期中葉～古墳中期末の集落。②10～13世紀の水田跡・居館跡。③14世紀以降の島畠跡	犠牲獣（12世紀末の土器を伴う護岸施設 SX1100から出土）	12世紀？	勾玉、土馬、埴輪も出土
7	大阪府寝屋川市	小路遺跡	古墳時代以降、各時代の集落跡。今回の調査では、①縄文時代の自然流路、②古墳時代前期初めの前方後方形周溝墓の周溝、③奈良時代～平安時代初めの祭祀遺物と条里制関連？の里道・水路などが特筆される	絵馬、斎串、木製人形、馬歯（すべて奈良時代の溝（幹線水路？）から出土。とくに人面墨書土器が多量）	奈良時代	
8	大阪府八尾市	久宝寺遺跡竜華地区	縄文時代晩期から近代まで継続する遺構面を確認。弥生時代の集落跡・水田跡、60基以上からなる古墳時代初めの墳墓群、同時期の水田などが特筆される	赤塗した高坏（05418溝からの出土）	古墳時代前期（布留期中段階）	
9	大阪府八尾市	久宝寺遺跡竜華地区	縄文時代晩期から近代まで継続する遺構面を確認。弥生時代の集落跡・水田跡、60基以上からなる古墳時代初めの墳墓群、同時期の水田などが特筆される	完形の墨書土器、土師器（池03019・03021溝出土。祈雨に関連？）	8世紀末～9世紀前半	
10	大阪府八尾市	植松遺跡	旧大和川の支流となる自然流路を検出。流路の時期は、古墳時代中期～平安時代初め	ミニチュア土器、墨書土器	8世紀～9世紀初め	
11	大阪府寝屋川市	讃良郡条里遺跡	弥生時代中期、古墳時代中期以降の集落跡。古墳時代中期～後期の居住域において、韓式系土器が出土し、渡来人とのかわりが想定された。奈良時代以降は条里制地割による小規模居住域や島畠を中心とする耕作地へと展開した	土馬、土馬の周囲に散布された白玉700点以上、鉄製品、曲げられた状態の鉄剣（いずれも流路へ投棄を伴う祭祀）	5世紀半ば～6世紀？	流路から5世紀中ごろ～6世紀の遺物が出土
12	大阪府大阪市	加美遺跡	弥生時代～近世の複合遺跡。弥生時代中期の大型墳丘墓、弥生時代後期後半～古墳時代前期の周溝墓群と集落跡が特筆される	人面墨面土器、人形木製品、絵馬および動物遺体（いずれも人工の運河とみられる大規模な流路からの出土）	奈良時代	運河の掘削から祭祀の実行に至るまで公的な支配が強く及んでいたとされる
13	大阪府大阪市	長原遺跡00-6次	後期旧石器時代～近代における大阪平野を代表する遺跡。後期旧石器時代～縄文時代草創期の石器製作址、縄文時代晩期の土器群（長原式土器）、飛鳥～奈良時代の方格地割にもとづく水田跡などが特筆される。平安時代と室町時代以降は遺構が比較的希薄	木製人形（溝 SD401最下層からの出土）	11世紀前半	
14	大阪府大阪市	長原遺跡01-14次	後期旧石器時代～近代における大阪平野を代表する遺跡。後期旧石器時代～縄文時代草創期の石器製作址、縄文時代晩期の土器群（長原式土器）、飛鳥～奈良時代の方格地割にもとづく水田跡などが特筆される。平安時代と室町時代以降は遺構が比較的希薄	ミニチュア土器（甕・甌・甬・高坏）、墨面土器、斎串、横櫛、ウシ・ウマの骨（いずれも NR501からの出土）	8世紀前半	
15	大阪府大阪市	長原遺跡07-1次	後期旧石器時代～近代における大阪平野を代表する遺跡。後期旧石器時代～縄文時代草創期の石器製作址、縄文時代晩期の土器群（長原式土器）、飛鳥～奈良時代の方格地割にもとづく水田跡などが特筆される。平安時代と室町時代以降は遺構が比較的希薄	人面墨面土器、ウシ・ウマの骨（いずれも自然流路からの出土）	奈良時代前半	
16	大阪府吹田市	五反島遺跡	①平安時代前期の大規模堤防を検出。②平安時代前期の祭祀関連遺物を多量検出	笹塔婆	16世紀前半	笹塔婆によって16世紀前半頃には周辺の河辺で塔婆を用いる仏教儀礼が行われていたとされる。鉄鎌、刀子、小刀、鉸具、銭貨（北宋銭）なども出土
17	兵庫県神戸市	住吉宮町遺跡第33次	庄内期の集落跡、奈良時代～平安時代前半の掘立柱建物跡2・土坑など	壺形土器（谷状地形での水辺の祭祀に関連。土器は谷状地形が埋没するときに投棄）	古墳時代前期	

18	兵庫県豊岡市	入佐川遺跡	弥生時代後期～古墳時代中期の貯木場・堅穴住居跡など、奈良～平安時代の溝跡、中世の山城関連遺構	溝跡 SD201（石釧を伴い、祭祀的な性格を持って形成）	古墳時代前期	
19	兵庫県神戸市	雲井遺跡第28次	遺構面は縄文時代早期・後期、弥生時代中期初頭・中期前半、弥生時代後期末～古墳時代前期、古墳時代後期～飛鳥時代、鎌倉時代～近代の8面が確認された。最盛期は弥生時代中期で、第4遺構面から武器形青銅器鋳型や玉作り関連遺物などが見つかった	供献土器群（3区 SD401から出土。壺が多い）	弥生時代中期後半	
20	兵庫県多可町	安坂・城の堀遺跡	7世紀の壑、8世紀の祓所など	木製祭祀具（斎串・人形・馬形・鋤先形・刀形など。溝から出土）	奈良時代	
21	奈良県田原町	東井上遺跡第1次	弥生時代～中世の集落跡・耕作地	白玉、人面墨書土器、土馬（いずれも SR-1101から出土）	6世紀末葉～8世紀前半	
22	奈良県大和高田市	土庫長田遺跡第1次～第3次	①古墳時代前期～中期の集落遺跡（堅穴住居跡など）、②古墳時代後期の耕作関連遺構、③9～11世紀の条里制水田跡が検出された。古墳時代前期～後期の大河道や多量の韓式系土器も特筆される	植物種子、滑石製勾玉、有孔円盤（いずれも大河道から出土）	古墳時代	
23	和歌山県有田川町	野田地区遺跡	古墳時代前期から中世の水にかかわる祭祀を行っていた場所	形代？（遺構10（溝）から検出。付近での水辺の祭祀と関連？布留期の土器を伴う）	古墳時代前期？	（水辺の）祭祀は遺跡に隣接する藤並神社とも関連？
24	和歌山県有田川町	野田地区遺跡	古墳時代前期から中世の水にかかわる祭祀を行っていた場所	壑（11世紀の溝8から出土。完形の土師器碗・台付皿と共伴。壑が祭祀に用いられる？）	11世紀	
25	和歌山県かつらぎ町	西飯降Ⅱ遺跡	①弥生時代中期の集落跡、②古墳時代前期・後期の集落跡、③平安時代の条里制水田跡、④鎌倉～室町時代の掘立柱建物跡・水田跡	コウヤマキ製の下駄（自然流路6からの出土）	古墳時代後期	
26	島根県出雲市	古志本郷遺跡F区・G区	①古墳時代前期の集落跡、②古墳時代後期の溝跡、③飛鳥時代～平安時代初めの「神門郡家」関連とみられる掘立柱建物跡など、④15世紀以降の水田跡。9世紀中葉～中世前半の遺構は皆無	溝 SD39（大刀・土玉・手捏ね土器を伴う）	7世紀前半	
27	島根県出雲町	家ノ脇Ⅱ遺跡2区	古墳時代後期の斐伊川河道や土器溜まりなどが確認された	集石、土器溜まり（赤色塗装され器面が磨かれた土師器の高坏・甕などを伴う。川辺の祭祀）	古墳時代後期	
28	島根県出雲市	大津町北遺跡	弥生時代後期以降の集落跡 主たる遺構は中世の集石と近世の水田跡	赤彩あるいは胎土が鮮やかな壺・甕型土器・高坏・低脚坏・注口土器・甕（3層からの出土。斐伊川の支流？大きな神社が存在？）	弥生時代後期末葉～古墳時代中期	
29	島根県江津市	高津遺跡	弥生時代後期～古墳時代後期を中心とした集落跡 飛鳥時代遺構は明確な遺構は確認されていない	割れた裝飾壺、絵画土器（いずれも大溝から出土）	弥生時代後期後葉？	共伴遺物は畿内V-4様式のもの
30	島根県江津市	高津遺跡	弥生時代後期～古墳時代後期を中心とした集落跡 飛鳥時代遺構は明確な遺構は確認されていない	赤塗土器（水場・大溝で出土）	古墳時代後期	水場と大溝を祭祀の対象とする思想が弥生時代から続いていたとされる
31	島根県出雲市	九景川遺跡	古墳時代中期前半、奈良～平安時代初め、鎌倉時代を中心とした集落跡	丹塗高坏・坏、手捏ね土器、ウシの上腕骨	古墳時代後期前半	
32	島根県出雲市	矢野遺跡	縄文時代後期～江戸時代の各時代における集落跡、弥生時代前期～古墳時代前期は出雲平野の拠点的集落として継続した	須恵器高杯（溝の中から破片の状態で出土）	5世紀前半	
33	島根県益田市	浜寄遺跡	古墳時代前半～飛鳥時代の須恵器や土師器などが検出され、水際での祭祀に関連した場所である可能性も見出された	完形の土器（水際での祭祀？）	古墳時代前半～飛鳥時代	
34	島根県飯南町	森V遺跡	①縄文～弥生時代の集落跡、②室町時代の祭祀跡	土坑（土師質土器・鉄製品が埋納される。祭祀跡か墳墓？）	中世後半	10m東の神戸川に龍神を祀る祠がある
35	岡山県倉敷市	上東遺跡	古墳時代の河道、水田、貝塚、獣骨などが確認された	波止場状遺構（貨泉・完形土器を伴う）	弥生時代後期～古墳時代	
36	岡山県岡山市	津島遺跡	弥生時代前期以降、各年代の集落跡・水田跡	須恵器（須恵器の杯身・蓋を5個体重ねて配置）	（弥生時代～）古墳時代後期	祭祀は弥生時代から継続
37	岡山県総社市	北溝手遺跡	弥生時代以降、各年代の集落跡・水田跡。今回は河道部の調査で、弥生時代、古墳時代、平安時代の遺物と、中世の土壌墓が検出された	特殊器台（河道から出土）	弥生時代後期	
38	岡山県総社市	南溝手遺跡	弥生時代以降～古代の各時代の集落跡で、古代においては寺院とも関連	陶馬（河道最下層から出土）	7世紀後半～8世紀初め	
39	岡山県岡山市	津寺遺跡	弥生時代前期以降、各年代の集落跡・水田跡	土器（溝から出土）	古墳時代前期初め	
40	広島県庄原市	大仙2号遺跡	弥生時代中期の住居跡、古墳時代の畿内系土器・山陰型甕形土器、中世の祭祀遺構などが見つかった	祭祀遺構 SX1（溝状遺構 / 高坏7個体を伴う）	古墳時代	
41	広島県東広島市	青谷1号遺跡	弥生時代後期の溝跡・土坑、奈良時代の掘立柱建物跡など	溝遺構 SD1（投棄された？大型の壺形土器・甕形土器・鉢形土器を伴う。上層から弥生時代終末期、下層から弥生時代後期前葉の遺物が出土）	弥生時代後期	

42	広島県東広島市	安芸国分寺周辺遺跡	安芸国分寺の軸線に沿った溝状遺構が検出された	土師質土器（流路から出土。流路廃絶に伴う儀式）	13世紀～14世紀	
43	山口県下関市	川棚条里跡木舟地区・田尻地区	弥生時代後期中葉～古墳時代の集落跡、中世の墓	落ち込み（甕・鉢・高坏・ミニチュア土器などを伴う / 水壺祭祀）	弥生時代後期末葉（庄内期を含む）	
44	山口県下関市	武久川下流域条里遺跡	弥生時代後期終末～古墳時代初期の集落跡。掘立柱建物跡、祭祀跡に一括廃棄されたとみられる土器群、線刻土器が出土	土器溜まり（器台・小型鉢・ミニチュア土器・穿孔土器など）	弥生時代後期末葉～古墳時代前期初め（庄内）	
45	山口県下関市	伊倉遺跡	①弥生時代末～古墳時代の凹谷の埋没、②古墳時代の谷頭における祭祀跡が確認された	井戸状遺構（須恵器平瓶を伴う）	古墳時代	
46	山口県下関市	西沢遺跡	弥生～古墳時代の集落跡	不明遺構 SX003（小型丸底壺・高坏・手づくね土器などを伴う）	弥生時代後期～古墳時代中期	
47	山口県下関市	寺ヶ谷遺跡	弥生時代～中世の集落跡	①土器集積遺構 SX0007（13世紀後半）、②土器集積遺構 SX0015（14世紀前半）	13世紀後半～14世紀前半	SX0007・0015とも水辺の祭祀と関連
48	徳島県三好市	大柿遺跡	縄文時代後期以降の集落跡。平安時代末葉～鎌倉時代に集落が最も拡大し、掘立柱建物跡群が検出された	溝跡 SD7014・7015（自然礫・赤塗須恵器・鹿角などを伴う）	古墳時代	
49	徳島県徳島市	観音寺遺跡	古墳時代後期から中世の遺構が確認された。木簡をはじめ容器、祭祀具などの木製品が大量に出土した	多量の木製祭祀具（斎串・人形・舟形など）、銅製品	8世紀前半～9世紀前半	各層は自然流路の各層から層位的に木製祭祀遺物が出土
50	徳島県徳島市	観音寺遺跡	奈良時代～中世の自然流路。祭祀具などの木製品、木簡、容器が多量に出土	木製祭祀具（人形など。自然流路から出土）	古代～中世（とくに9世紀～10世紀）	
51	徳島県徳島市	庄（庄・蔵本）遺跡	①弥生時代前期の土坑・土器だまり・炭化米が見つかった。②平安時代の水路から多量の墨書土器や斎串が出土し、付近に官衙施設の存在が想定できる。③近世～近代の大溝、井戸などが見つかった	木製祭祀具（主に斎串）、土馬、墨書土器	平安時代	
52	香川県さぬき市	寺田・産宮遺跡	①弥生時代中期後半～後期前半、②弥生時代後期後半～古墳時代前期初め、③古墳時代後期末葉、④平安時代後半、⑤鎌倉時代、⑥室町時代後半以降の集落跡	小形仿製鏡（第2低地帯の河床面から出土。周辺の水辺の祭祀と関連）	弥生時代後期後半	
53	香川県高松市	前田東・中村遺跡	①弥生時代中期～後期の溝状の遺構・自然河川。②古代の掘立柱建物跡・柵列跡など。③中世の掘立柱建物跡・窯跡など	斎串、木製模造品、墨書土器など（いずれも自然河川から出土。郡境での境界祭祀？）。	古代。	
54	香川県善通寺市	旧練兵場遺跡	①弥生時代後期～古墳時代前期を中心とした集落跡。②奈良～鎌倉時代の条里制地割・農耕地	ミニチュア土器（SD56出土）、赤色顔料土器（SD56・SR01出土）、線刻画土器（大半がSD56出土）、金属製品（住居の廃絶に用いられる？）	弥生時代後期	
55	香川県高松市	天満・宮西遺跡	弥生時代後期～古墳時代前期初めの旧河道。搬入土器、特殊器台、赤色顔料付着土器が出土した	特殊器台（旧河道から出土）	弥生時代後期～古墳時代前期	
56	香川県高松市	西下遺跡	7世紀と14世紀の遺構・遺物が検出された。主体は7世紀前半の大型掘立柱建物跡で、条里制地割と合致することから規格性が認められる	鳥形木製品（SD103から出土）	7世紀	
57	愛媛県松山市	道後町遺跡	弥生時代以降の集落跡。弥生時代前期～中期と中世以降が中心	小形仿製鏡（SD8から出土）、鏡の石製品模造品	弥生時代後期～古墳時代前期初め	
58	愛媛県今治市	高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡第2次	後期旧石器時代～古墳時代の遺物が検出された	壺、甕、高坏、鉢など（いずれも自然流路から出土）	弥生時代後期前葉～中葉	
59	愛媛県松山市	船ヶ谷遺跡第4次	弥生時代前期～古墳時代後期の集落跡	自然流路（陶質土器・滑石製品・口縁部を打ち割った甕が出土）	古墳時代中期～後期	
60	愛媛県西予市	坪栗遺跡	弥生時代後期後半の集落跡	非在地系土器、農具、堅果類、異体字銘帯鏡	弥生時代後期？	各遺物はSD04からの出土。SD04は弥生時代後期末葉に埋没
61	高知県高知市	ミトロ遺跡	弥生時代中期前半～古墳時代前期初めの集落跡。遺跡の中心は弥生時代後期末葉～古墳時代前期初めで、小形竅穴住居跡、掘立柱建物跡などが検出された	溝跡 SD3S・SD3N（SD3S 廃絶後にSD3Nを掘削。SD3Sを埋めた後に行われた祭祀？）	弥生時代後期末葉～古墳時代前期初め（庄内期）？	庄内式土器を伴う
62	高知県土佐市	北ノ丸遺跡	古墳時代後期の多量の木製品が検出された	琴、鏡板など	古墳時代後期	

IX. おわりに

本報告は広島大学考古学研究室と舞鶴市が提携して推進した共同研究『日本海をめぐる古代交流と海浜祭祀に関する研究』（研究代表者：古瀬清秀）および、広島大学大学院文学研究科で推進している『世界遺産・巖島の総合的研究』の科学研究費補助金（基盤研究（B）、課題番号20320103（研究代表者：狩野充徳・西別府元日））による研究成果である。

まず、舞鶴市千歳下遺跡の2度におよぶ発掘調査中に現地遺跡に赴き、ご指導いただいた京都府埋蔵文化財関係者の方々に感謝したい。多くの助言によって遺跡の性格を的確に評価できたことをありがたく思う。

また、韓国全羅北道竹幕洞祭祀遺跡の現地見学に際しては、南ソウル大学 安秉杰氏に同行いただき、お世話になった。調査研究の過程では、千歳下遺跡出土土器と京都府宮津市にある丹後一ノ宮、元伊勢籠神社に隣接する難波野遺跡や、兵庫県神戸市白水遺跡・南あわじ市木戸原遺跡、岡山県岡山市高島祭祀遺跡群、愛媛県越智郡上島町魚島大木遺跡など、海浜に位置する祭祀遺跡出土土器・青銅器・鉄器・玉類および関連資料の比較検討を行なった。出土遺物の観察と比較検討を行うにあたっては、（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 肥後弘幸氏・小池寛氏・高野陽子氏・岩松保氏・中川和哉氏、神戸市教育委員会 千種浩氏、神戸市埋蔵文化財センター 西岡誠司氏・中村大介氏、南あわじ市教育委員会 貞松佳恵氏・的場薫氏、岡山理科大学 亀田修一氏・福田正継氏、上島町役場魚島支所 中西智恵氏に便宜を図っていただき、多くのご教示をいただいた。

とくに第七章、丹後地域の祭祀遺跡に関しては杉原和雄氏や三浦到氏のご教示を賜った。前方後円墳の築造規格に関しては奥村清一郎氏や岸本直文氏からご教示を受けた。さらに畿内政権との関係については、三浦到氏・岸本直文氏・塚口義信氏の諸論考に多くを負っていることも明記しておきたい。

実質的な基礎作業として、広島大学考古学研究室に在籍していた大学院生を非常勤職員として雇用し、石膏復原・着色・遺物実測・製図・浄書などを行っていただいた。大学院生といえども、多くは経験不足から物足りる実測図がすぐにはなしえるわけではない。石膏着色・実測・浄書についても、繰り返し修正せざるをえなかった。また、写真撮影や図版のレイアウトについても検討を繰り返して納得できる表現を目指していただいた。当然ながら稚拙なところも多いが、これらの基礎的な活動が今回の報告に結実したものと考えている。

最後に、本共同研究契約締結と学生雇用に関しては広島大学大学院文学研究科の教員支援室 矢野久美主査、事務職員 大麻ゆかり氏に煩雑な事務業務を代行していただいた。また、最終的な校正では、広島大学考古学研究室大学院生 齋藤友紀氏に協力いただいた。巻末に掲載した要約については、韓国語翻訳を広島大学大学院文学研究科に留学中の李容哲氏（日本近世史）に、英語翻訳を広島大学考古学研究室研究員の有松唯氏（西アジア考古学）に担当いただいた。皆様に記して感謝しつつ稿をとじたい。

註

- (1) 第1表において、出土地不明の鉄器・鉄片が多いのはA・C調査区の遺構面周囲に排水溝を掘削した際に出土したことによる。
- (2) 現地調査担当者の松本達也による現地での判断である。
- (3) 岡村氏は浮彫式獸帯鏡の面径の平均を、六像A式15.7cm、六像B式13.0cm、四像式11.2cmとする（岡村1992）。
- (4) 農具の変遷と画期については魚津知克氏の論考（魚津2003）を参考とした。
- (5) ここでいう大型・小型は、あくまで千歳下遺跡出土遺物における大小の違いを示している。
- (6) 古瀬清秀氏は、まず以下の寺沢薫氏の分類に基づき、大きさにより大型品・中型品・小型品に分類した後、着柄角度が90度前後のもの、110度前後のものをⅠ類、Ⅱ類として分類している（古瀬1991）。その寺沢分類は民具や文献資料に基づき、「全長10～12cm以下、刃幅も概して2cm以下」の小型鎌、「全長12～18cm（刃渡り10～16cm）前後、刃幅は概して2～3cm」の中型鎌、「全長20cm（刃渡り17cm以上）」で、「刃幅も概して3cmと広」い大型鎌に分類している（寺沢1991）。
- (7) 都出比呂志氏は折り返し部が、平面形でみて、刃に対して直角のものを「直角鎌」、鈍角のものを「鈍角鎌」とし、直角鎌の方が短く、鈍角鎌の方が長い傾向を示している（都出1967・1989）。また、寺沢薫氏も「付加属性」としてではあるが、角度による分類に言及しており、「85°以下の鋭角」のもの、「直角にちかいもの」、「95～110°前後の鈍角」のもの、「110°を超えるような極端な鈍角」のものに分けている（寺沢1991）。古瀬氏は前掲注（11）のように、90°前後と110°前後の2分類を行っている。
- (8) 古瀬氏は鈍角鎌は草を切るのには向かないことを指摘するとともに、岡山県金藏山古墳出土の副葬品の組み合わせから、鈍角鎌は工具に近い性格、鋭角鎌は農具の性格をもつと想定している（古瀬1991）。
- (9) 甲技法・乙技法は、基部の折り返し方向の違いに基づく分類である。刃部を下に向けて、折り返しが上に来るように置いた時に、折り返し部が右側に来るのが甲技法、折り返し部が左側にくるのが乙技法である（都出1967・1989、松井1993）。
- (10) 甲技法と乙技法は「製作者のクセの差にすぎない」が、直刃鎌には甲技法が多く、曲刃鎌には甲・乙両技法が存在すること、およびその変遷過程から、技術系統に差が存在する可能性が想定されている（都出1967・1989）。
- (11) 千歳下遺跡の調査終了後間もない2000年5月23日に、京都大学大学院文学研究科大学院生（現在、大手前大学史学研究所）魚津知克氏が実測した原図を一部改変してトレースした。現状は含浸処理がなされ、当初の形態からはかなり変形している。
- (12) 3分の1に切断していたとすると、くびれ部付近で完結する資料が存在するはずであるが、欠損品以外では、くびれ部のみの資料は存在しない。また、千歳下遺跡出土の資料の中には、10cm以上の鉄鋌はみられないことから、仮に中央付近で切断した2点が接合して完形となったとしても、最大で20cm程度である。片方の端部のみを切断していたとすると、さらに短くなり、全長はせいぜい13～15cm程度であろう。
- (13) 色調は『新版標準土色帖1997年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修）を参照した。
- (14) 海の奥宮である冠島（息津島・常世島）は鳥獣保護区であり、原則として上陸が禁止されているが、地元では航海安全と豊漁を祈願する祭礼が今も行われている。
- (15) 和田萃氏は畿内王権や北部・中部九州の氏族が沖ノ島の嶋神祭祀当初の祭祀主体と想定した。また、神島祭祀は畿内王権の東国進出路における航海祈願を契機とするとした（和田1995）。
- (16) 丸山竜平氏は、「鋤持（佐比持）」など鉄に関連する神名は朝鮮半島への航海の安全や航海への指針を示す意味合いを含むものとした（丸山1983）。
- (17) 共伴する土器のなかでは高杯の型式がやや新しくみえるといった印象を受ける。

- (18) 安田編2000文献では、出土した土師器がTK208型式の須恵器と共伴する土師器に類似することから、TK208型式前後とする。
- (19) 接合形態として、高坏Ⅱ類は脚部を坏底部外面にある程度押し込むもので、筒状の脚上端部の内部にわずかに圧迫された坏部粘土がわずかな押し出し部分となるものがあり、I b類との弁別が困難な場合がある。高坏Ⅲ類は脚上端部を坏底部外面に接着させ、接着部外面を輪状の粘土を貼り付けて補強するのみのものである。脚上端部は円筒状とならず、閉じてしまっているものも含まれる。これらは5世紀後半以降の小形のものに多い型式である。高坏Ⅳ類は脚裾部を別作りとするものである。円板状のもの他に高坏筒部下端の中空部にあわせて空隙がある輪状の粘土を貼り足す場合も多い。なお、第25図では、難波野条里遺跡の円板状のものを模式化したのが、実際には上記のものも各類型に含まれる。
- (20) 岡山理科大学福田正継氏からご教示をいただいた。記して感謝したい。なお、高島の西側海浜部ではTK208前後の須恵器も採集されており、高島における海浜祭祀は5世紀中葉ごろまで遡る可能性もある。
- (21) さらに岸本直文氏は宮内庁の測量調査に基づき、「五社神古墳型」を設定した。京都府与謝野町蛭子山古墳、大阪府岸和田市摩湯山古墳、岡山県岡山市金蔵山古墳などは、佐紀盾列古墳群西群でも最も新しくなる五社神古墳の墳丘規格を基準とすると持論を修正した（考古学研究会岡山例会、平成23年1月8日）。いずれの墳丘をモデルとしたとしても、佐紀盾列古墳群西群の前方後円墳を基準とした墳丘規格が丹後半島や瀬戸内地域の海上交流の要衝地に配置されることにはかわりはない（第34図）。
- (22) 和同6（713）年、丹波国から加佐・与謝・丹波（のちの中郡）・竹野・熊野の5郡が割かれて、丹後国が成立する。分国以前、丹波国の中心は現在の京都府京丹后市峰山町である。
- (23) 兵庫県神戸市垂水区の五色塚古墳は三段築成に造成されているが、その上・中位の葺石は地質学的には淡路島のものである可能性が指摘されている（西谷 1974）。
- (24) 鳥取県における「因幡型円筒埴輪」は、丹後半島三大古墳から出土する丹後型円筒埴輪との関係が指摘されている。両者の先後関係が明確ではないものの、4世紀後半期、彼此の首長間交流を推察することができる考古学的物証といえる（東方 2010）。
- (25) 広義には井戸や池の近辺での行為も含まれるが、今回は流水をとまなう遺構・遺物を主たる対象とした。
- (26) 大和川は1702年に流路が人工改変される以前、柏原市の石川との合流点から大阪平野東部を北流し、現在の京橋駅付近で淀川に注いでいた。
- (27) 語句の抽出は、黒板勝美・国史大系編修会編 1952文献をもとにした。
- (28) 語句の抽出は、黒板勝美・国史大系編修会編 1934a 文献をもとにした。
- (29) 語句の抽出は、黒板勝美・国史大系編修会編 1934b 文献をもとにした。
- (30) 降水量データは気象庁Web サイト内の「過去の気象データ検索」(URL : <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> (最終閲覧日2011年1月4日)) から入手した。
- (31) 1931年以降の雷日数については気象庁作成の『気象庁年報』および気象庁Web サイトに加え、京都については、京都地方気象台編 1981文献に掲載されている1881年以降のものも参照した。
- (32) 本州の日本海側では冬季にも雷が多いが、日本海側における冬季の雷日数は気象庁のデータから長期的に増加傾向にある（吉田 2002）。この点から、観測時代より前の日本海側における雷日数について類推することには大きな不確実性をともなう。

引用・参考文献

- 相田則美・谷若倫郎 1993 『出作遺跡』Ⅰ、松前町教育委員会。
- 赤星直忠 1979 「了源寺古墳」『神奈川県史』資料編20、考古資料、神奈川県弘済会、215頁。
- 秋山 泰 1976 「天河別神社古墳群」『鳴門市史』上巻、鳴門市、212～218頁。
- 東 潮 1999a 「鑄造斧形品をめぐる諸問題」『古代東アジアの鉄と倭』溪水社、283～322頁。
- 東 潮 1999b 「鉄鋌の基礎的研究」『東アジアの鉄と倭』溪水社、147～283頁。
- 熱海市史編纂委員会編 1967 『熱海市史』上巻、熱海市、97～103頁。
- 安部勝行・真鍋昭文編 1998 『火内遺跡・臥間遺跡』来島大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第3集、(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター。
- 石尾政信・引原茂治 2008 「難波野遺跡・難波野条里制遺跡、大垣遺跡・一の宮遺跡」『京都府遺跡調査報告集』第128冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、53～92頁。
- 石崎善久・黒坪一樹・福島孝行 2000 「浅後谷南遺跡」『京都府遺跡調査概報』第93冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、3～186頁。
- 和泉市久保惣記念美術館 1984 『和泉市久保惣記念美術館蔵鏡拓影』和泉市久保惣記念美術館。
- 市川 創・島崎久恵 2005 「畿内における集落出土の滑石製品」『古墳時代の滑石製品』第54回埋蔵文化財集会、195～217頁。
- 稲原昭嘉 1996 『藤江別所遺跡』明石市教育委員会。
- 井上 太 1999 「群馬県富岡市曾木久保遺跡の祭祀遺構と儀鏡」『月刊考古学ジャーナル』No. 446、ニュー・サイエンス社、6～9頁。
- 今岡一三・平石 充・松尾充晶 2006 『青木遺跡Ⅱ』国道431号道路改築事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター。
- 今田昇一・肥後弘幸 1998 「三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群」『京都府大宮町文化財調査報告書』第14集、大宮町教育委員会。
- 上田宏範 1969 『前方後円墳』学生社。
- 魚津知克 2003 「曲刃鎌とU字形鋤鋤先―「農具の画期」の再検討―」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集、帝京大学山梨文化財研究所、29～48頁。
- 魚津知克 2005 「鉄製農工具の副葬と農工具形石製祭器の副葬」『古代』第118号、79～103頁。
- 内田保之 2010 「まとめ」『金貝遺跡』ほ場整備関係(経営体育成基盤整備)遺跡発掘調査報告書37-2、滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会、100～116頁。
- 梅原末治 1919a 「銚子山古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第1冊、京都府、119～121頁。
- 梅原末治 1919b 「神明山古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第1冊、京都府、121～124頁。
- 梅原末治 1923a 「大宮壳神社」『京都府史蹟勝地調査會報告』第5冊、京都府、81～87頁。
- 梅原末治 1923b 「丹後ニ於ケルニ・三ノ史前遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告』第5冊、京都府、87～93頁。
- 梅原末治 1926 「黒部銚子山古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第7冊、京都府、131～133頁。
- 梅原末治 1933 『讃岐高松石清尾山古墳の研究』東京帝国大学文学部。
- 梅原末治・藤田亮策編 1959 『朝鮮古文化綜鑑』第三巻、養徳社。
- 近江俊秀 2008 「東一坊坊間路と三条大路の交差点の形状について」『平城京左京三条一坊五・十二・十三坪発掘調査報告書』奈良県文化財調査報告書第126集、奈良県立橿原考古学研究所、44～57頁。
- 大賀克彦 2002 「弥生・古墳時代の玉」『考古資料大観』9、弥生・古墳時代、319頁。
- 大賀克彦 2009 「山陰糸玉類の基礎的研究」『出雲玉作りの特質に関する研究―古代出雲における玉作りの研究Ⅲ―』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、9～62頁。

- 大西 顕編 2008 『七尾市小島西遺跡』(財)石川県埋蔵文化財センター。
- 大平 茂 2008 「播磨国の祭祀遺跡－風土記にみる神まつりの背景－」『祭祀考古学の研究』雄山閣、226～238頁。
- 岡崎 敬ほか 1979 『宗像沖ノ島』宗像神社復興期成会。
- 岡林峰夫・石崎善久 2004 「赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書」『京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書』第24集、峰山町教育委員会。
- 岡村秀典 1992 「浮彫式獣帯鏡と古墳出現期の社会」『出雲における古墳の出現期を探る－松本古墳群シンポジウムの記録－』出雲考古学研究会、98～115頁。
- 奥井哲秀 1982 「茨木市安威0号墳、1号墳の調査」『大阪文化誌』第1号、(財)大阪文化財センター、29～38頁。
- 奥村清一郎 1996 「丹後半島の大型前方後円墳－その築造原理を探る－」『京都府埋蔵文化財論集』第2集、創立十周年記念誌、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、55～62頁。
- 奥村清一郎 2001 「丹後二大古墳の比較研究」『京都考古』第90号、京都考古刊行会、1～8頁。
- 奥村清一郎 2008 「網野銚子山古墳の前方部」『京都考古』第98号、京都考古刊行会、1～8頁。
- 奥村清一郎編 1988 「寺岡遺跡」『京都府野田川町文化財調査報告』第2集、野田川町教育委員会。
- 奥村清一郎・林日佐子 1986 「奈具岡遺跡第3次発掘調査報告書」『弥栄町文化財調査報告』第4集、弥栄町教育委員会。
- 小田富士雄 1999 「韓国竹幕洞祭祀遺跡と古代祭祀－とくに倭系祭祀遺物について－」『網干善教先生古稀記念考古学論集』下巻、網干善教先生古稀記念会、1405～1434頁。
- 小高幸男 1989 「古墳出土釧の基礎的研究－金銅製釧について－」『君津都市文化財センター研究紀要』Ⅲ、(財)君津都市文化財センター、19～90頁。
- 小沢洋編 1989 『小浜遺跡群Ⅱ マミヤク遺跡』木更津市小浜土地区画整理組合・(財)君津都市文化財センター。
- 小野真一 1982 『祭祀遺跡』考古学ライブラリー10、ニュー・サイエンス社。
- 鏡山 猛 1958 『沖ノ島』宗像大社復興会期成会。
- 賀川光夫・小田富士雄 1967 「野間古墳群調査報告」『大分県文化財調査報告』第13輯、大分県教育委員会、2～21頁。
- 加藤晴彦ほか 2005 「日吉ヶ丘遺跡」『加悦町文化財調査報告』第33集、加悦町教育委員会。
- 金井亀喜 1977 「真亀C地点遺跡」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会。
- 金子裕之 2004 「三重県鳥羽八代神社の神宝」『奈良文化財研究所紀要』奈良文化財研究所、66～67頁。
- 金子裕之編 1998 『日本の信仰遺跡』雄山閣。
- 神谷正義・河田健司・西田和浩編 2006 『南坂8号墳・一国山城跡・一国山古墳群』岡山市教育委員会文化財課・岡山市埋蔵文化財センター。
- 亀井正道 1966 『建鉾山』吉川弘文館。
- 亀井正道 1967 「祭祀遺跡－山と海」『日本の考古学』第Ⅶ巻歴史時代(下)、河出書房新社、342～361頁。
- 亀井正道 1988 「海と川の祭り」『古代を考える 沖ノ島と古代祭祀』吉川弘文館、130～163頁。
- 鎌木義昌 1968 「備前高島遺跡について－第1次調査概要－」『サスカイト』創刊号、岡山理科大学考古学部、2～8頁。
- 加悦町市史編纂委員会 2007 『加悦町史 資料編』第一巻、与謝野町。
- 加悦町・加悦町教育委員会 1997 『徹底検証 日本海三大古墳はなぜ丹後につくられたのかその謎に迫る』加悦町・加悦町教育委員会。

- 川崎雅史 2009 「考察『野田地区遺跡』(財)和歌山県文化財センター、45～57頁。
- 川瀬貴子 2007 「植松遺跡の性格」『植松遺跡』(財)大阪府文化財センター調査報告書第164集、(財)大阪府文化財センター、133～136頁。
- 河野一隆 1997 「平遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第79冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 岸岡貴英・細川康晴ほか 1993 「桑飼上遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第19冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 岸本直文 1992 「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』第39巻第2号、考古学研究会、45～63頁。
- 岸本直文 2000 「畿内大型前方後円墳の築造規格の再検討」『人文研究』大阪市立大学文学部紀要第52巻第2分冊、9～47頁。
- 岸本直文ほか 2005 『前方後円墳の築造規格からみた古墳時代の政治的変動の研究』平成13年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書。
- 岸本直文編 2010 『玉手山1号墳の研究』大阪市立大学考古学研究報告第4冊、大阪市立大学日本史研究室。
- 京丹後市史編さん委員会編 2010 「京丹後市の考古資料」『京丹後市史資料編』京丹後市。
- 京都地方気象台編 1981 『京都気象100年』(財)日本気象協会、90～91頁。
- 日下部正雄 1977 「19世紀末までの近畿地方の気象災害」『研究時報』29、1～51頁。
- 日下部正雄 1978 「19世紀末までの中国地方の気象災害」『研究時報』30、23～56頁。
- 久世康博 1994 「祭祀遺物」(財)古代学協会編『平安京提要』角川書店、821～833頁。
- 宮内庁書陵部陵墓調査室 2005 「平成2年度 陵墓関係調査概要」『書陵部紀要』第43号、88～122頁。
- 栗原誠治・田川 憲・湯浅利彦 2005 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』本文編第2分冊、徳島県教育委員会・(財)徳島県埋蔵文化財センター。
- 黒板勝美・国史大系編修会編 1934a 『続日本紀』新訂増補国史大系第2巻、国史大系刊行会・吉川弘文館・日用書房。
- 黒板勝美・国史大系編修会編 1934b 『日本後紀・続日本後紀・日本文徳天皇実録』新訂増補国史大系第3巻、国史大系刊行会・吉川弘文館・日用書房。
- 黒板勝美・国史大系編修会編 1952 『日本書紀』新訂増補国史大系第1巻下、吉川弘文館。
- 黒坪一樹・石崎善久・福島孝行 2000 「国営農地(丹後東部地区)関係遺跡平成11年度発掘調査概要(1) 浅後谷南遺跡」『京都府遺跡調査概報』第93冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 国立全州博物館 1994 『扶安竹幕洞遺蹟』国立全州博物館學術調査報告第1輯。
- 佐田 茂 1999 「福岡県大島村沖ノ島遺跡の祭祀遺構と儀鏡」『月刊考古学ジャーナル』No. 446、ニュー・サイエンス社、29～32頁。
- 佐藤晃一 1986 「中上司遺跡2-調査の概要-」『加悦町文化財調査報告』第5集、加悦町教育委員会。
- 潮見 浩編 1980 『中小田古墳群-広島市高陽町所在-』広島市教育委員会、広島大学文学部考古学研究室。
- 定松佳重・谷口 梢 2006 「南あわじ市出土の韓式系土器について」『韓式土器研究』X、3～9頁。
- 島崎久恵 2002 『亀川遺跡一般国道26号線(第二阪和国道)建設に伴う発掘調査報告書』(財)大阪文化財調査研究センター調査報告書第75集、(財)大阪府文化財調査研究センター。
- 白石太郎編 1985 『祭祀関係遺物出土地名表(共同研究「古代の祭祀と信仰」附編)』(『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集)、国立歴史民俗博物館。
- 白石太郎・設楽博己編 1994 『弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成(共同研究「日本出土鏡データ集成」2)』(『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集)、国立歴史民俗博物館。
- 白石太郎・設楽博己編 2002 「弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成補遺1」『国立歴史民俗博物館研究

- 報告』第97集、国立歴史民俗博物館。
- 白数真也 2000 「大風呂南墳墓群」『岩滝町文化財調査報告書』第15集、岩滝町教育委員会。
- 杉原和雄 1970 「馬場の内古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会。
- 杉原和雄ほか 1979 「裏陰遺跡発掘調査概報」『大宮町文化財調査報告』第1集、大宮町教育委員会。
- 杉原和雄 1994 「丹後国一宮・籠神社所蔵の遺物について」『考古学と文化史』安井良三博士還暦記念論集、15～25頁。
- 楢山林繼 2004 「神道考古学から見た古代の大社」大社町教育委員会編『出雲大社境内遺跡』大社町教育委員会、483～493頁。
- 鈴木一有 2009 「鳥居松遺跡における伊場大溝調査の意義」『鳥居松遺跡5次 伊場大溝編』（財）浜松市文化振興財団、173～192頁。
- 鈴木忠司・植山 茂編 1984 「小池古墳群」『大宮町文化財調査報告』第3集、大宮町教育委員会・（財）古代学協会・平安博物館。
- 鈴木敏則 2008 「古墳時代」『伊場遺跡総括編』伊場遺跡発掘調査報告書第12冊、浜松市教育委員会、90～95頁。
- 鈴木敏則 2009 「祭祀遺物」『舞阪町天白遺跡』（財）浜松市文化振興財団、93～102頁。
- 鈴木裕明編 2010 『四条遺跡』Ⅱ、奈良県立橿原考古学研究所調査報告第106集、奈良県立橿原考古学研究所。
- 関野 貞・谷井濟一・栗山俊一・小場恒吉・小川敬吉・野守 健 1925 『楽浪郡時代ノ遺跡』図版下冊、朝鮮総督府。
- 高木勇夫 2007 「地理から読み取る「雷」」妹尾堅一郎編『雷文化論』慶應義塾大学出版会、207～223頁。
- 高橋 周 2010 「矢野遺跡出土の文字資料について」『矢野遺跡 自然科学分析・考察編（第4分冊）』出雲市の文化財報告10、出雲市教育委員会、163～166頁。
- 田代 弘・筒井崇史ほか 2001 「浦入遺跡群〈本文編〉」『京都府遺跡調査報告書』第29冊、（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 伊達宗泰・小島俊次・森 浩一 1963 『大和天神山古墳』橿原考古学研究所。
- 伊達宗泰 1966 「小泉 狐塚・大塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第23冊、奈良県教育委員会、1～20頁。
- 田中咲子 2005 「遺物のまとめ」『芦刈遺跡・大中の湖南遺跡』ほ場整備関係（経営体育成基盤整備）遺跡発掘調査報告書32-2、滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会、138～139頁。
- 田中光浩・林 和広 1982 「七尾遺跡発掘調査報告書」『京都府峰山町文化財調査報告』第8集、峰山町教育委員会。
- 谷岡能史 2010 「近畿地方の文献史料から見た7～10世紀における暖候期の気候」『地理学評論』83、44～59頁。
- 千賀 久編 1998 『オオヤマトの古墳と王権』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館。
- 中央气象台・海洋气象台 1939 「旱魃」『日本気象史料』中央气象台、520～557頁。
- 塚口義信 1985 「四世紀後半における王権の所在」『末永先生米壽記念献呈論文集』坤、末永雅雄先生米壽記念会、1167～1195頁。
- 塚口義信 2010 「4・5世紀における丹波の政治集団とヤマト政権」『古代学研究』186、古代学研究会、25～32頁。
- 次山 淳 2000 「土器からみた諸変革」『国家形成過程の諸変革』考古学研究会、55～73頁。
- 辻本和美・土橋 誠編 1987 「石本遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第8冊、（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 堤圭三郎 1970 「岩滝町法王寺古墳発掘調査」『岩滝町文化財調査報告書』第1集、岩滝町教育委員会。

- 都出比呂志 1967 「農工具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』第13号第3号、36～51頁。
- 都出比呂志 1988 「古墳時代首長墓系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』第22巻、1～16頁。
- 都出比呂志 1989 『日本農耕社会の成立過程』岩波書店。
- 寺沢 薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊、奈良県立橿原考古学研究所、327～397頁。
- 寺沢 薫 1991 「水稻農耕、収穫と貯蔵」『古墳時代の研究』4、雄山閣、50～69頁。
- 寺沢 薫 2000 『王権誕生』日本の歴史第02巻、講談社。
- 富岡市市史編さん委員会 1987 『富岡市史』自然編 原始・古代・中世編、富岡市、215～257頁。
- 長井数秋 1975 「愛媛県魚島の遺跡・遺物について」『ソーシャル・リサーチ』第4号、ソーシャル・リサーチ研究会、24～35頁。
- 中野 徹編 1985 『和泉市久保惣記念美術館蔵鏡図録』和泉市久保惣記念美術館。
- 中村孝行 1988 「青野遺跡第12次発掘調査概報」『京都府綾部市文化財調査報告』第15集、綾部市教育委員会。
- 鍋田 勇 1989 「近畿自動車道敦賀線関係遺跡(1) 私市円山古墳」『京都府埋蔵文化財調査概報』第36冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 鍋田 勇・戸原和人 1988 「古殿遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第9冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 檜崎彰一 1982 「日本古代の陶硯—とくに分類について—」『考古学論考』平凡社、485～520頁。
- 西田直二郎・梅原末治 1920 「第六 川村岡ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第二冊、京都府、53～59頁。
- 西田正夫編 1978 『宗像沖ノ島 本文』宗像大社復興期成会。
- 西谷真治 1974 「山間の古墳と海辺の古墳」『兵庫県史』第1巻(兵庫県史編集専門委員会編)、兵庫県、298～311頁。
- 野島 永 2007 「古墳時代祭祀遺跡における鉄の消費形態」『たたら研究』第47号、1～20頁。
- 野島 永 2009 「祭祀遺跡において消費される鉄—鉄の価値をめぐって—」『初期国家形成過程の鉄器文化』雄山閣、160～178頁。
- 野島 永・加藤 徹・脇山佳奈・荒平 悠 2009 「海の祭祀遺跡—舞鶴市千歳下遺跡—(1)」『広島大学考古学研究室紀要』第1号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、121～144頁。
- 野島 永・松波静香・松本達也 2010 「海の祭祀遺跡—舞鶴市千歳下遺跡—(2)」『広島大学考古学研究室紀要』第2号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、75～93頁。
- 野島 永・脇山佳奈・谷岡能史 2011 「海の祭祀遺跡—舞鶴市千歳下遺跡—(3)」『広島大学考古学研究室紀要』第3号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、69～97頁。
- 花田勝広 1999 「沖ノ島祭祀と在地首長の動向」『古代学研究』第148号、1～13頁。
- 原 嘉藤・小松 虔 1972 「長野県松本市中山第三六号古墳(仁能田山古墳)調査報告」『信濃』第24巻第2号、信濃史学会、61～76頁。
- 原田大六編 1961 『続沖ノ島宗像神社沖津宮祭祀遺跡』宗像神社復興期成会。
- 羽淵賢良 2005 「千原遺跡第3次」『岩滝町文化財文化財調査報告』第11集、岩滝町教育委員会。
- 東方仁史 2010 「山陰東部における埴輪の導入と展開」『円筒埴輪の導入とその画期』中国四国前方後円墳研究会、中国四国前方後円墳研究会第13回研究会、71～79頁。
- 樋口清之 1928a 「奈良県三輪町山ノ神遺跡研究」『考古学雑誌』第18巻第10号、日本考古学会、647～657頁。
- 樋口清之 1928b 「奈良県三輪町山ノ神遺跡研究」『考古学雑誌』第18巻第12号、日本考古学会、771～787頁。
- 肥後弘幸・三好博喜ほか 1989 「志高遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第12冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター。

- 肥後弘幸 1990 「国営農地開発事業関係遺跡平成元年度発掘調査概要 [2] アバタ遺跡」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会。
- 肥後弘幸 1991 「国営農地開発事業関係遺跡平成2年度発掘調査概要 [1] 幾坂遺跡」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会。
- 櫃本誠一 1998 「銅鏡の変転ー山崎町塚の本経塚出土の四獣鏡ー」『兵庫歴博ニュース』No. 64、兵庫県立歴史博物館、4～5頁。
- 櫃本誠一 2002 『兵庫県の出土古鏡』学生社、205～207頁。
- 平出紀男・木村有作・野澤則幸・伊藤正人・千田嘉博・小島一夫・山田鉦一 1990 『吉根4』名古屋市教育委員会。
- 広瀬和雄 2001 『各地の前方後円墳の消長に基づく古墳時代政治構造の研究』平成10年度～平成12年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書。
- 深田 浩 2006 「瑪瑙製玉類の展開」『季刊考古学』第94号、雄山閣。
- 福井県立若狭歴史民俗資料館 1999 『特別展「若狭の古代遺跡ー発掘の成果と出土品ー」』展示図録、福井県立若狭歴史民俗資料館。
- 福本 寛 2005 「九州における滑石製模造品の使用状況」『古墳時代の滑石製品』第54回埋蔵文化財集會、137～156頁。
- 藤井雄三・山元敏裕 1995 『居石遺跡』高松市教育委員会。
- 藤田亮策・斉藤忠編 1957 『沖ノ島宗像神社沖津宮祭祀遺跡』宗像神社復興期成會。
- 古瀬清秀 1982 「広島県出土の中国鏡について（上）」『広島大学文学部紀要』第42巻、広島大学文学部、141～163頁。
- 古瀬清秀 1991 「副葬品の種類と編年、農工具」『古墳時代の研究』8、雄山閣、71～91頁。
- 古瀬清秀・奥村晃史・大久保徹也・谷若倫郎・西別府元日・乗岡 実・乗安和二三 2002 「瀬戸内海における古代海上交通と祭祀」『瀬戸内海に関する研究』（財）福武学術文化振興財団、128～170頁。
- 堀田美桜男・川合治栄 1950 「加茂郡朝日村吉佐美小字溝の上（洗田）原史時代祭祀遺蹟」『静岡県史蹟名勝天然記念物調査報告』第13集、静岡県、1～8頁、図版1～23。
- 舞鶴市教育委員会 1990 『舞鶴市遺跡地図』舞鶴市教育委員会
- 前原市教育委員会 1993 『荻浦の文化財 前原市荻浦地区土地区画整備事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査の速報2』前原市教育委員会。
- 増田孝彦・田代 弘ほか 1993 「国営農地（丹後東部・西部地区）関係遺跡」『京都府遺跡調査概報』第55冊、（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 松井和幸 1993 「鉄鎌について」『考古論集鋌潮見浩先生退官記念論文集鋌』潮見浩先生退官記念事業會、563～580頁。
- 松本達也 2002 「女布遺跡発掘調査概要報告書」『舞鶴市文化財調査報告』第37集、舞鶴市教育委員会。
- 松本敏三 1981 「備讃瀬戸で発見の祭祀遺物」『香川の歴史』第1号、香川県史編さん室、12～26頁。
- 松本敏三・岩橋 孝編 1983 『讃岐青銅器図録』瀬戸内海歴史民俗資料館。
- 松本正信・加藤史郎・岸本雅敏 1970 『天坊山古墳』加古川市教育委員会。
- 松本豊胤 1983 「古枝古墳」『香川の前期古墳』日本考古学協會昭和58年度大会香川県実行委員会、30～31頁。
- 丸山竜平 1983 「近江製鉄史試論ー記紀からみた和邇・鉄・玉権ー」『日本製鉄史論集』たたら研究会創立25周年記念論集、たたら研究会、237-364頁。
- 三浦 到 1977 「林遺跡発掘調査報告書」『網野町文化財調査報告』第1集、京都府網野町教育委員会。
- 三浦 到 1982 「丹後の古墳と古代の港」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズI、241～246頁。
- 三浦 到 1988 「墳丘形態から見た巨大古墳に関する一考察」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズ

IV、113～123頁。

- 三浦 到ほか 1993 「離山古墳・離湖古墳発掘調査概要」『京都府網野町文化財調査報告』第7集、網野町教育委員会。
- 美浦雄二 2009 「古代における流路の変遷について」『中原遺跡Ⅲ 5区の調査』佐賀県文化財調査報告書第179集、佐賀県教育委員会、263～267頁。
- 水口昌也・門田良三 1978 『名張市遺跡調査紀要』名張市教育委員会・名張市遺跡調査会。
- 溝淵和幸・松本敏三ほか 1979 『瀬戸内の海上信仰調査報告（東部地域）』瀬戸内海歴史民俗資料館、16～19頁。
- 南あわじ市教育委員会 2005 『木戸原遺跡現地説明会資料』。
- 南あわじ市教育委員会 2009 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報』Ⅱ、南あわじ市文化財調査報告書第2集。
- 南あわじ市教育委員会 2010 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報』Ⅲ、南あわじ市文化財調査報告書第3集。
- 三宅和朗 1995 「日本古代の「名山大川」祭祀」『古代国家の神祇・祭祀』吉川弘文館、14～61頁。
- 三吉秀充 2010 「矢野遺跡C区SD3042出土の初期須恵器について」『矢野遺跡 自然科学分析・考察編（第4分冊）』出雲市の文化財報告10、出雲市教育委員会、159～162頁。
- 村上和馬編 1997 『魚島村誌』魚島村。
- 村上恭通 1988 「東アジアの二種の鑄造鉄斧をめぐって」『たたら研究』第29号、1～20頁。
- 森 清治編 2011 『天河別神社古墳群発掘調査報告書』鳴門市教育委員会文化財調査報告書7、鳴門市教育委員会。
- 森 浩一・三浦 到・高野陽子 2010 「京都の歴史を足元からさぐる－丹後・丹波・乙訓の巻－」小学館
- 日下部正雄 1969 「19世紀末までの四国地方の気象災害」『研究時報』20、502～526頁。
- 森田 勉 1995 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『大宰府陶磁器研究－森田勉氏遺稿集－』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会、71～100頁。
- 森本 徹編 2005 『古墳時代の滑石製品』第54回埋蔵文化財研究集会、埋蔵文化財研究会・(財)大阪市文化財協会。
- 門田誠一 1999 「古墳時代の鉄製模型農工具と渡来系集団」『史学論集－佛敎大学文学部史学科創設30周年論集－』佛敎大学文学部史学科、15～35頁。
- 八木武弘 1989 「国分前方後円墳出土の遺物について」『愛媛考古学』11、愛媛考古学協会、34～42頁。
- 安田滋編 2000 『白水遺跡第3・6・7次高津橋大塚第1・2次発掘調査報告書－神戸市白水特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書その2－』神戸市教育委員会。
- 山本 清 1963 『松本古墳調査報告』島根県教育委員会。
- 山本武夫 1983 「A.D.1～1600年の日本（西南日本京都）の気候変化」『気象研究ノート』147、627～639頁。
- 吉岡博之・松本達也・水野 聡・和泉大樹ほか 2001 『浦入遺跡群発掘調査報告書 遺構編』第33集、舞鶴市教育委員会。
- 吉岡博之・松本達也ほか 2002 「浦入遺跡群発掘調査報告書 遺物図版編」『舞鶴市文化財調査報告』第36集、舞鶴市教育委員会。
- 吉田 晶 1998 「東アジアの国際関係と倭王権」『倭王権の時代』新日本出版社、18～60頁。
- 吉田 弘 2002 「日本列島における雷日数の地理的分布とその長期的傾向」『天気』49、279～285頁。
- 吉田 誠 1997 「史跡 産土山古墳発掘調査概報Ⅱ」『京都府丹後町文化財調査概報』第13集、丹後町教育委員会。
- 李 日訓・胡 常春 2000 「山東長清小范庄墓地発掘簡報」『山東省高速公路考古報告集（1997）』山東省文物考古研究所、287～316頁。
- 梁 上椿（訳：田中 琢・岡村秀典） 1989 『巖窟藏鏡』同朋舎。

- 和田 萃 1995 「東国への海つ路」『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』下、塙書房、317～355頁。
- 和田 萃 1999 「古代の祭祀空間」國學院大學日本文化研究所編『祭祀空間・儀礼空間』雄山閣、139～183頁。
- 渡辺 誠ほか、1975 『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会。

第3表関連報告書（第3表の番号と対応／簡略表記）

- 1) 新田町教育委員会・群馬県企業局 2000『新田東部遺跡群Ⅱ』
- 2) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004『舞台遺跡(2)(古墳時代篇)』
- 3) 群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992『神保下條遺跡』
- 4) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994『白倉下原・天弘向原遺跡Ⅲ』
- 5) 大宮市遺跡調査会 1996『三崎台遺跡－第3次調査－』
- 6) 埋蔵文化財研究会第35回研究集会実行委員会 1994「八幡耕地遺跡(4次調査)」『第35回埋蔵文化財研究集会 倭人と鏡』
- 7) (財)君津郡市文化財センター 1993『二又堀遺跡・大竹古墳群』
- 8) 山武考古学研究所 1985『戸張一番割遺跡』
- 9) (財)君津郡市文化財センター 1998『根崎遺跡・寺ノ上遺跡』
- 10)・11)・16)～20) 国立歴史民俗博物館 2002「千葉県」『国立歴史民俗博物館研究報告』第97集
- 12) (財)千葉県教育振興財団文化財センター 2007『千原台ニュータウンⅦ－市原市草刈遺跡(K区)』
- 13) (財)千葉県文化財センター 2004『千原台ニュータウンⅪ』
- 14)・15) (財)千葉県文化財センター 1994『草刈六之台遺跡』
- 21) 中央高速道八王子地区遺跡調査団・八王子市教育委員会 1973『宇津木遺跡とその周辺－方形周溝墓初発見の遺跡－』
- 22) 黒尾和久 1989「小形倣製鏡を出土した古墳時代の集落遺跡－八王子市館町515遺跡の調査から－」『東京の遺跡』24号、館町515遺跡調査団 2001『八王子市 No. 515遺跡』
- 23) 国立歴史民俗博物館 1994「神奈川県」『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集
- 24) 神奈川県埋蔵文化財センター 1990「池子遺跡群 No. 2地点」『神奈川県埋蔵文化財センター年報 平成元年度』
- 25)・26) 新穂村教育委員会 1998『新穂村蔵王玉作遺跡群村内遺跡発掘調査の概要』
- 27) 富山県 1972「古墳時代」『富山県史 考古編』
- 28) 石川県教育委員会 1976『塚崎遺跡』
- 29) (財)長野県埋蔵文化財センター 1997『篠ノ井遺跡群』
- 30) 長野市教育委員会 1986『塩崎遺跡群Ⅳ』
- 31) 焼津市史編纂委員会 2005『焼津市史』資料編－考古
- 32) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003『木津城山遺跡』
- 33) 福知山市教育委員会 2001『福知山市文化財調査報告書』第40集
- 34) 国立歴史民俗博物館 1994「滋賀県」『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集
- 35) 滋賀県教育委員会 1999『木曾遺跡Ⅲ』
- 36) 和歌山県教育委員会 1971『和歌山市北田井遺跡発掘調査概報』Ⅱ
- 37) 有田川町遺跡調査会 2008『旧吉備中学校校庭遺跡発掘調査報告書』、有田川町遺跡調査会 2009『旧吉備中学校校庭遺跡第4次発掘調査』
- 38) 豊中市教育委員会 1986『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要1985年度』
- 39)・40) 八尾市文化財調査研究会 1992「久宝寺遺跡第8次調査(KH91-9)」『平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』、(財)八尾市文化財調査研究会 2006『久宝寺遺跡－竜華操車場跡地における調査成果－』
- 41) 櫃本誠一 2002『兵庫県出土の古鏡』学生社
- 42) 神戸市教育委員会文化財課 2000「長田神社境内遺跡第10次調査」『平成9年度神戸市文化財年報』
- 43) 岡山県古代吉備文化財センター 1996『斎富遺跡』
- 44) 総社市教育委員会 1994『総社市埋蔵文化財調査年報』4
- 45) 岡山県教育委員会 1977『川入・上東』
- 46) 岡山県教育委員会 1995『足守川加茂A遺跡 足守川加茂B遺跡 足守川矢部南向遺跡』
- 47) 国立歴史民俗博物館1994「岡山県」『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集
- 48) 岡山県教育委員会 1985『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2』
- 49) 岡山県教育委員会 1996『津守遺跡3』
- 50) 北房町教育委員会 1986『谷尻遺跡赤茂地区』
- 51) 岡山県教育委員会 2002『下湯原B遺跡・藪途山城跡』
- 52) 広島県教育委員会 1977『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』
- 53) 広島県立歴史民俗資料館 1993『ひろしまの青銅器』
- 54) 香川県教育委員会 1986『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(VII) 下川津遺 岡宮遺跡 聖通寺城跡』
- 55) 善通寺市教育委員会 1985『彼ノ宗遺跡』
- 56) 鳥取県教育文化財団 1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
- 57) 鳥取県教育文化財団 1982『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
- 58) 鳥取県教育文化財団 1999『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第6号遺跡』
- 59) 鳥取県

教育文化財団 1993『南山大山遺跡・南谷ヒジリ遺跡・南谷22・24～28号墳』 60) 鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター 1996『宮内第1遺跡・宮内第4遺跡・宮内第5遺跡・宮内2・63～65号墳』 61) (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1987『長野A遺跡3 [Ⅲ・Ⅶ・Ⅷ区(1号溝)の調査]』 62) 苅田町教育委員会 1998『稲光遺跡Ⅰ・Ⅱ地区発掘調査概報』 63) 嘉穂町教育委員会 1986『嘉穂地区遺跡群Ⅲ』 64) 福岡市教育委員会 1967『福岡市弥永原遺跡調査概要』 65)・71) 国立歴史民俗博物館 1997「福岡県」『国立歴史民俗博物館研究報告』第97集 66) 筑紫野市教育委員会 1986『御笠地区遺跡』 67) 福岡県教育委員会 1999『貝元遺跡Ⅱ』 68) 筑紫野市教育委員会 1989『日焼遺跡』 69) 太宰府市教育委員会 2005『太宰府・佐野地区遺跡群19』 70) 高倉洋彰 1985「弥生時代小形仿製鏡について(承前)」『考古学雑誌』第70巻第3号 72) 鳥栖市教育委員会 2000『内精遺跡』 73) 東脊振村教育委員会 1989『亀作A遺跡』 74) 佐賀市教育委員会 1998『牟田寄遺跡Ⅵ』 75)・76) 佐賀県教育委員会 1990『惣座遺跡』 77) 国立歴史民俗博物館 1994「佐賀県」『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集 78) 佐賀県教育委員会 1992『佐賀県農業基盤整備事業に係わる文化財調査報告書10』 79) 国立歴史民俗博物館 2003「大分県」『国立歴史民俗博物館研究報告』第97集 80) 久住町教育委員会 1996『市第Ⅰ遺跡・石田遺跡』 81) 竹田市教育委員会 1985『菅生台地と周辺の遺跡Ⅹ』 82)・83) 竹田市教育委員会 1992『菅生台地と周辺の遺跡ⅩⅤ』 84) 千歳村教育委員会 2001『鹿道原遺跡』 85) 日田市教育委員会 2004『本村遺跡3次』 86)・88)・89) 山鹿市教育委員会 2001『方保田東原遺跡Ⅳ』 87) 山鹿市教育委員会 2007『方保田東原遺跡(8)』 90) 高木正文 1999「熊本県うてな遺跡」『季刊考古学・別冊9 邪馬台国時代の国々』雄山閣出版 91)～93) 菊池市教育委員会 2006『小野崎遺跡』 94) 肥後考古学会 1983「西弥護免遺跡」『肥後考古』第3号 95) 肥後考古学会 1983「木瀬遺跡」『肥後考古』第3号 96)・97) 国立歴史民俗博物館 1994「熊本県」『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集 98) 熊本県教育委員会 2003『フスギ遺跡』 99) 植木町教育委員会 2002『石川遺跡』 100) 肥後考古学会 1983「徳王遺跡」『肥後考古』第3号 101) 熊本市教育委員会 1997『五丁中原遺跡』 102) 熊本市教育委員会 1986『戸坂遺跡発掘調査報告書』 103) 熊本県教育委員会 1987『下山西遺跡』 104)・105) 熊本県教育委員会 1993『夏女遺跡』 106) 宮崎県埋蔵文化財センター 2006『西ノ別府遺跡』 107) 国立歴史民俗博物館 2002「宮崎県」『国立歴史民俗博物館研究報告』第97集 108) 指宿市教育委員会 1982『横瀬遺跡』

第4表関連報告書(第4表の番号と対応/簡略表記)

1) (財)千葉県文化財センター 2004『館山市長須賀条里制遺跡・北条条里制遺跡』 2) 市原市教育委員会 2008『市原市御林跡遺跡Ⅱ』 3)～5) 下依知稲荷山古墳遺跡調査団 1988『稲荷山第一号古墳』 6) 上市町教育委員会 1981『北陸自動車道遺跡調査報告一上市町遺構編一』、上市町教育委員会 1982『北陸自動車道遺跡調査報告一上市町土器・石器編』 7) 金沢市教育委員会 1996『西念・南新保遺跡Ⅳ』 8) 金沢市教育委員会 1990『金沢市下安原遺跡』 9) 金沢市埋蔵文化財センター 2002『大友西遺跡Ⅱ』 10) 福井市教育委員会 1975『木田遺跡』 11) 三上徹也「長野県長野市石川条里遺跡」『日本考古学年報』41 12) 甲斐史学会 1959「山梨県甲府市伊勢町遺跡調査概報」『甲斐史学』11号 13) (財)静岡埋蔵文化財調査研究所 1989『大谷川Ⅳ』(遺物・考察編)本文編 14) 静岡県 1990「古墳時代の重要遺蹟の解説」『静岡県史 資料編2考古2』、静岡県河津町教育委員会 1983『姫宮遺跡発掘調査概報Ⅱ(第Ⅴ次～第Ⅶ次調査)』 15)・16) 守山市教育委員会 1985『守山市文化財調査報告書』第19冊 17) 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1994『鴨田遺跡発掘調査報告書Ⅲ一長浜市大成亥町所在一』 18)・19) 近江町教育委員会 1990『高溝遺跡』 20) (財)滋賀県文化財保護協会 1979『服部遺跡発掘調査概報』 21) 守山市教育委員会 2005『金森東遺跡(第30次)・金森遺跡(第2次)発掘調査概要報告書』 22) 日本考古学協会 1981「和歌山県太田黒田遺跡」『日本考古学年報』 23) (財)東大阪市文化財協会 1989「海獣葡萄鏡の一例(上)」『東大阪市文化財協会ニュース』4-2 24) 八尾市教育委員会 1987『八尾市文化財調査報告書』15 25) (財)大阪文化財

センター 1983『亀井』 26)～34) 明石市教育委員会 1996『藤江別所遺跡』 35) 兵庫県教育委員会 1978『播磨・長越遺跡－本文編』 36) 神戸市教育委員会 1992「三番町遺跡」『平成元年度 神戸市埋蔵文化財年報』 37)・39)・40)・41) 櫃本誠一 2002『兵庫県出土の古鏡』 38) 神戸市教育委員会文化財課 1999「篠原遺跡第12次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』 41) 尼崎市教育委員会 1981『尼崎市下坂部遺跡』 42)～44) 高松市教育委員会 1995『居石遺跡』 45) (財)香川県埋蔵文化財調査センター 2003『寺田・産宮通遺跡・南天枝遺跡』 46) (財)愛媛県埋蔵文化財センター 2005『道後町遺跡Ⅱ』 47) (財)愛媛県埋蔵文化財センター 2004『善応寺畦地遺跡 大相院遺跡 別府遺跡』 48) (財)鳥取県教育文化財団 2001『青谷上寺地3』 49) 米子市教育文化事業団 1994『萱原・奥陰田Ⅰ』 50) (財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2010『伊崎遺跡4区・5区』 51) (財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2003『長野フンデ遺跡3』 52) (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1996『金山遺跡Ⅵ区』 53) 苅田町教育委員会 1998『稲光遺跡Ⅰ・Ⅱ地区発掘調査概報』 54) 古賀市教育委員会 2006『馬渡・束ヶ浦遺跡』 55) 福岡市教育委員会 1995『雀居遺跡3』 56) 福岡市教育委員会 1982『福岡市野多目前田遺跡調査概報』 57)・58) 甘木市教育委員会 1994『平塚川添遺跡発掘調査概報－Ⅱ』 59) 佐賀県教育委員会 1993『平原遺跡Ⅱ』 60)・61) 鳥栖市教育委員会 1997『本行遺跡(本文編)』 62)～67) 佐賀県教育委員会 2003『吉野ヶ里遺跡－平成8年度～10年度の発掘調査の概要－』 68)・69) 佐賀県教育委員会 1990『惣座遺跡』 70)・71) 長崎県教育委員会 1985『今福遺跡Ⅱ』 72) 大分県教育委員会 1997『ガランジ遺跡・植田市遺跡・植田条里遺跡』 73) 肥後考古学会 1983「石原亀の甲遺跡Ⅰ」『肥後考古』第3号 74) 熊本県教育委員会 2004『柳町遺跡Ⅱ』 75) 菊池市教育委員会 2006『小野崎遺跡』

第5表関連報告書(第5表の番号と対応/簡略表記)

1) 鎌木義昌 1968「備前高島遺跡について－第一次調査概要－」『サヌカイト』1号 2) 松本敏三 1981「備前瀬戸で発見の祭祀遺物」『香川の歴史』第1号 3) 長井数秋 1975「愛媛県魚島の遺跡・遺物について」『ソーシャル・リサーチ』第4号 4) 愛媛県埋蔵文化財調査センター 1998『火内遺跡・臥間遺跡』5)～46)・49)～52) 宗像神社復興期成会 1961『続沖ノ島』47)・48) 宗像大社復興期成会 1958『沖ノ島』、宗像大社復興期成会 1959『沖ノ島Ⅱ』

第6表関連報告書(第6表の番号と対応/簡略表記)

1) 亀井正道 1966『建鉢山』吉川弘文館 2)・3) 富岡市市史編さん委員会 1987「久保遺跡」『富岡市史』自然編 原始・古代・中世編 4)～9) 熱海市史編纂委員会編 1967『熱海市史』上巻 熱海市史 10)・11) 大塚初重・川江秀孝ほか 1990『静岡県史 資料編2 考古2』、大場磐雄 1938「南伊豆洗田の祭祀遺跡」『考古学雑誌』28-3、堀田美桜男・川合治栄1950『静岡県史蹟名勝天然記念物調査報告』第13集、静岡県 12)・13) 名張市教育委員会・名張市遺跡調査会 1978『名張市遺跡調査概要Ⅲ』 14) 樋口清之 1928「奈良県三輪町山ノ神遺跡研究」『考古学雑誌』第18巻第10号、第12号 15) 前原市教育委員会 1993『荻浦の文化財 前原市荻浦地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査の速報2』

第7表関連報告書(第7表の番号と対応/簡略表記)

1) 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 2004『新宮神社遺跡』 2) 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 2005『芦刈遺跡・大中の湖南遺跡』 3) 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 2008『弘前遺跡Ⅰ』 4) 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 2010『金貝遺跡』 5) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2008「難波野遺跡・難波野条里制遺跡、大垣遺跡・一の宮遺跡平成18・19年度発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』128 6) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003『佐山遺跡』 7) (財)大阪府文化財センター 2006『小路遺跡Ⅲ』 8)・9) (財)大阪府文化財センター 2007『久宝寺遺跡』

竜華地区発掘調査報告書Ⅶ』 10) (財)大阪府文化財センター 2007『植松遺跡』 11) (財)大阪府文化財センター 2009『讃良郡条里遺跡Ⅸ』 12) (財)大阪市文化財協会 2003『加美遺跡発掘調査報告Ⅱ』 13)・14) (財)大阪市文化財協会 2003『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅵ』 15) (財)大阪市文化財協会 2004『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅶ』 16) 吹田市教育委員会 2003『吹田市五反島遺跡発掘調査報告書 遺物編』 17) 兵庫県教育委員会 2002『住吉宮町遺跡第33次調査』 18) 兵庫県教育委員会 2002『入佐川遺跡』 19) 神戸市教育委員会 2010『雲井遺跡第28次発掘調査報告書』 20) 中町教育委員会 2005『安坂・城の堀遺跡Ⅲ』 21) 奈良県立橿原考古学研究所 2006「東井上遺跡第1次調査」『奈良県遺跡調査概報 2005年度』第一分冊 22) 大和高田市教育委員会 2010『土庫遺跡群』 23)・24) (財)和歌山県文化財センター 2009『野田地区遺跡』 25) (財)和歌山県文化財センター 2010『西飯降Ⅱ遺跡、丁ノ町・妙寺遺跡』 26) 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003『古志本郷遺跡Ⅴ』 27) 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2004『家ノ脇Ⅱ遺跡 原田遺跡1区 前田遺跡4区』 28) 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2004『大津町北遺跡 中野清水遺跡』 29)・30) 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2005『高津遺跡』 31) 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008『九景川遺跡』 32) 出雲市教育委員会 2010『矢野遺跡』 33) 益田市教育委員会 2003『浜寄遺跡』 34) 頓原町教育委員会 2001『森Ⅴ遺跡』 35) 岡山県古代吉備文化財センター 2001『下庄遺跡 上東遺跡』第1分冊 36) 岡山県古代吉備文化財センター 2003『津島遺跡4』 37) 岡山県古代吉備文化財センター 2007『総社遺跡 金井戸遺跡 北溝手遺跡』 38) 岡山県古代吉備文化財センター 2008『南溝手遺跡 窪木遺跡』 39) 岡山市教育委員会 2009『津寺遺跡(加茂小・体育館)遺跡』 40) 庄原市教育委員会 2008『大仙2号遺跡』 41) (財)東広島市教育文化振興事業団 2002『青谷1号遺跡発掘調査報告書』 42) (財)東広島市教育文化振興事業団 2009『安芸国分寺周辺遺跡発掘調査報告書』 43) (財)山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター 2001『川棚条里跡(木舟地区・田尻地区)』 44) (財)山口県ひとつくり財団山口県埋蔵文化財センター 2004『武久川下流域条里遺跡』 45) 下関市教育委員会 2001『伊倉遺跡』 46) 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 2004『西沢遺跡』 47) 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 2005『寺ヶ浴遺跡 広田遺跡 磯地遺跡』 48) (財)徳島県埋蔵文化財センター 2004『大柿遺跡Ⅱ』 49) (財)徳島県埋蔵文化財センター 2007『観音寺遺跡Ⅳ』 50) (財)徳島県埋蔵文化財センター 2008『観音寺遺跡Ⅴ』 51) 徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室 2005『庄(庄・蔵本)遺跡』 52) (財)香川県埋蔵文化財調査センター 2003『県道富田西志度線道路改良事業及び県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 寺田・産宮通遺跡 南天枝遺跡』 53) (財)香川県埋蔵文化財調査センター 2006『前田東・中村遺跡Ⅲ』 54) (財)香川県埋蔵文化財センター 2009『旧練兵場遺跡Ⅰ』 55) 高松市教育委員会 2004『天満・宮西遺跡～旧河道編～ 上西原遺跡～第2次調査～』 56) 高松市教育委員会 2008『西下遺跡』 57) (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 2005『道後町遺跡Ⅱ』 58) (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 2008『高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡2次』 59) 松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 2002『船ヶ谷遺跡-4次調査-』 60) 西予市教育委員会 2009『坪栗遺跡』 61) 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2007『ミトロ遺跡』 62) 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2008『北ノ丸遺跡』

요 약

지토세시모(千歳下) 유적은 와카사만(若狭湾)을 바라보는 마이즈루(舞鶴)의 오우라반도(大浦半島), 마이즈루시 아자 지토세((舞鶴市字千歳)에 위치한다. 본 유적은 1988년에 마이즈루시 교육위원회가 행한 시내 유적분포조사에 의해 알려지게 되었다. 시도(市道) 개량공사에 따라 1999년에 마이즈루시 교육위원회에 의해 두 차례의 긴급조사가 행하여졌다. 발굴조사 결과, 고분시대 중기의 제사유적이 검출되어 사연수대경(斜縁獸帶鏡)과 동천(銅鉏) 등의 청동기를 비롯하여 700 점 이상에 이르는 철제품과 철편류, 1,000 점에 달하는 옥류나 석제모조품 등이 출토되었다.

2000년에는 발굴조사 담당자였던 마쓰모토(松本)가 당시 교토부(京都府) 매장문화재 조사연구센터에 근무하고 있던 노지마(野島)에게 지토세시모유적 출토자료의 도화 정리에 대하여 의뢰하였지만 제반의 사정으로 실현에 이르지 못하는 못하였다.

출토유물은 현지설명회에서 공개되었을 뿐이고 조사종료 후 충분한 정리작업을 행할 기회도 없이 조사성과는 미공개된 상태였다. 2006년에는 히로시마대학 고고학연구실과 마이즈루시 교육위원회가 각서를 교환하였고, 2009년에는 히로시마대학과 마이즈루시가 공동연구를 행하기로 계약체결을 하여 조사보고서 작성을 향한 체제가 갖추어졌다.

조사연구 결과 단고반도(丹後半島)에서도 제사유적이 여러 곳에서 보여지지만 그 중에서도 지토세시모유적은 현재 사례로는 동해(일본해) 연안지역에 있어서 가장 규모가 큰 고분시대 중기무렵의 해안제사유적인 것으로 밝혀졌다. 바다에 접한 모래사장에서 중국 후한대의 청동거울을 비롯하여 삼국시대 초기의 주조철부와 각종 철제품, 각종 곡옥·관옥·모조품 등이 망설임없이 폐기되어 있는 상황은 필시 해신에게 공양한 것으로 상정된다. 해신과의 호혜적 교환으로서 해상항해의 안전을 기원한 것은 비슷한 제사유물이 출토된 무나카타삼희신(宗像三姫神)을 모시는 오키노시마(沖ノ島)의 제사유물을 보아도 명백할 것이다. 육상계(六像系)의 박재수대경(舶載獸帶鏡)이나 고분시대 전기 후반의 토기에서 보면 고분시대 전기 후반부터 중기를 통해서 제사활동이 계속된 것으로 상정된다. 그러나 그 출토유물은 적은 폭(너비) 밖에 안 되는 시도의 개량공사였기 때문에 약간의 조사면적밖에 확보할 수 없었다. 따라서 내장된 유물 전체량은 적어도 몇 배 이상 상회할 것으로 보아도 틀림없을 것이다. 부분발굴에 따른 출토유물조차 고분시대 전기 후반기의 지방수장분(地方首長墳)의 부장품을 능가하는 것에서 기나이(畿内)정권의 개입에 따라 성립된 것으로 상정할 수 있다.

4세기 후반기의 기나이정권에 의한 해안제사라고 하면 교역항을 갖지 못한 기나이 사키(佐紀)정권에 의한 것으로 상정된다. 문헌사학에서는 사키정권은 오야마토(大和)정권과는 달리 대외적 정책을 중시했다고도 일컬어지고 있고, 칠지도(七支刀) 등에서도 백제(百濟)와의 군사적 동맹관계를 구축해 간 것으로 추측되고 있다. 지토세시모유적이 동해(일본해) 항해안전의 기원을 행하는 제사유적이었다면 동해(일본해) 루트를 따라 한반도 백제와의 동맹관계를 구축해 갔다고 상정하는데 중요한 유적 증거를 제시한 것으로

생각된다. 다소 내려가서 5세기에는 후루이치(古市)·모즈(百舌鳥) 정권에 의해 오사카만(大阪灣)에서 세토나이카이(瀬戶内海)로의 대외적 교역루트가 주류(主流)가 되므로 해안제사유적은 세토나이카이 해변에 점재(点在)하기 시작한다. 하지만 그 세토나이카이 연안의 5세기 제사유적에서 조차도 지토세시모유적의 제사유물과는 비교가 안 될 정도이다.

이상으로 마이즈루시 지토세시모유적은 동해(일본해) 루트에 의한 고분시대 초기 대외 교역을 방증하는 대규모 제사유적이라고 상정할 수 있다.

ABSTRACT

Chitose-shimo site is situated in Maizuru-shi aza-Chitose, in the Maizuru-Ōura Peninsula which has a distance view of the Wakasa Bay. This site has been found by archaeological survey of the board of education of Maizuru-shi, since 1988. Because of reconstruction of the official road, this site was urgently excavated two times in 1999. As a result, we found ritual construction and a lot of archaeological objects: bronze objects like bracelets and mirrors, over 700 iron objects and iron shreds, over 1000 beads and stone imitations of various objects.

In 2000, T. Matsumoto (Director of the excavation of Chitose-shimo site) asked H. Nojima (Kyoto Buried Cultural Properties Investigation Center) for arranging and drawing the material excavated at this site. However this was not realized for various reasons. Excavated materials have not been fully arranged and published after the excavations: they were exhibited for the public only in the site.

The department of archaeology of the Hiroshima University and the board of education of Maizuru-shi exchanged the memorandum in 2006 and made a convention in 2009. Then the system for publish of the excavation report was arranged.

As a result of study, although some ritual sites are also in the Tango Peninsula, we demonstrate that Chitose-shimo site is the biggest ritual place in the middle of Kofun Period on the coast of the Sea of Japan under the circumstances. In this site, people had thrown abundant objects away: Chinese bronze mirrors of the Eastern Han Dynasty is represent, and there are cast iron celt and various iron objects of the beginning of the Three Kingdoms Period, various beads like curved beads, cylindrical beads, and their imitations. We could suppose that it had been a kind of rite to put these objects for sea-god. Also in the Okinoshima Island where three Munakata goodness are enshrined, same kinds of ritual objects were excavated: we think this supports our supposition.

Imported beast-band mirror and pottery of the second part of the first half of Kofun Period signify that this ritual activity had continued from the second part of the first half to the middle of Kofun Period. However these objects were excavated from the area only 3 m in width for reconstruction of road and we have to say the excavation area was very limited. Accordingly, it might as well say the whole amount of these objects would have had been at least several times larger. Even by the partial excavation, we found more rich objects than funeral objects of local chiefs in the second part of the the first half of Kofun Period. Therefore it is possible to suppose that this site had been formed by the intervention of Kinai Dynasty.

If we consider it as the sea-rite by Kinai Dynasty, it would have been done by Kinai-

Saki Dynasty which had not have trade port. By the study of literatures, it is said that this Saki Dynasty had made much of external policy: this is different from Ōyamato Dynasty. This dynasty is guessed to have constructed military alliance with Paekche Dynasty also by the seven-branched sword. If Chitose-shimo site had been the ritual place for praying safety of voyage in the Sea of Japan, it is possible to say that we offer important archaeological evidence for supposing that this dynasty had constructed alliance with Paekche of Korean Peninsula, by way of the Sea of Japan. In the 5th century, a little later than the period of this site, it seems that the external trade route from Ōsaka Bay to the Inland Sea of Japan had become major by Huruichi and Mozu Dynasty, and the coastal ritual sites had begun to be scattered on the coast of the Inland Sea of Japan. However, even these ritual sites of the 5th century on the coast of the Inland Sea of Japan could not be comparable with Chitose-shimo site, about excavated objects.

As explained above, we can consider Chitose-shimo site as the large-scale ritual site which proves indirectly the external trade at the beginning of Kofun Period by way of the Sea of Japan.

第8表 青銅器観察表

報告 番号	調査区	出土遺構	種類	直径 (cm)		重量 (g)	備考
1	A 調査区	SK08	斜縁獣帯鏡	14.6	内区厚さ0.13 縁厚さ0.63~0.66	45.5	鏡片。破断面を研磨、 穿孔。「宜孫子」銘文
2	A 調査区	排水溝	鏡式不明鏡	11.2	縁厚さ0.29~0.30	16.1	鏡片
3	C 調査区 北側	包含層	銅釧	6.9	厚さ0.50~0.55 高さ0.55	6.6	錆化顕著

第9表 鉄器・鉄片観察表

報告 番号	調査区	出土遺構	器種	現存最大長 (cm)	残存長 (cm)	現存最大幅 (cm)	残存幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	C 調査区 北側	SK04	鉄刀		1.6	2.8		0.25	5.5	
2	C 調査区 北側	SK04	鉄剣		9.0	3.3		0.7	29.4	
3	C 調査区 北側	排水溝	鉄剣		5.5	2.6		0.5	19.9	
4	C 調査区 北側	SK04	鉄剣		7.2	2.3		0.35	24.9	
5			鉄剣		2.55	2.5		0.5	9.3	
6	C 調査区 北側	排水溝	鉄剣		2.3		2.9	0.25	6.4	
7	C 調査区 北側	SK04			4.5	3.3		0.35	18.9	木質の付着
8	A 調査区	SK03	鉄剣		3.6		4.0	0.9	30.7	錆化顕著
9	C 調査区 北側	SK04	鉄剣		5.5		2.3	0.25	20.8	茎
10	A 調査区	排水溝 4	鉄鏃		2.9		4.0	0.25	8.0	
11	A 調査区	10アゼ	鉄鏃		3.5		2.0	0.2	4.5	
12	C 調査区 北側	SK04灰色粘土 層土14	鉄鏃		3.2	1.6		0.4	5.1	
13	A・C 調 査区	南壁外側断面	鉄鏃		3.3	3.4		0.3		
14	A 調査区 東	排水溝断割	鉄鏃	8.3		3.3		0.25	19.8	
15	C 調査区 北側	SK04南東埋土	鉈		3.0	1.1		0.2	6.4	
16	C 調査区 北側	SK04	鉈		4.3	1.0		-	11.4	錆着した石の重量含む、 基部
17	C 調査区 北側	SK04埋土	鉈		8.0	1.0		0.35	20.1	
18	A 調査区	SK03下層	針		1.5	0.3		0.2	0.3	
19	A・C 調 査区	排水溝	針		1.2	0.2		0.15	0.2	端部
20	C 調査区 北側	SK04	針		2.0	0.15		0.15	0.2	
21	C 調査区 北側	SK04南東埋土	針		1.4	0.15		0.3	0.2	
22	A・C 調 査区	排水溝	針		1.3	0.1		0.15	0.1	先端
23	A 調査区	SK03上層落込 み	刀子		6.5	1.5		0.35	10.6	
24	C 調査区 北側	SK04	刀子		4.5	2.1		0.3	15.8	錆着した石の重量含む

25	A・C 調査区	外側南壁断面 8層暗茶黒色 土	刀子	5.7	1.9	0.35	10.8	茎から関部
26	A 調査区	SK07埋土	刀子	2.3	2.0	0.45	6.2	
27	A・C 調査区	崩落土、鍛冶 面下層古墳包 含層	刀子	2.2	1.55	0.35	3.1	
28	A・C 調査区	外側南壁断面 8層暗茶黒色 土	刀子	3.7	1.9	0.25	9.5	関部
29	A 調査区	SD01北側	刀子	3.9	1.3	0.25	4.8	
30	A・C 調査区	排水溝	刀子	2.1	1.4	0.15	1.1	
31	C 調査区 北側	SK04	刀子	2.6	1.5	0.2	2.3	茎?
32	A・C 調査区	東側排水溝	刀子	2.5	1.1	0.15	1.5	茎
33	A・C 調査区	外側南壁断面 8層暗茶黒色 土	刀子	3.3	1.4	0.25	4.8	茎
34	A・C 調査区	排水溝	刀子	2.0	1.3	0.4	2.8	茎
35	A 調査区	東側排水溝	刀子	1.7	1.1	0.3	1.9	茎?
36	C 調査区 北側	SK04	刀子	2.4	1.6	0.3	3.6	茎?
37	A・C 調査区	東側排水溝	刀子	1.3	1.0	0.2	0.8	茎?
38	A・C 調査区	排水溝	刀子	3.3	1.7	0.2	4.6	端部、両側縁折り返し
39	A・C 調査区	灰色粘土層	袋状鉄斧	9.0	5.5	0.7	155.2	袋部に木質遺存
40	C 調査区 北側	SK04	袋状鉄斧	9.5	6.0	0.8	126.9	
41	C 調査区 北側	SK04	袋状鉄鑿	7.3	3.4	0.3	55.7	
42	A 調査区	SK03下層	鍬・鋤先	5.3	7.0	0.6	50.5	
43	C 調査区 北側	SK04	鍬・鋤先	4.8	9.3	0.4	78.4	
44	C 調査区 北側	SK04	鍬・鋤先	6.1	10.4	0.3	110.8	
45	A 調査区	SK06下層3焼 石下層	鍬・鋤先	2.1	2.0	0.5	7.4	
46	C 調査区 北側	SK04埋土	鍬・鋤先	3.9	4.4	0.4	18.3	
47	A 調査区	SK06下層、西 壁断面・暗茶 黒色土	鍬・鋤先	4.0	2.9	0.3	15.0	
48	A 調査区	SK07北埋土	摘鎌	2.2	5.7	0.2	11.5	
49	A・C 調査区	東側排水溝	摘鎌	2.6	3.2	0.15	12.8	乙技法
50	A 調査区	排水溝	摘鎌	2.7	2.8	0.15	5.3	
51	A・C 調査区	南壁外側断面	摘鎌	2.6	2.2	0.35	9.8	
52	A・C 調査区	排水溝	摘鎌	1.2	2.5	0.1	2.3	
53	C 調査区 北側	SK04	摘鎌	1.95	2.1	0.3	4.3	木質遺存
54	A 調査区	SK06下層西壁 断面・暗茶黒 色土	鉄鎌	5.1	4.2	0.4	27.9	
55	A 調査区	SK10、東 No. 4	鉄鎌	3.7	4.9	0.2	2.2	

56	A・C調査区	排水溝	鉄鎌		3.0	2.6	0.15	5.2	
57	A・C調査区		鉄鎌	4.0	3.2		0.3	11.9	
58	C調査区 北側	SK04	鉄鎌	7.9	3.9		0.3	38.3	錆着した石の重量含む
59	A・C調査区	南壁外側断面 No. 20	鉄鎌		3.5	3.7	0.2	9.8	
60	C調査区 北側	SK04	鉄鎌		2.45	2.25	0.3	2.8	
61	A・C調査区	西壁断面暗茶 褐色土9層拡張部	鉄鎌		3.5	3.2	0.35	12.6	
62	A・C調査区	排水溝	鉄鎌		2.2	2.3	0.3	2.8	
63	C調査区 北側	SK04	鉄鎌		4.7	3.0	0.25	16.5	
64	C調査区 北側	SK04	鉄鎌		3.5	3.2	0.4	10.1	
65	A・C調査区	西壁断面6層 (西側)	鉄鎌		1.8	2.3	0.5	3.9	
66	A・C調査区		鉄鎌		2.4	2.1	0.4	5.0	
67	A調査区	SK06下層西壁 断面暗茶黒色 土北側着部	鉄鎌		2.1	1.9	0.2	2.0	
68	A調査区	SK03下層	鉄鎌		6.9	3.0	0.5	29.4	
69	C調査区 北側	SK04	鑄造斧形品	12.1	4.7			91.3	刃部欠損
70	C調査区 北側	SK04	鉄鋌	4.6	3.8		0.3	32.3	
71	A・C調査区	排水溝2	鉄鋌		4.4	3.7	0.15	10.4	
72	A・C調査区	排水溝	鉄鋌		4.8	5.1	0.25	30.3	
73	C調査区 北側	SK04鉄14	鉄鋌		4.3	4.0	0.3	16.4	
74	A・C調査区	西側排水溝	鉄鋌	9.5	3.9		0.45	53.1	
75	A・C調査区	排水溝	鉄鋌		4.6	4.0	0.25	16.3	
76	A・C調査区	排水溝	鉄鋌		4.8	3.4	0.25	9.6	
77	A・C調査区	断面1・9層	鉄鋌		4.2	4.1	0.4	24.5	
78	C調査区 北側	SK04	鉄鋌		3.5	3.7	0.15	5.4	
79	A・C調査区	排水溝	鉄鋌		3.5	3.1	0.25	8.4	
80	A・C調査区	排水溝2	鉄鋌		3.7	3.5	0.15	14.2	
81	A・C調査区	排水溝	鉄鋌		2.1	4.0	0.25	6.1	
82	A・C調査区	外側南壁断面 8層暗茶黒色 土	鉄鋌		1.6	3.7	0.2	5.1	
83	A調査区	SK05北東埋土 上層	鉄鋌		3.4	3.9	0.35	9.5	
84	C調査区 北側	SK04鉄18	鉄鋌		3.8	3.1	0.35	9.2	
85	A調査区	SK08 No. 8	鉄鋌		3.3	3.6	0.25	9.7	

86	C 調査区 北側	SK04	鉄鋌	9.2	4.0	0.6	45.0		
87	A・C 調 査区	排水溝	鉄鋌	6.7	3.9	0.25	20.7		
88	A・C 調 査区	排水溝	鉄鋌	4.2	3.9	0.35	27.5		
89	A・C 調 査区	SX01埋土	鉄鋌	4.6	2.9	0.2	15.0		
90	A 調査区	SK07面検出中 5	鉄鋌	4.0	3.1	0.15	9.1		
91	A 調査区	10アゼ	鉄剣模造品	11.2	1.95	0.2	23.4		
92	C 調査区 北側	SK04	鉄剣模造品	5.4	2.2	-	12.6		
93	A 調査区	SK11埋土北側 遺構ライン検 出中	刀子模造品	2.9	0.8	0.25	1.7		
94	A・C 調 査区	排水溝	鋤先模造品	4.7		3.1	0.2	15.2	
95	A・C 調 査区	排水溝20	鋤先模造品	3.7		3.2	0.15	13.7	
96	A・C 調 査区	南壁17	鋤先模造品	3.1	5.1	0.3	15.6		
97	A 調査区	SK08南側埋土	鋤先模造品	2.5	6.2	0.25	12.0		
98	A・C 調 査区	排水溝 4	鋤先模造品	2.4	2.3	0.15	5.5		
99	A・C 調 査区	A 調査区トレ 断面 6・8層	鋤先模造品	3.2		4.2	0.15	15.1	土器錆着
100	C 調査区 北側	04取上げメッ シュ 4	鋤先模造品	3.5		3.4	0.3	7.2	
101	A・C 調 査区	東側排水溝	鋤先模造品	1.6		2.0	0.15	1.7	
102	A・C 調 査区	南壁外側断面	鋤先模造品	2.4		2.0	0.3	3.3	
103	A・C 調 査区	南壁外側断面	鋤先模造品	2.0		2.6	0.3	2.9	
104	A・C 調 査区	排水溝 4	鋤先模造品	2.4		1.9	0.15	2.5	
105	A 調査区	SK03上層落ち 込み	鋤先模造品	2.2		1.2	0.2	2.8	
106	A・C 調 査区	南壁外側断面	鋤先模造品	2.4		1.6	0.25	5.3	
107	A 調査区	SK03上層埋土	鋤先模造品か 鉄鎌模造品	2.1		1.8	0.15	2.5	
108	A 調査区	SK07埋土 (アゼ)	鋤先模造品か 鉄鎌模造品	1.7		2.1	0.25	2.5	
109	A 調査区	SK08埋土北西 ブロック炭層 下層	鋤先模造品か 鉄鎌模造品	1.45		1.9	0.2	1.5	
110	A 調査区	SK03上層落ち 込み	鋤先模造品か 鉄鎌模造品	1.8		1.5	0.15	1.8	
111	A・C 調 査区	崩落土、鍛冶 面下層古墳包 含層	鋤先模造品か 鉄鎌模造品	1.8		1.9	0.2	1.2	
112	A・C 調 査区	排水溝20	斧形鉄製模造 品	4.0		2.6	0.2	10.7	
113	A・C 調 査区	排水溝20	斧形鉄製模造 品	3.9		2.6	0.2	9.1	
114	C 調査区 北側	SK04	斧形鉄製模造 品	3.5		1.5	0.25	4.9	
115	C 調査区 北側	SK04	斧形鉄製模造 品	2.0		1.3	0.15	1.7	

116	A 調査区	SK08 (鉄 2)	斧形鉄製模造品	2.7	3.4	0.15	6.8	
117	A・C 調査区	南壁外側断面	斧形鉄製模造品	2.5	3.0	0.35	5.1	
118	A 調査区	SK06下層西壁断面・暗茶黒色土	斧形鉄製模造品	3.1	3.0	0.3	8.5	
119	A・C 調査区	外側南壁対応	斧形鉄製模造品	2.7	1.9	0.3	3.9	
120	A 調査区	SK03下層メッシュ 2	斧形鉄製模造品	2.8	2.5	0.35	6.1	
121	A・C 調査区	排水溝	斧形鉄製模造品	3.1	4.2	0.15	10.6	
122	A 調査区	SK03上層落ち込み	斧形鉄製模造品	2.6	1.9	0.15	3.0	
123	A・C 調査区	排水溝	斧形鉄製模造品	2.4	2.1	0.25	4.3	
124	C 調査区 北側	SK04灰色粘土層メッシュ 1	斧形鉄製模造品	1.8	2.4	0.3	2.7	
125	A・C 調査区	排水溝 4	斧形鉄製模造品	1.7	2.0	0.25	2.3	
126	A・C 調査区	排水溝 4	斧形鉄製模造品	2.3	2.7	0.15	6.0	
127	A 調査区	SK08No. 14	斧形鉄製模造品	2.3	2.4	3.5	3.2	
128	A・C 調査区	排水溝	斧形鉄製模造品	1.9	1.6	0.15	1.8	
129	A 調査区	SK05埋土	斧形鉄製模造品	2.5	2.1	0.15	5.7	
130	A・C 調査区	排水溝	斧形鉄製模造品	1.55	2.0	0.15	1.2	両面に木質遺存
131	C 調査区 北側	SK04メッシュ 28	鉄鎌模造品	1.65	1.9	0.15	1.1	
132	A・C 調査区	外側南壁対応 20cm 礫砂・礫多く含む暗褐色土	鉄鎌模造品	2.3	1.6	0.15	2.0	
133	C 調査区 北側	SK04取 5 メッシュ	板状鉄片 a 類	3.1	1.5	0.15	4.8	
134	A・C 調査区	排水溝	板状鉄片 a 類	2.0	1.0	0.2	1.5	
135	A・C 調査区	崩落土	板状鉄片 a 類	2.2	2.3	0.2	4.3	
136	A 調査区	SK06下層	板状鉄片 a 類	2.3	2.2	0.15	3.5	
137	A・C 調査区	排水溝	板状鉄片 a 類	1.2	1.5	0.1	1.4	
138	A・C 調査区	排水溝	板状鉄片 b 類	1.6	1.5	0.2	1.3	
139	A・C 調査区	東側排水溝	板状鉄片 b 類	1.0	1.1	0.2	0.5	
140	C 調査区 北側	SK04	板状鉄片 c 類	3.4	5.0	0.5	16.6	
141	A・C 調査区	排水溝	板状鉄片 c 類	3.3	4.3	0.25	22.1	
142	A・C 調査区	排水溝	板状鉄片 c 類	3.2	3.8	0.25	11.0	
143	A・C 調査区	排水溝	板状鉄片 c 類	2.7	3.8	0.25	12.0	
144	C 調査区 北側	SK04	板状鉄片 c 類	2.4	2.6	0.15	4.3	
145	C 調査区 北側	SK04	板状鉄片 c 類	2.0	2.0	0.25	1.7	

146	A・C 調査区	崩落土	板状鉄片 c 類	2.4		2.5	0.15	2.9
147	A 調査区	SK06下層西壁断面・暗茶黒色土	板状鉄片 c 類	3.2		5.6	0.5	22.1
148	C 調査区 北側	SK04拡3	板状鉄片 c 類	1.1		3.7	0.3	3.4
149	A・C 調査区	東側排水溝	板状鉄片 c 類	2.3		2.2	0.2	5.1
150	A・C 調査区	排水溝	板状鉄片 c 類	2.2	1.1		0.15	1.3
151	A・C 調査区	排水溝	板状鉄片 c 類	3.3		2.4	0.15	4.8
152	A・C 調査区	排水溝	板状鉄片 c 類	1.8	2.1		0.18	2.6
153	A・C 調査区	東側排水溝	板状鉄片 c 類	1.6		1.7	0.15	1.6
154	C 調査区 北側	SK04	板状鉄片 c 類	1.9		1.3	0.1	1.0
155	C 調査区 北側	SK04	板状鉄片 c 類	3.0		3.6	0.3	8.4
156	A・C 調査区	東側排水溝	板状鉄片 c 類	2.9		3.6	0.15	7.2
157	A・C 調査区	外側南壁対応20cm礫砂・礫多く含む暗褐色土	板状鉄片 c 類	2.6		1.6	0.2	2.1
158	A 調査区	SK06下層、北西隅 SK07検出中	板状鉄片 c 類	2.6		1.6	0.15	3.6
159	A 調査区	西壁断面17層・下半分 SK12	板状鉄片 c 類	2.6		4.1	0.2	5.3
160	A・C 調査区	排水溝	板状鉄片 c 類	1.8		1.8	0.15	1.8
161	C 調査区 北側	SK04	板状鉄片 c 類	1.3		1.8	0.25	2.3
162	C 調査区 北側	SK04 北東埋土	板状鉄片 c 類	2.1		1.2	0.35	2.3
163	A・C 調査区	東側排水溝	板状鉄片 c 類	1.5		2.0	0.2	1.4
164	A・C 調査区	崩落土	板状鉄片 c 類	1.7		0.9	0.15	0.8
165	A・C 調査区	排水溝	板状鉄片 c 類	0.75		1.7	0.15	0.3
166	A・C 調査区	南壁外側断面 No. 20	板状鉄片 d 類	2.9		1.5	0.15	4.1
167	A・C 調査区	排水溝	板状鉄片 d 類	3.2		4.8	0.25	13.1
168	A・C 調査区	排水溝	板状鉄片 d 類	3.6		4.3	0.2	18.0
169	A・C 調査区	排水溝	板状鉄片 d 類	4.7	4.4		0.32	12.4
170	A・C 調査区	西壁断面12層鉄分による黒変色土を多く含む暗茶色砂礫層	板状鉄片 d 類	3.6		5.0	0.2	19.8
171	A・C 調査区	排水溝	板状鉄片 e 類	3.1		2.1	0.3	3.5
172	A・C 調査区	A 調査区断面 2	板状鉄片 e 類	3.2	1.6		0.15	3.4
173	A・C 調査区	排水溝断割	板状鉄片 e 類	1.6		4.3	0.25	5.8

174	A・C 調査区	東側排水溝	板状鉄片 e 類	2.2	2.5	0.15	3.5	
175	A・C 調査区	東側排水溝	板状鉄片 e 類	1.4		2.2	0.15	1.5
176	A・C 調査区	排水溝	板状鉄片 f 類	0.7		2.0	0.15	1.1
177	A 調査区	SK10	板状鉄片 f 類	1.6	4.0		0.35	8.5
178	A・C 調査区	排水溝断割	板状鉄片 f 類	0.8		3.5	0.2	2.5
179	A・C 調査区	排水溝	板状鉄片 f 類	1.0		3.1	0.25	2.6
180	A・C 調査区	排水溝	板状鉄片 f 類	0.9		2.2	0.15	2.1
181	A 調査区	SK06下層 3 (焼面下層)	板状鉄片 f 類	2.3		2.6	0.3	4.2

第10表 玉類観察表

報告 番号	調査区	出土遺構	種類	分類	材質	全長 [現存長] (mm)	直径・厚・幅 [現存厚] (mm)	孔径 小 (mm)	孔径 大 (mm)	重量 (g)	穿孔 方法	色調	備考
1	C 調査区 北側	SK04掘 3 埋土	勾玉		瑪瑙	[19.2]				3.0	片面 穿孔	淡橙色 (156)	
2	A 調査区		勾玉		瑪瑙	27.0	11.0	2.4	3.8	4.4	片面 穿孔	橙色 (159)	
3	A 調査区	排水溝	勾玉		碧玉	27.9	10.4	2.7	3.5	5.0	片面 穿孔	濃緑色 (553)	
4	A 調査区	排水溝	勾玉		碧玉	27.8	11.0	2.2	2.9	4.6	片面 穿孔	濃緑色 (553)	
5	A 調査区		勾玉		碧玉	38.2	13.9	1.8	4.0	11.7	片面 穿孔	緑色 (554)	
6	C 調査区 北側	SK04	勾玉		緑色凝 灰岩	28.6	10.1	1.7	2.0	5.4	片面 穿孔	淡緑色 (5595)	
7	C 調査区 北側	SK04埋土	勾玉		滑石	24.5	8.3	1.6	2.1	3.4	片面 穿孔	淡緑色 (5477)	
8	A 調査区	SK07	勾玉		滑石	25.6	9.8	1.2	1.5	3.8	両面 穿孔	淡緑色 (5595)	
9	C 調査区 北側		勾玉		滑石	[37.2]	13.4	2.7	4.0	8.0	両面 穿孔	淡緑色 (5477)	
10	A 調査区		勾玉		滑石	40.0	14.6	1.5	1.6	9.0	片面 穿孔	緑色 (553)	
11	A 調査区	西壁断面 9層北東	勾玉		滑石	32.3	11.0	1.6	2.0	6.7	両面 穿孔	濃緑色 (5605)	
12	A 調査区	排水溝	勾玉		滑石	26.8	9.6	1.6	1.9	3.8	両面 穿孔	淡緑色 (5477)	
13	A 調査区	排水溝	勾玉		滑石	28.0	9.7	1.6	1.6	2.9	片面 穿孔	淡褐色 (7504)	
14	A・C 調 査区	外側南壁	勾玉		滑石	9.5	4.6	1.5	1.5	0.1 以下	片面 穿孔	濃緑色 (553)	
15	C 調査区 北側		勾玉		滑石	6.9	3.5	1.2	1.2	0.1	片面 穿孔	褐色 (463)	
16	A 調査区		勾玉		滑石	6.6	3.2	1.1	1.1	0.1 以下	片面 穿孔	淡緑黄色 (5773)	
17	C 調査区 北側		勾玉		硬玉	12.5	5.9	0.9	1.1	0.8	片面 穿孔	淡緑色 (5555)	
18	C 調査区 北側	SK04	平玉		硬玉	9.6	9.5	1.4	1.5	0.4	片面 穿孔	淡緑色 (5595)	
19	C 調査区 北側		平玉		硬玉	11.2	8.5	1.5	1.7	0.3	片面 穿孔	淡緑色 (5595)	
20	C 調査区 北側		平玉		硬玉	7.7	5.6	1.3	1.3	0.2	片面 穿孔	淡緑色 (5595)	
21	C 調査区 北側灰色 粘土層		算盤 玉		水晶	7.9	10.3	1.4	1.9	1.2	片面 穿孔	乳白色 (Warm Gray 1M)	
22	C 調査区 北側	A 調査区 断面 2 6・8層	算盤 玉		水晶	8.1	11.3	0.8	1.5	1.3	片面 穿孔	乳白色 (Warm Gray 1M)	
23	C 調査区 北側	SK04	小玉		ガラス	5.2	5.3	2.0	2.1	0.2		紺色 (2738)	
24	C 調査区 北側	SK04	小玉		ガラス	3.3	5.2	1.9	1.9	0.1		紺色 (2738)	
25	C 調査区 北側	SK04	小玉		ガラス	4.0	4.8	1.2	1.2	0.1		青緑色 (320)	
26	A・C 調 査区	排水溝17	小玉		ガラス	2.5	4.9	2.7	2.7	0.1 以下		青緑色 (320)	端面研磨
27	C 調査区 北側	SK04	小玉		ガラス	4.7	4.0	1.5	1.7	0.1 以下		青緑色 (320)	端面研磨
28	C 調査区 北側	SK04	小玉		ガラス	3.1	3.5	2.2	2.5	0.1 以下		青緑色 (320)	端面研磨

29	C調査区 北側	SK04	小玉	ガラス	3.1	3.9	1.7	1.7	0.1 以下	青緑色 (320)	端面研磨	
30	A調査区		管玉	緑色凝 灰岩	30.7	4.5	1.9	2.2	1.1	両面 穿孔	淡緑色 (5625)	
31	A調査区		管玉	緑色凝 灰岩	28.1	4.1	2.0		0.7	両面 穿孔	淡緑色 (5625)	片面一部欠 損
32	C調査区 北側	SK04青 色粘土 層	管玉	緑色凝 灰岩	30.4	5.3	1.9	2.4	1.5	両面 穿孔	緑色 (5615)	
33	A調査区	排水溝	管玉	緑色凝 灰岩	22.6	4.6	2.1	2.4	0.9	両面 穿孔	緑色 (5615)	
34	A調査区	SK08	管玉	緑色凝 灰岩	22.6	4.5	2.0	2.0	0.8	両面 穿孔	緑色 (5615)	
35	C調査区 北側	SK04	管玉	緑色凝 灰岩	19.6	4.1	1.7	1.9	0.7	両面 穿孔	緑色 (5535)	
36	A調査区	SK08	管玉	緑色凝 灰岩	20.3	4.9	2.0	2.1	0.6	両面 穿孔	淡緑黄色 (451)	鉄錆の付着
37	C調査区 北側		管玉	緑色凝 灰岩	20.7	4.0	1.8	1.8	0.5	両面 穿孔	濃緑色 (5605)	
38	C調査区 北側	SK04・1 層	管玉	緑色凝 灰岩	18.6	4.1	2.2		0.4	両面 穿孔	淡緑色 (5595)	片面一部欠 損
39	C調査区 北側		管玉	緑色凝 灰岩	15.6	3.5	1.9	1.9	0.2	両面 穿孔	淡緑色 (5595)	
40	C調査区 北側		管玉	緑色凝 灰岩	[11.1]	[4.6]	2.3	2.7	[0.4]	不明	淡緑色 (5595)	一部欠損、 鉄錆の付着
41	A調査区		管玉	緑色凝 灰岩	[12.5]	[4.7]	2.0	2.4	[0.3]	両面 穿孔	淡緑色 (5585)	
42	A調査区	SK10	管玉	緑色凝 灰岩	[9.7]	[4.5]	1.2	2.0	[0.2]	不明	淡緑色 (5595)	一部欠損
43	A調査区		有孔 円板	滑石	36.1	36.8	1.4	1.4	7.1	片面 穿孔	淡緑色 (5625)	
44	A調査区	排水溝	有孔 円板	滑石	34.1	32.7	1.8	2.0	8.3	片面 穿孔	淡緑色 (5575)	
45	C調査区 北側	SK04	有孔 円板	滑石	24.9	24.9	1.2	1.4	2.6	片面 穿孔	淡緑色 (5555)	
46	C調査区 北側	SK04	有孔 円板	滑石	23.7	22.2	1.6	1.9	4.5	片面 穿孔	淡緑色 (5487)	
47	A調査区	排水溝	有孔 円板	滑石	21.1	18.6	1.3	1.5	1.8	片面 穿孔	緑色 (5615)	
48	A調査区	排水溝	有孔 円板	滑石	18.4	18.0	1.2	1.6	1.8	片面 穿孔	緑色 (5615)	鉄錆の付着
49	A調査区		有孔 円板	滑石	16.1	15.9	1.5	2.0	1.1	片面 穿孔	褐色 (462)	
50	A調査区	SK03下層	有孔 円板	滑石	18.3	15.5	1.5	1.7	1.6	片面 穿孔	淡緑色 (5477)	
51	A・C調 査区	西壁断面 6層	有孔 円板	滑石	19.8	19.6	1.4	1.8	2.7	両面 穿孔	淡緑色 (5487)	
52	A調査区		有孔 円板	蛇紋岩	15.7	15.2	1.8	2.2	1.4	片面 穿孔	濃緑色 (5467)	
53	C調査区 北側	SK04	有孔 円板	滑石	23.9	15.9	1.4	1.7	2.2	片面 穿孔	褐色 (463)	
54	A調査区 東壁		白玉 1a	滑石	3.2	3.9	1.8	1.8	0.1 以下		淡緑色 (5477)	
55	A調査区 東壁		白玉 1a	滑石	2.8	4.0	1.3	1.4	0.1 以下		濃黄緑色 (5815)	
56	A調査区 東壁		白玉 1a	滑石	2.5	4.0	1.4	1.7	0.1 以下		淡緑色 (5487)	
57	A調査区 東壁		白玉 1b	滑石	2.4	4.0	1.5	1.6	0.1 以下		濃黄緑色 (5815)	
58	A調査区 東壁		白玉 1a	滑石	2.9	4.0	1.7	1.7	0.1 以下		淡緑色 (5487)	
59	A調査区 東壁		白玉 1a	滑石	3.1	4.0	1.7	1.7	0.1 以下		淡緑色 (5487)	

60	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	2.6	4.5	1.7	1.7	0.1 以下	淡緑色 (5497)
61	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	4.0	3.9	1.6	1.7	0.1 以下	淡黄緑色 (5845)
62	A 調査区 東壁	白玉 2	滑石	2.2	3.6	1.7	1.7	0.1 以下	濃黄緑色 (5815)
63	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	2.4	3.9	1.6	1.8	0.1 以下	淡緑色 (5565)
64	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	3.0	3.5	1.6	1.6	0.1 以下	緑色 (5545)
65	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	3.2	4.0	1.8	2.0	0.1 以下	淡緑色 (5565)
66	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	2.2	2.9	1.5	1.5	0.1 以下	濃緑色 (5535)
67	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	2.1	4.0	1.5	1.5	0.1 以下	淡緑色 (5555)
68	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	2.0	3.4	1.2	1.4	0.1 以下	淡緑色 (5555)
69	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	2.2	3.3	1.3	1.6	0.1 以下	緑色 (5545)
70	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	2.0	3.1	1.5	1.7	0.1 以下	濃緑色 (5535)
71	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	1.8	3.4	1.5	1.7	0.1 以下	濃緑色 (5535)
72	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	3.0	3.8	1.6	1.6	0.1 以下	緑色 (5545)
73	A 調査区 東壁	白玉 2	滑石	1.5	4.0	1.8	1.8	0.1 以下	濃緑色 (5535)
74	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	1.6	3.3	1.2	1.2	0.1 以下	緑色 (554)
75	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	1.5	4.1	1.7	2.0	0.1 以下	淡緑色 (5555)
76	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	1.4	3.3	1.4	1.5	0.1 以下	緑色 (554)
77	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	1.8	3.0	1.5	1.5	0.1 以下	淡緑色 (5565)
78	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	3.2	4.1	1.7	1.8	0.1 以下	緑色 (562)
79	A 調査区 東壁	白玉 1b	滑石	3.0	3.6	1.8	2.1	0.1 以下	淡緑色 (5477)
80	A 調査区 東壁	白玉 2	滑石	2.1	4.3	1.4	1.4	0.1 以下	緑色 (562)
81	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	2.0	4.3	1.4	1.8	0.1 以下	褐色 (4625)
82	A 調査区 東壁	白玉 1b	滑石	1.8	3.8	1.5	1.7	0.1 以下	緑色 (562)
83	A 調査区 東壁	白玉 1b	滑石	2.3	3.7	1.5	2.0	0.1 以下	淡緑色 (5477)
84	A 調査区 東壁	白玉 1b	滑石	3.0	4.1	1.8	1.8	0.1 以下	緑色 (562)
85	A 調査区 東壁	白玉 1b	滑石	2.1	3.7	1.3	1.4	0.1 以下	濃緑色 (5533)
86	A 調査区 東壁	白玉 1b	滑石	1.9	4.6	1.3	1.5	0.1 以下	淡緑色 (5477)
87	A 調査区 東壁	白玉 1b	滑石	2.1	3.1	1.5	1.5	0.1 以下	淡緑色 (5497)
88	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	2.1	3.7	1.6	1.6	0.1 以下	淡緑色 (5477)
89	A 調査区 東壁	白玉 1b	滑石	1.7	3.4	1.3	1.8	0.1 以下	淡緑色 (5477)
90	A 調査区 東壁	白玉 1b	滑石	2.3	3.5	1.3	1.3	0.1 以下	濃緑色 (5533)

91	A 調査区 東壁	白玉 1b	滑石	1.8	3.5	1.3	1.5	0.1 以下	淡緑色 (5477)
92	A 調査区 東壁	白玉 1b	滑石	1.8	3.3	1.4	1.6	0.1 以下	濃緑色 (5533)
93	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	2.8	4.4	1.3	1.6	0.1 以下	緑色 (5545)
94	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	2.0	3.5	1.3	1.4	0.1 以下	緑色 (562)
95	A 調査区 東壁	白玉 3	滑石	2.2	3.3	1.3	1.5	0.1 以下	淡緑色 (5477)
96	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	2.6	3.8	1.8	1.8	0.1 以下	緑色 (553)
97	A 調査区 東壁	白玉 2	滑石	1.8	4.2	2.0	2.0	0.1 以下	濃緑色 (5535)
98	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	2.7	3.3	1.3	1.3	0.1 以下	緑色 (562)
99	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	2.1	3.6	1.2	1.7	0.1 以下	緑色 (5545)
100	A 調査区 東壁	白玉 2	滑石	2.1	3.7	1.7	1.7	0.1 以下	緑色 (562)
101	A 調査区 東壁	白玉 3	滑石	1.8	2.7	1.5	1.5	0.1 以下	淡緑色 (5555)
102	A 調査区 東壁	白玉 2	滑石	2.2	3.0	1.4	1.5	0.1 以下	緑色 (5545)
103	A 調査区 東壁	白玉 3	滑石	1.9	3.6	1.4	1.6	0.1 以下	緑色 (553)
104	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	1.4	3.1	1.4	1.5	0.1 以下	緑色 (562)
105	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	1.7	4.1	1.6	1.6	0.1 以下	淡緑色 (5555)
106	A 調査区 東壁	白玉 3	滑石	2.2	4.6	1.3	1.4	0.1 以下	淡緑色 (5555)
107	A 調査区 東壁	白玉 1a	滑石	2.7	3.9	2.1	2.1	0.1 以下	緑色 (5535)
108	A 調査区 東壁	白玉 2	滑石	2.1	3.5	1.4	1.5	0.1 以下	緑色 (562)
109	A 調査区 東壁	白玉 3	滑石	2.3	3.4	1.4	1.5	0.1 以下	緑色 (5535)
110	A 調査区 東壁	白玉 2	滑石	2.1	3.8	1.4	1.4	0.1 以下	緑色 (562)
111	A 調査区 東壁	白玉 3	滑石	1.5	2.9	1.2	1.5	0.1 以下	濃緑色 (5535)
112	A 調査区 東壁	白玉 3	滑石	2.6	3.4	2.0	2.2	0.1 以下	緑色 (562)
113	A 調査区 東壁	白玉 2	滑石	2.7	3.6	1.3	1.3	0.1 以下	濃緑色 (5535)

註：色調は PANTONE formula guide solid matte Third Edition 2006を使用した。

第11表 土器観察表

報告 番号	調査区	出土 遺構	器種	形式	器高 [現存高] (cm)	口径 [復原径] (cm)	最大径 [復原径] (cm)	底径 [復原径] (cm)	調整		色調		備考
									外面	内面	外面	内面	
1	A 調査区	SK03	土師器	高杯	[8.2]	13.4			ナデ	摩耗のため不明	5YR8/4	10YR8/4	
2	A 調査区	SK03	土師器	高杯	[7.7]				摩耗のため不明	摩耗のため不明	10R6/8	2.5YR7/8	杯部内面に鉄錆の付着
3	A 調査区	SK03	土師器	高杯	[8.0]				摩耗のため不明	ヘラケズリ	5YR7/6	5YR7/6	脚部内面に棒状工具痕
4	A 調査区	SK03	土師器	高杯	[6.8]				ナデ	ヘラケズリ、ハケ	5YR7/6	5YR7/6	
5	A 調査区	SK03	土師器	高杯	[6.2]	[16.9]			ハケ	摩耗のため不明	5YR7/6	5YR6/6	
6	A 調査区	SK03	土師器	高杯	[7.4]			12.0	ハケ、ナデ	ヘラケズリ、ナデ	5YR7/6	5YR7/6	脚部内面に棒状工具痕
7	A 調査区	SK07	土師器	高杯	[5.8]			8.1	ナデ	ヘラケズリ、ナデ、シボリ	2.5YR5/8	2.5YR6/8	裾部に一部黒斑
8	A 調査区	排水溝	土師器	高杯	[7.5]				摩耗のため不明	ヘラケズリ、ナデ	10YR8/4	10YR8/4	
9	A 調査区	排水溝	土師器	高杯	[10.0]			[11.6]	ナデ	ヘラケズリ、ナデ	10YR8/3	10YR8/3	全体的に鉄錆の付着
10	A 調査区	排水溝	土師器	高杯	[6.5]				ユビオサエ、ナデ	ヘラケズリ、ナデ	2.5YR6/8	10R3/1	脚部に一部黒色の付着物
11	A 調査区	排水溝	土師器	高杯	[6.5]				ナデ	ヘラケズリ、ハケ	2.5YR6/8	2.5YR6/8	脚部に一部黒色の付着物
12	A 調査区	排水溝	土師器	高杯	[6.8]				ユビオサエ、ナデ	ヘラケズリ、ナデ	2.5YR8/3	2.5YR8/3	全体的に鉄錆の付着、特に内面に著しい
13	A 調査区	排水溝	土師器	高杯	[11.1]	[14.0]			ナデ	ヘラケズリ、ナデ	2.5YR6/8	2.5YR6/8	脚部外面に鉄錆の付着
14	A 調査区	排水溝	土師器	高杯	[8.0]			[11.4]	ナデ	ヘラケズリ、ナデ	5YR7/6	2.5YR6/8	
15	A 調査区	排水溝	土師器	高杯	[7.8]				ナデ	ヘラケズリ、ナデ	5YR6/6	5YR6/6	脚外面に黒色の付着物
16	A 調査区	排水溝	土師器	高杯	[7.4]			[12.8]	摩耗のため不明	ヘラケズリ、ナデ	5YR7/8	7.5YR8/8	内外面に鉄錆の付着
17	A 調査区	排水溝	土師器	高杯	[12.5]				杯部は粗いハケ、脚部はユビオサエ、ナデ	杯部は粗いハケ、脚部はヘラケズリ、ナデ	10YR7/4	10YR7/4	脚部内面は粘土紐の痕が顕著にみられる
18	A 調査区	排水溝	土師器	高杯	[7.6]				摩耗のため不明	ヘラケズリ	5YR8/3	5YR8/3	
19	A 調査区	排水溝	土師器	高杯	[7.3]				ナデ	ヘラケズリ	10YR8/4	10YR8/4	脚部外面に工具による細刻線
20	A 調査区	排水溝	土師器	高杯	[7.9]			[14.1]	ユビオサエ、ナデ	ヘラケズリ、ナデ、シボリ	5YR5/8	5YR5/8	
21	A 調査区	排水溝	土師器	高杯	[6.6]				ユビオサエ、ナデ	ヘラケズリ	10YR8/4	7.5YR8/8	
22	A 調査区	排水溝	土師器	高杯	[7.8]				ユビオサエ、ハケ	ヘラケズリ	2.5YR5/8	10YR4/1	杯部内面に鉄錆の付着
23	A 調査区	排水溝	土師器	高杯	[8.2]				ユビオサエ	ヘラケズリ	5YR7/8	7.5YR8/8	
24	A 調査区	排水溝	土師器	高杯	14.2	[22.9]		[13.8]	ユビオサエ、ナデ	ヘラケズリ	7.5YR6/4	5YR6/6	
25	A 調査区	排水溝	土師器	高杯	[7.7]				ナデ	ヘラケズリ、ハケ	10YR8/2	10YR8/2	
26	A 調査区	排水溝	土師器	高杯	[8.3]				ナデ	ヘラケズリ	10YR8/4	10YR8/4	
27	A 調査区	排水溝	土師器	高杯	[8.4]				摩耗のため不明	ヘラケズリ	5YR6/8	5YR6/8	内外面に黒色の付着物
28	A 調査区	排水溝	土師器	高杯	[7.6]			10.6	ユビオサエ	ヘラケズリ、ナデ	10YR8/4	10YR8/4	
29	C 調査区	SK04	土師器	高杯	[11.1]			[10.4]	摩耗のため不明	ヘラケズリ	10YR 7/6	10YR 7/6	

30	C 調査区 北側	SK04	土師器	高杯	[10.6]			[11.8]	ユビオサ エ、ナデ	ヘラケズ リ、ナデ	10YR6/4	7.5YR4/3	鉄錆の付着
31	C 調査区 北側	SK04	土師器	高杯	杯部 [7.5] 脚部 [7.1]			[11.1]	ナデ	ナデ	10YR7/3	10YR4/4	細片化
32	C 調査区 北側	SK04	土師器	高杯	[11.2]			12.8	ユビオサ エ、ナデ	ヘラケズ リ、ナデ	7.5YR8/6	7.5YR8/4	杯部内面に一 部鉄片・鉄錆 の付着
33	C 調査区 北側	SK04	土師器	高杯	[10.4]			14.8	ユビオサ エ、ナデ	ヘラケズ リ、ナデ	5YR6/8	5YR6/8	
34	C 調査区 北側	SK04	土師器	高杯	[8.7]			[11.2]	ナデ	ヘラケズ リ、ナデ	5YR5/6	5YR5/6	
35	C 調査区	遺構不明	土師器	高杯	[8.2]				摩耗のた め不明	ヘラケズ リ、ハケ	7.5YR7/6	10YR8/4	脚部内面に棒 状工具痕
36	C 調査区	遺構不明	土師器	高杯	[11.5]				ユビオサ エ、ナデ	ヘラケズ リ、ナデ	5YR6/8	5YR7/6	
37	C 調査区	遺構不明	土師器	高杯	[8.2]				ハケ、ナ デ	ヘラケズ リ、ナデ	7.5YR6/4	7.5YR6/4	脚部内面に棒 状工具痕
38	C 調査区	遺構不明	土師器	高杯	[13.6]	[16.0]		[11.4]	ユビオサ エ、タテ ハケ、ナ デ	ヘラケズ リ、ハケ、 ナデ	2.5YR5/4	2.5YR5/4	
39	C 調査区	遺構不明	土師器	高杯	[10.0]			10.6	ナデ	ヘラケズ リ、ナデ	2.5YR5/8	2.5YR5/8	
40	C 調査区	遺構不明	土師器	高杯	[7.1]			[8.5]	ナデ	ヘラケズ リ、ナデ、 シボリ	7.5YR8/6	7.5YR8/6	
41	C 調査区	遺構不明	土師器	高杯	[6.9]			[10.4]	摩耗のた め不明	ヘラケズ リ	7.5YR8/6	7.5YR8/6	
42	C 調査区	遺構不明	土師器	高杯	[7.0]			[9.0]	ユビオサ エ、ナデ	ヘラケズ リ、ナデ、 シボリ	5YR5/6	7.5YR6/3	
43	A 調査区	SK03	土師器	丸底壺	[9.4]	[10.6]			摩耗のた め不明	ヘラケズ リ	7.5YR7/6	7.5YR7/4	
44	A 調査区	SK03	土師器	丸底壺	[7.9]	[6.0]	8.8		ハケ、ナ デ	ナデ	7.5YR7/4	7.5YR7/4	口縁部を除き ほぼ完存
45	A 調査区	SK03	土師器	丸底壺	[5.7]		8.7		ハケ、ナ デ	ユビオサ エ、ナデ	5YR7/6	5YR7/8	口縁部を除き ほぼ完存
46	A 調査区	SK04	土師器	丸底壺	[6.1]	[9.2]			ナデ	ユビオサ エ、ナデ	10YR7/3	2.5YR4/1	
47	A 調査区	SK04	土師器	丸底壺	6.8	[5.6]	5.9		ユビオサ エ、ナデ	ユビオサ エ、ナデ	10YR8/3	10YR8/3	口縁部を除き ほぼ完存
48	A 調査区	SK04	土師器	丸底壺	[10.4]		13.9		ナデ	ヘラケズ リ、ナデ	5YR6/6	10YR6/3	口縁部を除き ほぼ完存
49	A 調査区	SK04	土師器	丸底壺	[5.8]	[8.2]			ハケ、ナ デ	ナデ	7.5YR8/6	7.5YR8/6	
50	A 調査区	SK04	土師器	丸底壺	8.9	[7.4]	[9.0]	2.3	ナデ	ユビオサ エ、ナデ	10YR8/2	5YR5/1	
51	A 調査区	SK04	土師器	丸底壺	[8.7]	[8.6]	[8.9]		ユビオサ エ、ナデ	ユビオサ エ、ナデ	2.5YR8/2	2.5YR8/2	
52	A 調査区	SK04	土師器	丸底壺	[5.1]	[7.6]			ナデ	ナデ	10YR8/3	10YR8/3	
53	A 調査区	SK04	土師器	丸底壺	[5.5]				摩耗のた め不明	ユビオサ エ、ナデ	5YR6/2	5YR6/2	
54	A 調査区	SK04	土師器	丸底壺	[3.3]				ナデ	ユビオサ エ、ナデ	10YR7/3	10YR8/3	
55	A 調査区	SK04	土師器	丸底壺	[4.1]				ナデ	ナデ	2.5Y8/2	2.5Y8/2	
56	A 調査区		土師器	丸底壺	[5.4]	[8.2]			ナデ	ユビオサ エ、ナデ	10YR7/3	10YR7/3	
57	A 調査区		土師器	丸底壺	[6.2]		8.7		ナデ	ユビオサ エ、ナデ	10YR8/3	5YR7/6	口縁部を除き ほぼ完存
58	A 調査区		土師器	丸底壺	9.2	[8.7]	10.5		ユビオサ エ、ナデ	ユビオサ エ、ナデ	7.5YR7/4	2.5YR6/8	
59	A 調査区		土師器	丸底壺	[7.6]	[8.8]			ナデ	ユビオサ エ、ナデ	10YR8/4	10YR8/3	内面に鉄錆の 付着
60	A 調査区		土師器	丸底壺	[6.8]		8.6		ハケ、ナ デ	ユビオサ エ、ナデ	7.5YR7/4	7.5YR7/4	
61	A 調査区		土師器	丸底壺	[11.2]	[10.0]	[11.8]		ハケ、ナ デ	ヘラケズ リ、ナデ	10YR8/3	10YR8/3	

62	C 調査区		土師器	丸底壺	8.3	[10.4]	[10.2]		摩耗のため不明	ユビオサエ、ナデ	10YR8/2	10YR8/2	
63	C 調査区		土師器	丸底壺	[7.9]		[9.5]		ナデ	ユビオサエ、ナデ	10YR8/2	10YR8/2	
64	C 調査区		土師器	丸底壺	[7.8]	[9.9]	[12.3]		摩耗のため不明	ヘラケズリ	5YR7/8	5YR7/8	
65	C 調査区 北側	SK04	土師器	甕	[9.2]	[14.4]			ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	7.5YR7/6	7.5YR6/4	内面に粘土紐の接合痕が顕著に残る
66	C 調査区 北側	SK04	土師器	壺	[7.2]	21.4			ナデ	ハケ、ナデ	7.5YR5/3	7.5YR6/4	口縁部はほぼ完存
67	A 調査区	排水溝	土師器	甕	[5.0]				ユビオサエ、ナデ	ナデ	5YR6/6	5YR6/6	肩部外面に鉄錆の付着
68	C 調査区 北側	SK04	土師器	甕	[7.6]	[19.5]			ハケ、ナデ	ヘラケズリ、ナデ	5YR6/8	5YR6/8	
69	C 調査区 北側	SK04	土師器	壺	[5.5]	[18.8]			ナデ	ナデ	10YR6/3	10YR5/2	
70	C 調査区 北側	SK04	土師器	壺	[9.8]	[17.4]			ハケ、ナデ	ユビオサエ、ハケ、ナデ	7.5YR6/6	7.5YR6/6	
71	C 調査区 北側	SK04	土師器	壺	[3.7]				摩耗のため不明	摩耗のため不明	5YR5/6	5YR6/6	外面に竹管状の工具による刺突文
72	C 調査区 北側	SK04	土師器	壺	[4.1]				摩耗のため不明	摩耗のため不明	7.5YR5/6	10YR6/6	外面に竹管状の工具による刺突文
73	C 調査区		土師器	甕	[12.6]	[14.4]			ハケ、ナデ	ヘラケズリ、ナデ	7.5YR7/6	7.5YR7/6	
74	C 調査区	灰色粘土層	土師器	甕	[12.8]	[15.9]			ハケ、ナデ	ヘラケズリ、ナデ	10YR7/3	10YR7/3	
75	C 調査区	灰色粘土層	土師器	甕	[19.0]	[14.8]	[22.2]		ハケ、ナデ	ヘラケズリ、ナデ	10YR8/2	10YR8/2	
76	C 調査区	灰色粘土層	土師器	甕	[14.9]	[15.6]	[27.4]		ナデ	ヘラケズリ、ハケ、ナデ	10YR7/3	10YR7/3	
77	C 調査区	北側排水溝	土師器	器台	[4.2]				ナデ	ナデ	7.5YH8/2	10YH7/3	胴部残存
78	発掘区南側、立ちあいで出土		土師器	器台	8.8	7.85	[10.2]		摩耗のため不明	ヘラケズリ、ナデ	2.5YR6/8	2.5YR6/8	口縁部～脚部はほぼ完存
79	C 調査区	西壁	土師器	器台	[5.4]				ナデ	摩耗のため不明	2.5YR7/8	5YR7/8	
80	A 調査区	SK04 ?	須恵器	甗	[3.3]		[10.3]		タタキ	ナデ	2.5GY8/1	2.5GY8/1	
81	A・C 調査区	排水溝9ほか	須恵器	横瓶	[11.8]	16.4			タタキ、回転ナデ	ナデ	N5/0	N5/0	
82	A 調査区	SK07	須恵器	壺	[7.1]	[10.0]							
83	A 調査区	排水溝	手捏ね土器		2.55	3.5		2.7	ナデ	ユビオサエ、ナデ	5YR6/8	5YR6/8	完形品
84	A 調査区	排水溝	手捏ね土器		2.9	3.0			ナデ	ユビオサエ、ナデ	5YR4/1	5YR5/3	完形品
85	A 調査区	SK03上層 落ち込み	手捏ね土器		2.9	4.0		2.3	ナデ、一部にハケ	ユビオサエ、ナデ	5YR6/6	5YR6/6	完形品
86	A 調査区	排水溝29	手捏ね土器		2.6	4.65			ナデ	ユビオサエ、ナデ	10YR7/3	10YR7/3	完形品
87	C 調査区	SD02	青磁		[1.7]			[5.9]	轆轤、ナデ	轆轤、ナデ	2.5GY7/1	2.5GY7/1	
88	C 調査区	SD02列石上層	白磁		[2.3]			[6.6]	轆轤、ナデ	轆轤、ナデ	5Y8/1	5Y8/1	
89	C 調査区	調査区南 西壁断割	白磁		[1.85]			[6.0]	轆轤、ナデ	轆轤、ナデ	7.5Y7/1		
90	C 調査区	SD03埋土	青磁		[2.1]			[6.05]	轆轤、ナデ	轆轤、ナデ	2.5GY6/1	2.5GY6/1	

第12表 土製品・石製品観察表

報告 番号	調査区	遺構名	遺物名	形式	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	調整		色調		備考
									外面	内面	外面	内面	
91	C 調査区 北側	SK04下層	土錘		6.4	2.5	2.2	45.4			2.5Y7/2		
92	A 調査区	排水溝19	土錘		6.2	2.2	2.2	38.3			5YR5/6		
93	C 調査区 北側	SK04	土錘		4.2	4.2	3.7	57.1			10YR8/4		
94	C 調査区 北側	SD04	土錘		4.0	4.3	4.0	59.1			10YR7/3		
95	A 調査区	SD01 (SK11)	石錘		4.7	3.3	1.8	33.2			10YR8/4		砂岩
96	A 調査区	4層付近	鉄床石		156.5	113.3	50.9	1271.0					砂岩
97	A 調査区	4層付近	羽口		9.5	8.2	2.9		ナデ		10YR8/4	7.5YR6/4	
98	A 調査区	4層付近	羽口		11.1	8.9	2.5		ユビオサ エ		7.5YR6/6	7.5YR6/6	
99	A 調査区	4層付近	羽口		5.8	不明	不明		ハケ		7.5YR7/4	7.5YR7/4	
100	A 調査区	4層付近	羽口		3.0	2.3	1.6				10YR4/4		



出土遺物集合



(1) 千歳下遺跡調査地遠景（谷奥から）



(2) 千歳下遺跡調査地遠景（南から）



(1) 千歳下遺跡調査地近景 (西から)



(2) 千歳下遺跡調査地近景 (北から)



(1) B 調査区東壁断面（北西から）



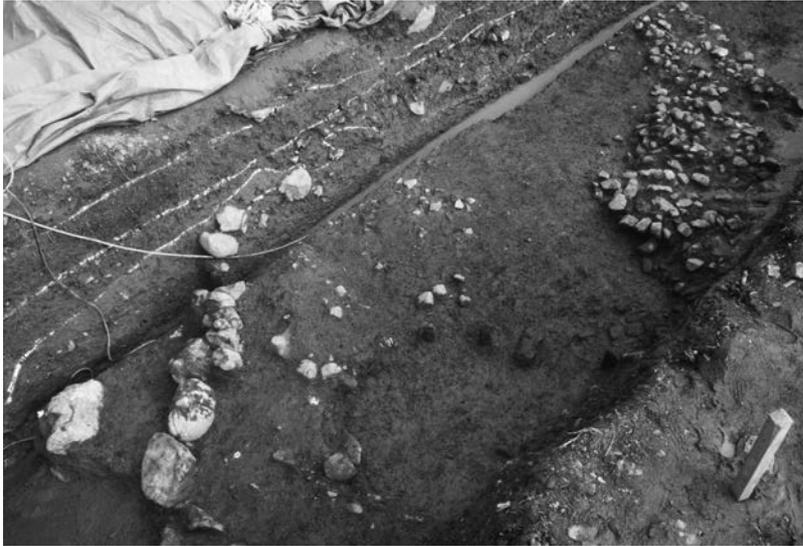
(2) B 調査区完掘状況（北から）



(1) C調査区調査前近景（北から）



(2) C調査区調査前近景（南から）



(1) B調査区完掘状況
(北西から)



(2) B調査区集石検出
状況 (北東から)



(3) B調査区列石検出
状況 (西から)

(1) B 調査区杭・
木製品出土状況
(西から)

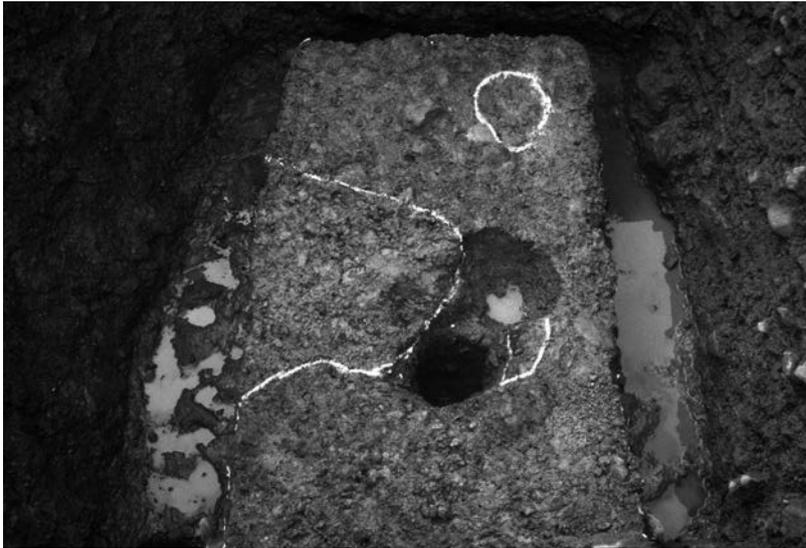


(2) B 調査区木製品
出土状況 (西から)

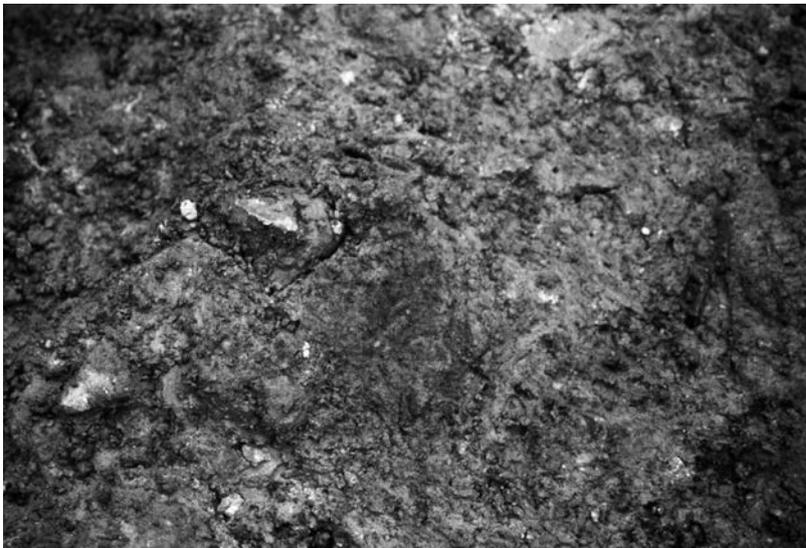


(3) B 調査区東壁
断面 (西から)

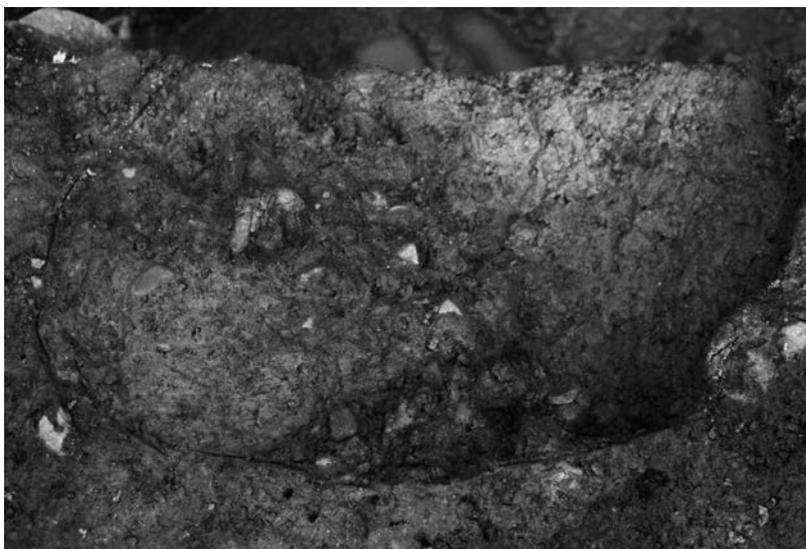




(1) A調査区鎌倉時代
遺構面検出状況
(北から)



(2) A調査区鎌倉時代
遺構面検出状況

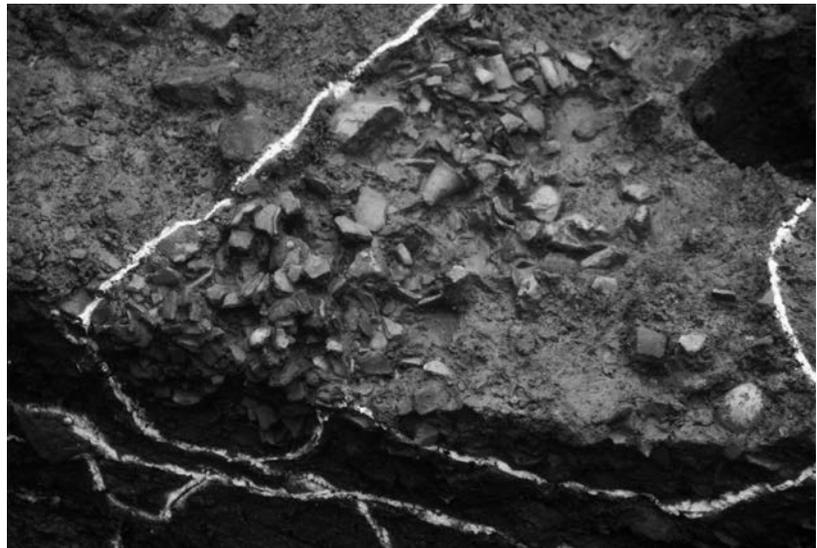


(3) A調査区 SK02
検出状況 (西から)

(1) A調査区 SK02
(西から)



(2) A調査区 SK03
上層遺物出土状況
(東から)

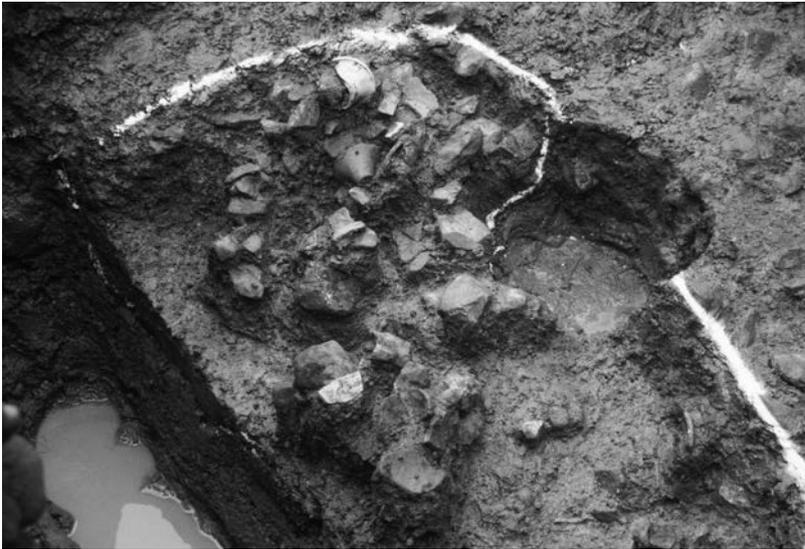


(3) A調査区 SK03
下層遺物出土状況
(北から)





(1) A調査区 SK06遺物
出土状況 (南から)



(2) A調査区 SK07遺物
出土状況
(南西から)

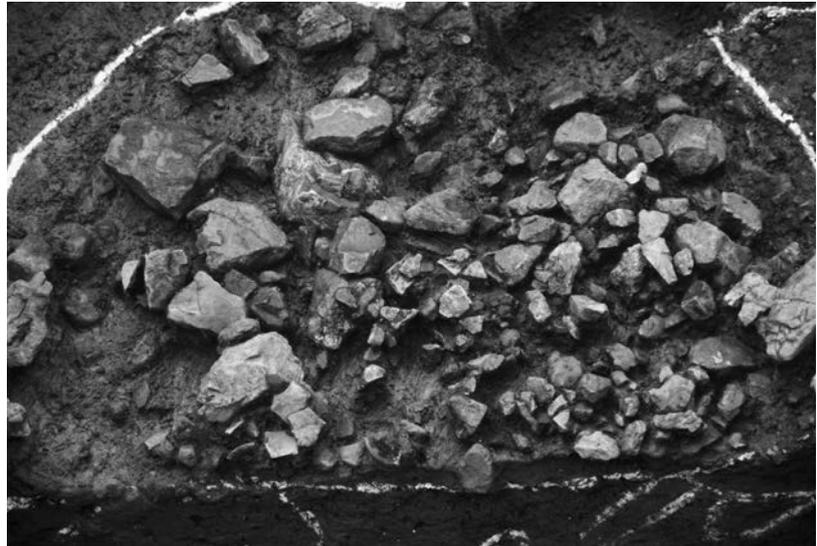


(3) A調査区 SK07勾玉
(玉8) 出土状況
(北から)

(1) A調査区 SK07完掘・
SK08遺物出土状況
(北から)



(2) A調査区 SK08遺物
出土状況 (東から)



(3) A調査区 SK08
斜縁獣帯鏡
(青銅器1)
出土状況 (南から)





(1) A調査区 SK09
(西から)



(2) A調査区 SK09・
Pit01断面 (西から)

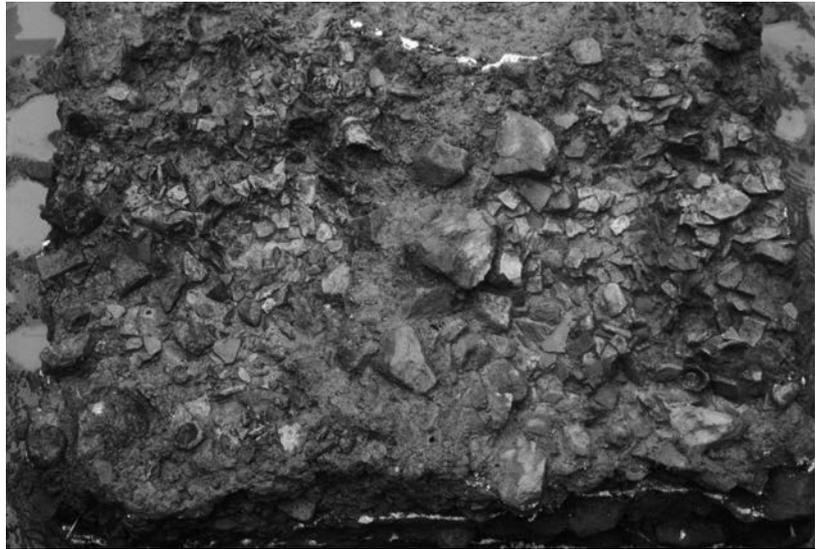


(3) A調査区
SK09・SK10検出状況
(南から)

(1) A調査区7～12層
土器溜まり(南から)



(2) A調査区土器溜まり
検出状況(南から)

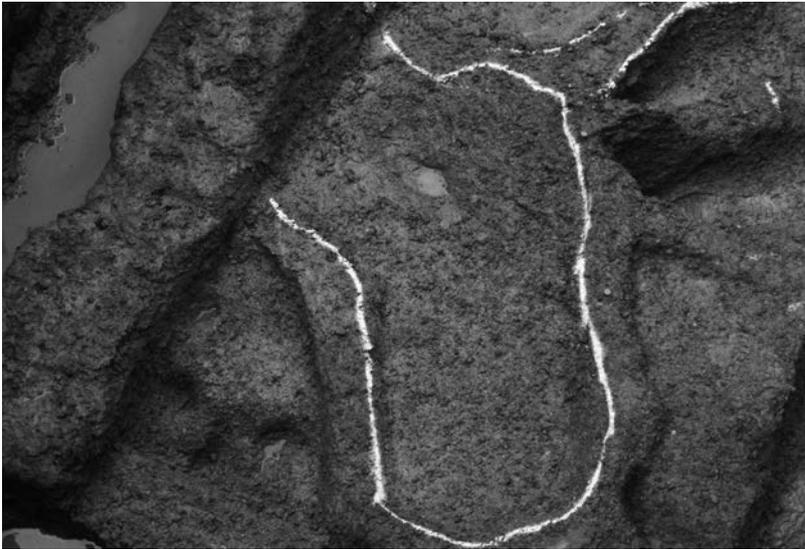


(3) A調査区土器溜まり
検出状況(東から)

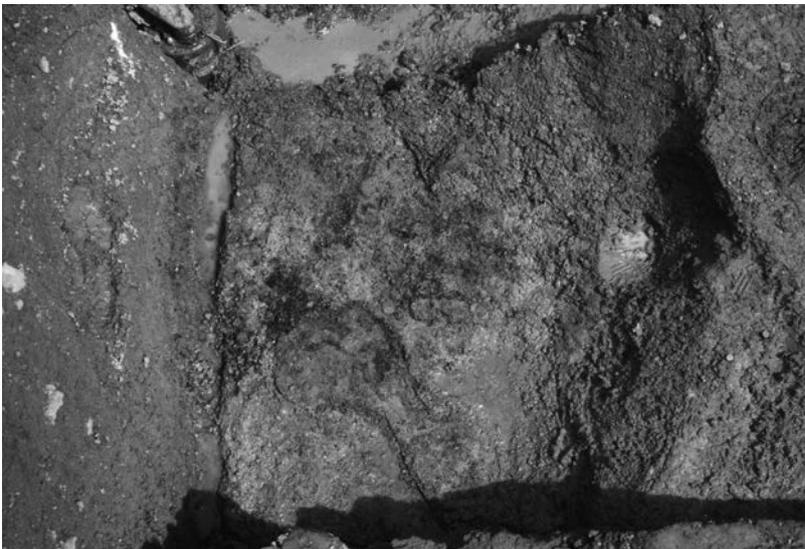




(1) A調査区 SK13
灰層面掘削状況
(東から)



(2) A調査区 SK14
完掘状況 (南から)

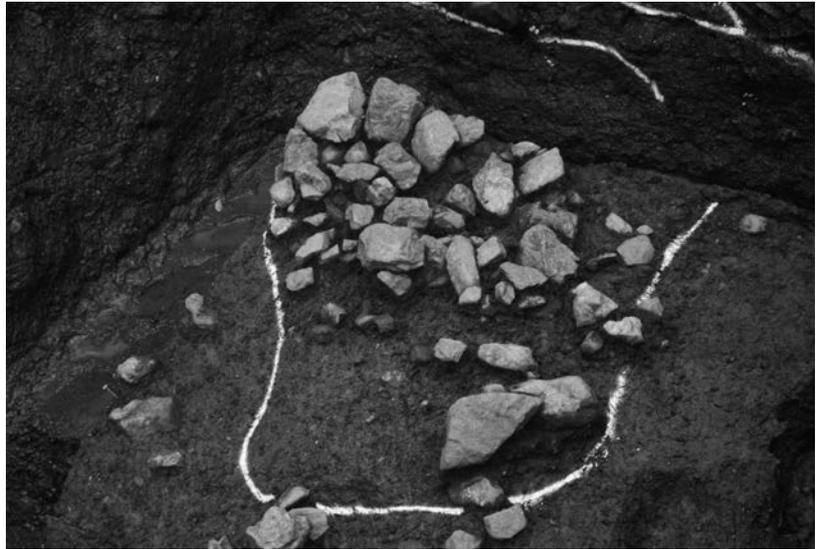


(3) A調査区 SK15
完掘状況 (西から)

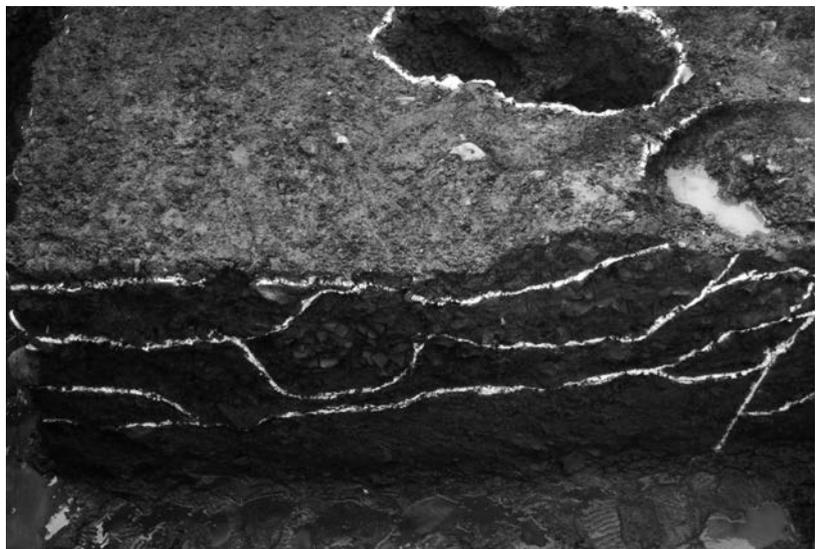
(1) A調査区 SK15
完掘状況（東から）

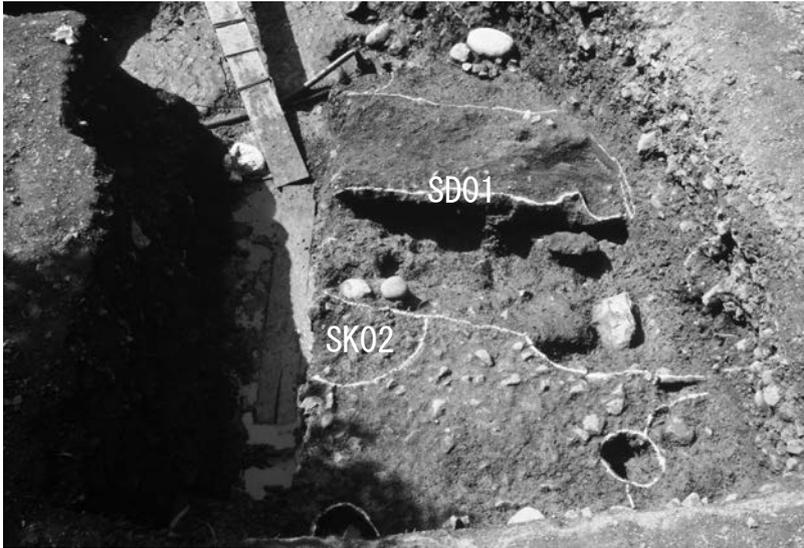


(2) A調査区 SX01
完掘状況（北から）



(3) A調査区東壁断面
（西から）





(1) C調査区 SD01
完掘・鎌倉時代
遺構面検出状況
(北から)



(2) C調査区 SD01
完掘・SK03検出状況
(東から)



(3) C調査区 SD01
完掘・SK03検出状況
(東から)

(1) C調査区 SK03
完掘状況（南から）



(2) C調査区北側
鍛冶焼土上面
検出状況

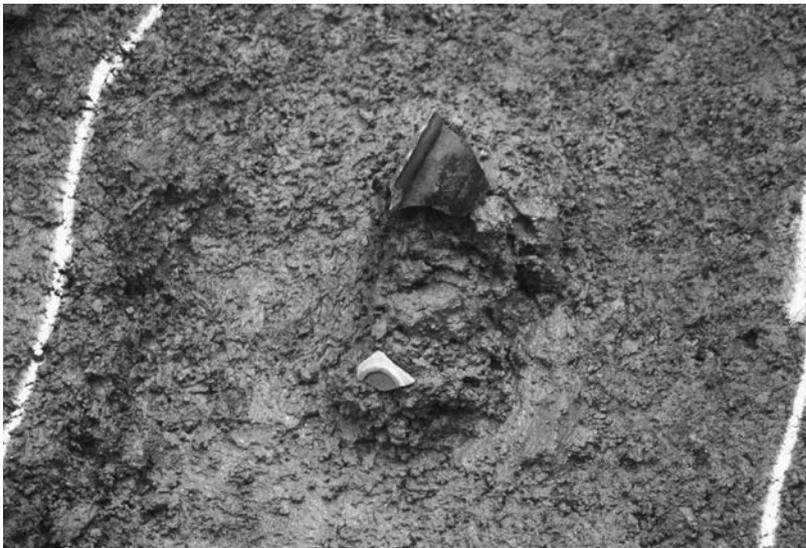


(3) C調査区北側
羽口（土器98）
出土状況

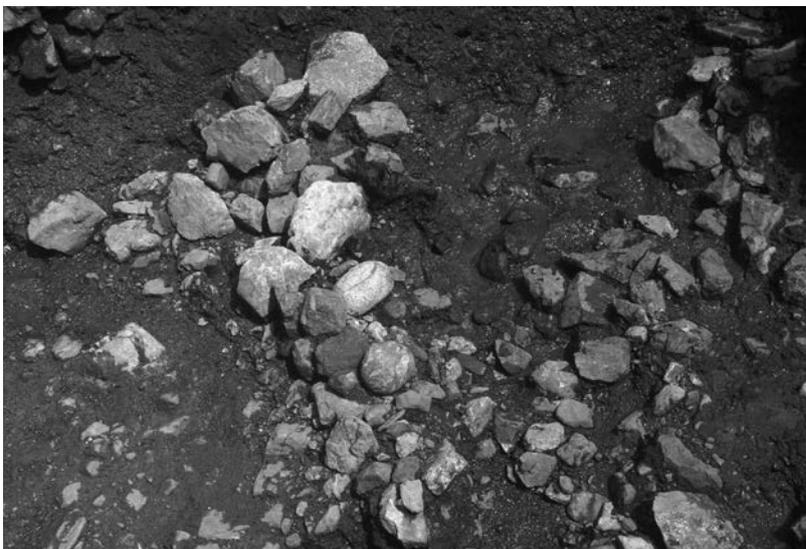




(1) C調査区 SD02
完掘状況（東から）



(2) C調査区 SD02磁器
（土器90）出土状況
（東から）



(3) C調査区 SD03
遺構面検出状況
（西から）

(1) C調査区 SD03
遺構面検出状況
(東から)



(2) C調査区 SD03
完掘状況 (東から)



(3) C調査区 SK02
完掘状況 (東から)





(1) C調査区北側 SK05
検出状況



(2) C調査区北側 SK05
検出状況



(3) C調査区灰色粘土層
SD06検出状況
(北から)

(1) C調査区灰色粘土層
遺物出土状況
(南から)



(2) C調査区灰色粘土層
遺物出土状況
(西から)

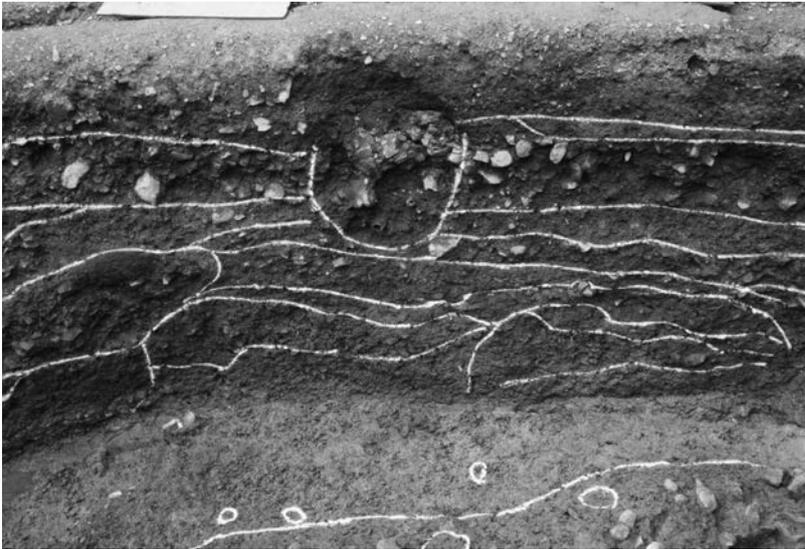


(3) C調査区灰色粘土層
鉄斧（鉄器39）
出土状況（西から）





(1) C調査区灰色粘土層
遺物出土状況
(西から)



(2) C調査区西壁断面
(東から)



(3) C調査区包含層
須恵器 (土器81)
出土状況 (南から)

(1) C調査区北側包含層
遺物出土状況
(北から)



(2) C調査区北側包含層
銅釧（青銅器3）
出土状況（南から）



(3) C調査区北側 SK04
遺物出土状況
(南から)





(1) C調査区北側 SK04
遺物出土状況
(北から)



(2) C調査区北側 SK04
遺物出土状況
(東から)



(3) C調査区北側 SK04
遺物出土状況
(南から)

(1) C調査区北側 SK04
遺物出土状況
(東から)



(2) C調査区北側 SK04
鋤先(鉄器44)
出土状況



(3) C調査区北側 SK04
鉄器出土状況





(1) C調査区北側 SK04
鑄造斧形品
(鉄器69) 出土状況



(2) C調査区北側 SK04
遺物出土状況



(3) C調査区北側 SK04
勾玉(玉6)
出土状況

(1) C調査区北側 SK04
遺物出土状況



(2) C調査区北側 SK04
有孔円板出土状況
(北から)

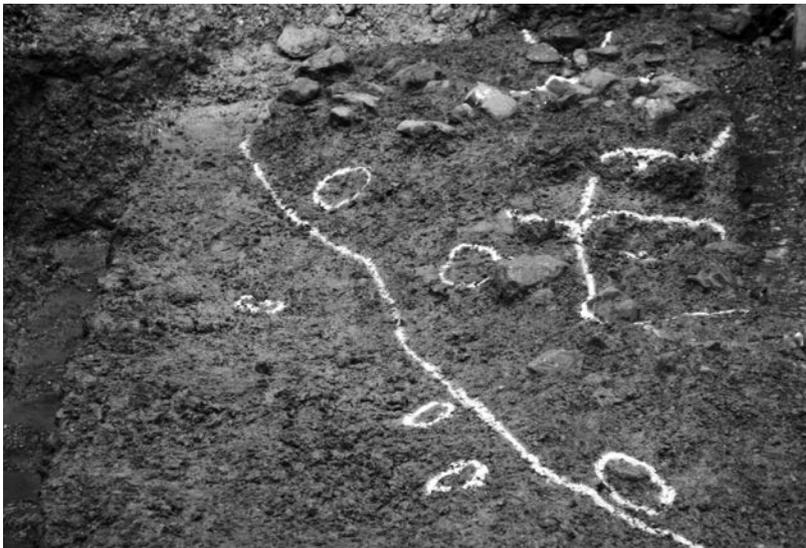


(3) C調査区北側 SK04
平玉 (玉18)
出土状況





(1) C調査区 SX01
検出状況（北から）



(2) C調査区 SX01
検出状況（南から）



(3) C調査区 SX01
焼石検出状況



(1) 作業風景（東から）



(2) 作業風景（北から）



(3) 作業風景（北から）



(1) 千歳下遺跡現在の状況（南から）



(2) 千歳下遺跡現在の状況（東から）



(3) 千歳下遺跡現在の状況（北から）



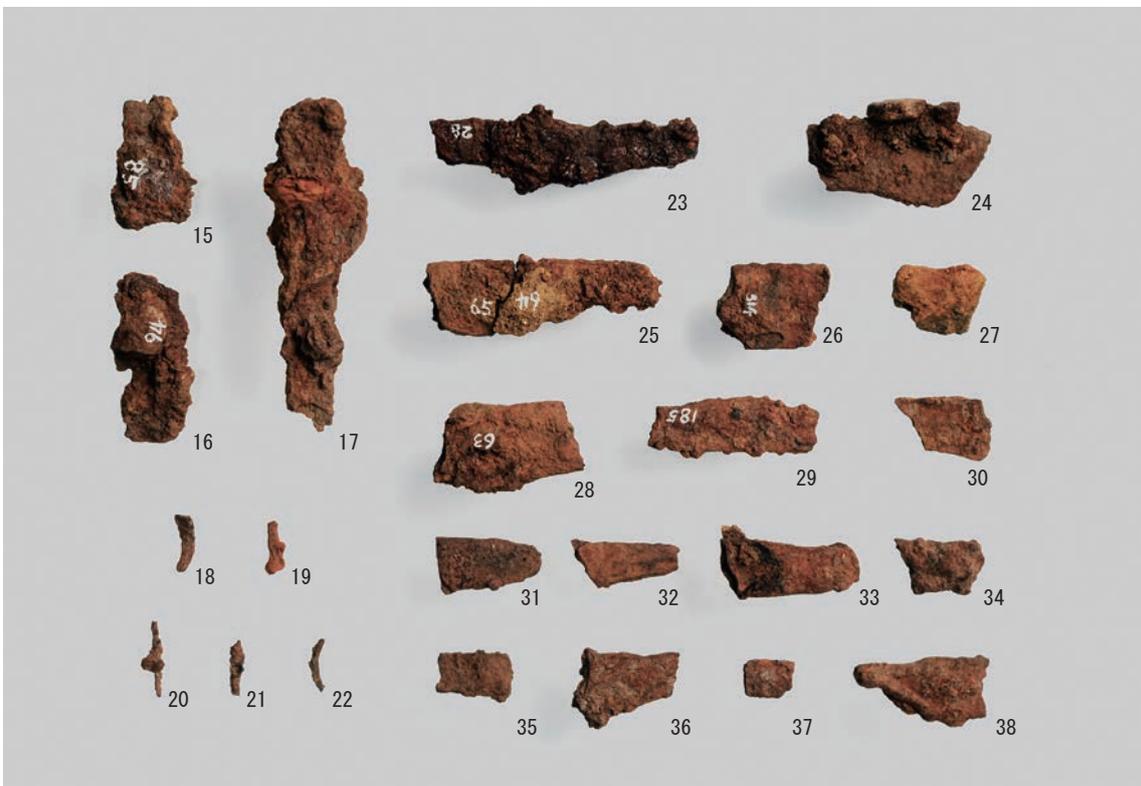
(1) 青銅器 (鏡背面)



(2) 青銅器 (鏡面)



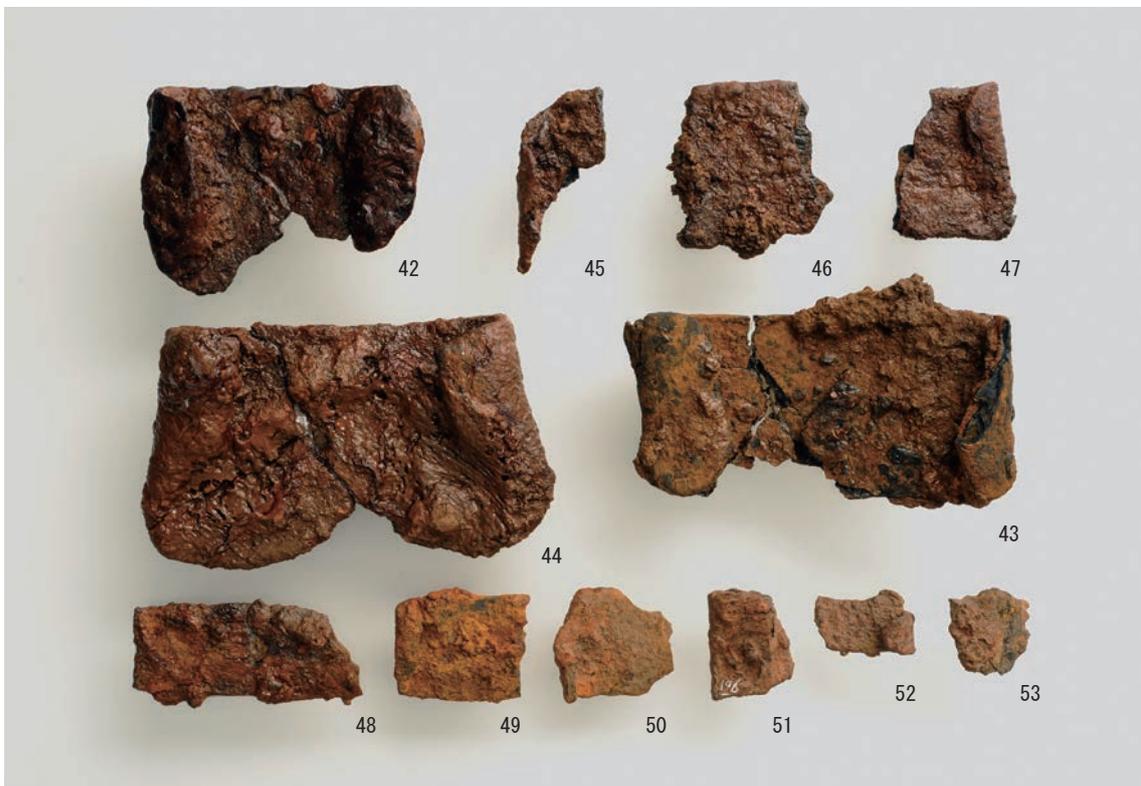
(1) 鉄器 (1)



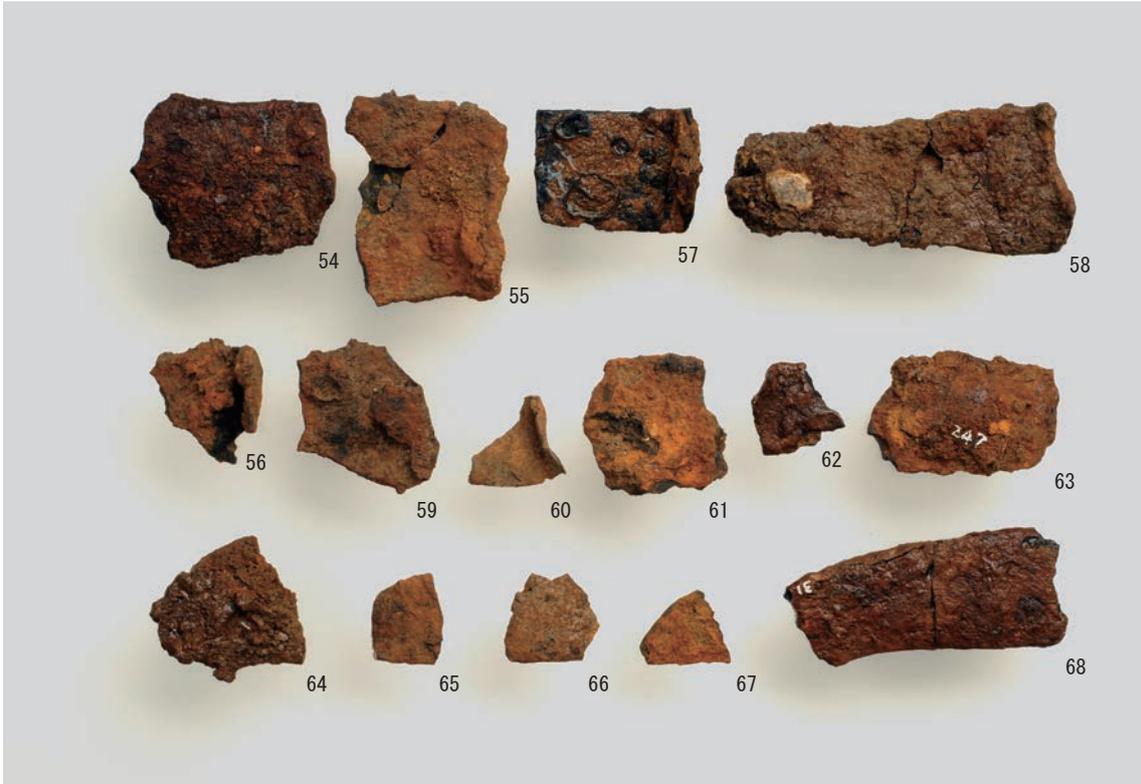
(2) 鉄器 (2)



(1) 鉄斧・鑄造斧形品



(2) 鉄製農具 (1)



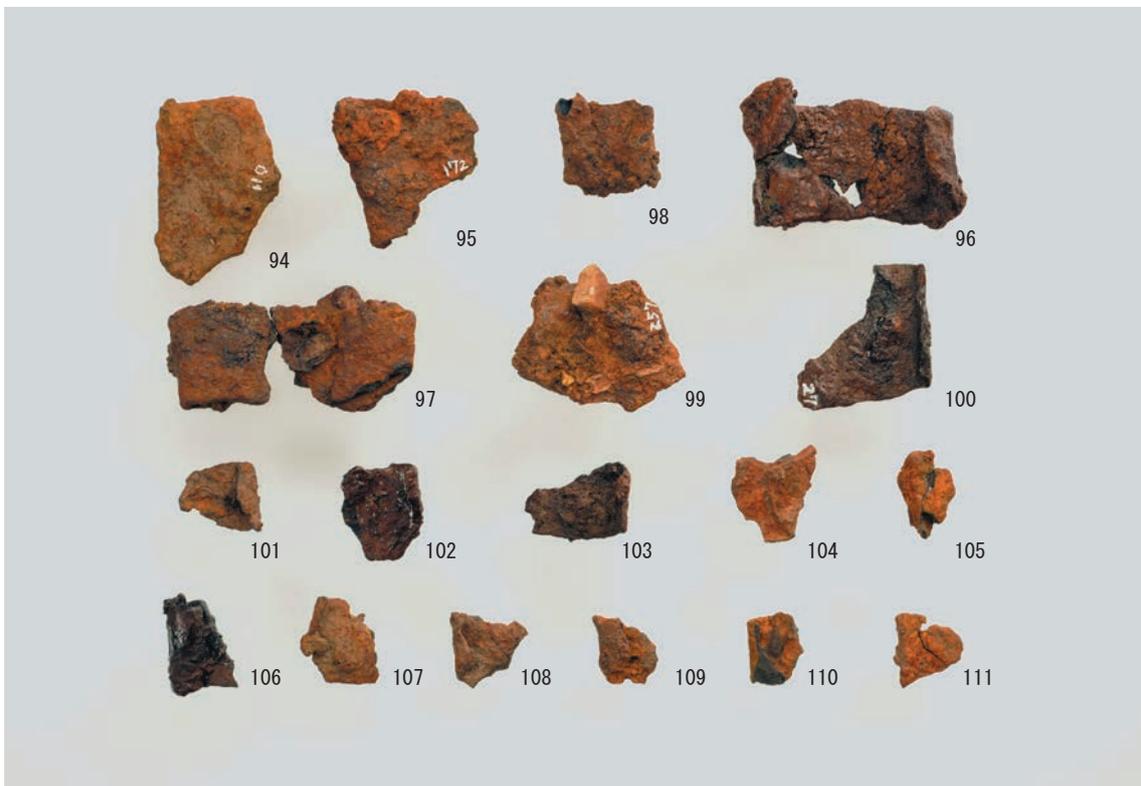
(1) 鉄製農具 (2)



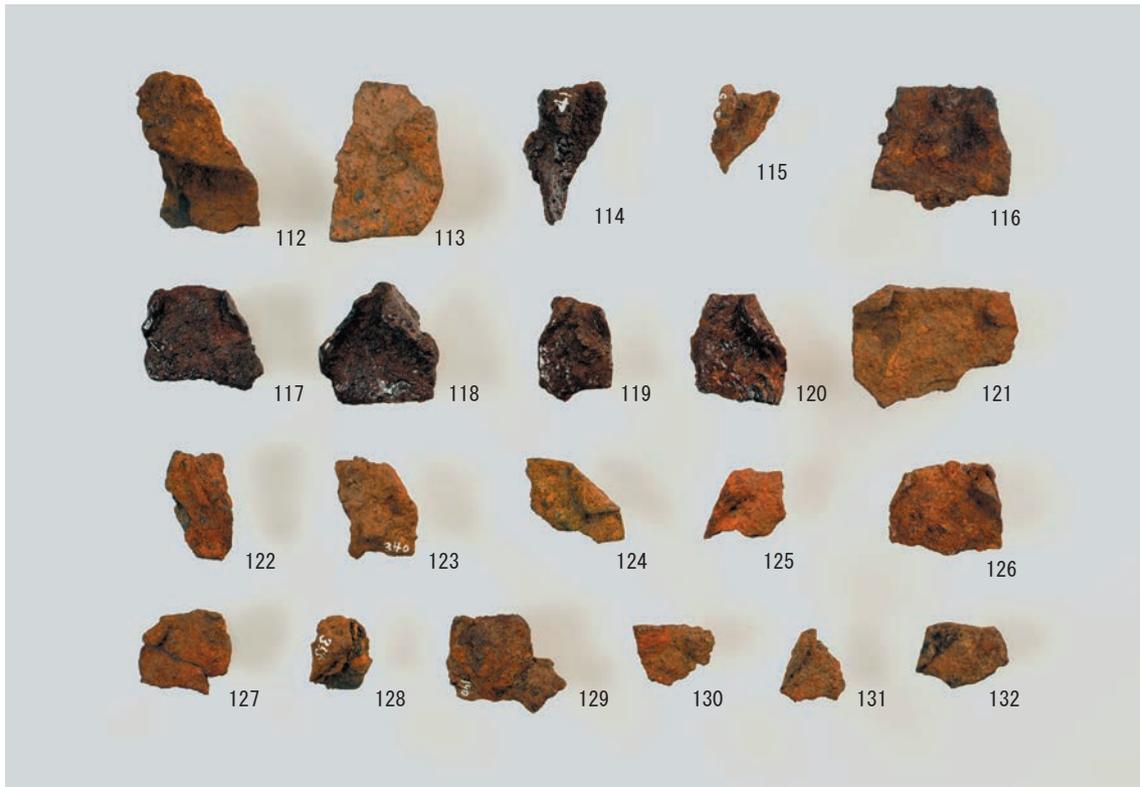
(2) 鉄鋌 (1)



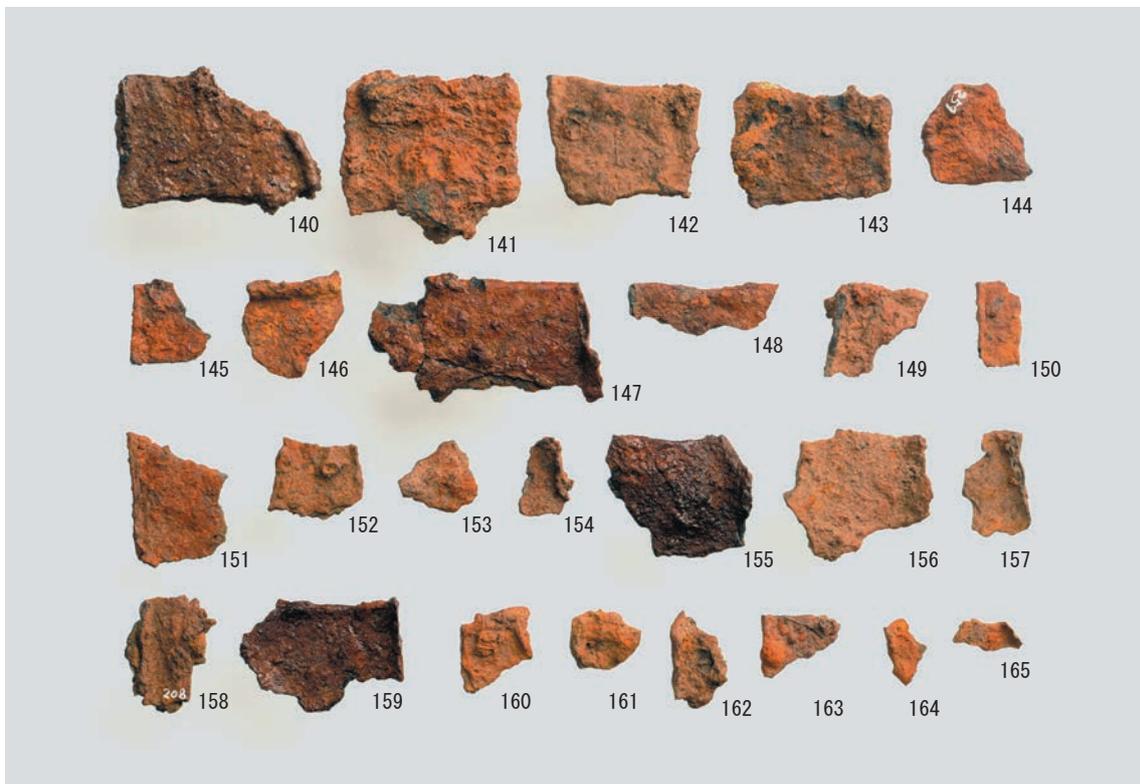
(1) 鉄鋌 (2)・鉄製模造品 (1)



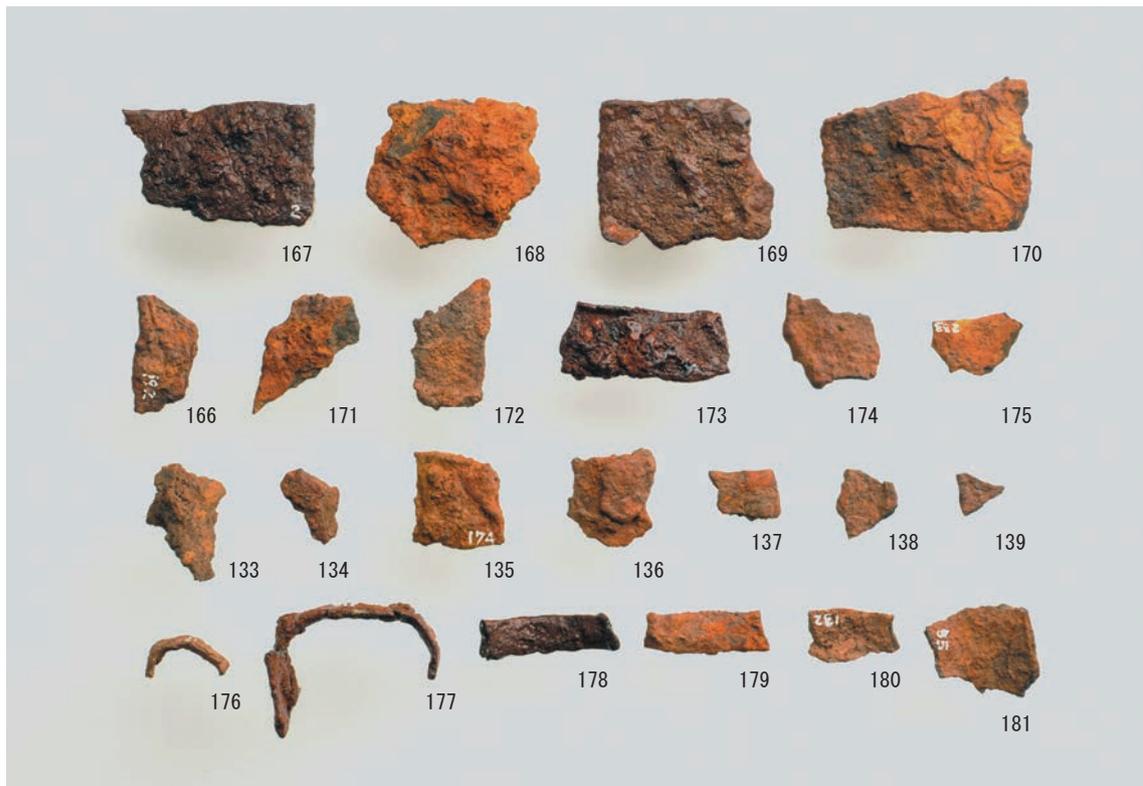
(2) 鉄製模造品 (2)



(1) 鉄製模造品 (3)



(2) 板状鉄片 (1)



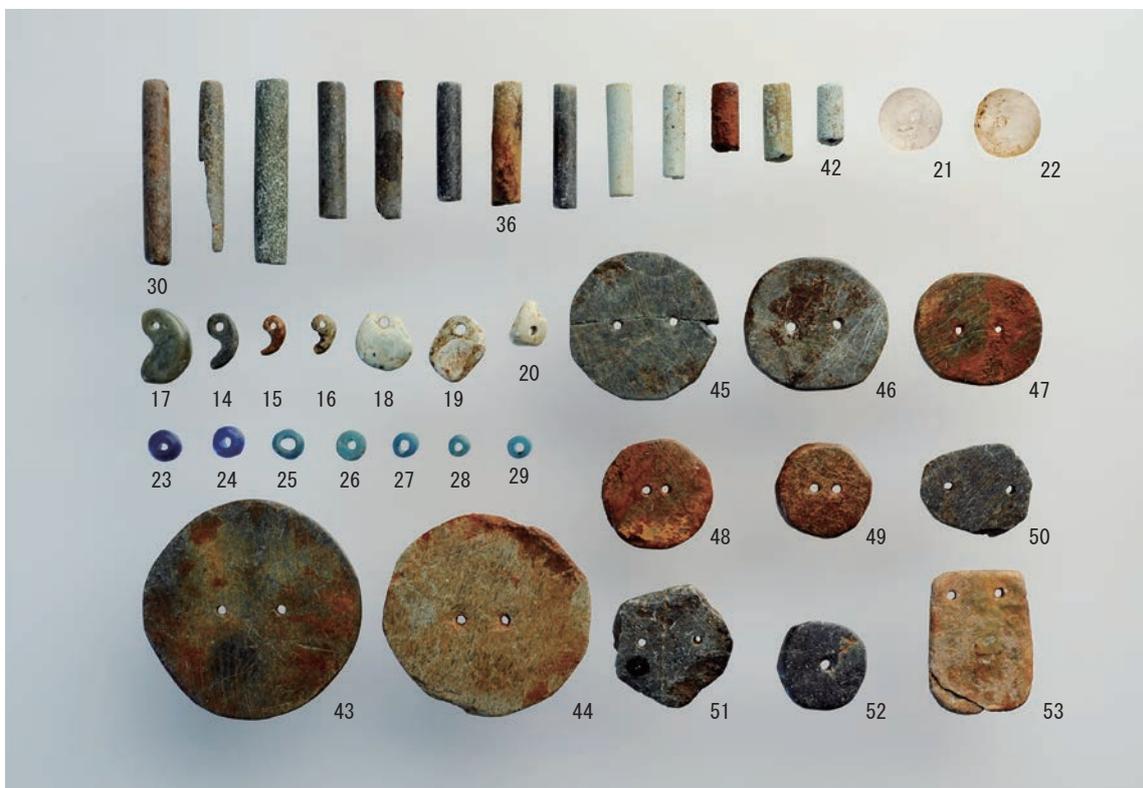
(1) 板状鉄片 (2)



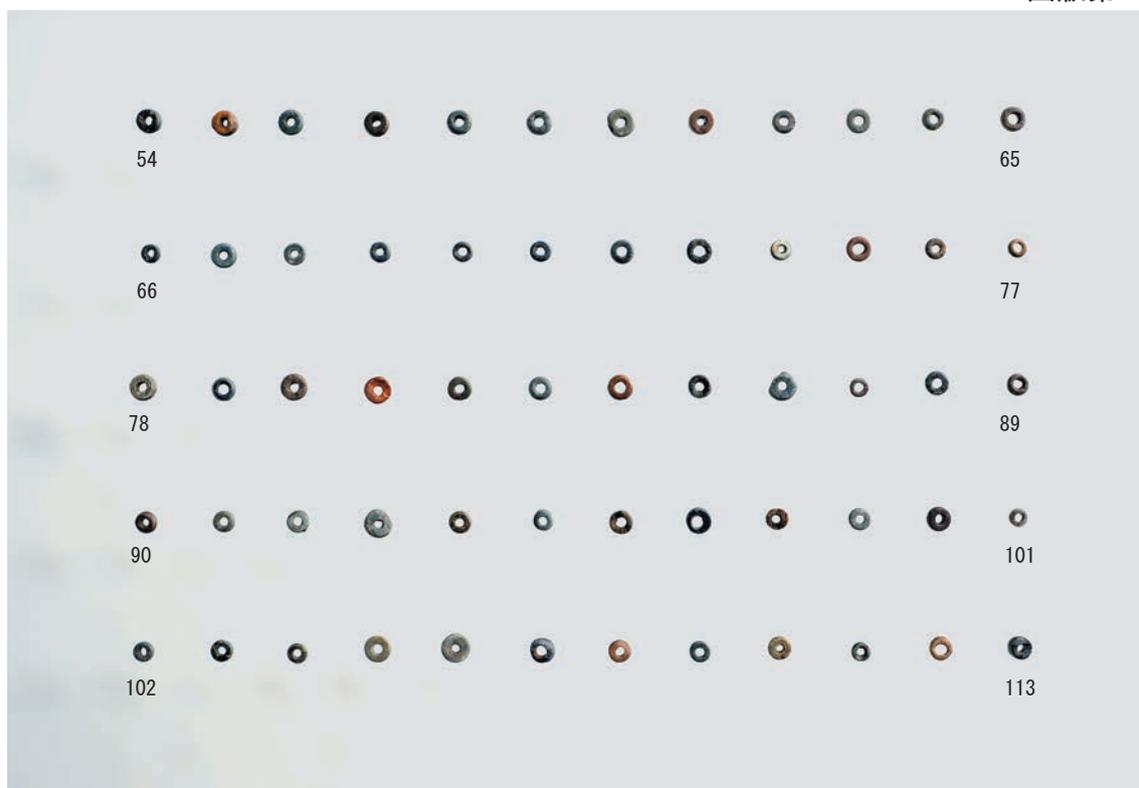
(2) 鉄器集合



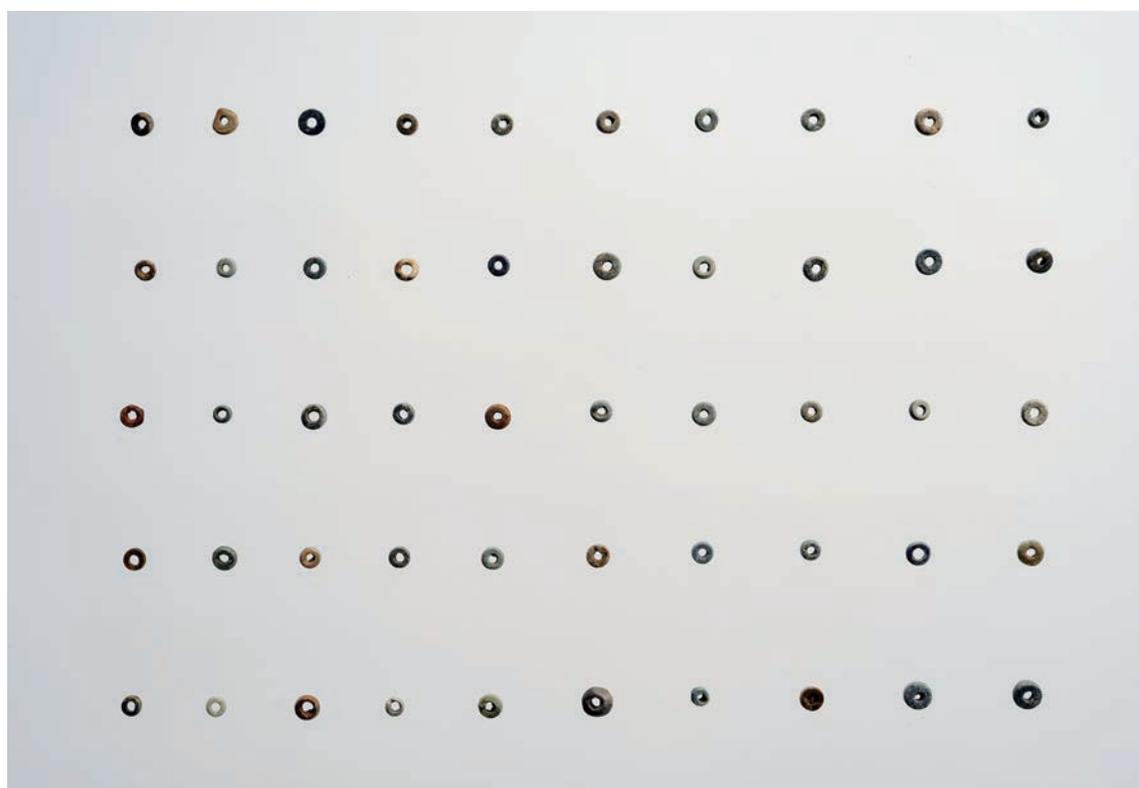
(1) 玉類 (1)



(2) 玉類 (2)



(1) 白玉 (1)



(2) 白玉 (2)



土師器高坏 (1)



土師器高坏 (2)



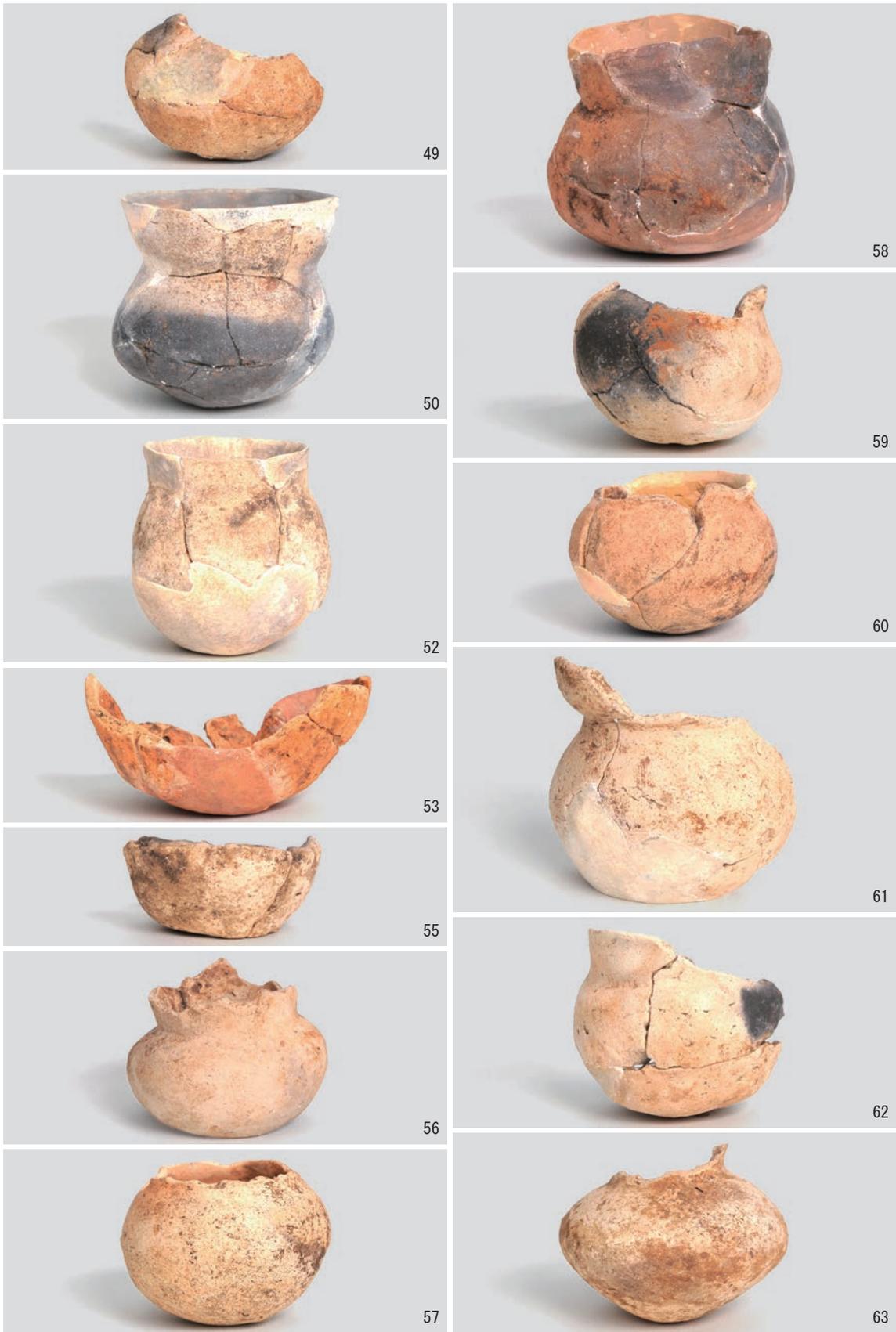
土師器高坏 (3)



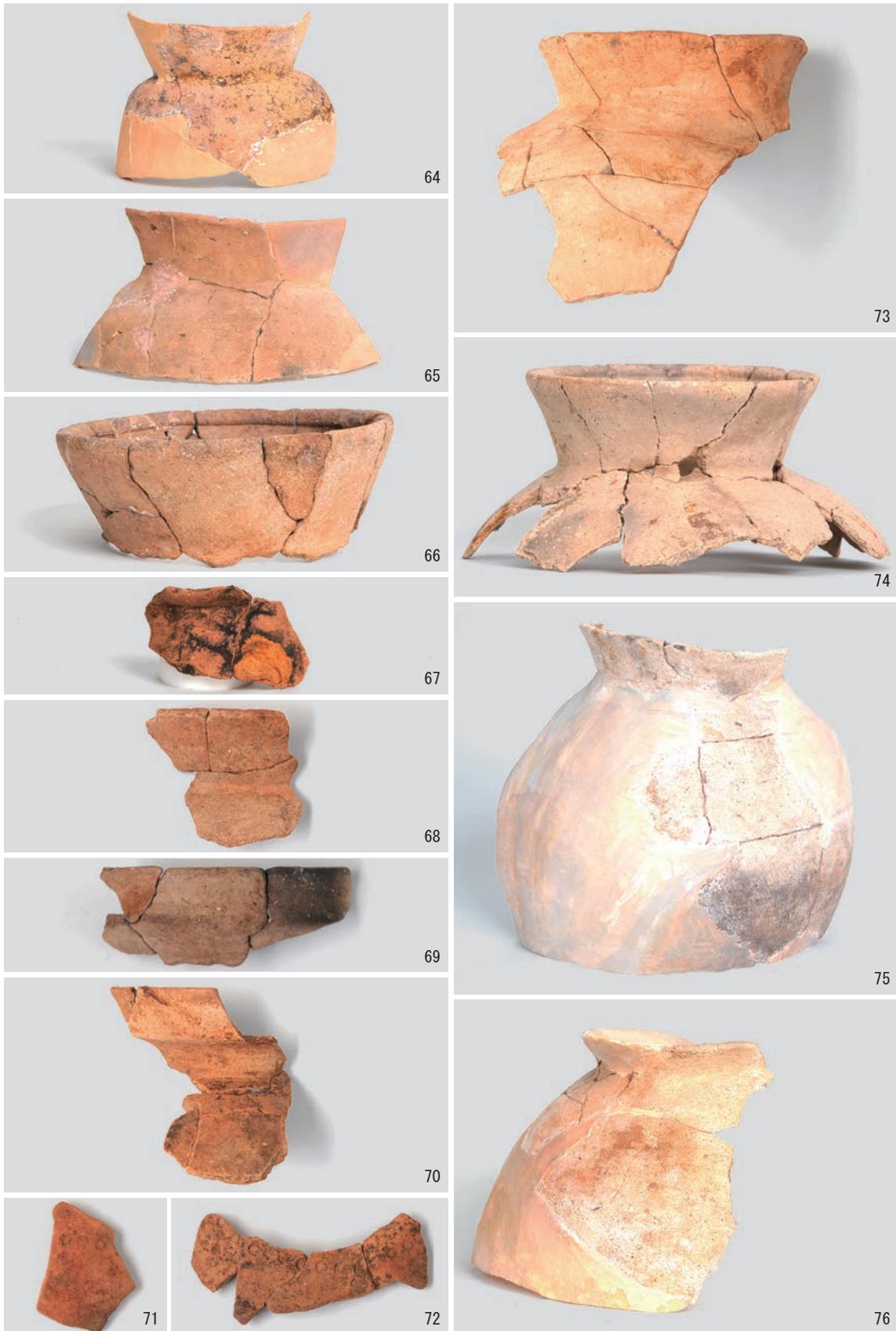
土師器高坏 (4)



土師器高坏 (5)・丸底壺 (1)



土師器丸底壺 (2)



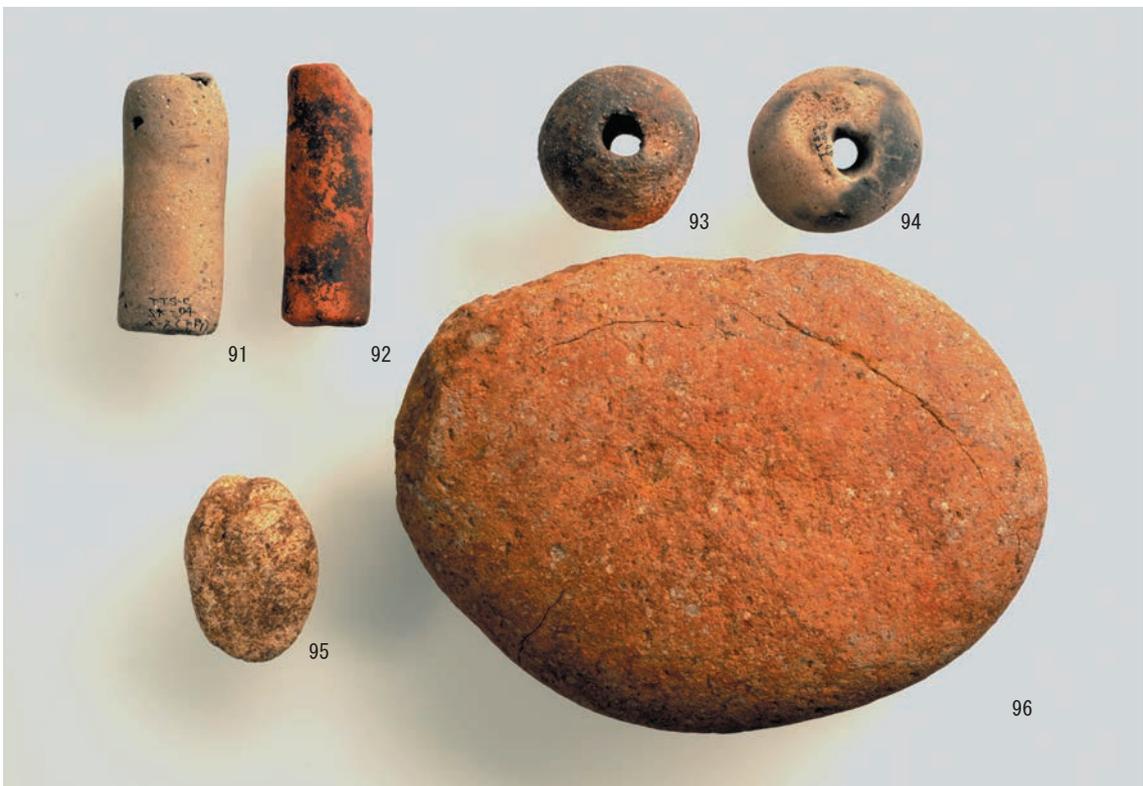
土師器壺・甕



土師器器台・手捏ね土器・須恵器・磁器



(1) 羽口



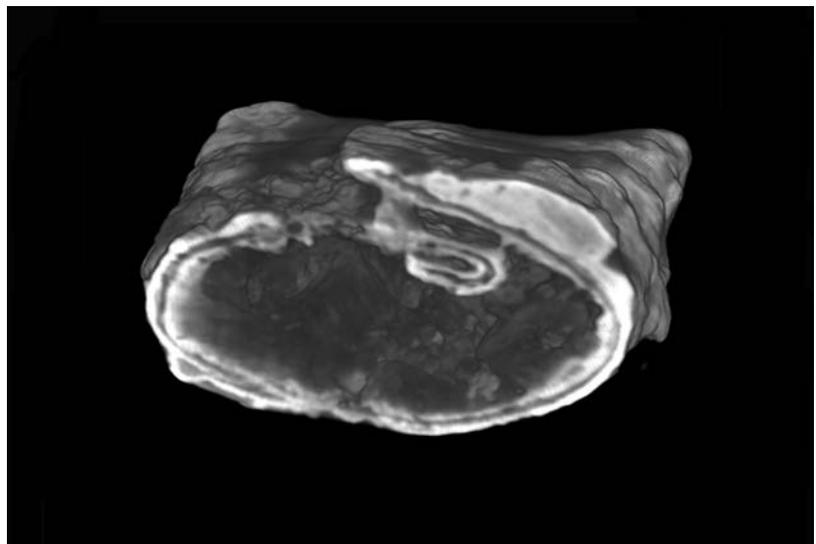
(2) 土錘・石錘・鉄床石



(1) 鉄器39 CT 画像



(2) 鉄器40 CT 画像



(3) 鉄器70 CT 画像

報告書抄録

ふりがな	ちとせしらいせき はつくつちようき ほうこくしょ						
書名	千歳下遺跡発掘調査報告書						
シリーズ名	広島大学大学院文学研究科考古学研究室報告第2冊 舞鶴市文化財調査報告第46集						
編集者名	野島 永・脇山佳奈						
編集機関	広島大学大学院文学研究科考古学研究室						
所在地	〒739-8522 広島県東広島市鏡山一丁目2番3号 TEL (082)424-6663 広島大学大学院文学研究科						
発行年月日	西暦 2012年 3月 15日						
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ちとせしも 千歳下	きょうとふ まいづるし 京都府舞鶴市 あざちとせ 字千歳	市町村遺跡番号 26202 302	° ' '' 35° 30' 46''	° ' '' 135° 20' 51''	20080205 ～20080331 20080805 ～20080930	120m ²	市道改良
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
千歳下遺跡	祭祀・集落	中 古 代 墳 文	土坑・溝	青銅鏡・釧・各種鉄器・ 滑石製模造品・土師器・ 須恵器・鍛冶関連遺物・ 縄文土器・陶硯・磁器	古墳時代中期を中心 とした海浜祭祀遺跡		

2012年3月12日

舞鶴市千歳下遺跡発掘調査報告書

広島大学大学院文学研究科考古学研究室報告 第2冊
舞鶴市文化財調査報告 第46集

編集・発行 広島大学大学院文学研究科考古学研究室
野島 永・脇山佳奈
〒739-8522 広島県東広島市鏡山一丁目2番3号
TEL・FAX (082)424-6663

印 刷 株式会社ニシキプリント
〒733-0833 広島県広島市西区商工センター7丁目5番33号
TEL (082)277-6954

